

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第215集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財調査報告書第42集

みど の
緑 埜 遺 跡 群 (平安時代の水田と畠等)

みど の かみ ごう
緑 埜 上 郷 遺 跡 (平安時代の水田等)

たけ ぬま
竹 沼 遺 跡 (古墳時代の集落跡)

1997

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県教育委員会
日本道路公団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第215集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財調査報告書第42集

みど の
緑 埜 遺 跡 群 (平安時代の水田と畠等)

みど の かみ ごう
緑 埜 上 郷 遺 跡 (平安時代の水田等)

たけ ぬま
竹 沼 遺 跡 (古墳時代の集落跡)

1997

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県教育委員会
日本道路公団



序

鏡川の一支流、鮎川の左岸段丘には豪族の墳墓として著名な白石稻荷山古墳など、数多くの古墳や集落遺跡が分布し、古代から繁栄した地域であったことが知られています。この地の北方を走る高速道路・上信越自動車道は、関越自動車道の藤岡ジャンクションから分岐し、「鏡の谷」に沿って信州佐久市に向かいます。

本報告による緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡・竹沼遺跡の発掘調査は、1990年に実施されました。緑埜遺跡群では平安時代水田跡や畠跡、緑埜上郷遺跡で平安時代水田跡、江戸時代の斉藤屋敷跡、竹沼遺跡で弥生・古墳・奈良時代の堅穴住居や掘立柱建物など多数の遺構や、それに伴う多数の遺物が出土し、この地域の古代史を解明するための貴重な資料を得ることができました。

その成果を多くの人々に利用していただくため、平成8年度に整理事業を進め、ここに『緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡・竹沼遺跡』

として刊行することになりました。本書の刊行が、研究者、地域の社会教育・学校教育などで広く活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いに存じます。

ここに日本道路公団東京第二建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、藤岡市教育委員会をはじめとする関係諸機関、並びに発掘調査・整理事業にかかわった多くの皆様のご協力とご支援に厚くお礼を申し上げます。

1997（平成9）年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 小寺弘之





遺跡の所在する群馬県藤岡市は、東西40km、南北10km、面積は127.71km²で、県の南西部に位置している。東は神流川をへだて埼玉県児玉郡に接し、西は多野郡吉井町・甘楽郡甘楽町に、南は多野郡鬼石町・万場町、北は多野郡新町・高崎市に接している。人口6万3849人、世帯数2万0183世帯（1996年12月現在）である。

1954（昭和29）年4月、多野郡藤岡町と神流・小野・美土里・美九里の1町4村が合併し藤岡市となり、翌年3月、多野郡日野・平井の2村を編入した。旧藤岡町が市の中核をなし、市街地を形成している。

藤岡市はその地形的特質から、西南部の山間地域と北東部の平野部とに分かれるが、遺跡が多く見られるのは北東平野部である。この平野部は鮎川による開析扇状地が東を神流川、北を鏡川、西を鮎川によって隔てられ、藤岡台地とも呼ばれている。

鮎川は甘楽郡下仁田町、多野郡中里村、藤岡市の3市町村の境界付近、杖植峠（1510m）近くから発し、藤岡市の日野地区の中央を西から東に流れ、平井・美土里地区を経、途中幾つかの支流を集めて、鏡川に合流している。延長34km、流域面積73km²。遺跡が濃密に存在するのは、鮎川・神流川・鏡川の3つの河川に沿った台地縁辺部である。鮎川流域には、伊勢塚古墳、七裏山古墳、白石稲荷山古墳及び白石古墳群、東平井古墳群などの古墳群が知られており、神流川流域とともに藤岡市の中では埋蔵文化財包蔵の中心的地域といえる。



遺跡遠景



遺跡遠景



竹沼遺跡A区11号住居跡出土遺物





竹沼遺跡A区5号住居跡出土遺物



竹沼遺跡A区13号住居跡出土遺物

〔例言・凡例〕

例 言

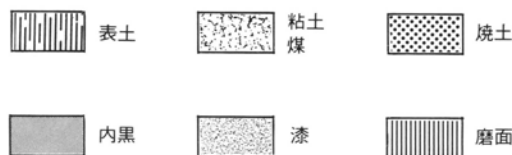
1. 本書は、関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡・竹沼遺跡」（調査時の事業名称＝緑埜遺跡群）の発掘調査報告書である。
2. 本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在地番は以下のとおりである。
緑埜（みどの）遺跡群
藤岡市大字白石字沖田、大字緑埜字下モ田、大字緑埜字西中通り、大字緑埜字西浦地内。
緑埜上郷（みどのかみごう）遺跡
藤岡市大字緑埜字上郷、大字緑埜字西浦地内。
竹沼（たけぬま）遺跡
藤岡市大字西平井字島地内。
3. 発掘した遺跡の調査期間と調査面積は以下のとおりである。
1990（平成2）年8月1日～1991（平成3）年1月31日
調査面積は緑埜遺跡群約3,100㎡、緑埜上郷遺跡約1,200㎡、竹沼遺跡約2,000㎡である。
4. 発掘調査は日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
5. 調査担当者は以下のとおりである。
真下高幸（調査研究第1課長）
女屋和志雄（主任調査研究員）
根岸 仁（調査研究員）
6. 出土遺物の整理作業・報告書作成期間は以下のとおりである。
1996（平成8）年4月1日～1997（平成9）年3月31日
整理担当者 菊池 実（専門員）
7. 本文執筆は菊池と女屋で協議して行い、本文執筆の分析については目次に記した。
8. 当遺跡の内容をより詳細に浮き彫りする意図で、次の各位に資料の分析・測定を依頼し、その分析・測定結果の玉稿を賜った。各位に厚く御礼申し上げます。
植物珪酸体分析 パリノ・サーヴェイ株式会社
石材鑑定 陣内主一
9. 出土遺物・図面・写真・記録等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
10. 調査および整理にあたっては、次の諸氏に御教示、御協力を賜った。（敬称略）
石塚久則 石部正志 今井堯 小田澤佳之 角張淳一
金井安子 菊池誠一 桐生直彦 小宮俊久 十菱駿武
勅使河原彰 時枝務 中沢悟 三宅敦気 綿貫鋭次郎

凡 例

1. 本書中の遺構番号は発掘調査時に付したものをそのまま使用しているが、藤岡市教育委員会実施の竹沼遺跡、緑埜遺跡群でのものを継続し、同一遺構はそのままとした。

2. 本書の遺構・遺物挿図の指示は次のとおりである。

- (1) 挿図縮尺
竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑・井戸……
…1/60
水田・畠……1/60
全体図 ……1/400、1/800、1/2,500
- (2) 遺構図の方位記号は国家座標の北を表している。
座標系は国家座標第IX系である。
- (3) 水糸レベルは標高を示す。
- (4) 遺物番号は、本文、挿図、表と一致する。
- (5) 挿図中のスクリーントーンの指示は次のとおりである。



- (6) 色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖（1988年版）に基づいている。
3. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の2万5,000分の1（「高崎」「藤岡」）地形図を使用した。

〔編集〕

菊池 実

〔執筆〕

女屋和志雄
菊池 実
パリノ・サーヴェイ株式会社
陣内主一

〔写真撮影〕

女屋和志雄（遺構写真）
根岸 仁（遺構写真）
佐藤 元彦（遺物写真 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団主任技師）
たつみ写真（航空写真）

〔測量・トレース〕

株式会社 測研

〔保存処理〕

関 邦一（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団主任技師）
小材 浩一（ 〃 補助員）
土橋まり子（ 〃 非常勤嘱託）
萩原 妙子（ 〃 補助員）

〔整理補助員〕

佐藤美代子（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員）
田村 栄子（ 〃 ）
高橋とし子（ 〃 ）

藤井 文江 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団補助員)

矢野 純子 ()

都丸美奈子 ()

鶴岡真希子 ()

阿久津久子 ()

〔器械実測班〕

長沼久美子 (財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団嘱託員)

岩渕 節子 () 補助員

光安 文子 ()

萩原 光枝 ()

立川千栄子 ()

南雲 富子 ()

〔滑石製品実測・トレース〕

有限会社アルカ

〔事務〕

(調査時)

常務理事 邊見長雄

事務局長 松本浩一

管理部長 田口紀雄

調査研究部長 神保侑史

調査研究第1課長 真下高幸

(整理時)

常務理事 菅野 清

事務局長 原田恒弘

管理部長 蜂巢 実

調査研究第1部長 赤山谷造

調査研究第1課長 平野進一

総務課長 小渕 淳

総務係長 笠原秀樹 主任 須田朋子 主事 宮崎忠司

経理係長 国定 均 主任 吉田有光 主任 柳岡良宏

非常勤嘱託 大澤友治 臨時職員 吉田恵子 松井美

智代 内山佳子 星野美智子 羽鳥京子 菅原淑子 若

田誠 山口陽子 佐藤美佐子

〔発掘調査従事者 敬称略〕

関口喜久雄 中里清 河野富江 橋本ツナヨ 松田正子

横堀裕美子 角田久江 狩野芳子 金子ひろ子 萩原イ

ネ子 高橋まさ子 水島誠一 水島貞子 細谷泰雄 吉

澤真太郎 市原良子 金嶋阪江 小田桐ミサ江 斉藤さ

だゑ 池田わか 兵藤つる子 角田文子 角田サエ 池

田チヨノ 角田智津子 田中まつ子 狩野貴美恵 斉藤

卷子 角田ふじ子 岡村鶴子 斉藤かず子 笛木キクエ

山田常治 星野久子 後藤洋子 笛木恵子 池田久子

角田アキ江 斉田正美 高田みや子 星野まつ子 天立

アグリ 大久保初子 高田茂 清水かよ子 佐藤富子

序文

口絵

例言・凡例

第1章 遺跡の立地と調査の経過

[1] 調査の経過・遺跡の位置……3～8

(女屋和志雄)

- 1 遺跡の位置……3
- 2 地形と基本土層……3
- 3 調査の経過……6
- 4 調査の方法……7
- 5 調査日誌……7

[2] 歴史的環境……8～14 (菊池 実)

第2章 緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡の調査

[1] 緑埜遺跡群の遺構と遺物

……17～34

(女屋和志雄)

- 1 調査区……17
- 2 基本土層……17
- 3 各区の概要……22
 - a 1区の概要……22
 - b 2区の概要……22
 - c 3区の概要……22
 - d 4区の概要……22
 - e 5区の概要……22
- 4 A s - B下畠……22
- 5 鎌倉街道……25
- 6 石敷遺構……25
- 7 A s - B下水田……25
- 8 A s - B下畠……25

[2] 緑埜上郷遺跡の遺構と遺物

……35～44

(女屋和志雄)

- 1 調査区……35
- 2 基本土層……35
- 3 KM3・JM2A・B4……35
- 4 A s - B下水田……35

5 斎藤代官屋敷……41

第3章 竹沼 (A～D区) 遺跡の調査

[1] 竹沼遺跡の遺構と遺物……45～84

(菊池 実)

- 1 遺跡の概要……46
- 2 調査区と遺構の概要……46

[2] A区検出の遺構と遺物……47

A区5号住居跡……47

A区6号 // ……56

A区7号 // ……59

A区8号 // ……61

A区9号 // ……64

A区10号 // ……68

A区11号 // ……69

A区12号 // ……73

A区13号 // ……74

A区1号掘立柱建物跡……83

A区1号溝……83

A区2号溝……83

A区3号土坑……83

[3] B区検出の遺構と遺物

……85～102

(菊池 実)

B区1号住居跡・1号溝……86

B区2号 // ……88

B区3号 // ……88

B区13号 // ……90

B区14号 // ……91

B区15号 // ……95

B区16号 // ……99

B区7号～16号土坑……100

[4] C区検出の遺構と遺物

……103～116

(菊池 実)

C区11号住居跡……104

C区13号 // ……109

C区14号 // ……109

C区15号 // ……112

C区16号 // ……112

C区2号 // ……114

C区12号 // ……114

C区1号掘立柱建物跡……114

C区1号井戸……114

[5] D区検出の遺構と遺物

……117~151

(菊池 実・女屋和志雄)

D区4号住居跡……118

D区5号 // ……118

D区7号 // ……119

D区8号 // ……123

D区9号 // ……127

D区10号 // ……133

D区11号 // ……133

D区12号 // ……133

D区13号 // ……137

D区14号 // ……137

D区15号 // ……137

D区1号・2号・3号・4号土坑・

1号井戸・表採……148

PLATES

別添資料

付図1 白石大御堂遺跡・緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡・竹沼遺跡位置図

付図2 緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡全体図

第4章 分析とまとめ

[1] 緑埜遺跡 植物珪酸体分析……155

(バリノ・サーヴェイ株式会社)

[2] 竹沼遺跡で石材として 取り扱ったその種類と地質的関連

……164

(陣内主一)

[3] 鐮川流域の古墳時代玉作……173

(女屋和志雄)

[4] 竹沼遺跡の調査変遷……184

(菊池 実)

挿 図 目 次

- 第 1 図 藤岡市および周辺地域の地質図
- 第 2 図 緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡・竹沼遺跡位置図
- 第 3 図 緑埜遺跡群（1区～5区）・緑埜上郷遺跡・竹沼遺跡（A区～D区）
- 第 4 図 周辺遺跡分布図（鮎川流域）
- 第 5 図 緑埜遺跡群標準土層
- 第 6 図 緑埜遺跡群 1 区調査区
- 第 7 図 緑埜遺跡群 1 区調査区
- 第 8 図 緑埜遺跡群 1 区調査区（As-A下晶）
- 第 9 図 緑埜遺跡群 2 区調査区（鎌倉街道）
- 第 10 図 緑埜遺跡群 2 区調査区
- 第 11 図 緑埜遺跡群 2 区調査区
- 第 12 図 緑埜遺跡群 2・3 区調査区
- 第 13 図 緑埜遺跡群 3 区調査区
- 第 14 図 緑埜遺跡群 3 区調査区
- 第 15 図 緑埜遺跡群 3 区調査区（As-A下晶）
- 第 16 図 緑埜遺跡群 4 区調査区（As-B下晶）
- 第 17 図 緑埜遺跡群 5 区調査区
- 第 18 図 緑埜上郷遺跡
- 第 19 図 緑埜上郷遺跡（As-B下水田）
- 第 20 図 緑埜上郷遺跡（斎藤代官屋敷跡）
- 第 21 図 緑埜上郷遺跡
- 第 22 図 緑埜遺跡群出土遺物（1）
- 第 23 図 緑埜遺跡群出土遺物（2）
- 第 24 図 竹沼遺跡A区全体図
- 第 25 図 A区5号住居跡
- 第 26 図 A区5号住居跡遺物分布図
- 第 27 図 A区5号住居跡出土遺物（1）
- 第 28 図 A区5号住居跡出土遺物（2）
- 第 29 図 A区5号住居跡出土遺物（3）
- 第 30 図 A区5号住居跡出土遺物（4）
- 第 31 図 A区5号住居跡出土遺物（5）
- 第 32 図 A区6号住居跡
- 第 33 図 A区6号住居跡出土遺物
- 第 34 図 A区7号住居跡出土遺物
- 第 35 図 A区7号住居跡
- 第 36 図 A区8号住居跡
- 第 37 図 A区8号住居跡出土遺物
- 第 38 図 A区9号住居跡出土遺物
- 第 39 図 A区9号住居跡・10号住居跡
- 第 40 図 A区9号住居跡・10号住居跡遺物分布図
- 第 41 図 A区9・10号住居跡掘り方
- 第 42 図 A区10号住居跡出土遺物
- 第 43 図 A区11号住居跡
- 第 44 図 A区11号住居跡出土遺物（1）
- 第 45 図 A区11号住居跡出土遺物（2）
- 第 46 図 A区12号住居跡
- 第 47 図 A区12号住居跡出土遺物
- 第 48 図 A区13号住居跡
- 第 49 図 A区13号住居跡遺物分布図
- 第 50 図 A区13号住居跡出土遺物（1）
- 第 51 図 A区13号住居跡出土遺物（2）
- 第 52 図 A区13号住居跡出土遺物（3）
- 第 53 図 A区13号住居跡出土遺物（4）
- 第 54 図 A区13号住居跡出土遺物（5）
- 第 55 図 A区1号掘立柱建物跡・1号溝・2号溝
- 第 56 図 A区3号土坑
- 第 57 図 竹沼遺跡B区全体図
- 第 58 図 B区1号住居跡・1号溝
- 第 59 図 B区1号住居跡出土遺物
- 第 60 図 B区2号住居跡
- 第 61 図 B区3号住居跡
- 第 62 図 B区13号住居跡
- 第 63 図 B区13号住居跡出土遺物
- 第 64 図 B区14号住居跡・2号溝
- 第 65 図 B区14号住居跡掘り方
- 第 66 図 B区14号住居跡出土遺物（1）
- 第 67 図 B区14号住居跡出土遺物（2）
- 第 68 図 B区15号住居跡
- 第 69 図 B区15号住居跡出土遺物（1）
- 第 70 図 B区15号住居跡出土遺物（2）
- 第 71 図 B区16号住居跡
- 第 72 図 B区16号住居跡出土遺物
- 第 73 図 B区7号～16号土坑
- 第 74 図 B区9号土坑出土遺物
- 第 75 図 竹沼遺跡C区全体図
- 第 76 図 C区11号住居跡
- 第 77 図 C区11号住居跡遺物分布図
- 第 78 図 C区11号住居跡掘り方
- 第 79 図 C区11号住居跡出土遺物（1）
- 第 80 図 C区11号住居跡出土遺物（2）
- 第 81 図 C区13号住居跡
- 第 82 図 C区14号住居跡
- 第 83 図 C区14号住居跡出土遺物
- 第 84 図 C区15号住居跡・16号住居跡
- 第 85 図 C区15号住居跡出土遺物
- 第 86 図 C区2号住居跡・12号住居跡・1号掘立柱建物跡
- 第 87 図 C区1号井戸
- 第 88 図 C区1号井戸出土遺物
- 第 89 図 竹沼遺跡D区全体図
- 第 90 図 D区4号住居跡出土遺物
- 第 91 図 D区4号住居跡・5号住居跡
- 第 92 図 D区7号住居跡
- 第 93 図 D区7号住居跡遺物分布図と掘り方
- 第 94 図 D区7号住居跡出土遺物
- 第 95 図 D区8号住居跡

- 第96図 D区8号住居跡掘り方
- 第97図 D区8号住居跡出土遺物(1)
- 第98図 D区8号住居跡出土遺物(2)
- 第99図 D区9号住居跡
- 第100図 D区9号住居跡遺物分布図
- 第101図 D区9号住居跡掘り方
- 第102図 D区9号住居跡出土遺物(1)
- 第103図 D区9号住居跡出土遺物(2)
- 第104図 D区9号住居跡出土遺物(3)
- 第105図 D区10号住居跡
- 第106図 D区11号・12号・13号・14号・15号住居跡・2号土坑
- 第107図 D区11号・12号・13号・14号・15号住居跡遺物分布図
- 第108図 D区11号・12号・13号・14号・15号住居跡
- 第109図 D区11号・12号住居跡出土遺物(1)
- 第110図 D区12号住居跡出土遺物(2)

- 第111図 D区12号住居跡出土遺物(3)
- 第112図 D区12号住居跡出土遺物(4)
- 第113図 D区13号住居跡出土遺物(1)
- 第114図 D区13号住居跡出土遺物(2)
- 第115図 D区13号・14号住居跡出土遺物
- 第116図 D区1号・2号・3号・4号土坑・1号井戸
- 第117図 D区1号井戸・2号土坑出土遺物
- 第118図 D区表採

図1 緑埜遺跡 各区の模式柱状図と分析試料

図2 ♪ 2区試料 植物珪酸体組成

図3 ♪ 3区試料 ♪

図4 ♪ 4区試料 ♪

図5 ♪ 5区試料 ♪

図1 群馬県地質図の〔鮎川沿岸〕

PLATES

- PL.1 空中写真(米軍撮影)
- PL.2 空中写真
- PL.3 空中写真
- PL.4 1. 緑埜遺跡群・調査前(北から)
- 2. 緑埜遺跡群・遠景(北から)
- PL.5 1. 緑埜遺跡群・調査前(南から)
- 2. 緑埜遺跡群・遠景(南から)
- PL.6 1. 緑埜遺跡群・EM-1全景(南東から)
- 2. 緑埜遺跡群・EM-2西壁(東から)
- PL.7 1. 緑埜遺跡群・1区畠全景(南西から)
- 2. 緑埜遺跡群・1区畠全景(南西から)
- PL.8 1. 緑埜遺跡群・EM-48・49(南東から)
- 2. 緑埜遺跡群・鎌倉街道全景(南から)
- 3. 緑埜遺跡群・GM-8西壁(東から)
- PL.9 1. 緑埜遺跡群・石敷遺構全景(南から)
- 2. 緑埜遺跡群・GM-4全景(南東から)
- 3. 緑埜遺跡群・GM-10全景(南から)
- PL.10 緑埜遺跡群・3区畠全景(南から)
- PL.11 1. 緑埜遺跡群・3区畠全景(南から)
- 2. 緑埜遺跡群・AZ-6全景(東から)
- 3. 緑埜遺跡群・If-55全景(南から)
- PL.12 緑埜遺跡群・4区As-B下畠(南から)
- PL.13 1. 緑埜遺跡群・KM-18全景(南から)
- 2. 緑埜上郷遺跡・調査前(南から)
- 3. 緑埜上郷遺跡・表土掘削
- PL.14 1. 緑埜上郷遺跡・JM2A・KM3全景(南から)
- 2. 緑埜上郷遺跡・1号土坑(南東から)
- 3. 緑埜上郷遺跡・As-B下水田(南西から)
- PL.15 1. 緑埜上郷遺跡・斎藤代官屋敷(北から)
- 2. 緑埜上郷遺跡・斎藤代官屋敷石垣(南東から)
- PL.16 ▼ 緑埜遺跡群出土遺物

▼ 緑埜遺跡群表採出土遺物

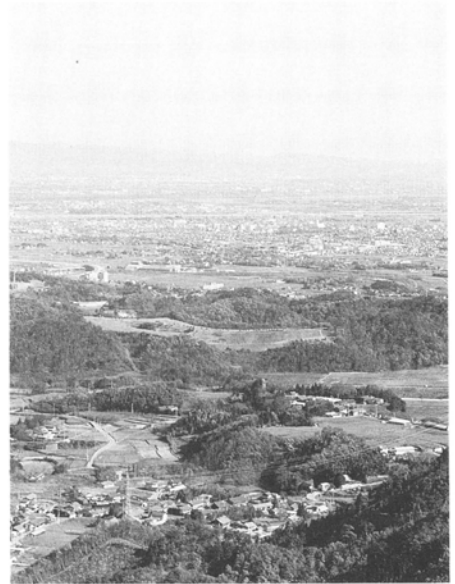
- PL.17 竹沼遺跡 A区全景(南から)
- PL.18 1. A区調査風景(南西から)
- 2. ♪ (南から)
- PL.19 1. A区5号住居跡(北から)
- 2. ♪ 遺物出土状況(西から)
- PL.20 1. A区5号住居跡遺物出土状況(北から)
- 2. ♪ (東から)
- 3. ♪ (南東から)
- PL.21 1. A区5号住居跡掘り方(北から)
- 2. A区6号住居跡(南西から)
- PL.22 1. A区6号住居跡(南西から)
- 2. ♪ 掘り方(南西から)
- PL.23 1. A区7号住居跡(西から)
- 2. ♪ 遺物出土状況(東から)
- 3. ♪ カマド(南西から)
- PL.24 1. A区7号住居跡貯蔵穴(南から)
- 2. ♪ 炭化材出土状況(北から)
- 3. ♪ 掘り方(北から)
- PL.25 1. A区8号住居跡(南西から)
- 2. ♪ カマド(南西から)
- 3. ♪ 掘り方(北西から)
- PL.26 1. A区9号住居跡(南西から)
- 2. ♪ 掘り方(北から)
- PL.27 1. A区10号住居跡(西から)
- 2. ♪ 遺物出土状況(東から)
- 3. ♪ 掘り方(北西から)
- PL.28 1. A区11号住居跡(南西から)
- 2. ♪ 遺物出土状況(北東から)
- PL.29 1. A区11号住居跡掘り方(南西から)
- 2. A区12号住居跡(南から)

- P L .30 1. A区12号住居跡(東から)
 2. ♪ 掘り方(南から)
- P L .31 1. A区13号住居跡(南から)
 2. ♪ 遺物出土状況(南から)
- P L .32 1. A区13号住居跡遺物出土状況(南から)
 2. ♪ (北東から)
- P L .33 1. A区13号住居跡貯蔵穴(南から)
 2. ♪ 南東隅貯蔵穴(北から)
 3. ♪ 掘り方(南から)
- P L .34 1. A区1号掘立柱建物跡(北西から)
 2. A区2号溝(南東から)
 3. A区3号土坑(東から)
- P L .35 竹沼遺跡B区全景(北から)
- P L .36 1. B区調査前風景
 2. B区遺構確認状況(北から)
- P L .37 1. B区1号住居跡(北西から)
 2. ♪ 遺物出土状況(南西から)
- P L .38 1. B区1号住居跡掘り方(北西から)
 2. B区2号住居跡(南東から)
- P L .39 1. B区3号住居跡(北東から)
 2. ♪ 遺物出土状況(北西から)
 3. ♪ 掘り方(北西から)
- P L .40 1. B区13号住居跡(北から)
 2. ♪ 掘り方(南東から)
- P L .41 1. B区14号住居跡(南東から)
 2. ♪ 遺物出土状況(南東から)
- P L .42 1. B区14号住居跡カマド(南西から)
 2. ♪ 掘り方(東から)
 3. B区15号住居跡(南東から)
- P L .43 1. B区15号住居跡遺物出土状況(南から)
 2. ♪ カマド(南西から)
 3. ♪ 掘り方(南東から)
- P L .44 1. B区16号住居跡(北東から)
 2. ♪ 掘り方(北東から)
 3. ♪ 貯蔵穴(南西から)
- P L .45 1. B区7号・8号・9号土坑(南西から)
 2. B区9号土坑(南東から)
 3. B区8号土坑(北から)
 4. B区11号土坑(西から)
 5. B区10号土坑(東から)
- P L .46 1. B区12号土坑(北西から)
 2. B区13号土坑(北西から)
 3. B区14号土坑(北西から)
 4. B区15号土坑(西から)
 5. B区1号溝(南東から)
 6. B区2号溝(南東から)
- P L .47 1. C区2号住居跡(西から)
 2. C区11号住居跡(北東から)
- P L .48 1. C区11号住居跡遺物出土状況(南東から)
 2. ♪ (南西から)
- P L .49 1. C区12号住居跡(東から)
2. C区16号住居跡(南から)
- P L .50 1. C区13号住居跡(東から)
 2. ♪ 掘り方(北西から)
- P L .51 1. C区14号住居跡(北から)
 2. ♪ 遺物出土状況(南東から)
- P L .52 1. C区15号住居跡(南から)
 2. ♪ カマド(南から)
 3. C区1号掘立柱建物跡(南から)
- P L .53 1. D区調査前風景(北東から)
 2. D区調査風景(南から)
- P L .54 竹沼遺跡D区全景(南から)
- P L .55 竹沼遺跡D区全景(南から)
- P L .56 1. D区4号住居跡(南西から)
 2. D区5号住居跡(北西から)
- P L .57 1. D区7号住居跡(南西から)
 2. ♪ カマド(南東から)
- P L .58 1. D区7号住居跡掘り方(北東から)
 2. D区8号住居跡(南東から)
- P L .59 1. D区8号住居跡カマド(南西から)
 2. ♪ 貯蔵穴(南西から)
 3. ♪ こも縄石出土状況(南西から)
- P L .60 1. D区8号住居跡掘り方(南東から)
 2. D区9号住居跡遺物出土状況(南東から)
- P L .61 1. D区9号住居跡カマド(南西から)
 2. ♪ (南西から)
 3. ♪ 遺物出土状況(北東から)
- P L .62 1. D区9号住居跡掘り方(北東から)
 2. D区10号住居跡(南東から)
- P L .63 1. D区11号・12号住居跡遺物出土状況(南東から)
 2. D区11号住居跡カマド(南西から)
- P L .64 D区12号・13号住居跡遺物出土状況(南東から)
- P L .65 1. D区12号住居跡遺物出土状況(東から)
 2. ♪ (西から)
 3. ♪ カマド(南西から)
- P L .66 1. D区13号～15号住居跡遺物出土状況(南東から)
 2. D区13号住居跡遺物出土状況(北から)
- P L .67 1. D区13号住居跡カマド(北西から)
 2. D区14号住居跡カマド(南西から)
 3. D区1号土坑(南東から)
 4. D区3号土坑(東から)
 5. D区4号土坑(南西から)
 6. D区1号井戸(東から)
- P L .68 ▼A区5号住居跡出土遺物
- P L .69 ▼A区5号住居跡出土遺物
- P L .70 ▼A区5号住居跡出土遺物
- P L .71 ▼A区5号住居跡出土遺物
 ▼A区6号住居跡出土遺物
- P L .72 ▼A区6号住居跡出土遺物
 ▼A区7号住居跡出土遺物
- P L .73 ▼A区8号住居跡出土遺物

- ▼A区9号住居跡出土遺物
- ▼A区10号住居跡出土遺物
- P L .74 ▼A区11号住居跡出土遺物
- ▼A区12号住居跡出土遺物
- P L .75 ▼A区13号住居跡出土遺物
- P L .76 ▼A区13号住居跡出土遺物
- P L .77 ▼A区13号住居跡出土遺物
- P L .78 ▼A区13号住居跡出土遺物
- ▼B区1号住居跡出土遺物
- ▼B区13号住居跡出土遺物
- ▼B区14号住居跡出土遺物
- P L .79 ▼B区14号住居跡出土遺物
- ▼B区15号住居跡出土遺物
- P L .80 ▼B区15号住居跡出土遺物
- ▼B区16号住居跡出土遺物
- ▼B区9号土坑出土遺物
- ▼C区11号住居跡出土遺物
- P L .81 ▼C区11号住居跡出土遺物
- ▼C区14号住居跡出土遺物
- P L .82 ▼C区15号住居跡出土遺物
- ▼C区1号井戸出土遺物
- ▼D区4号住居跡出土遺物
- ▼D区7号住居跡出土遺物
- ▼D区8号住居跡出土遺物
- P L .83 ▼D区8号住居跡出土遺物
- ▼D区9号住居跡出土遺物
- P L .84 ▼D区9号住居跡出土遺物
- P L .85 ▼D区11号住居跡出土遺物
- ▼D区12号住居跡出土遺物
- P L .86 ▼D区12号住居跡出土遺物
- ▼D区13号住居跡出土遺物
- P L .87 ▼D区13号住居跡出土遺物
- ▼D区14号住居跡出土遺物
- ▼D区2号土坑出土遺物
- ▼D区1号井戸出土遺物
- ▼D区表探出土遺物

第1章

遺跡の立地と 調査の経過



牛伏山から望む

[1] 調査の経過・遺跡の位置

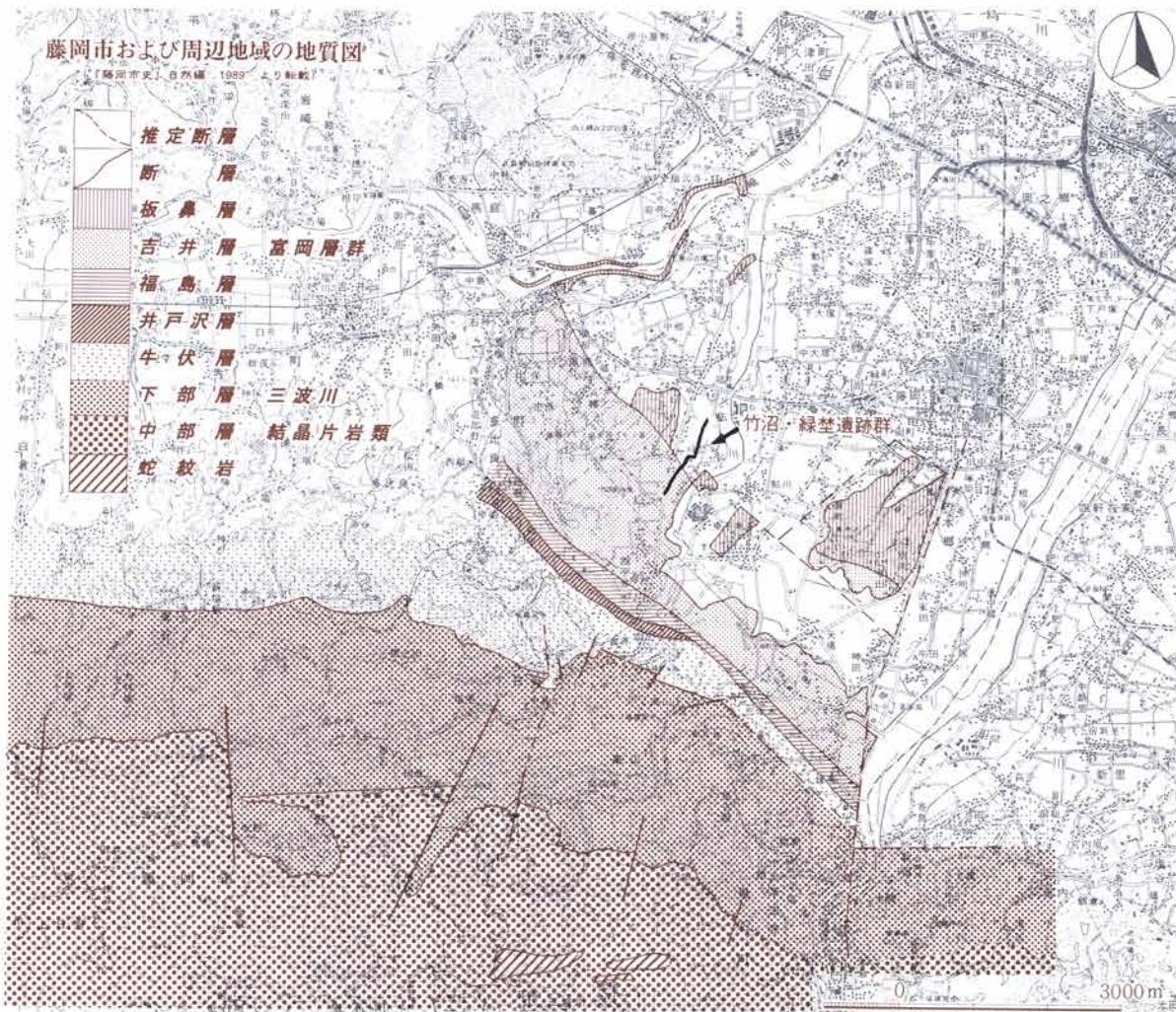
1 遺跡の位置

緑埜遺跡群は、群馬県の南西部、藤岡市西平井に所在し、竹沼遺跡、緑埜上郷遺跡、緑埜遺跡群の3つからなる。赤久縄山に水源をもつ鮎川の左岸、市街地からは南西に約4kmの田園地帯の中にある(第2図)。上流2km、通称日野の谷口には、関東管領上杉氏を擁した平井城、下流鮎川との合流点には白石稲荷山古墳、七輿山古墳など大型の前方後円墳が並び、古代、中世と地域の中樞をになった所である。また、多胡碑にある緑野郡の一画で、日本書紀安閑紀の“緑野屯倉”に比定される地でもある。

2 地形と基本土層

藤岡市の地形は、『山地』『丘陵・台地』『低地』の3つに区分できる。南西部に連なる日野の山並みは、関東山地の一画を占め、三波川変成帯に属している。丘陵・台地は、洪積世の砂礫層を基盤とし関東ローム層で覆われている。市街地のある一帯は、藤岡台地とも呼ばれる扇状地で、南西を鮎川、神流川で開析されている。その扇端が両河川と合流する鮎川による沖積低地である(第1図)。

遺跡付近は、左岸に鮎川の段丘につながる丘陵、右岸に偏平な藤岡台地を一望することができる。丘

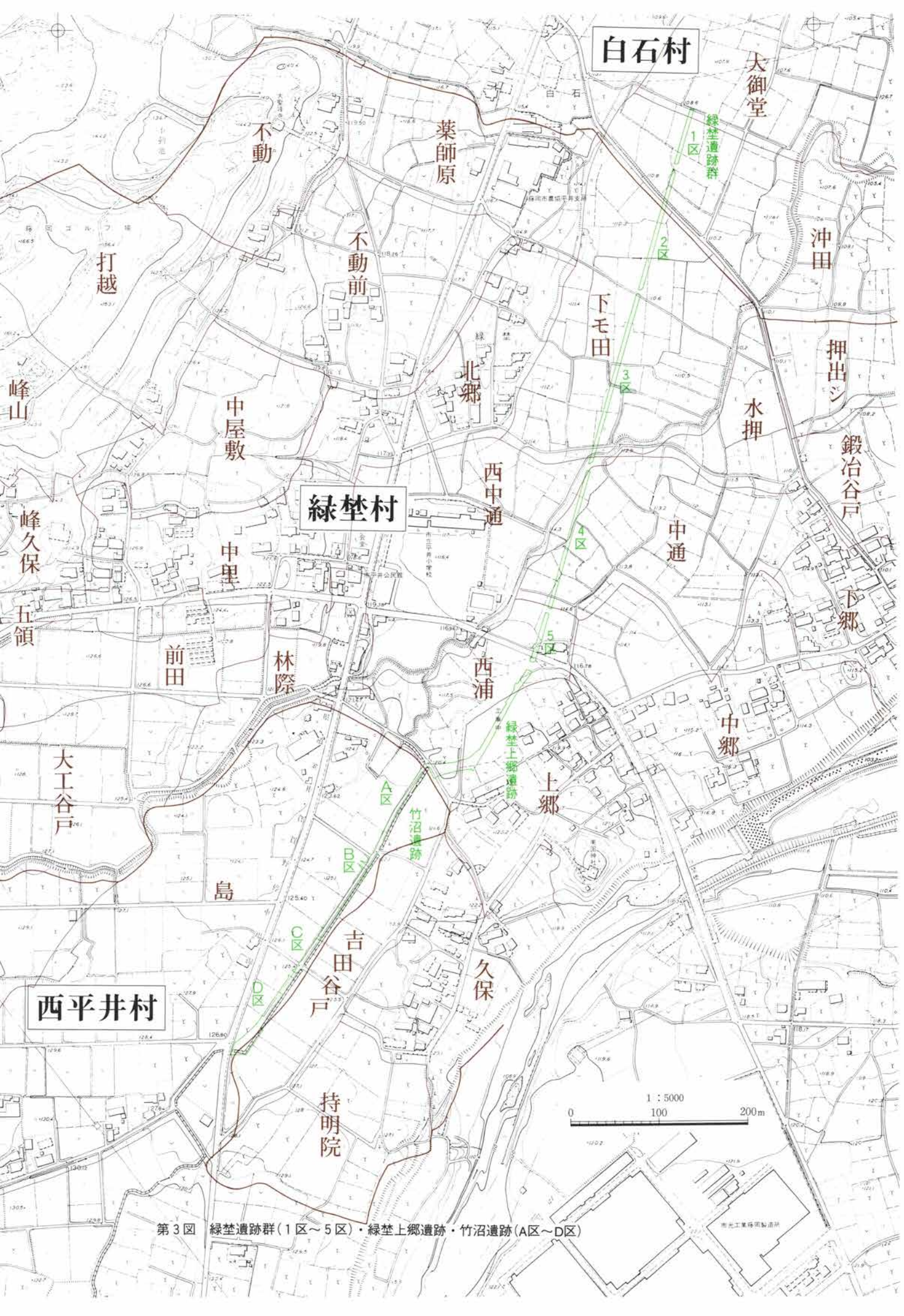


第1図 藤岡市および周辺地域の地質図



第2図 緑塙遺跡群・緑塙上郷遺跡・竹沼遺跡位置図

0 1000m
1:25000



白石村

大御堂

不動

薬師原

緑埜遺跡群
1区

沖田

打越

不動前

下毛田

2区

押出シ

水押

鍛冶谷戸

峰山

中屋敷

北郷

緑埜村

西中通

中通

下郷

峰久保
五領

中里

前田

林際

西浦

上郷

中郷

大工谷戸

竹沼遺跡

A区

B区

C区

D区

西平井村

吉田谷戸

久保

持明院

1 : 5000

0

100

200m

第3図 緑埜遺跡群(1区~5区)・緑埜上郷遺跡・竹沼遺跡(A区~D区)

第1章 遺跡の立地と調査の経過

陵からは谷地田で刻まれた台地がのび、鮎川との間に緑埜たんぼと通称される水田が広がる。1970（昭和45）年に始まる県営圃場整備以前は、養蚕を主とする畑作地帯で、水田は竹沼と大神場池を水源とする谷地田と緑埜たんぼの一面にすぎなかった（明治10年には田14町に対して畑46町の記録がある。一緑野郡村誌）。

発掘調査は、台地から低地にかけて10をこす遺跡で行われている。その結果は、中世、古代に溯る景観、また現代への移り変わりを明らかにしている。開墾は、谷地に面して始まり、その埋没とともに緑埜たんぼへ進出している。竹沼遺跡、緑埜上郷遺跡、台地上での集落の推移、緑埜遺跡群は微地形と集落のかかわりを知ることができる。

基本土層の観察は、各遺跡2箇所で行った。

竹沼遺跡・緑埜上郷遺跡のある台地では、結晶片岩類の砂礫を主とする基盤層の上に、暗色帯以上のローム層が1m前後堆積している。耕作土からローム層までは、約50cm前後の厚さで、As-A（浅間A）層やAs-B（同B）層は部分的にみられた。遺構の確認は、ローム漸移層かその上面で行った。

緑埜遺跡群の3区と5区では、地表下2.5mまでの深掘りを行った。最深部には、広葉樹の流木を含んだ黒色土、その上に古墳時代の水田耕作土の可能性のある暗褐色の粘質土、さらに淡い橙色粘質土の互層が1.5m近く堆積していた。この橙色粘質土の上面がAs-B層で覆われた水田や畠の耕作土である。その後、As-A層の二次堆積層や混土層、現代の耕作土となっている。

3 調査の経過

発掘調査は、上信越自動車道への盛土を搬出する道路用地、全長2,050m、幅7.5m、面積15,375㎡を対象とした。この用地は、藤岡市教育委員会が圃場整備事業に伴い、竹沼遺跡（1976年）、緑埜遺跡群（1982～1985年）として調査した道路の拡幅である。

その日程や体制については、1990（平成2）年7月6日、日本道路公団東京第二建設局、群馬県教育

委員会文化財保護課、群馬県埋蔵文化財調査事業団の三者で協議し、下記のとおりとした。

- 1 日程は、1990（平成2）年8月から同年12月までとする。
- 2 調査体制は、藤岡市教育委員会と群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施する。
- 3 調査範囲は、県道倉賀野停車場金井線の西830mを藤岡市教育委員会、東1,220mを群馬県埋蔵文化財調査事業団で分けて実施する。

その後、藤岡市教育委員会との調査方法や日程の協議、調査の準備をへて8月30日、竹沼遺跡の表土掘削を開始した。緑埜遺跡群、緑埜上郷遺跡は、水稲収穫後に調査を実施し、1990（平成2）年12月28日全ての調査を終了した。

竹沼遺跡の調査は、1990（平成2）年8月から10月に、D区からA区の順で実施した。

調査した遺構は、住居跡34軒、掘立柱建物2棟、土坑16基、井戸2基、溝4条、風倒木痕、ピット群である。住居は、古墳時代が32軒、弥生時代と奈良時代が各1軒である。遺構の大半は、新たに確認され、1976（昭和51）年の追加は住居5軒、溝2条である。

緑埜遺跡群は、1990（平成2）年11月、12月に1区から5区の順で実施した。

調査した遺構は、江戸時代と平安時代の水田と畠、溝、土坑そして鎌倉街道跡である。いずれも、1985・1986（昭和60・61）年調査の追加である。

緑埜上郷遺跡は、台地が圃場整備事業でローム面まで削平されており、遺構が確認できたのは台地の斜面と谷地からである。遺構は、1986（昭和61）年調査に追加する斎藤代官屋敷の石垣と平安時代の水田と溝である。

1990（平成2）年12月には、出土した石材の鑑定と植物珪酸体の分析を実施している。

4 調査の方法

調査の方法は、藤岡市教育委員会が調査した竹沼遺跡、緑埜遺跡群に準拠した。

測量基準杭は、国家座標系IX系で設定した緑埜遺跡群の方眼を南の竹沼遺跡の範囲まで延長した。4 m×4 mグリッドを基本とし、東西軸は50を起点に東へ延長、南北軸はEを基点に100m毎にE～Jまでとし、その中を4 mごとにa～yまで、例えばE50 aと表記した。従前の竹沼遺跡の方眼とは、西約20°のずれを持ち、個別の遺構は現状で合わせることにとどめた。

調査区の呼称は、竹沼遺跡では従来のA～D区をそのまま使用し、緑埜遺跡群では調査区を横断する道路水路で新たに北から1～5区までとした。その中で、道路、水路部分は調査の対象から除外した。遺構の呼称は、竹沼遺跡、緑埜遺跡群でのものを継続し、同一の遺構はそのままとした。

対象面積は、竹沼遺跡約2,000㎡、緑埜上郷遺跡約1,200㎡、緑埜遺跡群約3,100㎡である。

5 調査日誌

1990（平成2）年

8月1日 調査開始。担当者は真下高幸、女屋和志雄、根岸仁の3名である。

8月3日・4日 重機による表土剥ぎ作業を実施。

8月6日～10日 重機による表土剥ぎ作業を継続。

8月13日～18日 重機による表土剥ぎ作業を継続。13日からプレハブの水道工事が始まる。

8月20日～24日 竹沼D区の遺構確認作業を開始。

8月27日～9月1日 竹沼D・C区遺構確認作業。D区7・8号住居跡の発掘を開始。

9月3日～7日 竹沼A～D区の遺構確認作業。D区1～4号土坑の調査、1号井戸、4・7～9号住居跡の調査。C区6・13号住居跡の調査。B区2・3・13～15号住居跡の調査。

9月10日～14日 D区4・7・8・11～14号住居跡の調査、全体図の作成開始。C区14号住居跡、B区3・13～15号住居跡、A区5～7号住居跡の調査を行う。

9月17日～21日 D区4・6～8・11～14号住居跡の調査。C区13号住居跡の調査。B区1・2・13号住居跡の調査。A区5～7号住居跡の調査。

9月25日～28日 D区7・8・11～14号住居跡の調査。C区11・13号住居跡の調査。B区2・14～16号住居跡、土坑の調査。A区5～10号住居跡の調査継続。

10月1日～5日 C区2・3・14・15号住居跡の調査。B区14・15号住居跡の調査。A区5・7～13号住居跡、1号土坑の調査。緑埜遺跡群の掘削開始。

10月6日～12日 D区11～14号住居跡の精査。B区1・16号住居跡の調査。A区7～13号住居跡の調査。緑埜遺跡群の掘削継続。8日から菊池が調査の応援。

10月15日～20日 C区2・3・13・15号住居跡の精査。B区3・13・15号住居跡の精査。A区5・7～13号住居跡の精査を行う。

10月22日～26日 D区7～13号住居跡の掘り方調査。C区11・14・15号住居跡の掘り方調査。

10月29日～11月2日 B区3・13～15号住居跡掘り方調査。A区5～7・9～13号住居跡の掘り方調査。

11月5日～9日 B区1・13～16号住居跡の精査。A区5～9・11・13号住居跡の精査。緑埜遺跡群4・5区の遺構確認作業を行う。

11月13日～17日 緑埜遺跡群2～5区遺構確認作業。

11月19日～22日 緑埜遺跡群1・2区の遺構確認作業。全体図の作成を実施。

11月26日～12月1日 緑埜遺跡群5区の遺構確認作業。緑埜上郷遺跡の調査。30日夜半、台風来襲で遺跡は冠水。

12月3日～7日 緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡の排水作業を実施。緑埜遺跡群1区精査、3区確認作業、As-B下水田を検出。

12月10日～14日 緑埜遺跡群1区・4区調査。陣内主一先生による石材鑑定を実施。

12月17日～22日 緑埜遺跡群1区～3区調査。緑埜上郷遺跡の調査。プラントオパール分析を実施。

12月25日～27日 基本土層の注記作業。現場調査を終了。

1991（平成3）年

1月7日～11日 図面・写真整理を行う。
1月14日～19日 図面・写真整理。石材鑑定を実施。
1月21日～25日 遺物集計・石材の集計。事務所撤

去作業。
1月28日～31日 事務所撤去作業。調査終了に伴う
地元挨拶を行う。

〔2〕

歴史的環境

藤岡市はその地形的特質から、西南部の山間地域と北東部の平野部とに分かれる。遺跡が多く見られるのは北東平野部である。この平野部は鮎川による開析扇状地が東を神流川、北を鎭川、西を鮎川によって隔てられ、藤岡台地とも呼ばれている。遺跡が濃密に存在するのは、この3つの河川に沿った台地縁辺部である。

鮎川流域には、伊勢塚古墳(7世紀前半の築造)、七輿山古墳(6世紀前半の築造)、白石稻荷山古墳(5世紀前半の築造)及び白石古墳群、東平井古墳群などの古墳群が知られており、神流川流域とともに藤岡市の中では埋蔵文化財包蔵の中心的地域といえる。

竹沼遺跡・緑埜遺跡群周辺では、昭和48年度から52年度にかけて、また、昭和57年度から61年度にかけて二度にわたる大規模な農業構造改善基盤整備事業が実施され、広範な地域が調査対象となった。その結果、つぎの諸遺跡が調査されている。

旧石器時代の遺物を出土する遺跡はあまり多くない。緑埜島遺跡(018)からナイフ形石器1点が表採され、緑埜上郷遺跡(004)からはAT層を含む層から剥片石器が出土している。また、竹沼遺跡(002)からは両面加工石器、搔器が出土している。

縄文時代の遺跡は、平井・美土里地区と、藤岡台地北辺から東北辺にかけての小野・神流地区に多く見られ、台地縁辺に立地するものが多い。当遺跡の周辺では、シモ田遺跡(005)から晩期前半(安行3b式期)の土壙状の遺構1基、薬師原遺跡(013)から中期後半(加曾利E3式期)の住居跡1軒、土壙23基、土器埋設遺構3基が検出された。鍛冶谷戸遺跡(010)では配石や埋設土器が検出され、竹沼遺跡(002)からは中期住居跡3軒と土坑5基が調

査されている。

弥生時代遺跡の調査例は少ない。市教委が実施した竹沼遺跡(002)から、赤井戸式期の土器を伴う住居跡調査例と、今回調査の事例、そして中期土器の出土した白石大御堂遺跡(064)が知られている。

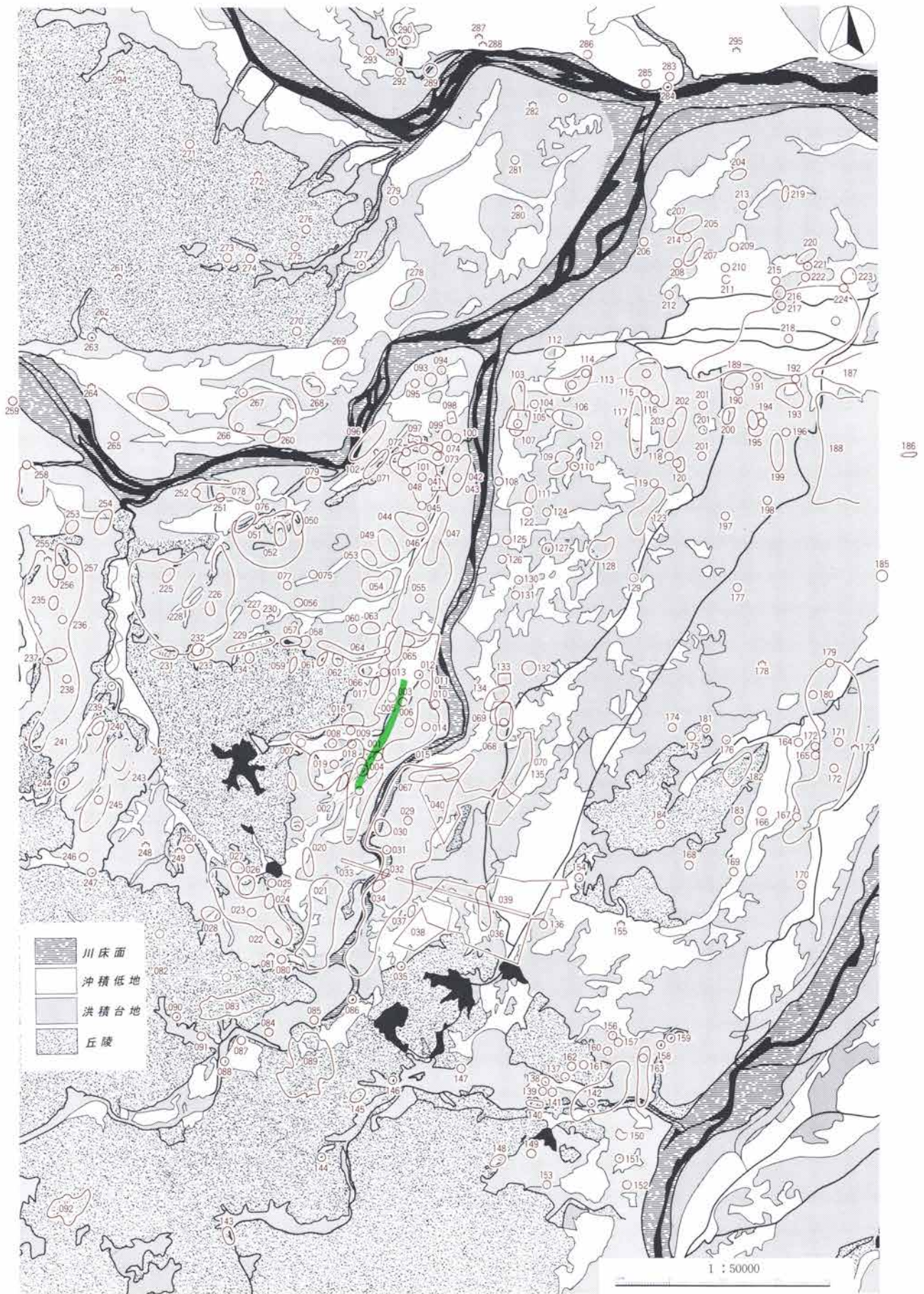
鮎川流域には白石稻荷山古墳(046)や七輿山古墳(097)などの規模の大きい前方後円墳が存在しているが、多くは後期の円墳であり群集している。分布域は鮎川流域と神流川流域に集中している。

緑埜古墳群(014)内に分布する古墳は『上毛古墳総覧』において7基が記載され、市教委の発掘調査の結果新たに3基の古墳が追加された。本古墳群は沖積地にもまたがる南北600メートルの範囲に点在することが判明し7世紀代の築造と考えられている。

古墳時代の集落跡は、緑埜島遺跡(018)から6世紀前半の住居跡1軒、土坑・ピット232基が検出されている。また、緑埜水押遺跡(012)では5世紀前半の住居跡3軒、緑埜上郷遺跡(004)では5世紀から6世紀代の住居跡26軒、竹沼遺跡(002)からは古墳時代前期の住居跡4軒、後期の住居跡26軒が検出されている。このうち後期住居跡の中には、9軒の滑石製品製作工房跡が含まれていた。

奈良～平安時代の遺跡は、中里遺跡(009)から古墳時代末と奈良時代後半から平安時代初頭頃の住居跡2軒、溝1条、ピット群が検出されている。緑埜押出シ遺跡(011)では平安時代の住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、土坑・ピットである。大工ヶ谷戸遺跡(008)は古墳時代末～奈良時代の住居跡8軒、平安時代住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土坑・ピットが検出されている。

また、緑埜地区水田址遺跡(003)では、As-B下水田と畠跡が検出されている。



第4図 周辺遺跡分布図(鮎川流域)

第1章 遺跡の立地と調査の経過

周辺遺跡一覧表 (◇遺物検出 ◆遺構検出 凸城館 ◎古墳)

番号	遺跡名	所在地	旧	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他	調査主体・文献
001	緑芝遺跡群・竹沼遺跡	藤岡市緑芝				◆	◆	◆	◆	◆		☆	☆				群埋文・本報告書
002	竹沼遺跡 (F 1)	藤岡市緑芝字久保、西平井字金ヶ谷戸	◇	◆	◆	◆	◆	◆				☆	☆				市教委「F 1竹沼遺跡」1977
003	緑芝地区遺跡群 (F 2)	藤岡市緑芝	◇	◆	◆	◆	◆	◆				☆	☆	☆	☆		市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
004	緑芝上郷遺跡	藤岡市緑芝字上郷	◇		◆				◆			☆					市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
005	シモ田遺跡	藤岡市緑芝字シモ田	◇														市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
006	緑芝中郷遺跡	藤岡市緑芝字中郷						◆					☆				市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
007	五領遺跡	藤岡市緑芝字五領	◇					◆									市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
008	大工谷戸遺跡	藤岡市緑芝字大工ヶ谷戸						◆	◆			☆					市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
009	中里遺跡	藤岡市緑芝字中里						◆		◆		☆	☆				市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
010	鍛冶谷戸遺跡	藤岡市緑芝字鍛冶谷戸	◆											☆			市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
011	緑芝押出シ遺跡	藤岡市緑芝字押出シ・字沖田					◆	◆				☆					市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
012	緑芝水押遺跡	藤岡市緑芝字水押					◆					☆					市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
013	薬師原遺跡	藤岡市緑芝字薬師原	◆				◆					☆			☆		市教委「F 9薬師原遺跡」1985
014	緑芝古墳群	藤岡市緑芝					◆								◎		市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
015	平井地区No.19遺跡	藤岡市緑芝、西平井、白石										◇					市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
016	平井地区No.18遺跡	藤岡市緑芝字中里		◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
017	平井地区No.17遺跡	藤岡市緑芝字不動前・字薬師原・字北郷		◇	◇	◇	◇										市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
018	緑芝島遺跡	藤岡市西平井字島	◇			◆						☆					市教委「F 2緑芝地区遺跡群Ⅰ」1986
019	平井地区No.22遺跡	藤岡市西平井字島、字二ノ宮、字道													◇		市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
020	平井地区No.23遺跡	藤岡市西平井字屋舗・字九伝	◇	◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
021	平井城跡	藤岡市西平井								◆					凸		『群馬県古城址の研究 下巻』1972
022	南坂古墳群	藤岡市西平井					◆								◎		市教委「E 4道上遺跡」1988
023	平井地区No.29遺跡	藤岡市西平井字南坂	◇	◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
024	平井地区No.28遺跡	藤岡市西平井字滝ノ上	◇					◇									市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
025	(墳墓)	藤岡市西平井				◇									☆		『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
026	平井地区No.27遺跡	藤岡市西平井字清水谷・字上ノ場	◇			◇	◇										市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
027	平井地区No.26遺跡	藤岡市西平井字の場	◇														市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
028	平井地区No.30遺跡	藤岡市西平井字不動原	◇	◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
029	東平井古墳群	藤岡市東平井					◆								◎		県教委「昭和55年度遺跡詳細分布調査報告書」1981
030	平井地区No.24遺跡	藤岡市東平井字飛石	◇	◇													市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
031	飛石A遺跡	藤岡市東平井字飛石	◆	◆											☆		市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1988
032	飛石の砦	藤岡市東平井字川破				◇									☆		群埋文
033	飛石の砦跡・東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡・西平井久保田代遺跡	藤岡市東平井、西平井、矢場地区	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	☆	☆	◎	凸			群埋文「飛石の砦跡・東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡・西平井久保田代遺跡」1994
034	平井地区No.25遺跡	藤岡市東平井字塚間	◇														市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
035	平井地区No.33遺跡	藤岡市東平井字上田	◇														市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
036	平井地区No.32遺跡	藤岡市東平井字猿川		◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
037	東平井の砦跡	藤岡市東平井字城之内								◇						凸	市教委「F 12藤岡平地区遺跡群」1994
038	F 12藤岡平地区遺跡群	藤岡市東平井字森附・字富士井戸・字官正前・字城之内	◆	◆	◆	◆	◆	◆				☆	☆	☆	凸		市教委「F 12藤岡平地区遺跡群」1994
039	F 14藤岡平地区遺跡群	藤岡市東平井、矢場	◆	◆	◆	◆	◆					☆	☆				市教委「F 14藤岡平地区遺跡群Ⅱ」1992
040	F 15藤岡平地区遺跡群	藤岡市東平井、鮎川	◆	◆	◆	◆						☆	☆				市教委「F 15藤岡平地区遺跡群Ⅲ」1993
041	平井地区No.5遺跡	藤岡市白石字北原	◇	◇													市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
042	白石猿田古墳群	藤岡市白石字猿田					◆								◎		市教委「白石古墳群調査報告書」1989
043	平井地区No.10遺跡	藤岡市白石字猿田	◇	◇													市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
044	平井地区No.6遺跡	藤岡市白石字稲荷原	◇	◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
045	十二天塚古墳	藤岡市白石字稲荷原					◆								◎		市教委「伊勢塚古墳・十二天塚古墳」1988
046	白石稲荷山古墳	藤岡市白石字稲荷原					◆								◎		市教委「白石稲荷山古墳」1987
047	平井地区No.11遺跡	藤岡市白石字滝	◇	◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
048	白石の砦	藤岡市白石字新堀								◇						凸	『群馬県古城址の研究 下巻』1972
049	平井地区No.7遺跡	藤岡市白石字新堀	◇	◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
050	平井地区No.3遺跡	藤岡市白石字上原	◇	◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
051	平井地区No.2遺跡	藤岡市白石字上原	◇	◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
052	(散布地)	藤岡市白石字上原	◇														
053	平井地区No.8遺跡	藤岡市白石字中郷	◇	◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
054	平井地区No.9遺跡	藤岡市白石字鳥寺	◇	◇	◇	◇											市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984
055	白石古墳群	藤岡市白石字下郷					◆								◎		市教委「白石古墳群調査報告書」1988
056	境塚遺跡	藤岡市白石字根岸					◇	◇	◇								市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1988
057	白石根岸遺跡	藤岡市白石字根岸	◇			◇	◇					☆	☆				群埋文「多比良平野遺跡 白石根岸遺跡」1994
058	平井地区No.12遺跡	藤岡市白石字根岸	◇														市教委「藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)」1984

[2] 歴史的環境

番号	遺跡名	所在地	旧	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他	調査主体・文献
059	(散布地)	藤岡市白石字根岸		◇				◇	◇								
060	(古墳)	藤岡市白石字根岸			◇									◎			
061	平井地区No.13遺跡	藤岡市白石字美濃山		◇													市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)』1984
062	平井地区No.14遺跡	藤岡市白石字上谷戸		◇	◇												市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)』1984
063	平井地区No.15遺跡	藤岡市白石字上谷戸		◇	◇	◇	◇										市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)』1984
064	白石大御堂遺跡	藤岡市白石字大御堂・字前原・字上谷戸	◇	◆	◆	◆	◆	◆	◆			☆	☆	☆			群埋文『白石大御堂遺跡』1991
065	平井地区No.16遺跡	藤岡市白石字前原		◇	◇												市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)』1984
066	白石古墳群	藤岡市緑壘、白石				◆								◎			市教委『白石古墳群調査報告書』1988
067	平井地区No.20遺跡	藤岡市鮎川字尺司・字時沢・字塔之内		◇													市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)』1984
068	鮎川古墳群	藤岡市鮎川				◆								◎			群馬県『上毛古墳総覧』1938
069	鮎川城	藤岡市鮎川字下の段・字元屋敷							◆						凸		『群馬県古城墓址の研究 補遺篇 上巻』1979
070	平井地区No.31遺跡	藤岡市鮎川字紅粉谷戸・字原ノ坊・字業師			◇	◇	◇										市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)』1984
071	東原遺跡(D1)	藤岡市三ツ木字東原		◆	◆								☆	☆			市教委
072	東原Ⅱ遺跡(F8)	藤岡市三ツ木字東原				◆	◆	◆					☆	☆			市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅶ)』1988
073	平井地区1号古墳	藤岡市三ツ木字東原				◆								◎			市教委『平井地区1号古墳』1993
074	平井地区No.4遺跡	藤岡市三ツ木字東原		◇	◇	◇	◇										市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)』1984
075	三ツ木橋向遺跡	藤岡市三ツ木										◇					市教委『文化財課年報』
076	平井地区No.1遺跡	藤岡市三ツ木字橋向		◇													市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅲ)』1984
077	三ツ木城跡	藤岡市三ツ木							◇						凸		『群馬県古城墓址の研究 下巻』1972
078	(散布地)	藤岡市三ツ木				◇	◇	◇									
079	(散布地)	藤岡市三ツ木				◇	◇	◇									
080	金山瓦窯跡	藤岡市金井字金山					◆						☆				立正大学『上野・金山瓦窯跡』1966
081	金山西城跡	藤岡市金井乙								◆					凸		『群馬県古城墓址の研究 補遺篇 上巻』1979
082	下日野・金井窯址群	藤岡市下日野字鉦沢、金井字風呂ヶ谷・字金井下						◇	◇						☆		市教委『年報(3)(4)』1988-1989
083	平井金山城跡	藤岡市金井字金山							◇						凸		『群馬県古城墓址の研究 補遺篇 上巻』1979
084	こぼつさま	藤岡市金井字大平				◇										☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
085	高山城跡	藤岡市金井字上小平							◇						凸		『群馬県の中世城館跡』1988
086	(墳墓)	藤岡市金井				◇										☆	
087	(墳墓)	藤岡市金井字中倉				◇										☆	
088	(墳墓)	藤岡市金井字川久保				◇										☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
089	金井城跡	藤岡市金井字小平								◆					凸		『群馬県古城墓址の研究 下巻』1972
090	駒留城	藤岡市下日野駒留字印字							◇						凸		『群馬県古城墓址の研究 補遺篇 上巻』1979
091	鉦沢遺跡	藤岡市下日野字鉦沢							◆	◆			☆				群馬大学『昭和39-40年度における発掘調査』1969
092	子玉山城跡	藤岡市下日野字塩平・字渡牛・字印字・字江木							◇						凸		『藤岡市史 資料編 原始・古代・中世』1993
093	美土里地区No.1遺跡	藤岡市上落合字屋敷裏	◇	◇	◇	◇	◇										市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
094	岡の砦	藤岡市上落合字岡							◇							☆	『藤岡市史 資料編 原始・古代・中世』1993
095	伊勢塚古墳	藤岡市上落合字岡				◆								◎			群馬・市教委『伊勢塚古墳 十二天塚古墳』1988
096	美土里地区No.2遺跡	藤岡市上落合字上野	◇	◇	◇	◇											市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
097	七興山古墳	藤岡市上落合字七興				◆								◎			帝博・県・市教委『七興山古墳』1991
098	落合の砦	藤岡市上落合字城山							◇							☆	『群馬県古城墓址の研究 下巻』1972
099	美土里地区No.4遺跡	藤岡市上落合字七興・字塚田	◇	◇				◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
100	D19上落合塚田遺跡	藤岡市上落合字塚田	◇		◆	◆										☆	市教委『市内遺跡Ⅰ』1993
101	宗永寺古墳群	藤岡市上落合字七興				◆								◎			帝博・県『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第三輯』1936
102	美土里地区No.3遺跡	藤岡市上落合字向山	◇	◇	◇	◇											市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
103	本動堂古墳群	藤岡市本動堂				◆								◎			
104	上宿B遺跡(D5)	藤岡市本動堂字上宿					◆	◆	◆				☆				市教委『年報(1)』1985
105	動堂城跡	藤岡市本動堂字前屋敷							◇						凸		『群馬県古城墓址の研究 下巻』1972
106	美土里地区No.6遺跡	藤岡市本動堂字下宿・字東				◇	◇	◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
107	(墳墓)	藤岡市本動堂				◇										☆	
108	D32稲荷屋敷B遺跡	藤岡市本動堂字佃・字上川原下大塚字久保田・字下川原							◆				☆				市教委『市内遺跡Ⅱ』1994
109	美土里地区No.9遺跡	藤岡市本動堂字稲荷屋敷他	◇	◇	◇	◇											市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
110	D31原屋敷B遺跡	藤岡市本動堂字原屋敷	◇						◆			◆			凸		市教委『市内遺跡Ⅱ』1994
111	美土里地区No.10遺跡	藤岡市本動堂字新堀、下大塚字新堀、字業師前・字藁	◇	◇	◇	◇											市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
112	美土里地区No.5遺跡	藤岡市篠塚字西原	◇	◇	◇	◇											市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
113	篠塚古墳群	藤岡市篠塚				◆								◎			市教委
114	(墳墓)	藤岡市篠塚字西原・字中組・字北口				◇											『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
115	(古墳)	藤岡市篠塚				◇								◎			
116	大明神遺跡(D8)	藤岡市篠塚字大明神							◆				☆				市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
117	美土里地区No.7遺跡	藤岡市篠塚字夏日他				◇	◇	◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
118	岡の西遺跡(D11)	藤岡市篠塚字岡の西					◆	◆									☆ 市教委『年報(1)』1985

第1章 遺跡の立地と調査の経過

番号	遺跡名	所在地	旧	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他	調査主体・文献
119	狐穴遺跡 (D6)	藤岡市藤塚字狐穴						◇	◇							☆	市教委『年報(1)』1985
120	美土里地区No.8遺跡	藤岡市藤塚字岡西・字狐穴					◇	◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
121	北原遺跡 (D2)	藤岡市下大塚字北原					◆	◆									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
122	新堀遺跡	藤岡市下大塚字新堀						◆								☆	市教委『年報(4)』1989
123	美土里地区No.11遺跡	藤岡市下大塚字東イブナ、中大塚字下郷		◇			◇	◇	◇	◇							市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
124	平地神社古墳	藤岡市中大塚字宮前					◇									◎	市教委『多野藤岡地方史』1976
125	滝下遺跡 (D10)	藤岡市中大塚字滝下		◆		◆										◎	市教委『滝前・滝下遺跡』1988
126	滝前遺跡 (D10)	藤岡市中大塚字滝前		◆		◆	◆	◆								☆	市教委『滝前・滝下遺跡』1988
127	美土里地区No.12遺跡	藤岡市中大塚字宮裏・字正蓮寺					◇										市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
128	中大塚城跡	藤岡市中大塚字下郷								◇						凸	『群馬県古城址の研究 下巻』1972
129	中大塚遺跡	藤岡市中大塚字市海道・字中道・字八幡林・字薬師堂						◇									群埋文『上栗須遺跡 下大塚遺跡 中大塚遺跡』1989
130	中大塚遺跡	藤岡市中大塚字鎌倉		◆												☆	市教委『群馬県史資料編』1988
131	美土里地区No.13遺跡	藤岡市中大塚字鎌倉														◇	市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
132	美土里地区No.14遺跡	藤岡市上大塚字出口					◇	◇	◇								市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
133	上大塚の砦跡	藤岡市上大塚								◇						凸	『群馬県古城址の研究 下巻』1972
134	美土里地区No.15遺跡	藤岡市上大塚字南					◇										市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
135	美土里地区No.16遺跡	藤岡市上大塚字南原					◇	◇	◇								市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅱ)』1983
136	道上遺跡	藤岡市矢場字道上					◆	◆								☆	市教委『E3道上遺跡』1987
137	(墳墓)	藤岡市三本木字下原					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
138	(墳墓)	藤岡市三本木字下原					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
139	(墳墓)	藤岡市三本木字下原					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
140	三本木清水遺跡	藤岡市三本木字清水					◆									◎	市教委『E14保美地区遺跡群』1994
141	(墳墓)	藤岡市三本木字下原					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
142	三本木古墳群	藤岡市三本木					◆									◎	市教委『神田・三本木古墳群』1988
143	清水山城跡	藤岡市高山字山室								◇						凸	『群馬県古城址の研究 下巻』1972
144	高山館跡	藤岡市高山字下組								◇						凸	『群馬県古城址の研究 下巻』1972
145	伝高山氏館跡	藤岡市高山字高山								◇						凸	『群馬県の中世城館跡』1988
146	(寺院跡)	藤岡市高山								◇						☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
147	(縄文住居跡)	藤岡市高山字高木		◇												☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
148	南大谷遺跡	藤岡市保美字南大谷、鬼石町浄法寺字根古屋		◆												☆	市教委『E14保美地区遺跡群』1994
149	平塚台遺跡	藤岡市保美字平塚台		◆		◆	◆									☆	市教委『E14保美地区遺跡群』1994
150	芦田川屋敷跡	藤岡市保美字城戸								◇						凸	『群馬県古城址の研究 下巻』1972
151	高山氏祖代々の墓	藤岡市保美字丁								◇						☆	
152	保美の砦跡	藤岡市保美字中内出・字西内								◇						凸	『群馬県古城址の研究 下巻』1972
153	(墳墓)	藤岡市保美字塚越								◇						☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
154	(墳墓)	藤岡市神田字宿					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
155	常岡城跡	藤岡市神田字城腰								◆						凸	『群馬県古城址の研究 下巻』1972
156	(住居跡)	藤岡市神田字前原					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
157	(墳墓)	藤岡市神田字宿					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
158	(墳墓)	藤岡市神田字宿					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
159	(墳墓)	藤岡市神田字宿					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
160	(墳墓)	藤岡市神田字宿					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
161	(墳墓)	藤岡市神田字高峰					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
162	(墳墓)	藤岡市神田字高峰					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
163	神田古墳群	藤岡市神田					◆									◎	市教委『神田・三本木古墳群』1988
164	本郷尺地遺跡	藤岡市本郷字尺地・字田中東		◆		◆				◇	◇					☆	群埋文『本郷尺地遺跡』1987
165	地藏堂・ひょうたん塚	藤岡市本郷・根岸					◇										『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
166	本郷山根遺跡	藤岡市本郷字山根		◇		◇	◇	◇									群埋文『本郷山根遺跡』1989
167	本郷輪窯跡	藤岡市本郷字塚原					◆									☆	群馬師範学校『風土』1958
168	美九里No.16遺跡	藤岡市本郷字別所		◆													市教委『市内遺跡Ⅱ』1994
169	堂山	藤岡市本郷字別所					◇									☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
170	土師神社	藤岡市本郷字宮下					◇										『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
171	堀ノ内遺跡群 (A1)	藤岡市本郷字田中東、小林字堀之内・字舞台		◆		◆	◆	◆	◆	◇	◇					☆	市教委『A1堀ノ内遺跡群』1982
172	小林古墳群	藤岡市本郷・根岸、小林					◆									◎	市教委『A1堀ノ内遺跡群』1982
173	根岸築城跡	藤岡市小林字堀之内								◆						凸	『藤岡市史 資料編 原始・古代・中世』1993
174	白塩道南遺跡	藤岡市藤岡字白塩道南								◆	◆					☆	市教委『A2藤岡北山遺跡 A3山間遺跡 A6白塩道南遺跡』1987
175	北山遺跡	藤岡市藤岡字北山		◇	◆	◆	◆	◆	◆							☆	市教委『A2藤岡北山遺跡 A3山間遺跡 A6白塩道南遺跡』1987
176	山間遺跡	藤岡市藤岡字山間		◆												☆	市教委『A2藤岡北山遺跡 A3山間遺跡 A6白塩道南遺跡』1987

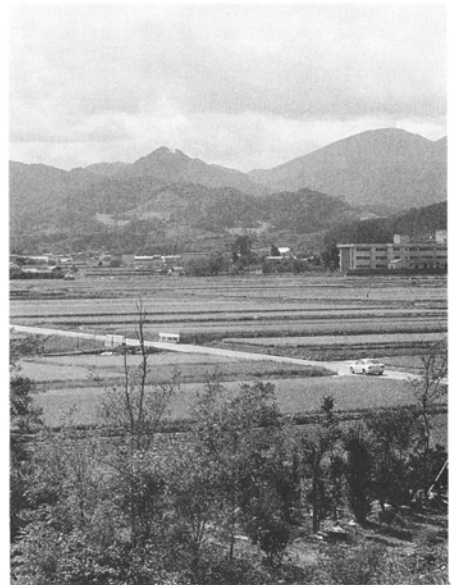
(2) 歴史的環境

番号	遺跡名	所在地	旧	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他	調査主体・文献
177	奥浅間古墳	藤岡市藤岡字高崎道西				◇								◎			『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
178	芦田城跡	藤岡市藤岡字城屋敷								◆					凸		『藤岡市史 資料編 原始・古代・中世』1993
179	(墳墓)	藤岡市藤岡字東裏甲				◇								☆			『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
180	諏訪神社古墳	藤岡市藤岡字東裏甲				◇								◎			群大『東京人類学雑誌』1910
181	光徳寺裏山遺跡	藤岡市藤岡	◆									☆					藤岡女子高校『藤岡町史』1957
182	大神宮山の砦跡	藤岡市藤岡字南山							◇						☆		『藤岡市史 資料編 原始・古代・中世』1993
183	(墳墓)	藤岡市藤岡字南山				◇									☆		『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
184	(墳墓)	藤岡市藤岡字外平				◇									☆		『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
185	株木B遺跡	藤岡市上戸塚字株木、下戸塚字西原	◆	◆	◆	◆						☆		◎			市教委『B6株木B遺跡』1991
186	稲荷通り遺跡	藤岡市下栗須、下戸塚	◆	◆	◆	◆								◎			市教委『稲荷通り遺跡』1992
187	神流地区No.8遺跡	藤岡市下栗須字瀧川・字新田・字五町田・字清水田	◇	◇	◇	◇											市教委
188	神流地区No.9遺跡	藤岡市下栗須字権現塚地	◇	◇	◇	◇											市教委
189	神明遺跡(C5)	藤岡市中栗須字神明	◆													☆	市教委
190	小野地区No.8遺跡	藤岡市中栗須字神明	◇														市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
191	神明北遺跡(C7)	藤岡市中栗須字神明北	◆												☆		市教委『C7神明北遺跡 C8谷地遺跡』1988
192	谷地遺跡(C8)	藤岡市中栗須字谷地	◆	◇	◇	◇									☆		市教委『C7神明北遺跡 C8谷地遺跡』1988
193	小野地区No.9遺跡	藤岡市中栗須字谷地	◇														市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
194	小野地区No.10遺跡	藤岡市中栗須字邸前	◇														市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
195	小野地区No.12遺跡	藤岡市中栗須字郷土	◇														市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
196	藤岡境Ⅱ遺跡(C14)	藤岡市中栗須字藤岡境			◆							☆					市教委『年報(1)』1985
197	藤岡境遺跡(C10)	藤岡市中栗須字藤岡境				◆						☆					市教委『年報(1)』1985
198	八反畑遺跡(C3)	藤岡市中栗須字八反畑				◆	◆					☆					市教委『年報(1)』1985
199	小袋遺跡	藤岡市中栗須字小袋					◆					☆					市教委『年報(1)』1985
200	上栗須古墳群	藤岡市上栗須				◆								◎			群埋文『上栗須遺跡 下大塚遺跡 中大塚遺跡』1989
201	上栗須遺跡	藤岡市上栗須字白山・字岡前・字寺東	◆	◆	◆	◆	◆					☆	☆	☆			群埋文『上栗須遺跡 下大塚遺跡 中大塚遺跡』1989
202	上栗須寺前遺跡	藤岡市上栗須字上ノ台・字寺前、篠塚、本動堂	◇	◇	◇	◇						◇					群埋文『上栗須寺前遺跡群Ⅰ・Ⅱ』1994
203	小野地区No.11遺跡	藤岡市上栗須字寺前				◇	◇	◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
204	小野地区No.1遺跡	藤岡市中字下諏訪、森字天神				◇	◇	◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
205	小野地区No.3遺跡	藤岡市中字天神				◇	◇	◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
206	立石堀遺跡(C12)	藤岡市中字堤添								◇						☆	市教委『年報(1)』1985
207	小野地区No.4遺跡	藤岡市中字天王西				◇	◇	◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
208	中Ⅱ遺跡	藤岡市中字中西	◇		◆	◆	◆								☆	☆	県教委『森遺跡 中Ⅰ遺跡 中Ⅱ遺跡』1983
209	中Ⅰ遺跡	藤岡市中字社宮司				◆						☆		☆			県教委『森遺跡 中Ⅰ遺跡 中Ⅱ遺跡』1983
210	社宮司遺跡(C2)	藤岡市中字社宮司				◆										☆	市教委『年報(1)』1985
211	中沖遺跡(C1)	藤岡市中字沖				◆						☆					県教委
212	中城	藤岡市中字東黒田				◇	◇	◇	◇						凸		『群馬県古城址の研究 下巻』1972
213	森泉遺跡(C13)	藤岡市中字下諏訪、森字天神・字泉			◆	◆	◆	◆		◆		☆		☆	☆		市教委『年報(1)』1985
214	森西館跡	藤岡市中字中西								◇	◇				凸		『藤岡市史 資料編 原始・古代・中世』1993
215	森遺跡	藤岡市森字口無			◇	◆	◆	◆				☆	☆				県教委『森遺跡 中Ⅰ遺跡 中Ⅱ遺跡』1983
216	小野地区No.5遺跡	藤岡市森字石塚				◇	◇	◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
217	滝川遺跡(C6)	藤岡市森字滝川	◇													☆	市教委『C4小野地区遺跡群発掘調査報告書』1982
218	小野地区水田址遺跡(C4)	藤岡市立石字遠沖、中栗須字六反田				◆	◆	◆						☆			市教委『C4小野地区遺跡群発掘調査報告書』1982
219	小野地区No.2遺跡	藤岡市立石字壘谷戸				◇	◇	◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
220	小野地区No.6遺跡	藤岡市立石字清水				◇	◇	◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
221	沖Ⅱ遺跡(C11)	藤岡市立石字沖			◆	◆	◆	◆							☆		市教委『C11沖Ⅱ遺跡』1986
222	沖遺跡(C4)	藤岡市立石字沖				◆									☆		市教委『C4小野地区遺跡群発掘調査報告書』1982
223	小野地区No.7遺跡	藤岡市立石字下川				◇	◇	◇									市教委『藤岡市遺跡詳細分布調査(Ⅰ)』1982
224	下川前遺跡(C4)	藤岡市立石字下川前				◆	◆					☆					市教委『C4小野地区遺跡群発掘調査報告書』1982
225	黒熊遺跡群	吉井町黒熊、深沢、小串	◆	◆	◆	◆	◆	◆				☆	☆				町教委『黒熊遺跡群(Ⅰ)～(Ⅴ)』1981～1985
226	(散布地)	吉井町黒熊字新井	◇														
227	(包蔵地)	吉井町黒熊				◇	◇										
228	(散布地)	吉井町黒熊字新井・字中西・字久保				◇	◇	◇									
229	黒熊栗崎遺跡	吉井町黒熊字栗崎・字平地・字柿山						◇	◇							☆	群埋文『黒熊栗崎遺跡』1995
230	黒熊中城	吉井町黒熊字内出							◇						凸		『群馬県古城址の研究 補遺篇 上巻』1979
231	黒熊中西遺跡	吉井町黒熊字中西				◇	◇					◇					群埋文『黒熊中西遺跡』1992
232	(散布地)	吉井町黒熊字八幡	◇														
233	黒熊八幡遺跡	吉井町黒熊字八幡				◇	◇					◇					群埋文『黒熊八幡遺跡』1996
234	(散布地)	吉井町黒熊字栗崎	◇														
235	(散布地)	吉井町多比良字西深沢	◇														
236	(散布地)	吉井町多比良字西深沢・字追部野				◇	◇	◇									
237	多比良追部野遺跡	吉井町多比良字追部野				◇	◇	◇				☆	☆				群埋文『年報10』1991

第1章 遺跡の立地と調査の経過

番号	遺跡名	所在地	旧	縄	弥	古	奈	平	中	近	他	集	生	墳	城	他	調査主体・文献				
238	(包蔵地)	吉井町多比良字追部野	◇														『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973				
239	(散布地)	吉井町多比良字西組	◇																		
240	(散布地)	吉井町多比良字新堀	◇																		
241	(散布地)	吉井町多比良字西組・字中組			◇	◇	◇														
242	下五反田窯跡	吉井町多比良字下五反田						◇	◇					☆			国士館大学『考古学研究室 甲種第3冊 考古学研究室発掘調査報告書』1984				
243	新堀城跡	吉井町多比良字中城甲								◇						凸	町教委『新堀城跡』1992				
244	(散布地)	吉井町多比良字中組	◇																		
245	(散布地)	吉井町多比良字中組				◇	◇	◇													
246	(生産跡)	吉井町多比良字長谷川												☆			『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973				
247	山の神古墳群	吉井町多比良字山の神			◇											◎	『上毛古墳総覧』入野第46~52号墳				
248	瀬戸城跡	吉井町多比良字向平								◇						凸	『群馬県古城遺址の研究 下巻』1972				
249	中ノ原城跡	吉井町多比良字中ノ原								◇						凸	町教委『中ノ原城跡』1989				
250	中ノ原古墳群	吉井町多比良字中ノ原				◇										◎	『上毛古墳総覧』入野第54~63号墳				
251	塚原遺跡	吉井町小串字塚原	◆	◇				◆					☆			☆	町教委『塚原遺跡 黒熊第1遺跡』1983				
252	小串古墳群	吉井町小串字東組・字塚原乙・字藤塚・字中組・黒熊字伊勢塚				◇											◎	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973			
253	祝神遺跡	吉井町石神			◇	◇	◇	◇	◇	◇								『信濃』34巻4号 1982			
254	石神祝神古墳群	吉井町石神				◇											◎	『上毛古墳総覧』入野第34~44号墳			
255	峰山城跡	吉井町石神字城								◇						凸	『群馬県古城遺址の研究 下巻』1972				
256	入野遺跡	吉井町石神															☆	町教委『入野遺跡Ⅲ』1986			
257	(包蔵地)	吉井町石神	◇															『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973			
258	塚原古墳群	吉井町岡				◇											◎	町教委『蛇塚古墳』1987			
259	多胡碑	吉井町池字御門				◇												☆	『上野三碑の研究』1980		
260	西浦古墳群	吉井町池字塚原				◇											◎				
261	入道ヶ谷遺跡	吉井町馬庭								◇							凸	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973			
262	中林城跡	吉井町馬庭字中林								◇							凸	『群馬県古城遺址の研究 下巻』1972			
263	池四郎塚古墳	吉井町馬庭字下中林				◇											◎	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973			
264	馬庭城跡	吉井町馬庭字内出								◇							凸	『群馬県古城遺址の研究 下巻』1972			
265	御穴塚古墳	吉井町馬庭字宮森				◇											◎	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973			
266	松木瀬古墳群	吉井町馬庭字松木瀬				◇											◎	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973			
267	(散布地)	吉井町馬庭				◇	◇	◇													
268	(散布地)	吉井町馬庭				◇	◇	◇													
269	岩井古墳群	吉井町岩井字塚原・字葛塚・字新田・字押出・字蟹沢				◇												◎	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973		
270	薬師穴横穴群	吉井町岩井字葛塚				◇												◎			
271	金井沢碑	高崎市山名町				◇													☆	『上野三碑の研究』1980	
272	根小屋城跡	高崎市山名町城山・赤岩山															凸		市教委『根小屋城址』1983		
273	山ノ上西古墳	高崎市山名町山ノ上山神谷				◇												◎	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973		
274	でえせじ遺跡	高崎市山名町大谷						◇										☆	☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973	
275	山ノ上古墳・山ノ上碑	高崎市山名町山神谷				◇												◎	☆	『上野三碑の研究』1980	
276	山名城跡	高崎市山名町下之城								◇									凸	『新編 高崎市史 資料編3 中世Ⅰ』1996	
277	五三山火葬墓	高崎市山名町五三山天水								◇								◎	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973		
278	伊勢塚古墳群	高崎市山名町伊勢塚				◇												◎	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973		
279	古墳(多野八幡67~72号の内3基)	高崎市山名町土合				◇												◎	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973		
280	木部城跡	高崎市木部町堀ノ内								◇									凸	『新編 高崎市史 資料編3 中世Ⅰ』1996	
281	田端遺跡	高崎市木部町田端・阿久津町田端				◇	◇	◇											☆	☆	群埋文『田端遺跡』1988
282	木部町北遺跡	高崎市阿久津町中組								◇									凸	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973	
283	大道南古墳群	高崎市倉賀野町下町大道南																	◎		市教委
284	大広寺遺跡	高崎市倉賀野町下町甲大広寺乙				◇	◇	◇												☆	市教委
285	倉賀野大道遺跡	高崎市倉賀野町下町大道南																		☆	市教委
286	倉賀野町下町橋東遺跡	高崎市倉賀野町下町橋東																		☆	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
287	倉賀野西城跡	高崎市倉賀野町薬師前								◇										凸	『新編 高崎市史 資料編3 中世Ⅰ』1996
288	倉賀野城跡	高崎市倉賀野町上町・中町・八幡前・宮之前								◇										凸	『新編 高崎市史 資料編3 中世Ⅰ』1996
289	倉賀野万福寺遺跡	高崎市倉賀野町正六万福寺				◆	◆	◆	◆											☆	県教委・高崎市遺跡調査会『倉賀野万福寺遺跡』1983
290	大鶴巻古墳	高崎市倉賀野町下正六				◇														◎	『群馬県史 資料編3』1983
291	小鶴巻古墳	高崎市倉賀野町下正六				◇														◎	『群馬県史 資料編3』1983
292	佐野戸崎遺跡	高崎市下佐野戸塚・翁				◇														凸	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
293	下佐野古墳群	高崎市下佐野町稲荷塚・鍛冶風川・龍名戸崎・翁前				◇														◎	『群馬県遺跡台帳Ⅱ(西毛編)』1973
294	茶臼山城跡	高崎市寺尾町茶臼山								◇										凸	『新編 高崎市史 資料編3 中世Ⅰ』1996
295	岩鼻陣屋跡	高崎市岩鼻町旧陣坂上北・坂上南								◇	◇									凸	

第2章
緑埜遺跡群
緑埜上郷遺跡の調査



緑埜遺跡群遠景

〔1〕 緑埜遺跡群の遺構と遺物

1 調査区 (第3図・付図1・2)

調査区は、北の上信越自動車道白石大御堂遺跡から緑埜上郷遺跡までの間である。南北約650m、幅約2.5～5m、面積約2,769㎡を対象とする。調査区を横断する道路や水路で、北から1～5区に分けた。1区は、白石大御堂遺跡から道路まで、2区は道路から大聖峰寺参道、3区は参道から道水路まで、4区は道水路から大堀用水路、5区は用水路から市道までである。位置は、竹沼遺跡、緑埜上郷遺跡のある台地から続く低地で、1987(昭和62)年の市教育委員会の調査区の西に接している。その調査では、As-B層で覆われた平安時代の水田や畠、溝、鎌倉街道などが確認されている。

今回は、As-A層下とAs-B層下の2面で遺構が確認され、平安時代の水田や畠、鎌倉街道のほかにAs-A層で覆われた江戸時代の畠、溝、畦が追加された。各遺構とも、旧地形と関係し、その制約の中で作られている。旧地形については、下記の所見を得た。

- 1 調査区全体の地形勾配は、南の5区から北の1区まで比高差約6mの下りである。
- 2 その中で、鍵層となる基本土層最下層の黄褐色粘土層や、その上面にある水田耕土の黒色粘質土の状態からすると、5区から3区南半にかけては、台地から続く微高地があつて北半と地形の格差となっている。
- 3 微高地は、緑埜上郷遺跡から続く洪積台地が低地にのびて発達したもので、北東方向にさらにのび、緑埜シモ田遺跡付近まで続いている。
- 4 その占地は、緑埜シモ田遺跡の内容からすると、縄文時代後期から晩期頃には居住域の対象となりうるもので、古墳時代中期頃までは継続している。その後、低地への土砂の流入・堆積が進む中で平坦化が助長され、生産適地へと転化したか、集落構造の変化からか、居住の痕跡は希薄になる。浅間B層下では、この付近一帯

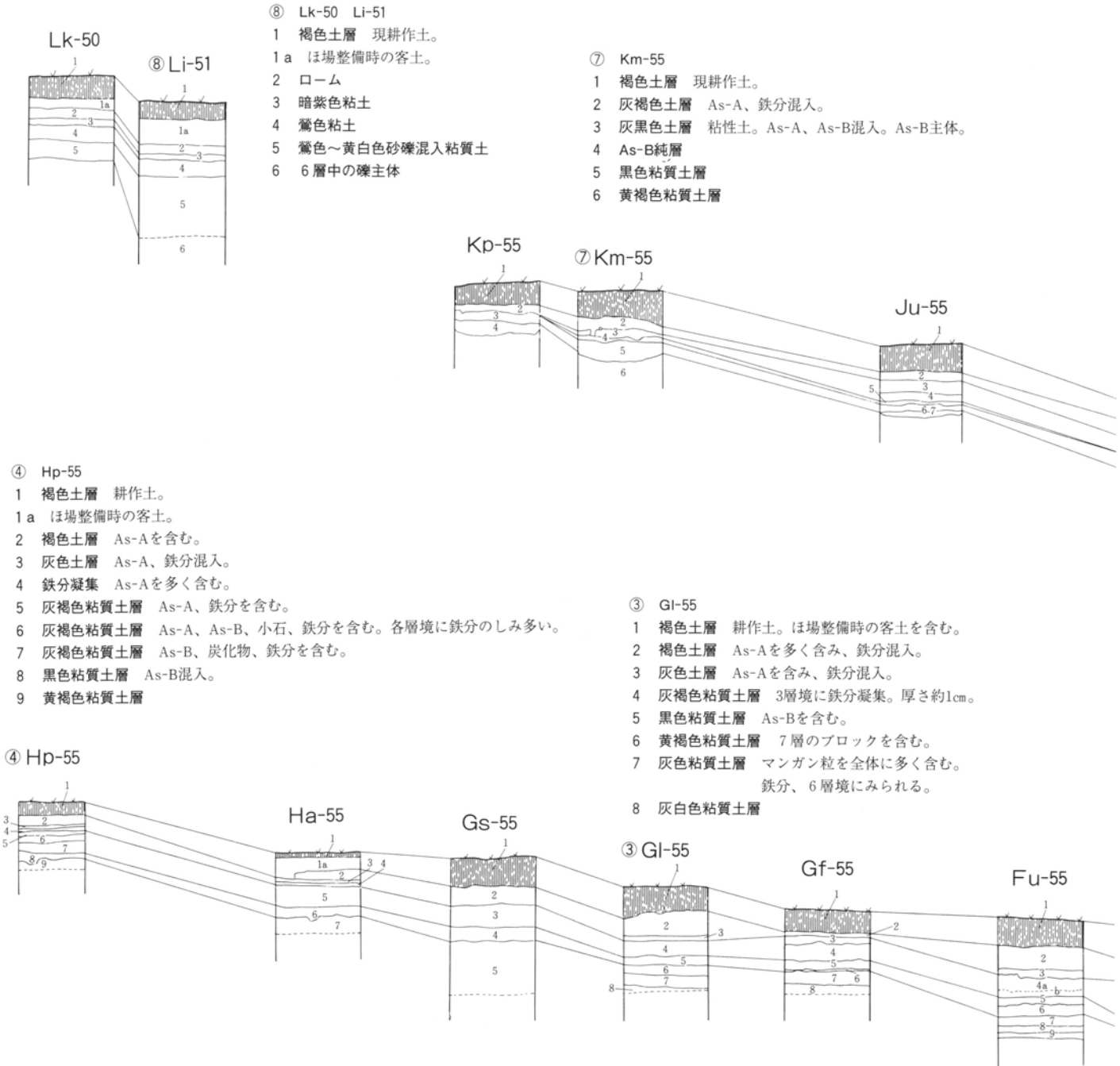
が畠地であつたと推定され、より低地での水田化と対照的なあり方を示す。

- 5 3区北半の低地部分は、As-B層の堆積が足跡やくぼみだけに見られる程度で、耕土の発達にはAs-B層降下後も間断なくみられる。
- 6 微高地は、低地全体を東西に二分するようであり、流水を伴う西の低地と鮎川崖線際の微高地とに挟まれた東の低地とが推定される。
- 7 開田は、西の低地から東の低地へ、北から南へと広がり、微高地を畠、低地を水田と分けて行われた可能性がある。

2 基本土層

基本土層は、1～5の区毎に記録した。土層の堆積は、旧地形との関係で層厚や性状に若干づつの差異が認められるが、以下にまとめられる。

- 1 全体で統一的に見られる鍵層は、現耕作土、As-A層、As-B層、地山とした黄褐色粘質土である。
- 2 区毎で差異を示すのは、現耕作土、As-A層前後とAs-B層までの土層である。
- 3 水田耕土は、全域で継続した堆積状態がみられたが、調査での初現はAs-B層下の黒色粘質土で、その後As-B層を含む灰黒色土、暗褐色土、As-A層を含む褐色土と続いている。



第5図 緑埜遺跡群標準土層

118.00m

⑥ Jg-55

- 1 褐色土層 現耕作土。
- 1a ほ場整備時の客土。
- 2 灰褐色土層 As-A、鉄分混入。
- 3 灰色土層 As-A、鉄分混入。
- 4 灰黒色土層 粘性土。
- 5 黄褐色粘質土層 軽石・鉄分・炭化物粒混入。
- 6 黄褐色粘質土層 軽石・鉄分混入。5層より暗い。
- 7 黒色粘質土層
- 8 黄褐色粘質土層

117.00m

⑤ If-55

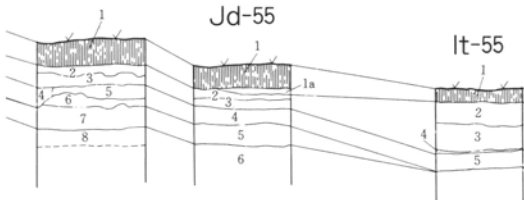
- 1 褐色土層 現耕作土。
- 1a ほ場整備時の客土。
- 2 灰褐色土層 As-A、鉄分混入。
- 3 灰褐色土層 As-A、鉄分混入。2層よりAs-A少ない。
- 4 灰黒色土層 As-A、As-B混入。3層との境界に厚さ3cm前後で鉄分のしみあり。
- 5 灰黒色土層 As-B混入。
- 6 As-B純層
- 7 黒色粘質土層
- 8 黄褐色粘質土層

116.00m

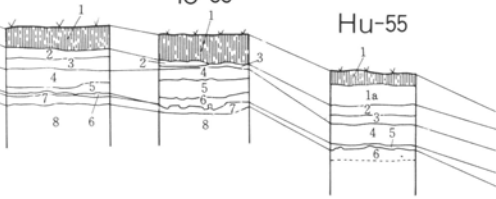
115.00m

114.00m

⑥ Jg-55



⑤ If-55



113.00m

112.00m

② FI-55

- 1 褐色土層
- 2 灰色土層 As-Aを含み、鉄分混入。
- 3 鉄分凝集
- 4 褐色土層 As-A混入。
- 5 褐色土層
- 6 褐色土層 As-B混入。
- 7 灰黒色土層 As-B混入。鉄分が全体にしみこみ黄色を呈する。
- 8 灰黒色土層 As-B混入。下にAs-B多い。
- 9 黄褐色粘質土層
- 10 黄褐色粘質土層

① EI-55

- 1 褐色土層 現耕作土。客土を含む。
- 2 灰色土層 As-Aを全体に含む。鉄分混入。
- 3 暗褐色土層 As-A、As-B混入。
- 4 黒色粘質土層 As-B混入。
- 5 黄褐色粘質土層
- 6 黄褐色粘質土層
- 7 灰黄色砂層 粗粒。
- 8 灰黄色粘質土層 細粒。
- 9 灰色砂土層 粗粒。

112.00m

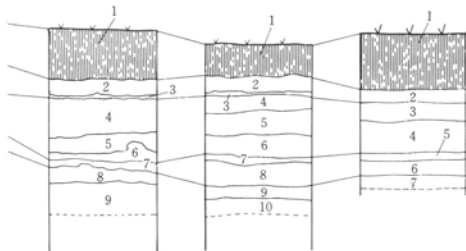
111.00m

110.00m

Fp-55

② FI-55

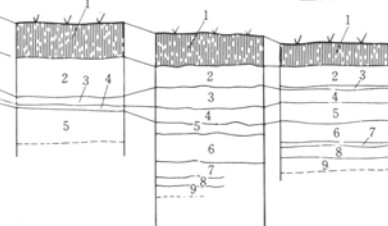
Fj-55



En-55

① EI-55

Ek-55



109.00m

108.00m



第6図 緑埜遺跡群1区調査区

3 各区の概要

調査は、10月1日から14日まで表土掘削、11月6日から22日までが5区から遺構確認、その後11月28日の台風28号による調査区全域の水没で1週間の中断をはさんで、12月9日までに上面の調査が終了。10日からAs-B層下の調査を始め、25日までにプラントオパール分析の試料採取、基本土層の検討を済ませて調査の終了とした。

a 1区概要 (第6～8図、P.L. 6～8)

As-A混土下とAs-B層下の2面で調査を実施した。1987(昭和62)年の調査では、EM1・2・47・48・49の溝とAs-B層下水田が確認された範囲である。今回確認された遺構は、As-A層下で南北に畝を持つ島2区画があり、なお広がり予想された。As-B層下は、純層はなく現耕作土からも極めて浅く、褐色土への混入の状態である。

b 2区概要 (第9～12図、P.L. 8・9)

1987(昭和62)年調査区の32Aトレンチ・40トレンチに隣接した位置である。調査は、As-A層下とAs-B層下の2面で実施した。As-A混土下では、GM8・GM10・FM1の溝が確認され、GM8・FM1の2本は掻き寄せたAs-A層で埋没していた。全体では、東西方向に溝が横断し、3区に続く島が広がる。As-A層の堆積は、FP～FUグリッド付近では厚さ10cm前後が残存し、凹地に掻き寄せたか、降灰後の復旧の度合いが弱いかと推定される。As-B層下は、円形や楕円形のアッシュだまりが確認された。

c 3区概要 (第12～15図、P.L. 10・11)

1987(昭和62)年調査区の32トレンチ南に隣接した位置である。調査は、As-A層下とAs-B層下の2面で実施した。1987(昭和62)年の調査では、広域でAs-B層が認められ水田の可能性が指摘されている。As-A層下では、HP55～HU55グリッドにかけて3区画の島が確認され、なお広がりを持っていた。島は、南北方向に畝を持ち、水路を付設した馬入れで区画されていた。その下面では、鉄分沈着を受けた粘質土数枚があり、明瞭な遺構はないが水田

の可能性はある。As-B層下では、2区と同様にAs-B層のアッシュだまりが無数に集中しており、水田と判断した。この他に時期を特定できないが、グリッドでの石敷遺構がある。現在の大聖峰寺へ向かう参道の前身で、土層断面からすると中世頃と推定されるものである。

d 4区概要 (第16図、P.L. 11・12)

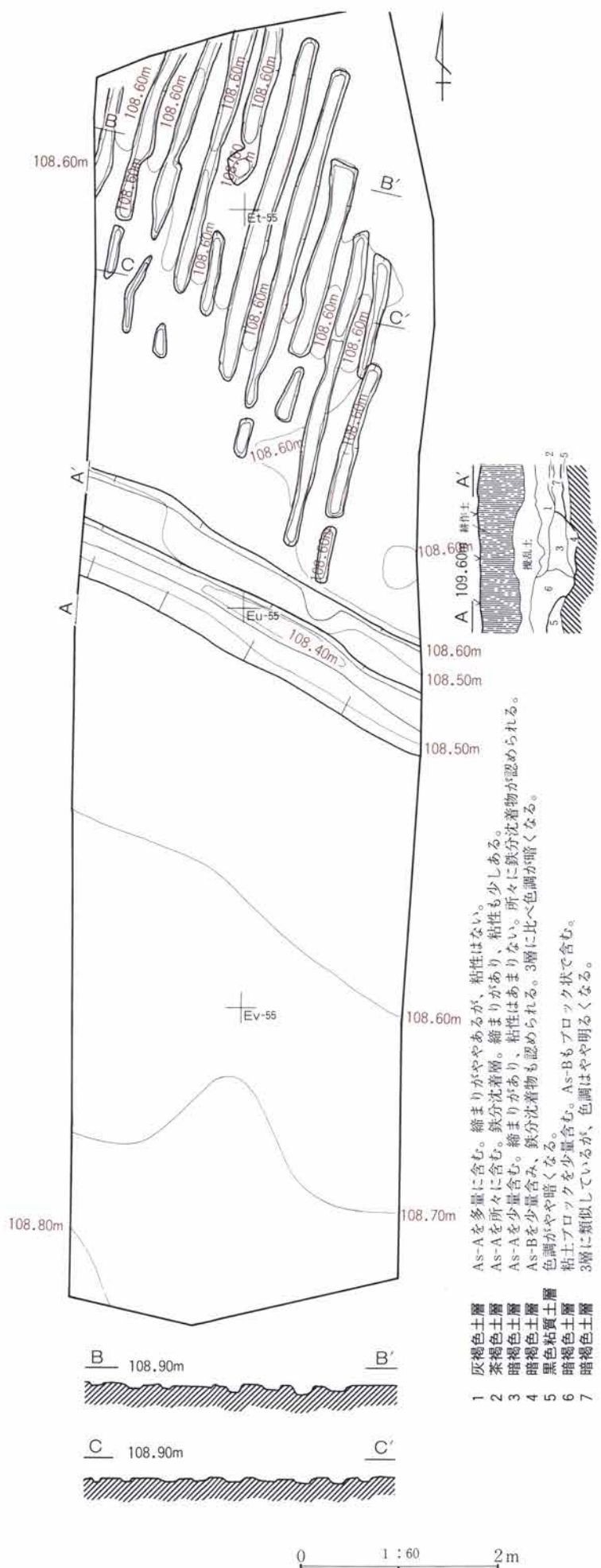
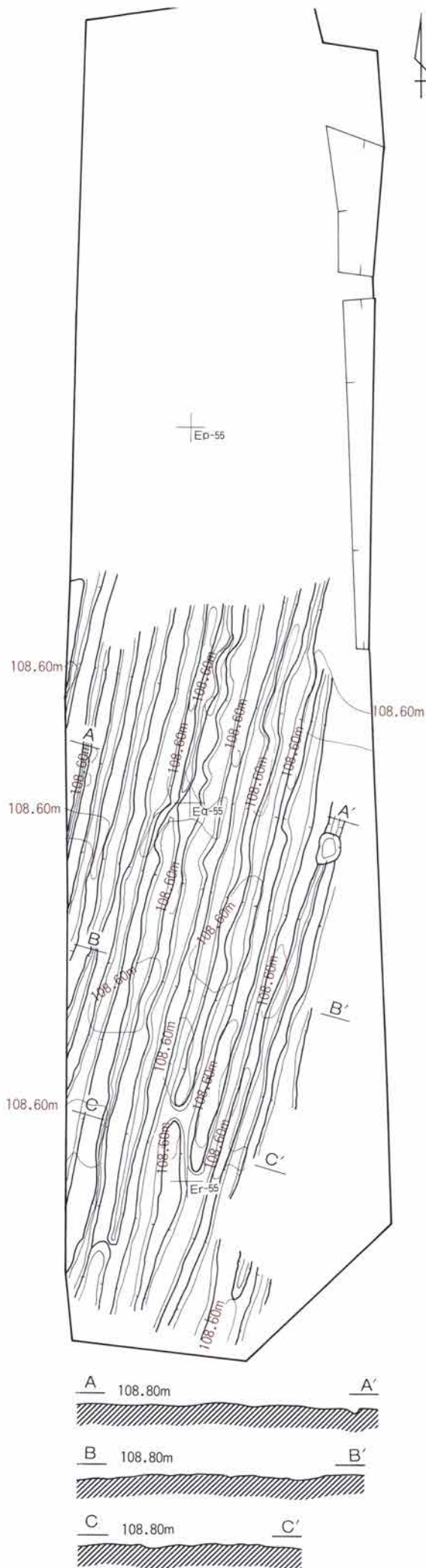
1987(昭和62)年調査区の32B・Cトレンチの西に位置する。調査は、As-A層下とAs-B層下の2面で実施した。1987(昭和62)年の調査では、JM2・IM29が確認されたがAs-B層の残りは悪く水田は不明であった。遺構は、上記の溝を手掛かりとしたが、ともに確認できずAs-B層の残りも不明瞭であった。しかし、JW55グリッド以南では、As-B層下で南北方向の畝を持つ島が確認され、32CトレンチJP55～JV60グリッド付近の畝とKe60～Kh60グリッド付近の畝との空白域を埋めることができた。これは、If55グリッド以南でのAs-B層の堆積状況を考えると、Igグリッド付近を境として北が水田、南が島であった可能性を示している。未確認のJM2は、その島北縁を画するかのよう配置された幹線水路といえる。

e 5区概要 (第17図、P.L. 13)

1987(昭和62)年調査区の32C・Dトレンチの西に隣接する位置である。南からのびる台地縁辺部にあたり、これまで基準としたAs-A層は不明瞭で、As-B層下と合わせて変則的な2面調査となった。遺構は、1987(昭和62)年に確認済みのKM4・18A・Bの溝3本とKg～KpグリッドでAs-B層下水田を確認した。Kgグリッド以北は、黄褐色粘質土が一段高くなり、島か遺構が存在しなかった箇所である。また、Kpグリッド以南は、台地縁辺部に相当し、KM18A・Bはその縁辺を弧状にめぐる溝である。

4 As-A層下島 (第8・15図、P.L. 7・10・11)

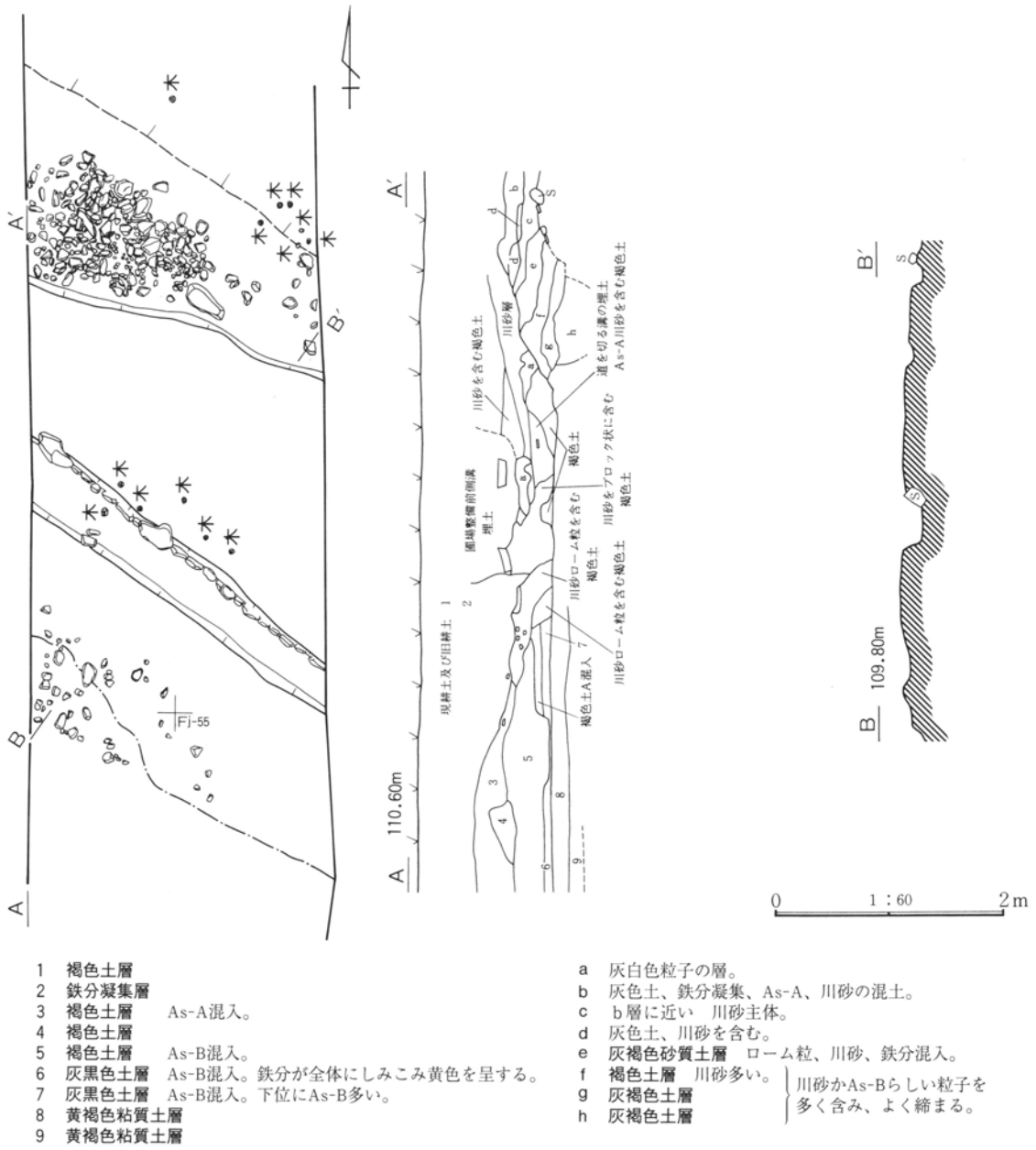
島は1区と3区で確認されている。1区は、34.2㎡が確認されている。遺構は、幅10cm前後の浅い溝が



As-Aを多量に含む。縮まりがややあるが、粘性はない。
 As-Aを所々に含む。鉄分沈着層。縮まりがあり、粘性も少しある。
 As-Aを少量含む。縮まりがあり、粘性はあまりない。所々に鉄分沈着物が認められる。
 As-Bを少量含む。鉄分沈着物も認められる。3層に比べ色調が暗くなる。
 色調がやや暗くなる。
 粘土ブロックを少量含む。As-Bもブロック状で含む。
 3層に類似しているが、色調はやや明るくなる。

- 1 灰褐色土層
- 2 赤褐色土層
- 3 暗褐色土層
- 4 暗褐色土層
- 5 黒色粘質土層
- 6 暗褐色土層
- 7 暗褐色土層

第8図 緑柱遺跡群1区調査区(As-A下島)



第9図 緑埜遺跡群2区調査区(鎌倉街道)

約20cmの間隔で連続するもので、ほぼ南北の走行を持っている。その表面は、耕作痕を思わせる手の平大のくぼみが不規則にみられる。区画の境界は、幅50cmの溝が直交する。3区は、馬入れをはさんで2区画が確認された。走行並びに浅い溝が連続する様子は1区と同様である。馬入れは、両側に溝を持ち、幅約2mである。その規模からして、全体の中でも基幹のものであろう。

5 鎌倉街道 (第9図、P.L. 8)

鎌倉街道は、F j 55グリッドの現地地表下約1.2mで確認された。現況では失われているが、圃場整備以前までは幅3m強の農道があり、調査の結果でも何回かの付け替えの跡が確認されている。鎌倉街道以後も白石から緑埜地区の基幹の道として使用され、その延長線上になお路線をたどることができる。調査した位置は、圃場整備で削平された台地の縁辺部にあたる。路面は、As-B層を混入した褐色土面から地山を削りだした上に卵大の玉石を敷き、さらにロームと褐色土の混土を踏み締めて養生している。路面は、ほぼ平坦で約1間の幅を持ち、やや盛り上がっている。そして、北側には幅1m弱の溝が付設されている。その変遷の中では、当初の位置を踏襲しながら埋没と地均しを繰り返し、徐々にかさ上げをしながら、現代に至っている。断面では、重複と攪乱で判断できなかったが3～4期に分けられる。当初の構築時期は、As-B層降下以後である。

6 石敷遺構 (第12図、P.L. 9)

石敷遺構は、通称不動様と呼ばれる大聖峰寺への参詣道の下面で確認された。鎌倉街道とは逆に地山を掘り下げた中に平らな石を敷き並べたものである。規模は、上幅3.1mの掘り方の中に1m強の幅で一面に石を敷いている。断面では、両側に50cm前後の溝が付設されていたが、遺構として確認できなかった。石は、2面に分けられ、人頭大のものを上面に、拳大のものを地業として下面に敷いている。石の中には、緑泥片岩製の板碑が差し込まれた状態

にあり、それにより構築年代の上限を知ることができる。時期を示す遺物は、この板碑以外にないが、土層ではAs-B混土層が上面までを覆っていた。

7 As-B下水田 (第11図)

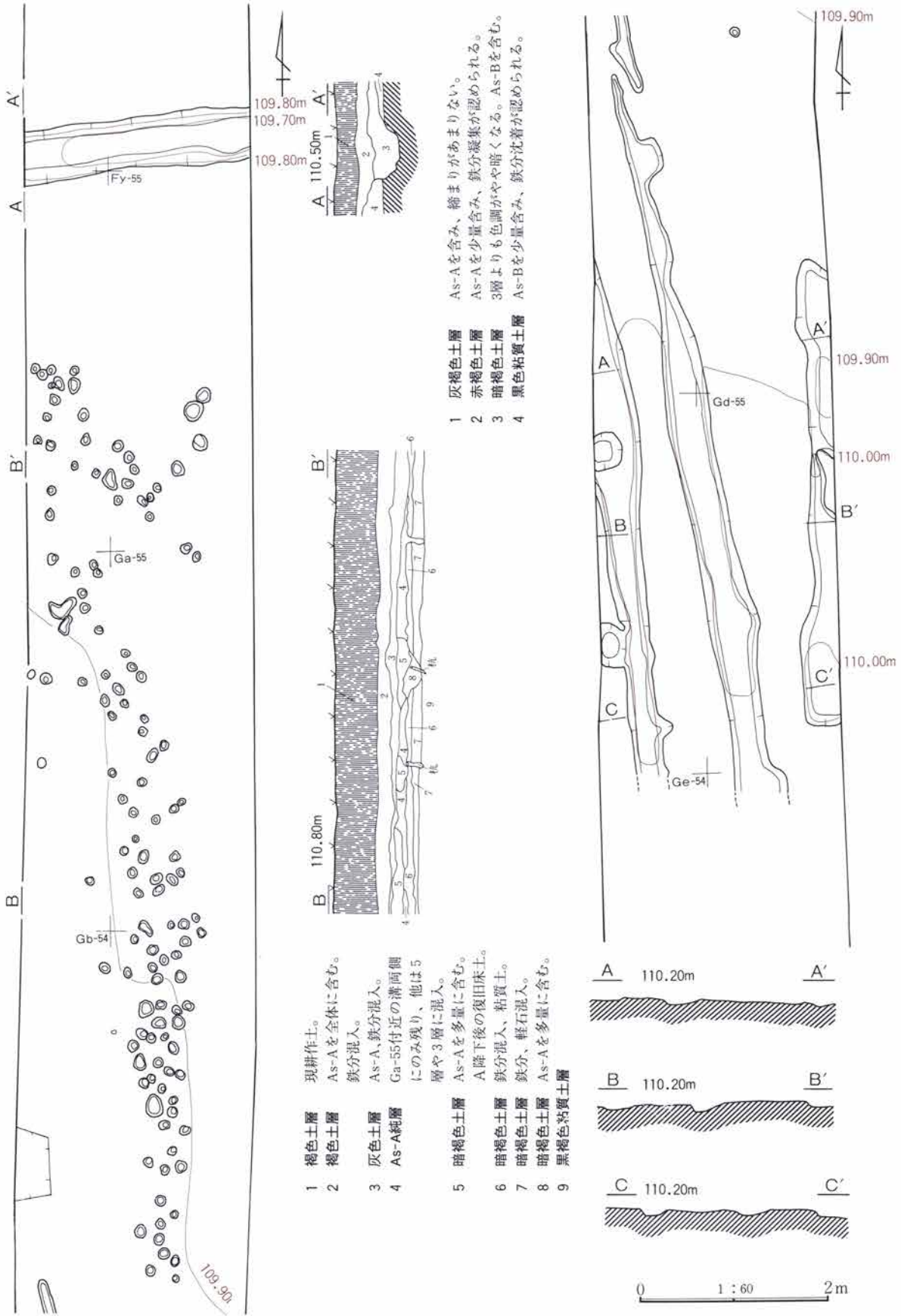
水田は、緑埜上郷遺跡と同様に溝で区画したものが、2区と3区で確認されている。ともにAs-B層下で確認されたが、畦や明瞭な区画を示すものはなく、耕作土である暗褐色土が一面に広がっている状態である。耕作土は、10cm前後の厚さを持ち、黄灰色シルト質土を床土として堆積している。全体に粘性は強いものの、その一部では床土に圧着しただけで、As-B層降下以前、長期間の耕作は考え難い。次に述べる畠とは併存するが、微高地上が畠、それを取り巻く低地が水田という占地区分である。

8 As-B下畠 (第16図、P.L. 12)

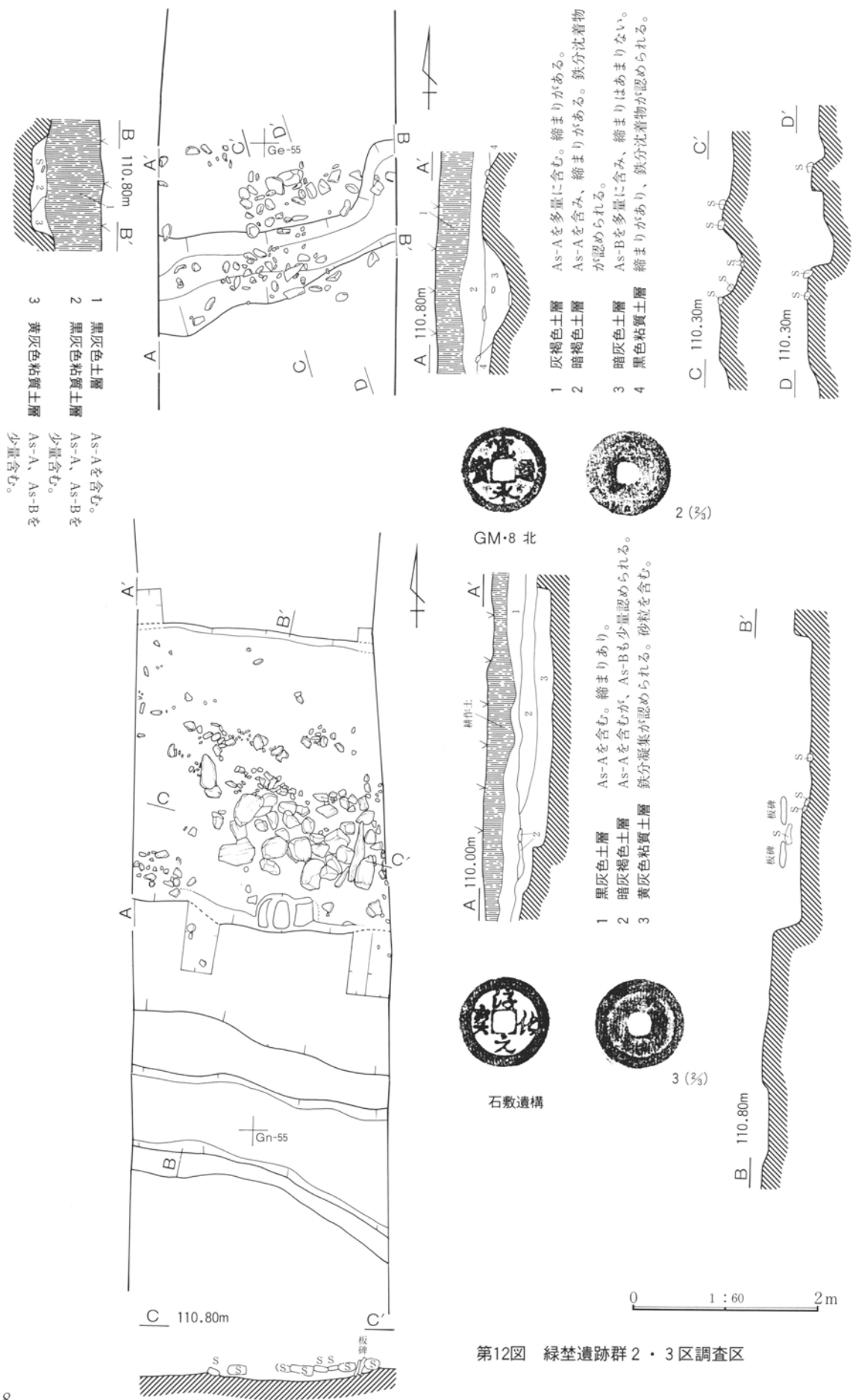
畠は、1区と4区で確認された。いずれも、1987(昭和62)年の調査に追加されるものである。畠は、遺跡全体の中では、低地の中の微高地だけに占地するもので、水田と併存している。1区は、グリッドで確認されたもので、幅15cm前後の浅い溝が30cm前後の間隔で、南北方向に調査区幅に連続している。溝の中は、鋤跡痕らしい若干の高低差がある。4区は、台地先端に続く微高地上、グリッドで確認されたもので、その状態は1区と同様である。プラントオパール分析の結果では、水田と同様にイネ科の花粉が抽出されている。



第10図 緑埜遺跡群2区調査区

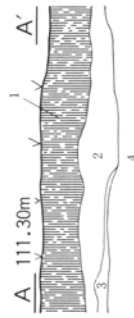
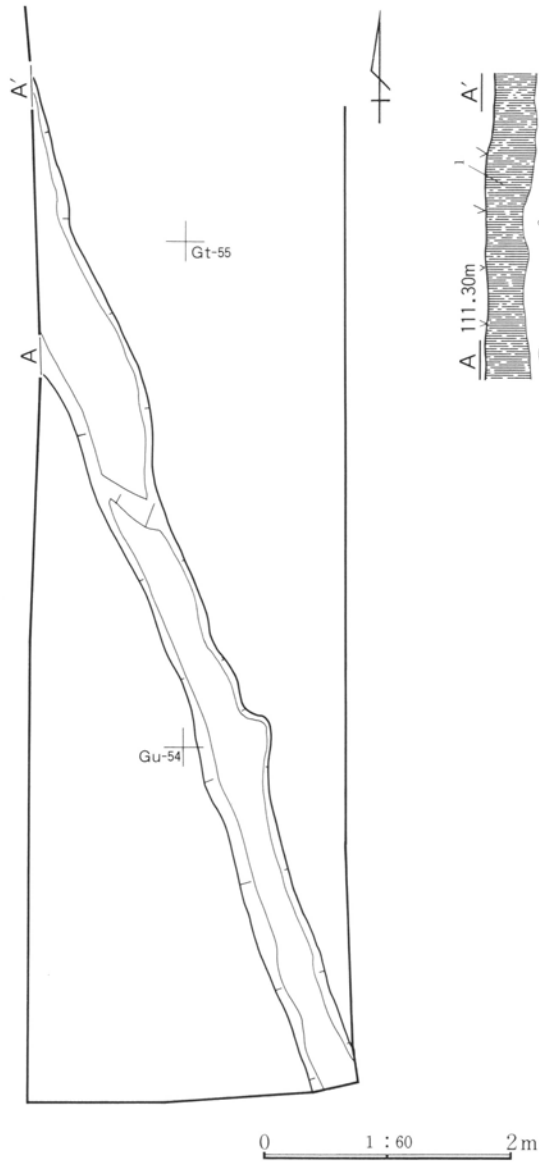


附11図 緑埜遺跡群2区調査図

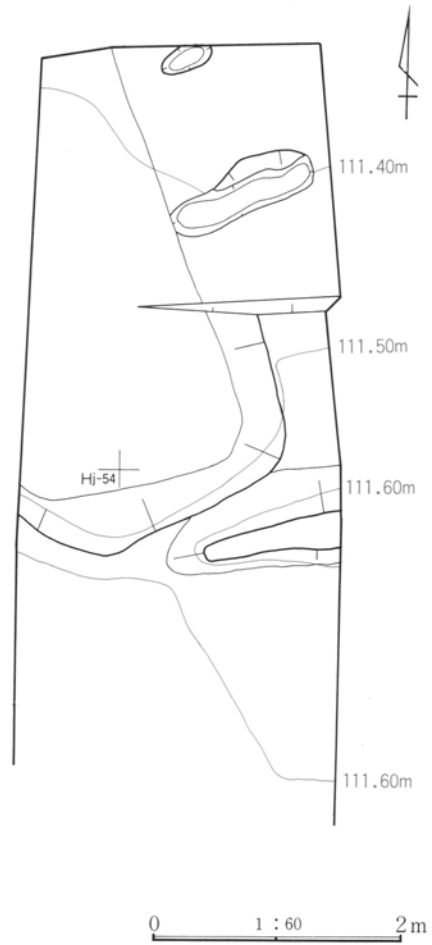


第12図 緑埜遺跡群2・3区調査区

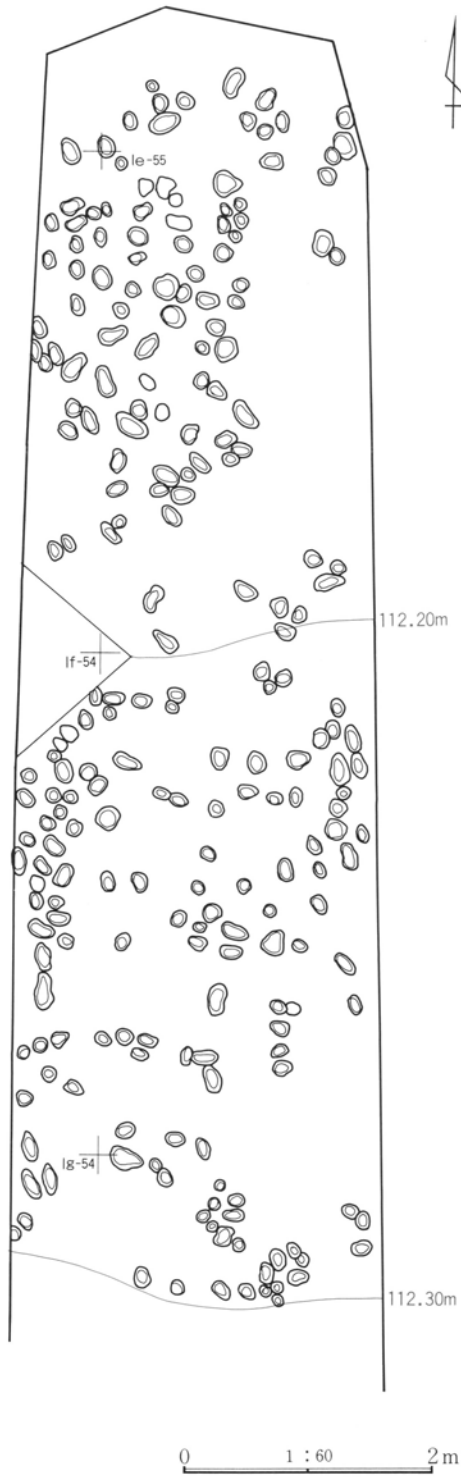
[1] 緑埜遺跡群の遺構と遺物



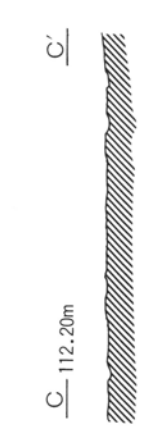
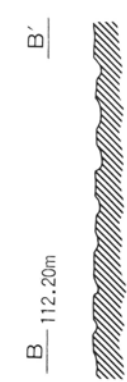
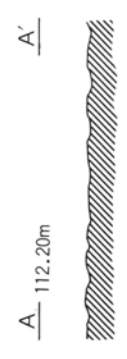
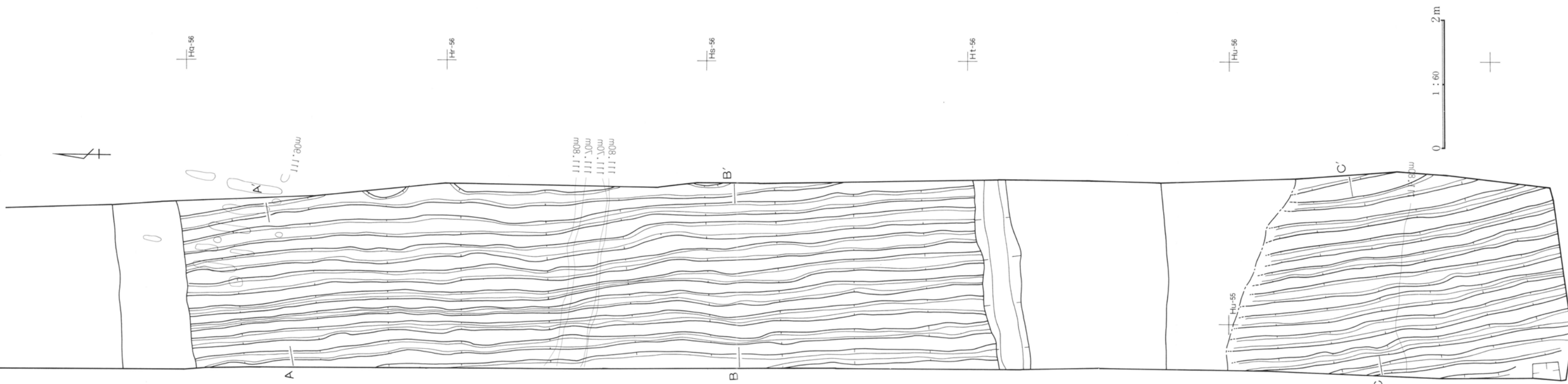
- 1 褐色土層 現耕作土。As-A混入。
- 2 灰色土層 As-A混入。鉄分沈着多い。
- 3 鉄分凝集層
- 4 暗褐色土層 軽石、小石、鉄分混入の粘質土。



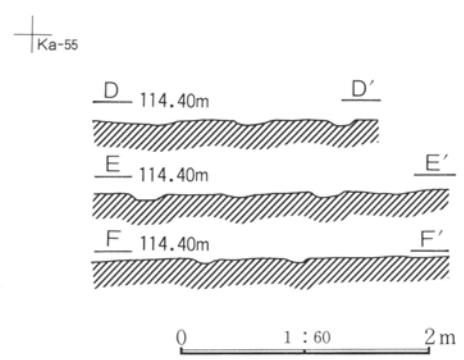
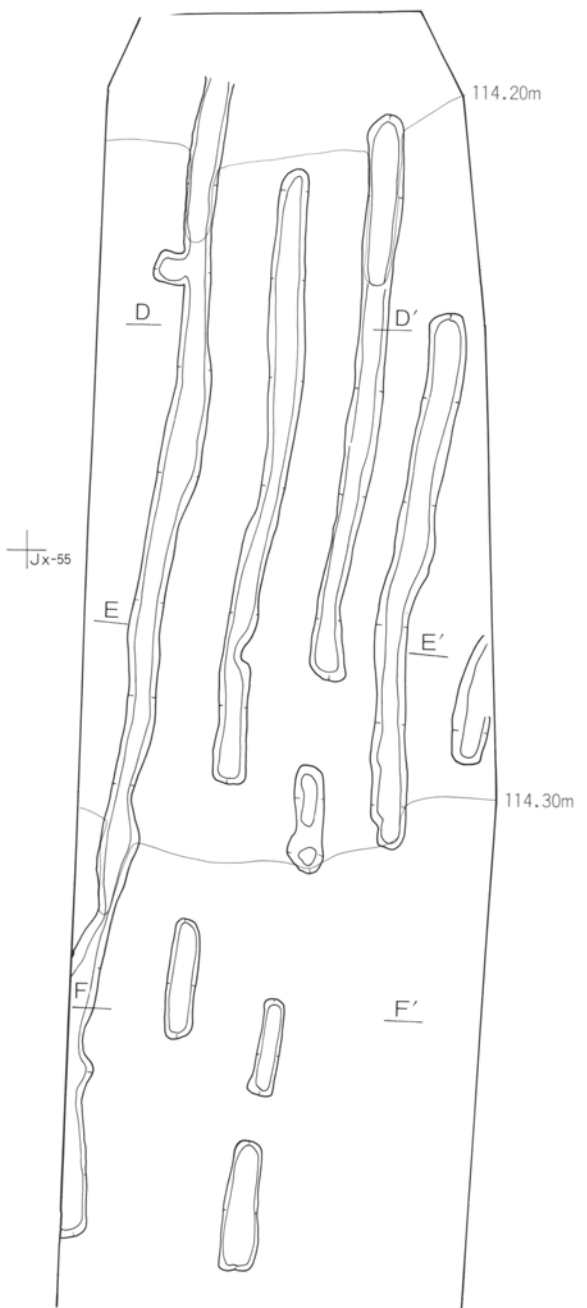
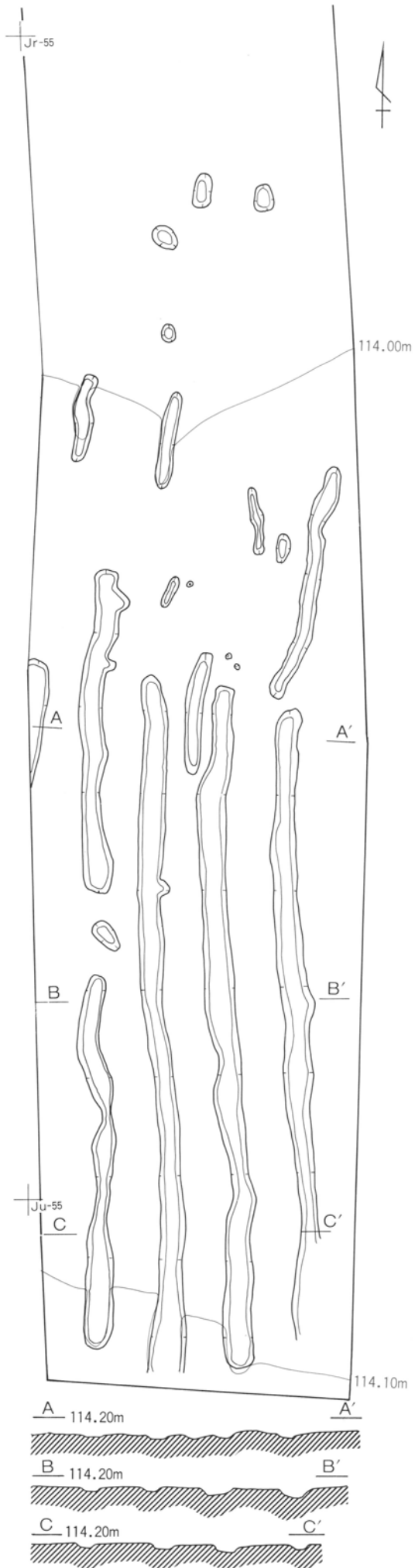
第13図 緑埜遺跡群3区調査区



第14図 緑埜遺跡群 3区調査区

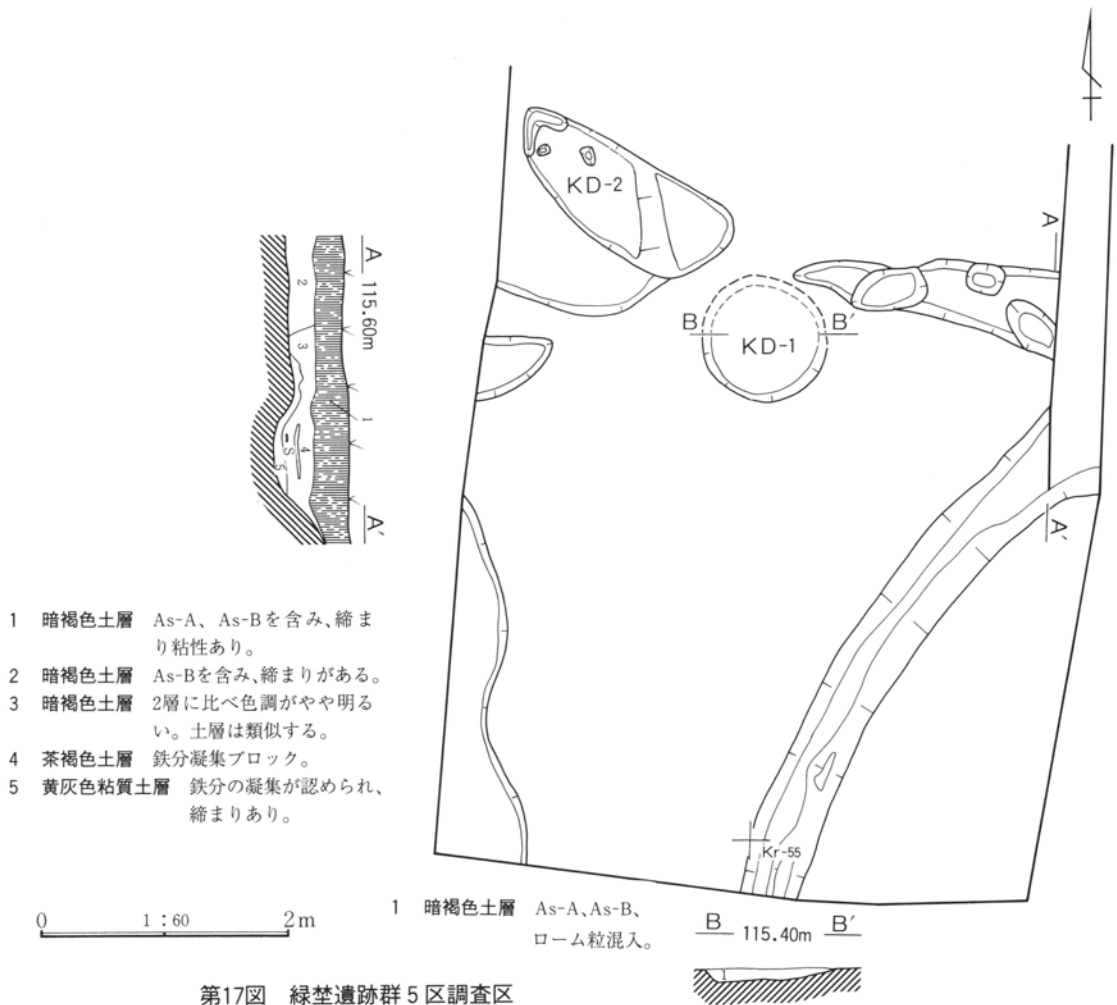
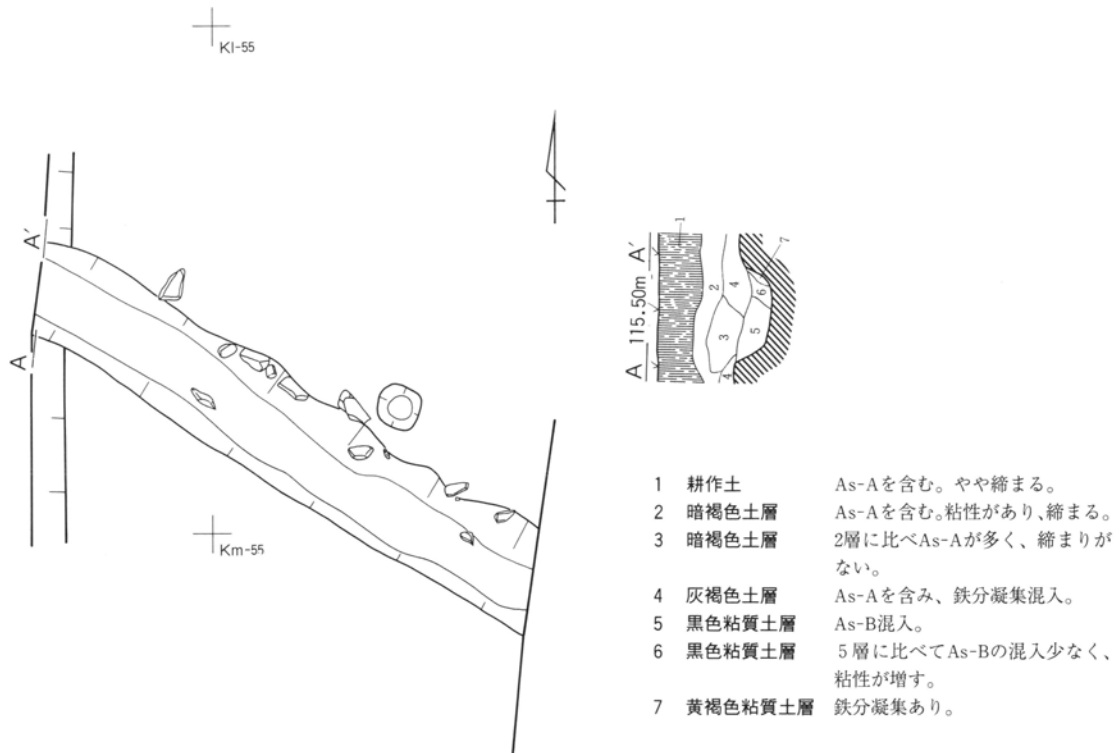


第15図 緑蔭遺跡群3区調査区(As-A下畠)



第16図 緑埜遺跡群4区調査区(As-B下畠)

第2章 緑埜遺跡群 緑埜上郷遺跡の調査



第17図 緑埜遺跡群5区調査区

〔2〕 緑埜上郷遺跡の遺構と遺物

1 調査区 (第3・18~21図、P.L.13~15)

調査区は、竹沼遺跡とは谷を隔てた東の台地にある。南北約180m、幅約6~14m、面積約1,123m²を対象とする。位置は、台地西斜面から低地部分にかけてで、1987(昭和62)年の市教育委員会による21Bトレンチの西に接している。その調査では、旧石器時代のユニット箇所、古墳時代の住居24軒、平安時代の水田跡、溝、江戸時代斎藤氏の代官屋敷跡などが確認されている。地形を異にするが、竹沼遺跡とほぼ同様な内容が知られている。しかし、今回の調査区では、調査終了後の圃場整備で台地部分はローム層の暗色帯まで削平され、谷はその残土で埋められて遺構は消失していた。唯一、北側の低地部分が調査の対象として残されていた。

確認された遺構は、斎藤代官屋敷の石垣、近世の溝3条、平安時代の水田、溝2条がある。これらは、いずれも昭和61年の調査内容に追加されるものである。

2 基本土層

基本土層はLoc・3+60地点で記録した。すでにローム層の中位までが削平を受けていた。標高は116~118mである。

- 1層 現耕作土 客土 厚さ10cm前後
- 2層 黄褐色土 強粘性 厚さ20cm前後 下面は西側への下り勾配を持つ、ローム層としては下位に相当し挟雑物が多い。
- 3層 黄褐色土 多量のクサリ礫、結晶片岩類の破碎礫を含む。礫は1~5cm大。
- 3A層 黄土色粘質土 3B層とともに4層との境界面に厚さ3cm前後で堆積する。礫の混入はない。
- 3B層 灰色粘質土 3A層と同性状、細粒で緻密、礫の混入はない。
- 4層 褐色土を混入する礫層 礫は5~10cm大。

5A層 褐色粘質土 5層上面の粘質土の多い部分、3A・B層ほど明瞭ではない。

5層 褐色土を混入する礫層 礫は5~15cm大、4層とともに礫が主体で隙間を褐色粘質土が充填する。

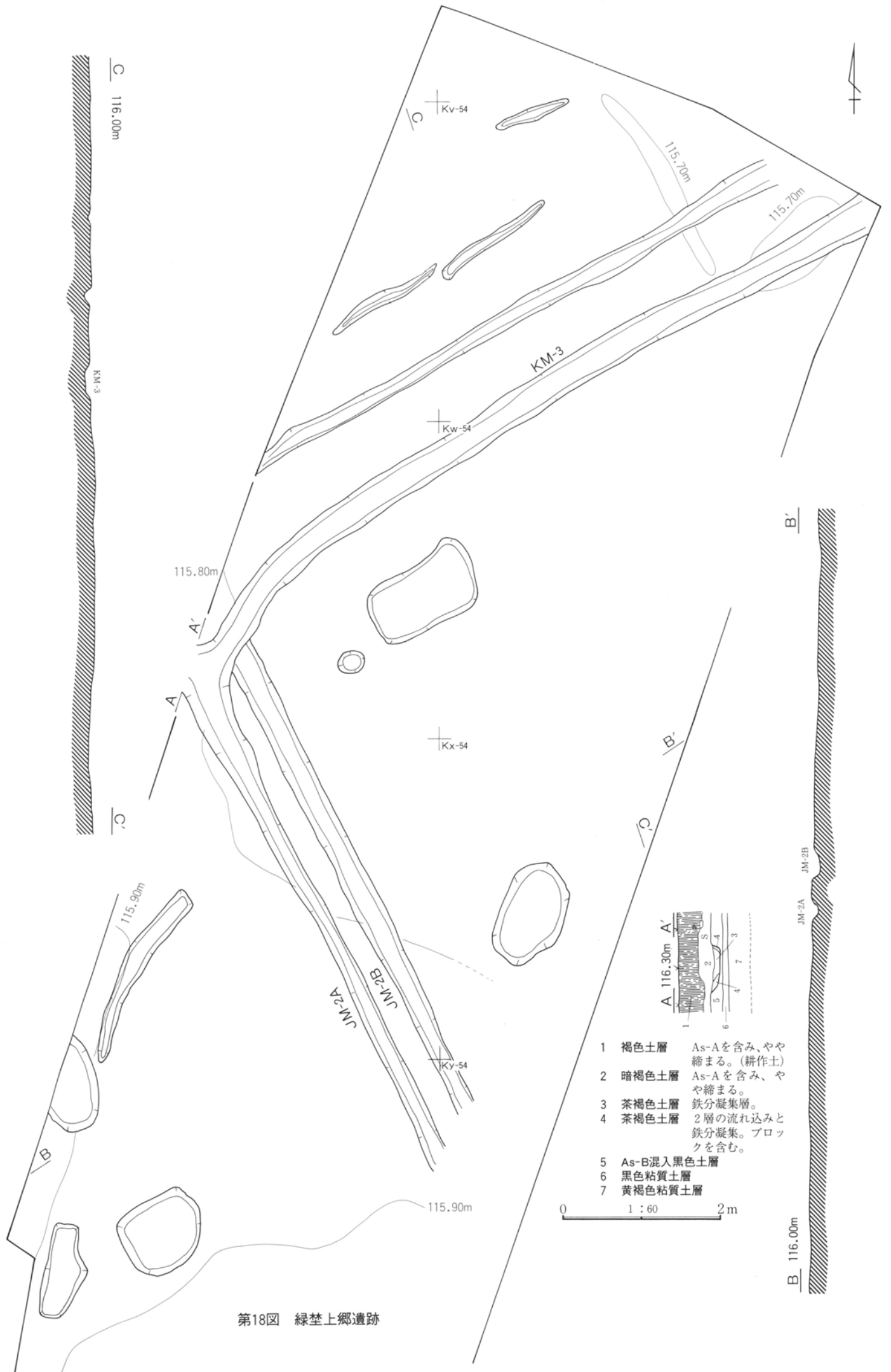
3 KM3・JM2A・JM2B (第18図、P.L.14)

この3条の溝は1983(昭和58)年の調査に続くものである。いずれも、As-B層混土層を掘り込んであるもので埋土の様子からすると、As-A層降下前後の時期である。平行した溝を持つKM3の様子からすると、畠を区画する溝と考えられる。JM2Aは、長さ7m分を確認し北西隅でKM3と直交している。上幅30~40cmで深さ10cmである。平行するJM2Bは、ほぼ同規模で一時期先行する。畠の区画は、等高線に平行・直交の関係にありAs-B層下水田のあり方を踏襲している。

4 As-B下水田 (第19図、P.L.14)

平安時代の水田は、As-B層で覆われていたもので、台地縁辺の微高地部分を勾配を利用しながら区画している。区画は、畦ではなく溝を境界としている。区画全体が調査されたものはないが、一辺が10mを越すものが3区画ある。このうちの2区画には、直径10cm前後の円形のくぼみが集中して確認されており、足跡か株跡と思われる。溝は、区画境界のほかに、谷上流からの導水を目的としたものがある。直交しているJK19とJK20は、ともに上幅1mを越し、耕作面からの深さ20cmほどのもので、規模と底面に砂礫が堆積している点からみて基幹の導水路と考えられる。灌漑は、緩やかな地形勾配、畦を持たない区画の特徴からすると、大区画の中に基幹の導水路で通水後は、地形勾配のままにオーバーフローさせ、再度溝に集水して下流域へと通水を繰り返したのと考えられる。

水田は、As-B層の降下で耕作が放棄されている

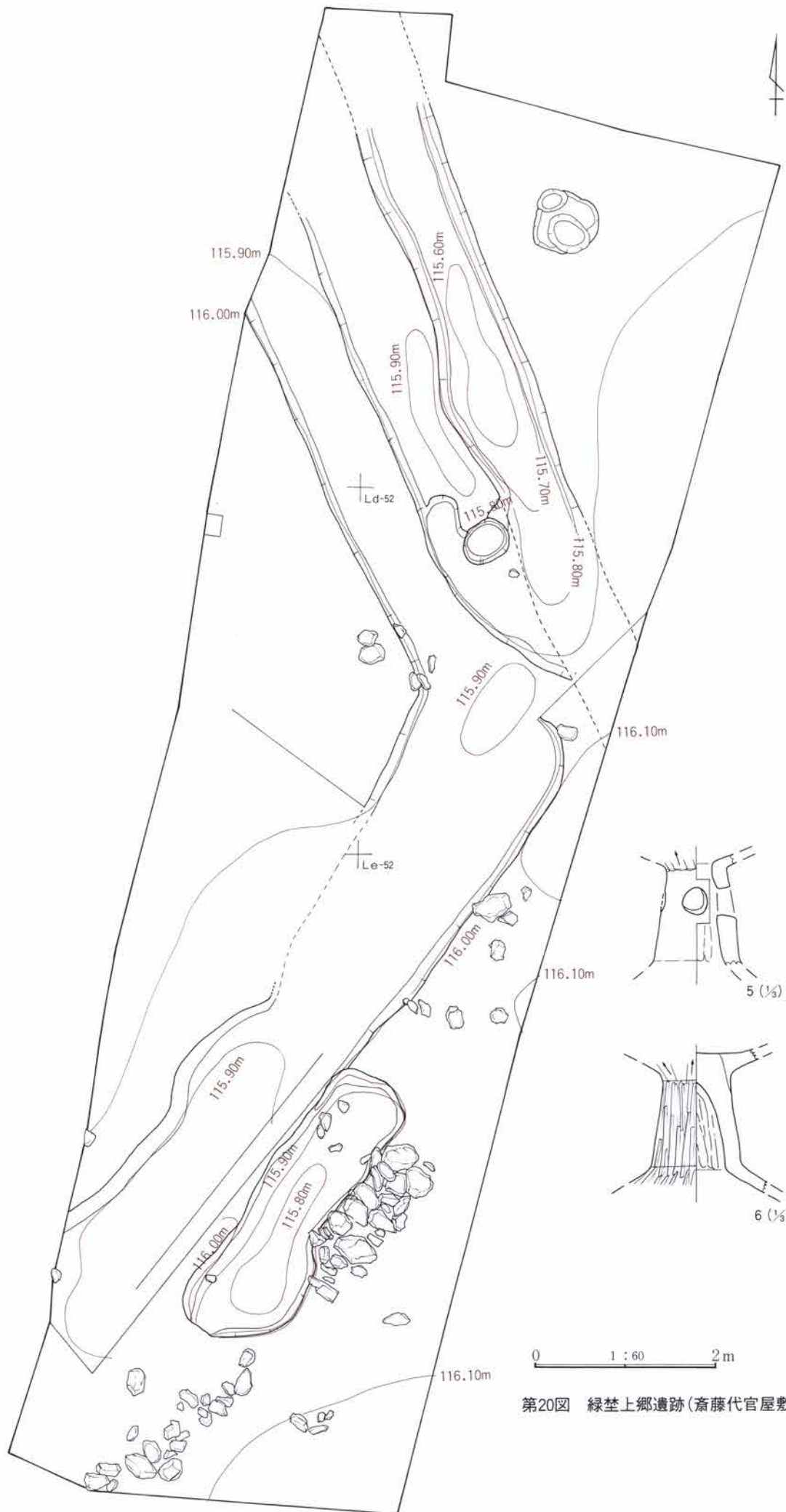


- 1 褐色土層 As-Aを含み、やや締まる。(耕作土)
- 2 暗褐色土層 As-Aを含み、やや締まる。
- 3 茶褐色土層 鉄分凝集層。
- 4 茶褐色土層 2層の流れ込みと鉄分凝集。ブロックを含む。
- 5 As-B混入黒色土層
- 6 黒色粘質土層
- 7 黄褐色粘質土層

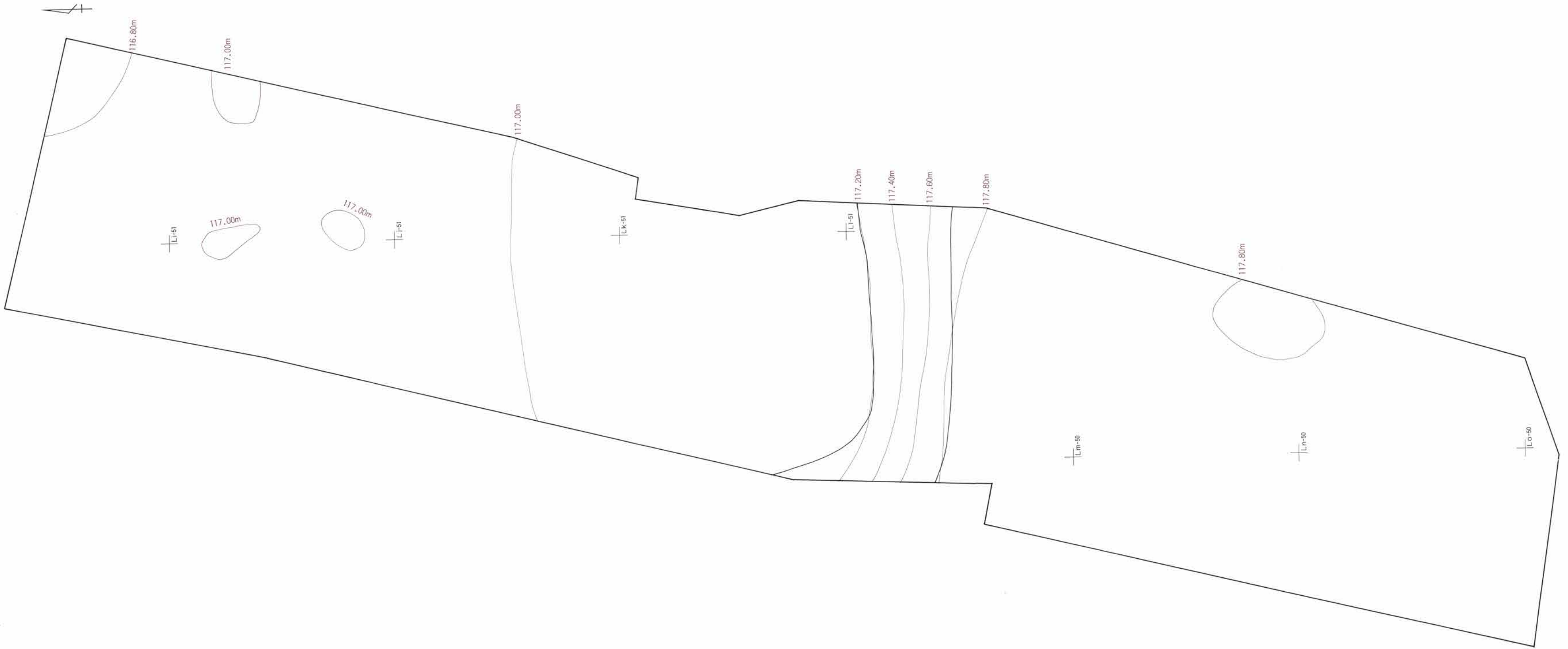
第18図 緑柱上郷遺跡



第19図 緑埜上郷遺跡(As-B下水田)



第20図 緑柱上郷遺跡(斎藤代官屋敷跡)



第21図 緑荳上郷遺跡

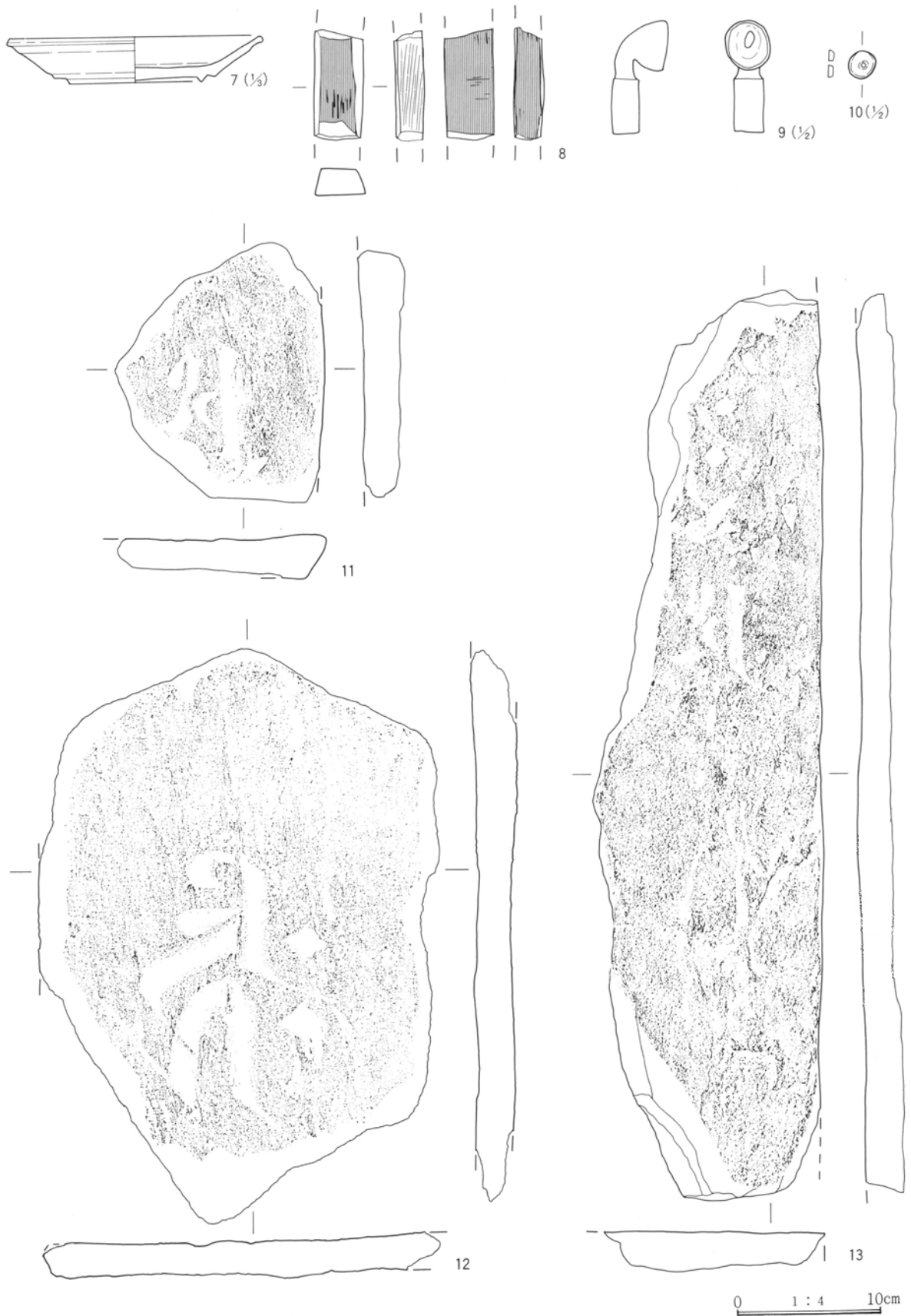
0 1:60 2m

が、その上面にはAs-B層を混入し鉄分が沈着した暗褐色土があり、ほどなく耕作が再開された様子が窺える。

5 斎藤代官屋敷 (第20図、P.L.15)

斎藤代官屋敷は、この地域一帯を治めた代官斎藤氏のものである。前回の調査では、屋敷の北西部分の確認され、母屋を始めとする建物跡、倉跡、建物を区画する溝、屋敷全体を区画する石垣が確認されている。今回は、さらに外周の石垣が追加された。石垣は、基部の側溝にかかる縁石で幅1 m、長さ7 m

ほどが確認された。その状態は、台地の縁辺部を削り落とし、その全面に石を小口積みになっている。石は、人頭大くらいの大きさで、削り出した土を裏込めになっているが、ゆるいためか根石列を遺して全体に崩落している。根石は、下面にAs-B層下水田があるために、補強を目的として盛土をした上に、一見すると2列に敷き並べられていた。石自身は、鮎川や地山で一般に見られるもので、割る、面取りするといった加工の痕跡はない。その外側には、幅1 m弱の排水溝が付いている。崩落した石に混じって、染付陶磁器、軟質陶器の破片、瓦が出土している。



第22図 緑埴遺跡群出土遺物(1)



第23図 緑埜遺跡群出土遺物(2)

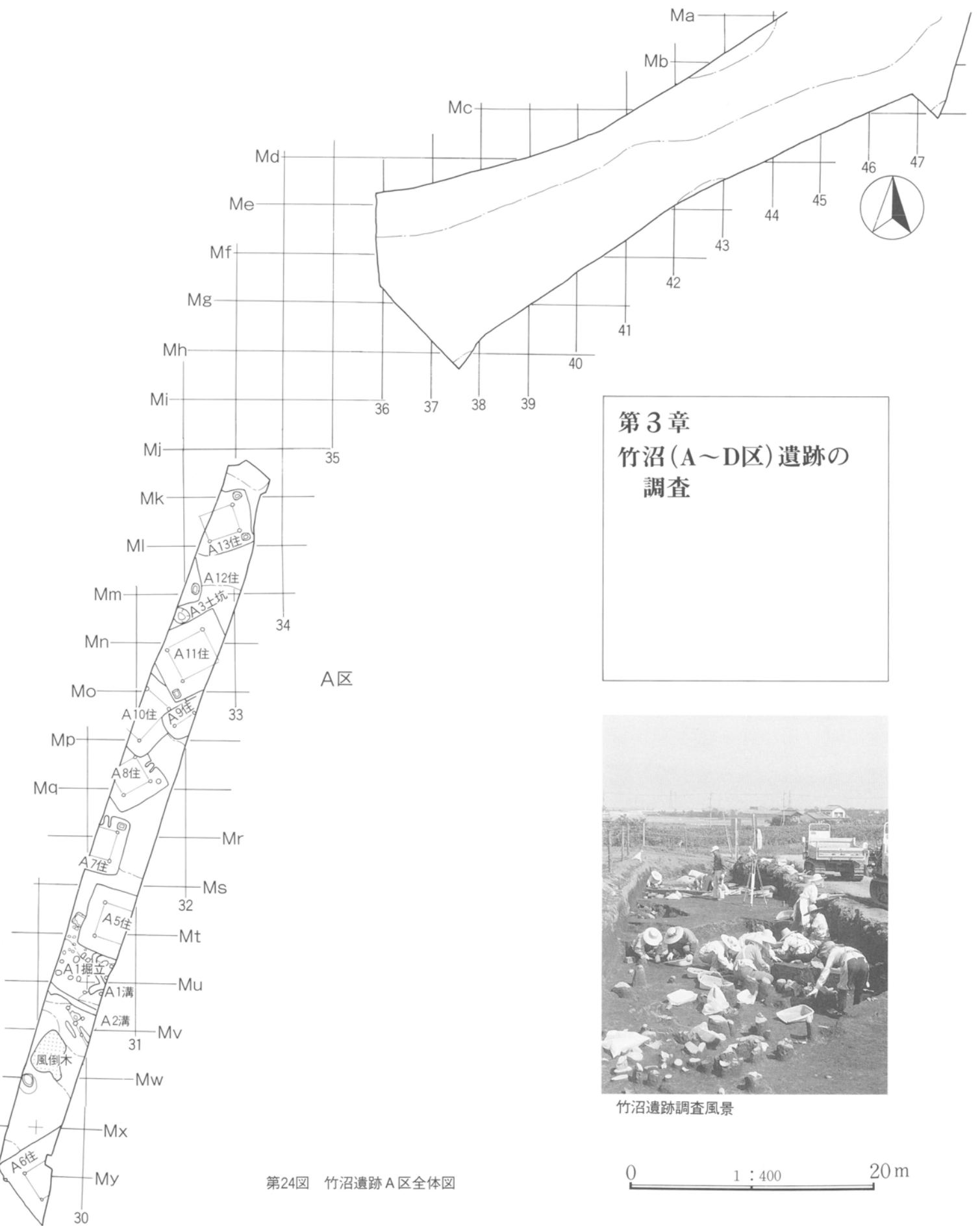
第2章 緑埜遺跡群 緑埜上郷遺跡の調査

緑埜地区出土遺物

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)		①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径②器高③底径					
20-5 16	土師器 器台	②5.9		①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	脚部外面ナデ。 内面ナデ。	緑埜上郷	脚部2/3
20-6 16	土師器 高坏	②(7.2)		①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	脚部外面ヘラ削り、ミガキ。 内面ナデ。	緑埜上郷	脚部全周 4世紀代
22-7 16	陶器 皿	①(13.0) ②2.3 ③(3.3)		①細 ②還元焰③灰オリーブ色	全面に灰釉、ケズリ出し高台。 目跡あり。瀬戸美濃。	2区	1/3残存 17世紀代
23-16 16	縄文土器	底部片		①中粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい赤褐色	底面網代。	表採	底部3/4
23-17 16	縄文土器	胴部片		①中粒の砂を含む。 ②良 ③明赤褐色	縄文施紋。原体はR 比横位。 内面は横ミガキ。	表採	中期前半
23-18 16	縄文土器	口縁部片		①中粒の砂を含む。 ②良 ③灰褐色	縄文施紋。原体はR 比横位。 内面は横方向の調整。	表採	中期前半

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
22-8-16	砥石	2/3	砂岩	(4.3)	3.5	1.8	(80)	4側面を使用。	Fo-55付近
22-10-16	白玉	完形	滑石	0.9		(0.2)	0.3		表採
22-11-16	板碑	破片	点紋緑泥片岩	17.9	14.5	1.8~3.0	(1,115)		石敷遺構
22-12-16	板碑	破片	点紋緑泥片岩	39.8	27.5	1.8~2.8	(5,200)		3区
22-13-16	板碑	半完形	緑泥片岩	63.0	16.0	2.0~2.9	(4,500)		3区
23-14-16	板碑	半完形	絹雲母石墨片岩	48.8	16.5	2.1~2.7	(3,900)		3区
23-15-16	板碑	破片	緑泥片岩	26.0	16.7	2.0	(1,520)		3区
23-19-16	打製石斧	完形	熱変成岩	9.5	7.0	2.5	200	分銅型。	縄文

図番 PL.	器種	遺存状況	計測値 (g・mm)			種類・年代	出土状態	
			重量	銭径(タテ・ヨコ)	銭厚			
7-1-16	古銭	一部欠損	(3.4)	24.5	23.5	0.8~1.2	寛永通寶	EM-49G
12-2-16	古銭	完形	2.52	22.5	23	0.8~1.2	寛永通寶	GM・8
12-3-16	古銭	完形	2.31	23.5	24	0.8~1.1	淳化元寶 北宋淳化元年 西暦990年	石敷遺構
19-4-16	古銭	完形	1.96	24	23.5	1	聖宋元寶 同建中靖國元年 西暦1101年	水田群南端区



第3章
竹沼(A~D区)遺跡の
調査



竹沼遺跡調査風景

第24図 竹沼遺跡A区全体図

0 1 : 400 20 m

〔1〕 竹沼遺跡の遺構と遺物

1 遺跡の概要

竹沼遺跡は、鮎川流域での谷地をめぐる集落の変遷、日野の谷あいへの開発の動きを知る遺跡の一つである。東の台地には緑埜上郷遺跡、緑埜たんぼには緑埜中郷・緑埜押出し・緑埜水押・シモ田・鍛冶谷戸の各遺跡があり、緑埜地区遺跡群と総称している。周辺では、東平井古墳群を始めとした後期群集墳が作られており、それらに呼応した集落でもある。

1976年の調査では、東西2つの台地で旧石器・縄文時代から平安時代の遺構や遺物が確認されている。成果は、『F1 竹沼遺跡発掘調査概報』（藤岡市教育委員会1978）として一部が公表されている。

集落の主体は、古墳時代後期で住居26軒がある。これ以前には、縄文時代中期加曾利E1式期、弥生時代後期末から古墳時代初頭の小規模な集落がある。古墳時代初頭では、赤井戸式土器と古式土師器が相伴しており、北武蔵の吉ヶ谷式土器との分布圏の検討が喚起されている。古墳時代後期には、白玉や紡錘車を製作した工房跡9軒があり、鮎川中流域の滑石を加工した專業集団が推定されている。

2 調査区と遺構の概要

調査区は、北からA~E区に分けられる。西の台地ではA~D区が、東の台地ではA区とE区が、これまで調査されている。今回は、A~D区の西側に接する南北約380m、幅約5~6m、面積約2,000m²である。現況は、標高125m前後、桑園と畠が広がる台地で、東の谷地田は緑埜たんぼへと続いている。

確認された遺構は、住居跡34軒、掘立柱建物跡2棟、土坑16基、溝4条、井戸2基、風倒木跡2基、ピット群である。住居は、古墳時代が32軒、弥生時代、奈良時代が各1軒である。遺構の大半は、新たに確認されたが、住居5軒、溝2条は1976年調査の追加である。区毎は以下である。

A区 住居9軒、掘立柱建物1棟、土坑2基、溝2条、ピット群

B区 住居7軒、土坑10基、溝2条

C区 住居7軒、掘立柱建物1棟、井戸1基、風倒木痕2基

D区 住居11軒、土坑4基、井戸1基

西の台地について新発見は2点ある。

第1に、居住域はB区とC区の間にある凹地を中心にあること。この凹地は、間口30m、B区のローム層上面との比高差1m強で谷地に続いている。古墳時代後期には、住居をA・B区とC・D区の2群に分け、縄文時代中期の遺構もこれに面していたと思われる。平安時代には浅井戸が掘られていたが、As-B層降下頃には埋没し、遺構は稀薄になる。

第2に、古墳時代後期後半に土地利用の画期があること。後期の住居が新たに27軒追加され、しかも台地の北縁辺部まで分布している。住居群は、台地上に点在し、谷地に面する一群と台地際の一帯がある。これは、広い範囲での開墾を意図したもので、緑埜たんぼを含めた動きである。

〔2〕 A区検出の遺構と遺物

A区5号住居跡（第25～31図、PL.19～21・68～71）

位置 Ms-29・30、Mt-29・30グリッドにかけて検出された。A区7号住居跡の南約1mの所に位置している。

形状 完掘されていないために不明であるが、現状では長辺5.3m、短辺3.3mを測る。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4（1・2・a・b）層に分かれた。4・5層は風倒木痕の可能性が考えられる。

壁高 住居跡確認面より約26～35cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼床でやや凹凸が認められる。現状での面積は約16㎡である。

掘り方 凹凸が非常にあるが、床面中央部と壁際を

残して掘り込みが認められる。貼床下から少量の土器片が出土している。

周溝 現状では全周している。幅4～12cm、深さ3～6cmである。

竈 検出できなかった。

柱穴 ピットは総計4個検出された。P1は深さ46cm、P2深さ45cm、P3深さ9cm、P4深さ6cmである。P1・P2が主柱穴になる。

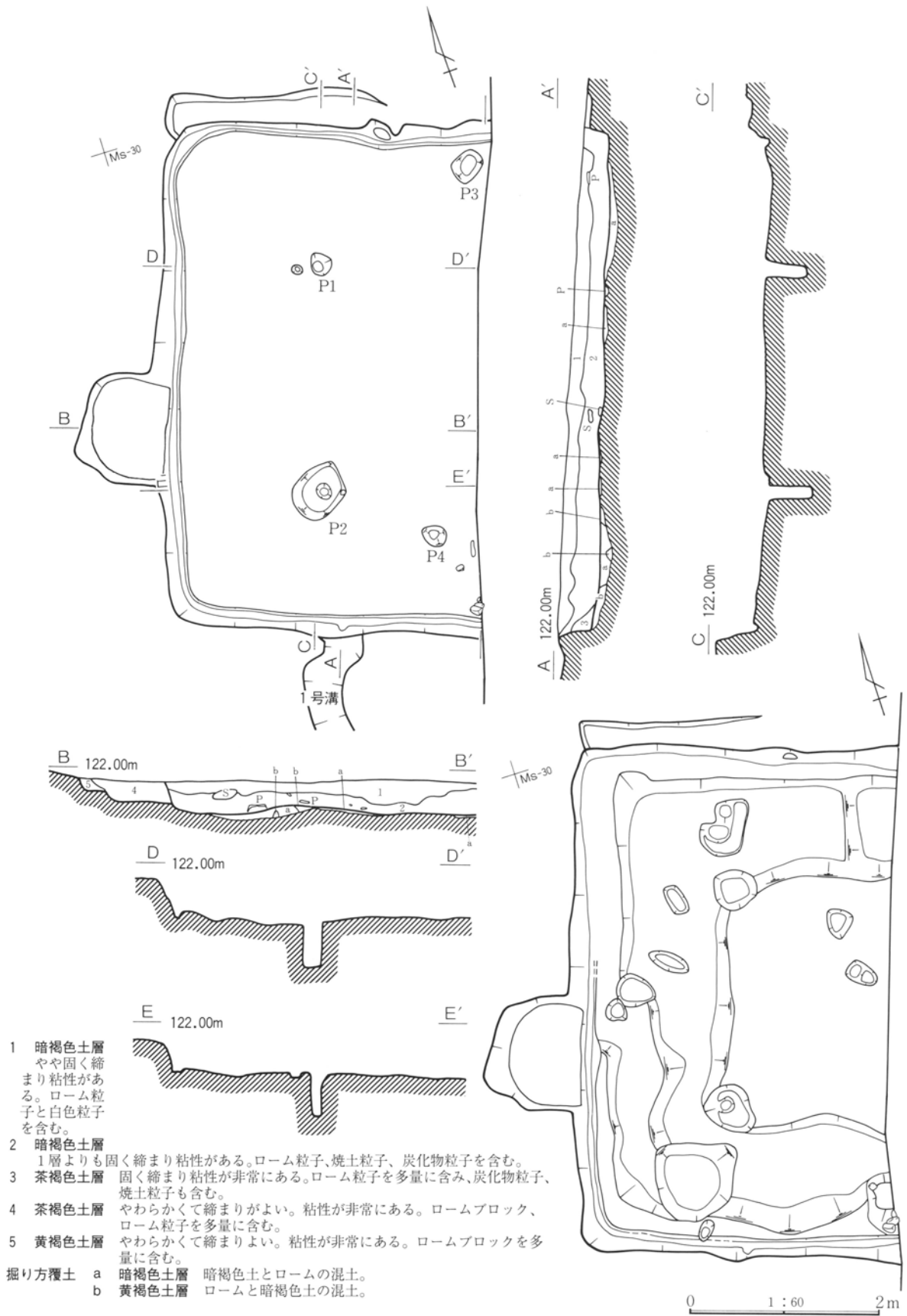
貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 床面直上や覆土から多量の遺物が出土している。とりわけ西壁周辺からは完形品を含めた土師器甕や坏が出土したが、その在り方は一括廃棄された様相を感じさせる。

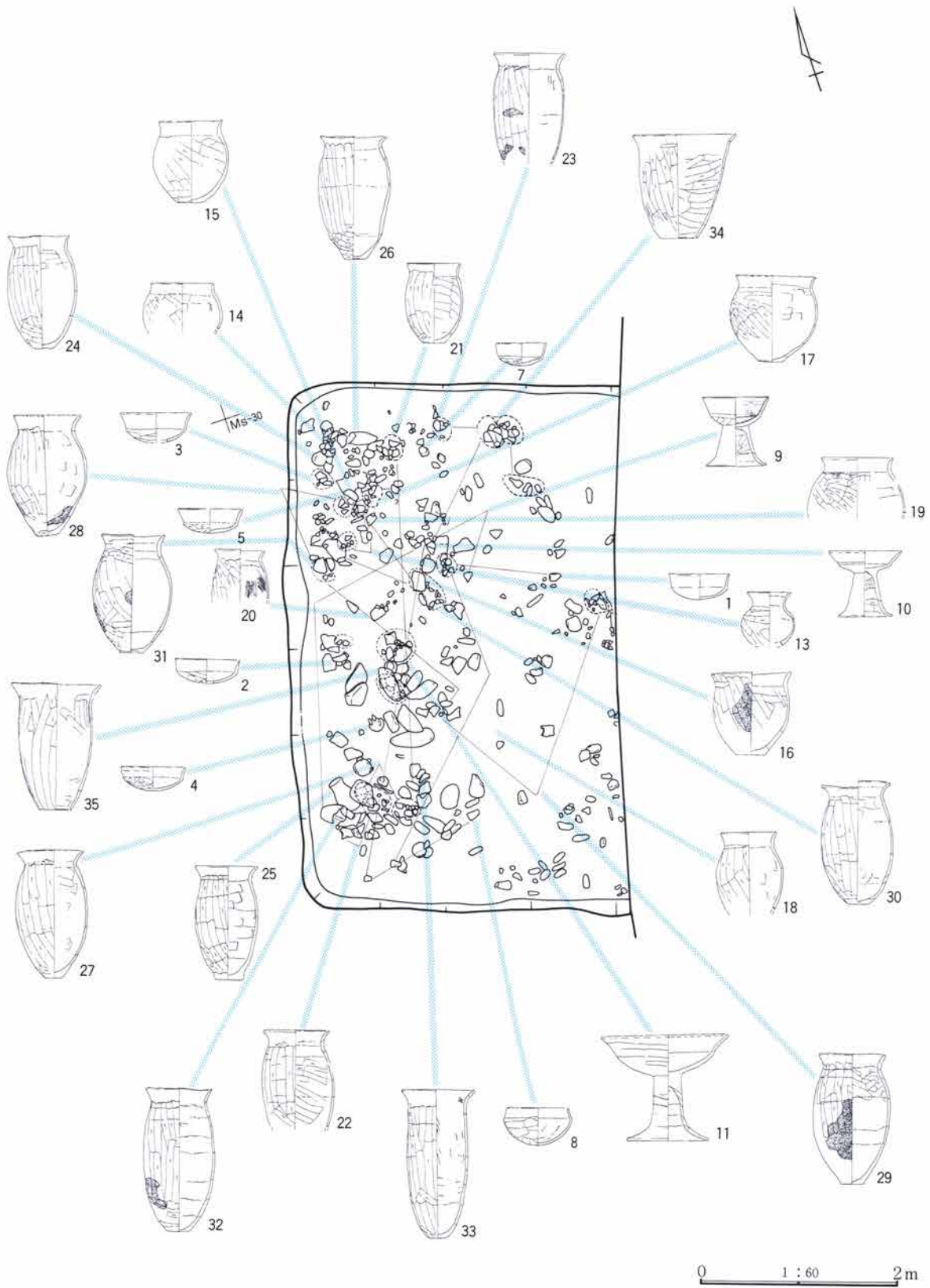
時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀前半の段階である。

A区5号住居跡

図番 PL	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況
						備考
27-1 68	土師器 坏	①12.3 ②(5.1)	①粗粒の砂、赤色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデ。	中央部	完形
27-2 68	土師器 坏	①(13.0) ②(4.7)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	西壁寄り	2/3残存
27-3 68	土師器 坏	①(14.5) ②(6.0)	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	北西壁寄り	1/2残存
27-4 68	土師器 坏	①13.1 ②4.8	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。ヘラの工具痕。	西部	完形
27-5 68	土師器 坏	①13.2 ②4.9	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。ヘラの工具痕。	北西部	完形
27-6 68	土師器 坏	①(12.9) ②4.5	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。ヘラの工具痕。	覆土	2/3残存
27-7 68	土師器 坏	①10.0 ②4.6	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③明褐色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。ヘラの工具痕。	北部	口縁部一部欠損
27-8 68	土師器 坏	①12.3 ②7.6	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③暗灰黄色	底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。ヘラの工具痕。	南部	ほぼ完形
27-9 68	土師器 高坏	①(13.3) ②14.0③(12.2)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	脚部外面ヘラ削り不明瞭。内面ナデ。坏部内面吸炭による黒色処理。	南西壁寄り	坏部1/2欠損
27-10 68	土師器 高坏	①(14.7) ②13.2 ③11.0	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	脚部外面ヘラ削り不明瞭。内面ヘラ削り。坏部内面ナデ。	中央部	坏部口縁一部欠損
27-11 68	土師器 高坏	①25.6 ②21.2 ③16.5	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙色	脚部外面ヘラ削り、内面輪積み痕。坏部底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。	西部	坏部1/3欠損
27-12 68	土師器 小型土器	①(6.1) ②7.3 ③4.8	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明褐色	底面・胴部外面ヘラ削り。 内面ナデ。	覆土	口縁部一部欠損
27-13 68	土師器 小型壺	①9.0 ②(11.0)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北西部	底部欠損
28-14 68	土師器 小型甕	①(12.8) ②(9.7)	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北西隅	口縁～胴上半1/3欠損

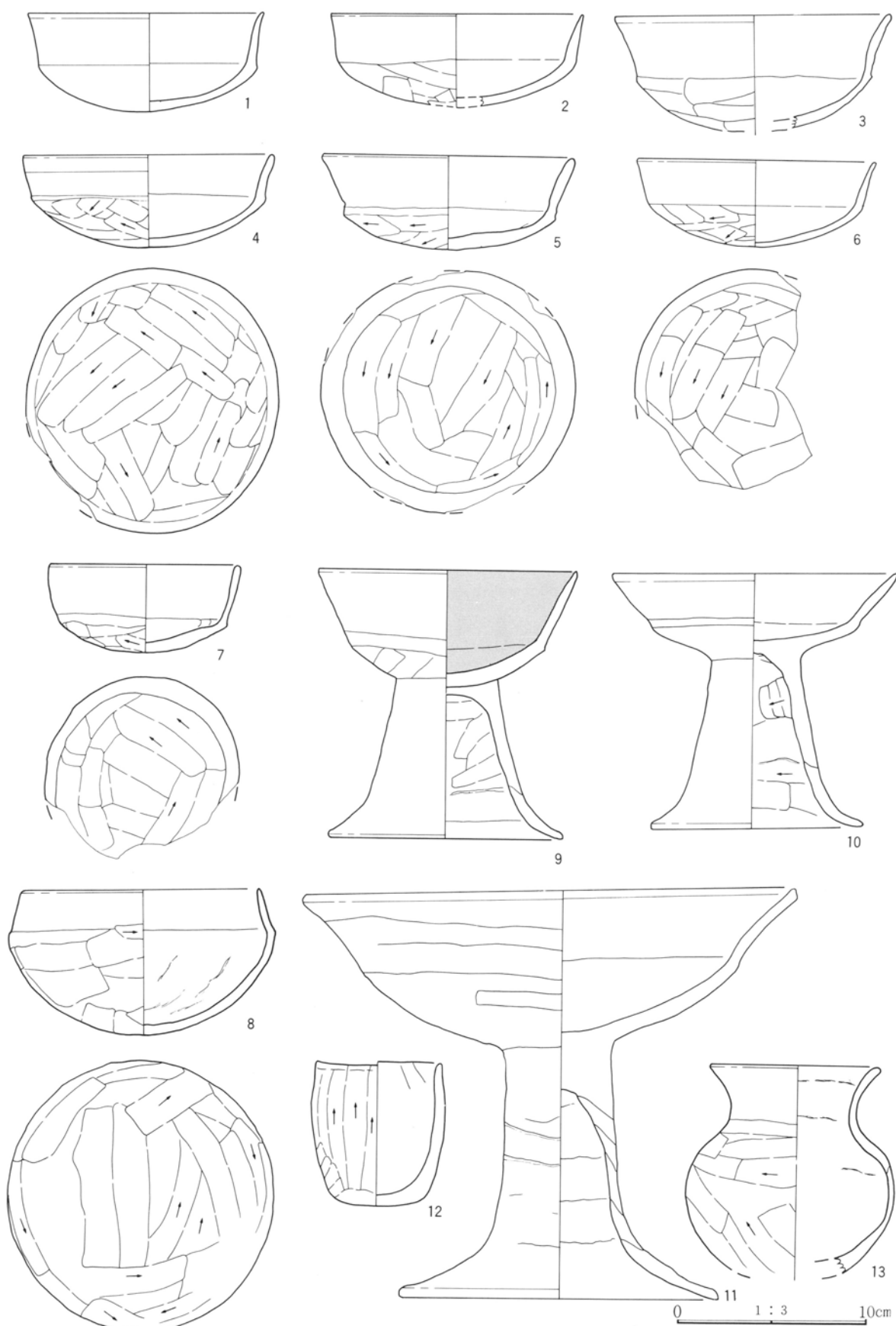


第25図 A区5号住居跡



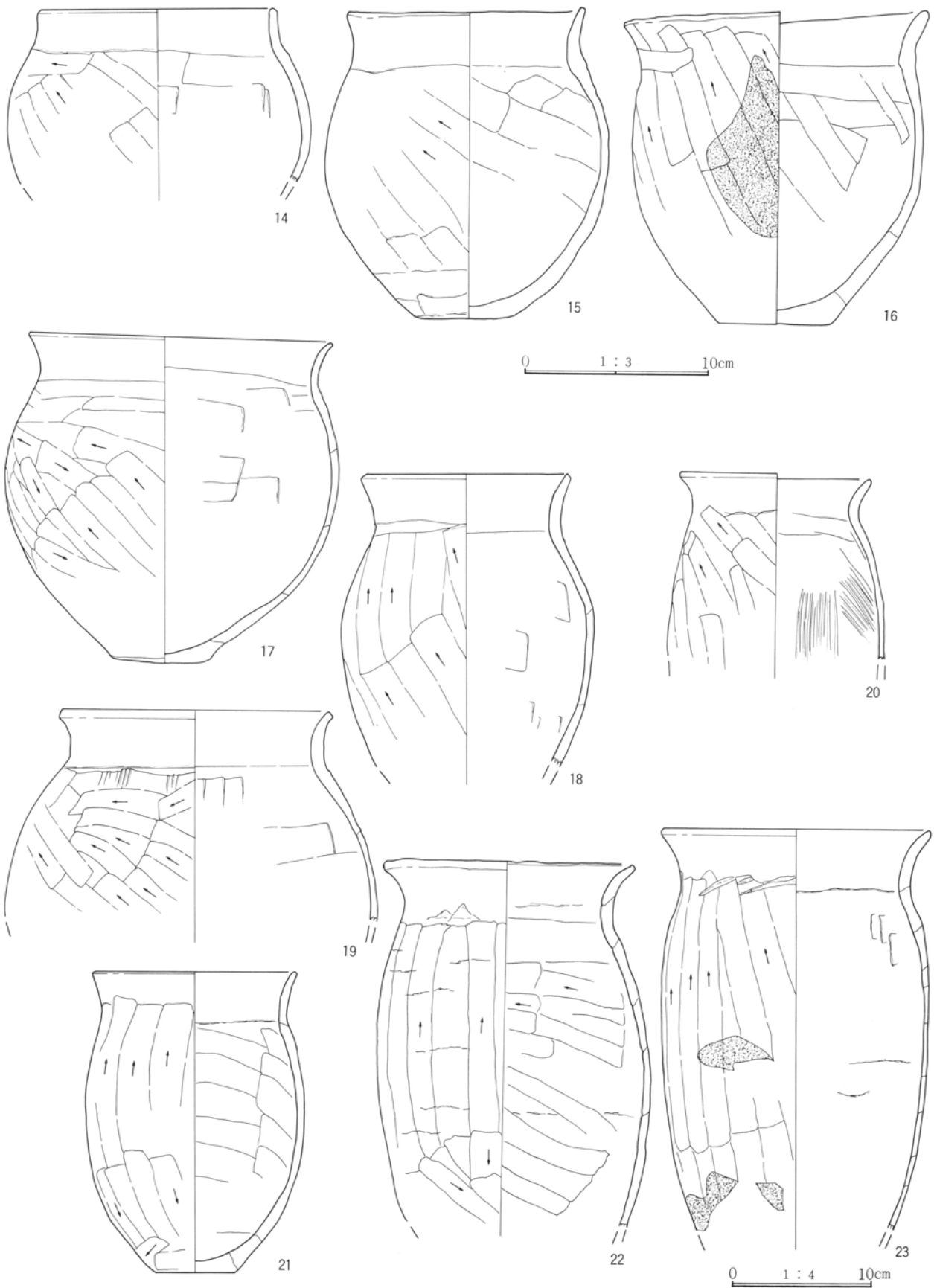
第26図 A区5号住居跡遺物分布図

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査

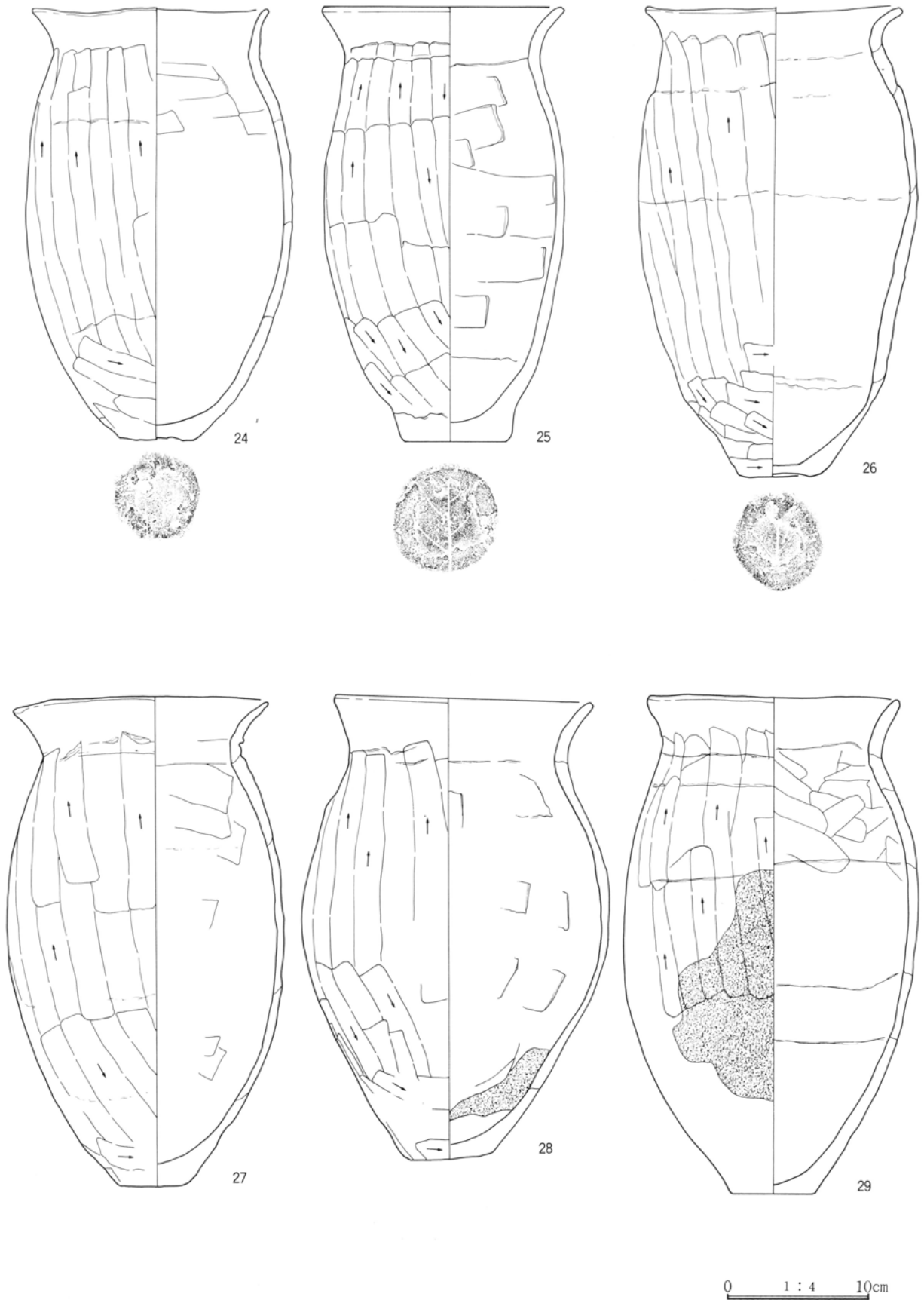


第27図 A区5号住居跡出土遺物(1)

〔2〕 A区検出の遺構と遺物

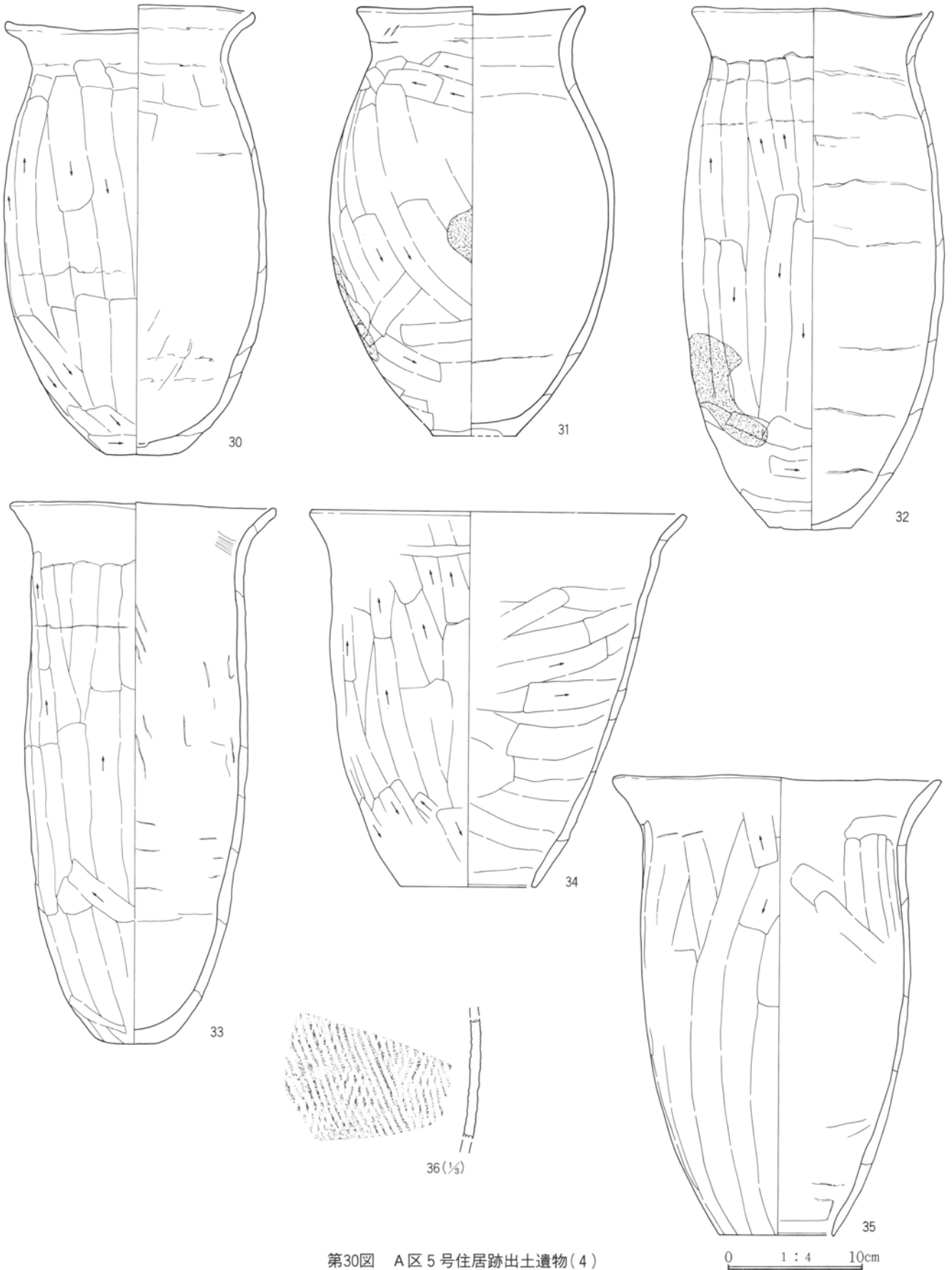


第28図 A区5号住居跡出土遺物(2)



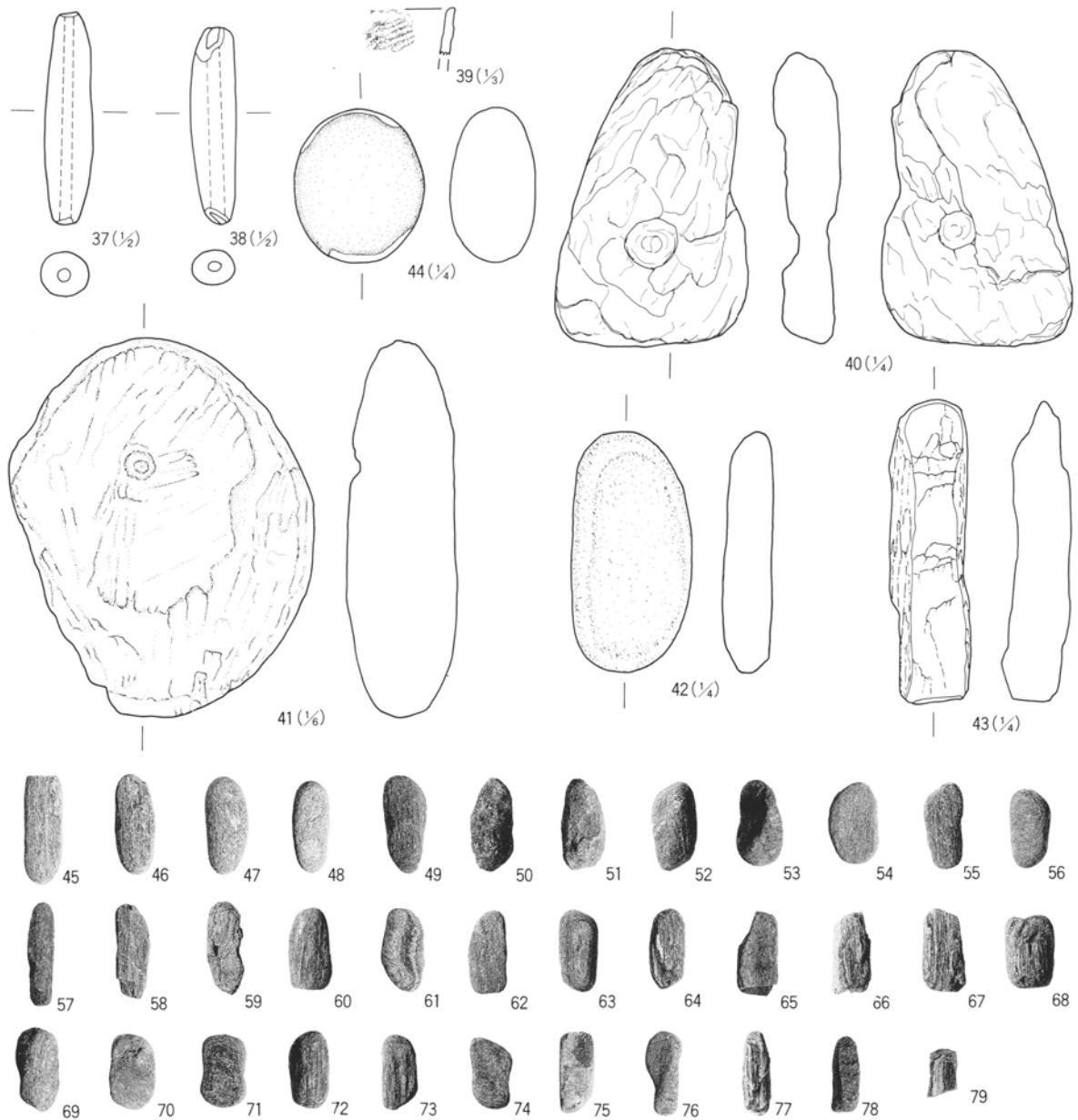
第29図 A区5号住居跡出土遺物(3)

[2] A区検出の遺構と遺物



第30図 A区5号住居跡出土遺物(4)

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



こも編石

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
31-45	絹雲母石墨片岩	19.5	6.8	2.5	540
31-46	絹雲母石墨片岩	16.3	6.5	2.6	460
31-47	絹雲母石墨片岩	16.0	7.0	4.0	690
31-48	絹雲母緑泥片岩	15.0	6.0	3.5	500
31-49	点紋絹雲母石墨緑泥片岩	16.4	7.0	4.2	730
31-50	絹雲母石墨片岩	15.5	7.1	4.8	637
31-51	点紋緑泥片岩	14.5	7.7	4.3	540
31-52	絹雲母石墨片岩	14.5	7.0	6.3	950
31-53	輝岩	14.0	7.0	4.5	980
31-54	絹雲母石墨片岩	13.5	8.2	2.2	399
31-55	絹雲母石墨片岩	14.3	6.5	2.4	364
31-56	絹雲母石墨片岩	13.0	6.7	4.5	600
31-57	点紋絹雲母石墨緑泥片岩	17.0	4.3	2.5	300
31-58	点紋絹雲母石墨緑泥片岩	15.2	6.5	3.5	400
31-59	絹雲母石墨片岩	15.0	6.5	4.0	460
31-60	絹雲母石墨片岩	13.5	6.5	4.0	580
31-61	絹雲母石墨片岩	13.6	7.0	2.6	380
31-62	絹雲母石墨片岩	14.0	6.5	2.5	380

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
31-63	絹雲母石墨片岩	13.5	6.5	4.0	570
31-64	絹雲母石墨片岩	13.0	5.8	3.5	420
31-65	絹雲母石墨片岩	14.0	6.5	3.5	480
31-66	点紋絹雲母石墨緑泥片岩	13.3	6.2	3.4	450
31-67	絹雲母石墨片岩	13.8	7.0	4.3	610
31-68	絹雲母石墨片岩	12.0	7.5	6.5	940
31-69	絹雲母石墨片岩	13.5	6.8	3.5	520
31-70	緑簾緑泥片岩	12.5	8.0	4.3	580
31-71	絹雲母石墨片岩	12.0	7.5	2.5	400
31-72	点紋絹雲母石墨緑泥片岩	12.9	6.5	4.3	510
31-73	絹雲母石墨片岩	12.5	5.5	4.5	430
31-74	点紋絹雲母石墨緑泥片岩	11.5	6.6	3.6	430
31-75	絹雲母石墨片岩	13.3	5.0	5.5	650
31-76	絹雲母石墨片岩	13.8	6.8	4.6	440
31-77	絹雲母石墨片岩	14.0	4.8	4.5	420
31-78	絹雲母緑泥片岩	12.3	4.5	3.5	280
31-79	流紋岩	14.5	7.7	4.3	540

第31図 A区5号住居跡出土遺物(5)

[2] A区検出の遺構と遺物

図番 PL.	土器種別 器種	法 量 (cm)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備 考
		①口径	②器高	③底径				
28-15 68	土師器 小型甕	①12.6 ②16.3 ③5.7	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	北西部	完形		
28-16 68	土師器 小型甕	①16.2 ②16.6 ③6.0	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	中央部	胴部一部欠損		
28-17 68	土師器 壺	①21.7 ②23.2 ③7.1	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面磨耗。胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	北西部	完形		
28-18 68	土師器 甕	①15.0 ②(20.8)	①粗粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ、ヘラの工具痕。	中央部	胴下半部欠損		
28-19 69	土師器 壺	①19.5 ②(14.9)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ、ヘラの工具痕。	北西部	胴下半部欠損		
28-20 69	土師器 甕	①13.6 ②(13.8)	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	西部	胴下半部欠損		
28-21 69	土師器 小型甕	①14.4 ②21.5 ③5.7	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	北部	口縁から底部1/2残存		
28-22 69	土師器 甕	①18.0 ②(25.5)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面ヘラ削り。輪積み痕。口縁部横ナデ、内面ナデ。	南西部	胴下半部欠損		
28-23 69	土師器 甕	①(19.2) ②(28.0)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ、輪積み痕残る。	北部	底部欠損		
29-24 69	土師器 甕	①(16.7) ②30.4 ③4.9	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③黒褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	北西隅	胴部一部欠損		
29-25 69	土師器 甕	①17.0 ②30.0 ③8.0	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	南西部	完形 底面木葉痕		
29-26 69	土師器 甕	①18.2 ②33.0 ③5.5	①粗粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面木葉痕。胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	北部	完形		
29-27 69	土師器 甕	①18.0 ②34.0 ③4.7	①粗粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	南西部	完形		
29-28 70	土師器 甕	①18.0 ②32.4 ③6.0	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③赤褐色	底面磨耗。胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	北西壁寄り	胴部一部欠損		
29-29 70	土師器 甕	①17.3 ②34.7 ③6.0	①粗粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	中央部	胴部一部欠損		
30-30 70	土師器 甕	①18.5 ②33.5 ③5.5	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削り。口縁部ナデ。内面ナデ。輪積み痕。	中央部	完形		
30-31 70	土師器 甕	①16.8 ②31.7③(6.0)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③黄褐色	底面ナデ。胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。輪積み痕。	西壁寄り	胴部一部欠損 外面に煤付着		
30-32 70	土師器 甕	①18.0 ②38.6 ③6.0	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面・胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	南西部	完形		
30-33 70	土師器 甕	①19.7 ②40.0 ③5.0	①中粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面・胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ、輪積み痕残る。	南西部	完形		
30-34 71	土師器 甕	①(28.1) ②27.7③(10.0)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北部	口縁・胴部一部欠損		
30-35 71	土師器 甕	①24.3 ②33.2 ③8.4	①中粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	西部	胴部一部欠損		
30-36 71	須恵器	破片	①細 ②還元焰 ③褐灰色		覆土	胴部片		
31-37 71	土錘	長さ：6.1 幅：1.4	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②良 ③橙色	外面丁寧なナデ。 孔径約5mm。	貼床中	完形		
31-38 71	土錘	長さ：(5.7) 幅：1.3	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②良 ③にぶい黄褐色	外面丁寧なナデ。 孔径約5mm。	覆土	両端部一部欠損		
31-39 71	縄文土器	口縁部片	①細粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい赤褐色	口唇部平坦。 縄文施紋。原体はL118。	覆土			

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
31-40-71	凹石	完形	絹雲母片岩	17.3	10.5	1.7~3.7	860	両面に計2個の凹みが認められる。	覆土 縄文
31-41-71	多孔石	ほぼ完形	点紋緑泥片岩	22.0	17.3	7.0	(3600)	片面に1個の凹み穴が認められる。	覆土 縄文
31-42-71	磨石	完形	絹雲母緑泥片岩	14.0	7.0	3.0	460	両面に磨耗痕が認められる。	覆土 縄文
31-43-71	磨石	完形	絹雲母片岩	17.5	4.4	4.2	500	両面に磨耗痕が認められる。	覆土
31-44-71	磨石	完形	輝石	8.9	7.5	4.9	540	全面に磨耗痕、両端に敲打痕が認められる。	覆土 縄文

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査

A区6号住居跡(第32・33図、PL.21・22・71・72)

位置 Mx-28・29、My-28・29グリッドにかけて検出された。A区5号住居跡の南西約14mの所に位置している。

形状 完掘できなかつたために不明であるが、現状では長辺6.3m、短辺5.3mを測る。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は9(1~6・a~c)層に分かれた。a~c層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約48cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。現状での面積は約16.8㎡。

掘り方 床面中央部を残し、壁際で顕著である。貼床下から少量の土器片が出土している。

周溝 現状では全周している。幅約4~10cm、深さ約6cmを測る。

竈 検出できなかった。

柱穴 ピットは総計6個検出された。P1は深さ77cm、P2深さ22cm、P3深さ13cm、P4深さ23cm、P5深さ15cm、P6深さ18cmである。ピットの深さと配置から考えるとP1が主柱穴になると思われる。

貯蔵穴 検出できなかった。

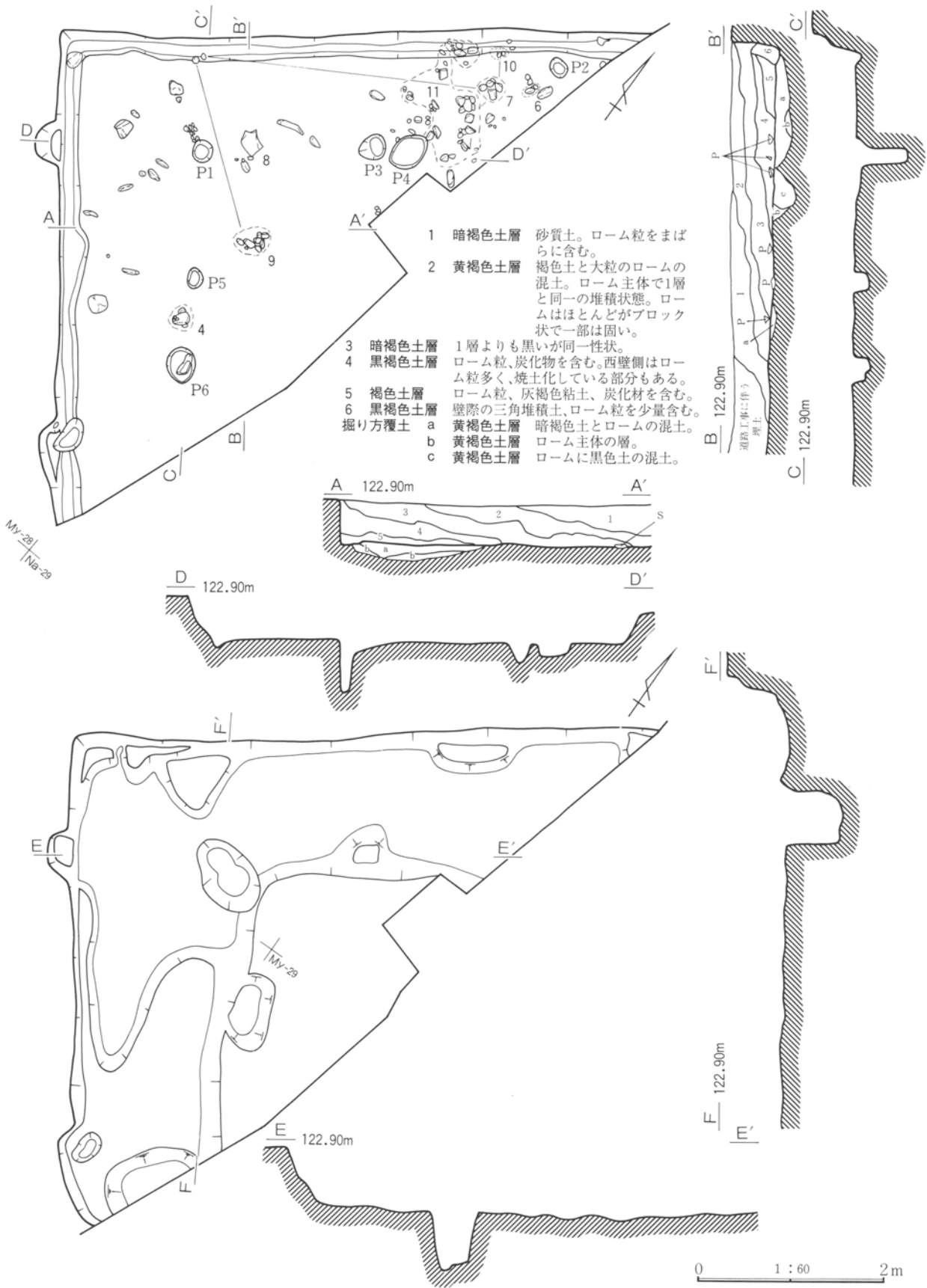
遺物 床面北西部から土師器の坏や甕が出土している。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀前半の段階に相当する。

A区6号住居跡

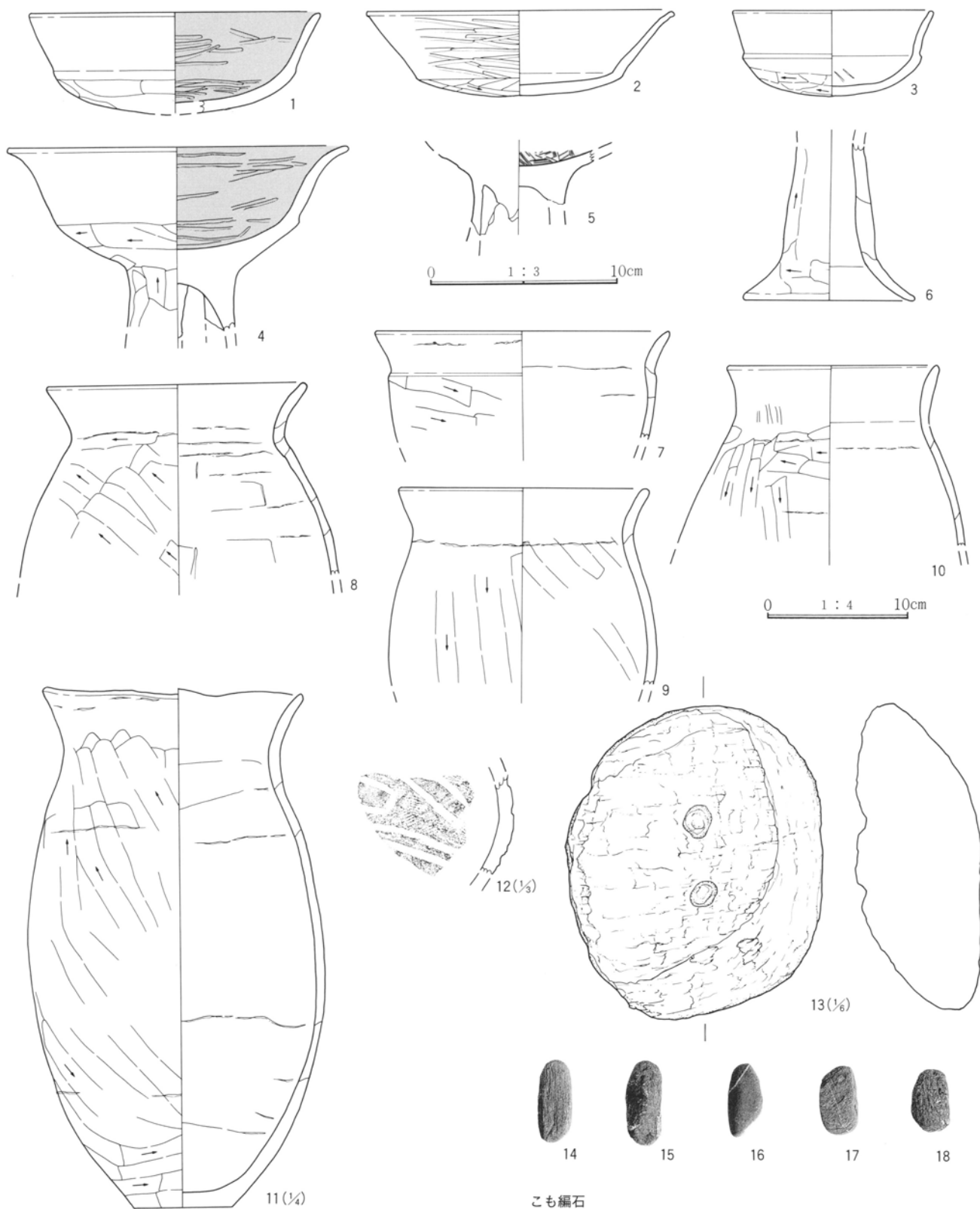
図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
33-1 71	土師器 坏	①(15.3) ②(5.2)	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ。内面吸炭による黒色処理。ミガキ。	覆土	3/4残存
33-2 71	土師器 坏	①(16.0) ②4.5	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ。ミガキ。内面ナデ。	覆土	1/3残存
33-3 71	土師器 坏	①(10.5) ②4.5	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。へらの工具痕。	覆土	1/2残存
33-4 71	土師器 高坏	①(18.0) ②(10.0)	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	脚部に透かし、坏部外面へら削り、口縁部横ナデ、内面黒色処理。ミガキ。	南西部	坏部3/4残存
33-5 72	土師器 高坏	②(4.5)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	脚部に透かし。坏部内面は吸炭による黒色処理、ミガキ。	覆土	部分
33-6 72	土師器 高坏	②(8.0) ③(9.0)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	脚部外面へら削り。 内面ナデ。	北西壁寄り	部分
33-7 72	土師器 鉢	①(20.8) ②(7.3)	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③灰黄褐色	胴部外面へら削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	北西壁寄り	口縁~胴上半 1/3残存
33-8 72	土師器 甕	①18.0 ②(13.5)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	胴部外面へら削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。輪積み痕残る。	P4周辺	口縁部1/2欠損
33-9 72	土師器 甕	①(17.0) ②(13.6)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③褐色	胴部外面へら削り不明瞭、口縁部横ナデ。内面ナデ。	西部	
33-10 72	土師器 甕	①14.8 ②(12.6)	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③黒褐色	胴部外面へら削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北西壁寄り	口縁~胴上半部
33-11 72	土師器 甕	①18.2 ②35.8 ③7.0	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③褐色	底面木葉痕、胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	P4周辺	胴部一部欠損
33-12 72	弥生土器	胴部片	①細粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい褐色	縄文施紋。原体はL字沈線による文様。		中期

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
33-13-72	多孔石	完形	絹雲母片岩	21.6	17.8	8.6	4690	片面に2個の凹み穴が認められる。	覆土 縄文



第32図 A区6号住居跡

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



こも編石

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
33-14	絹雲母石墨片岩	16.5	7.0	3.5	667
33-15	絹雲母石墨片岩	17.5	7.5	6.8	1170
33-16	輝緑岩	15.0	7.0	4.8	780
33-17	絹雲母石墨片岩	13.8	7.0	4.0	600
33-18	絹雲母石墨片岩	12.5	7.5	5.0	710

第33図 A区6号住居跡出土遺物

A区7号住居跡 (第34・35図、PL.23・24・72)

位置 Mq-30、Mr-29・30グリッドにかけて検出された。A区5号住居跡の北約1mの所に位置している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺4.7m、短辺2.7mを呈している。

方位 N-16°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は10(1~7・a~c)層に分かれた。覆土には炭化物や焼土が全体的に含まれていた。a~c層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約10~30cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼床でほぼ平坦である。現状での面積は約10.8m²。

掘り方 全体的に凹凸が顕著である。

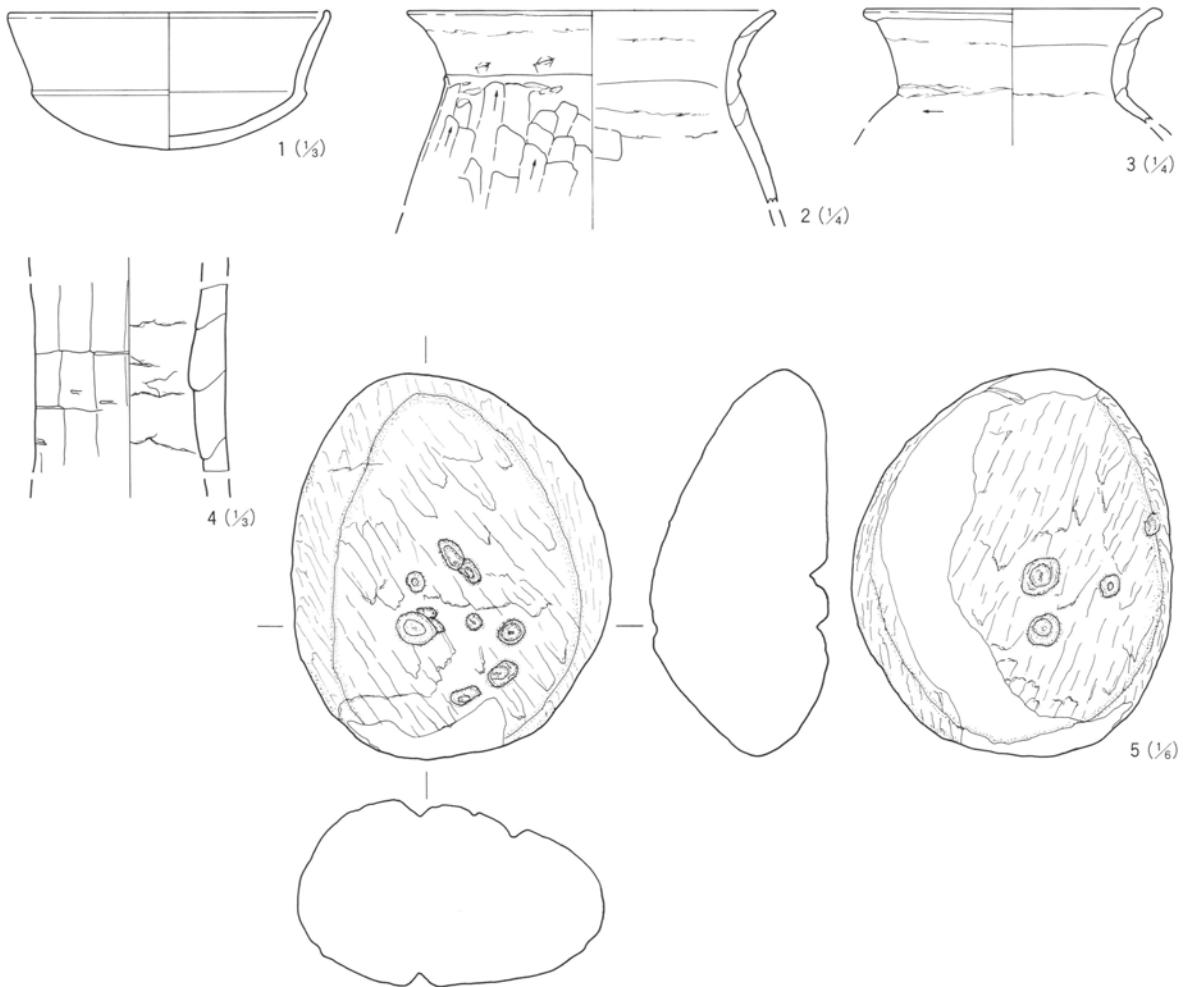
周溝 南東コーナーが途切れているが、幅約3~8cm、深さ約10cmを測る。

竈 北壁中央部に位置しているものであろう。燃烧部は床面に構築され、袖部は約100cm残存している。規模は煙道方向100cm、両袖方向100cmである。住居内部にロームを馬蹄形に掘り残し、6・7層を貼って袖を構築している。袖石1点残存。屋外には僅かに煙道が残る。

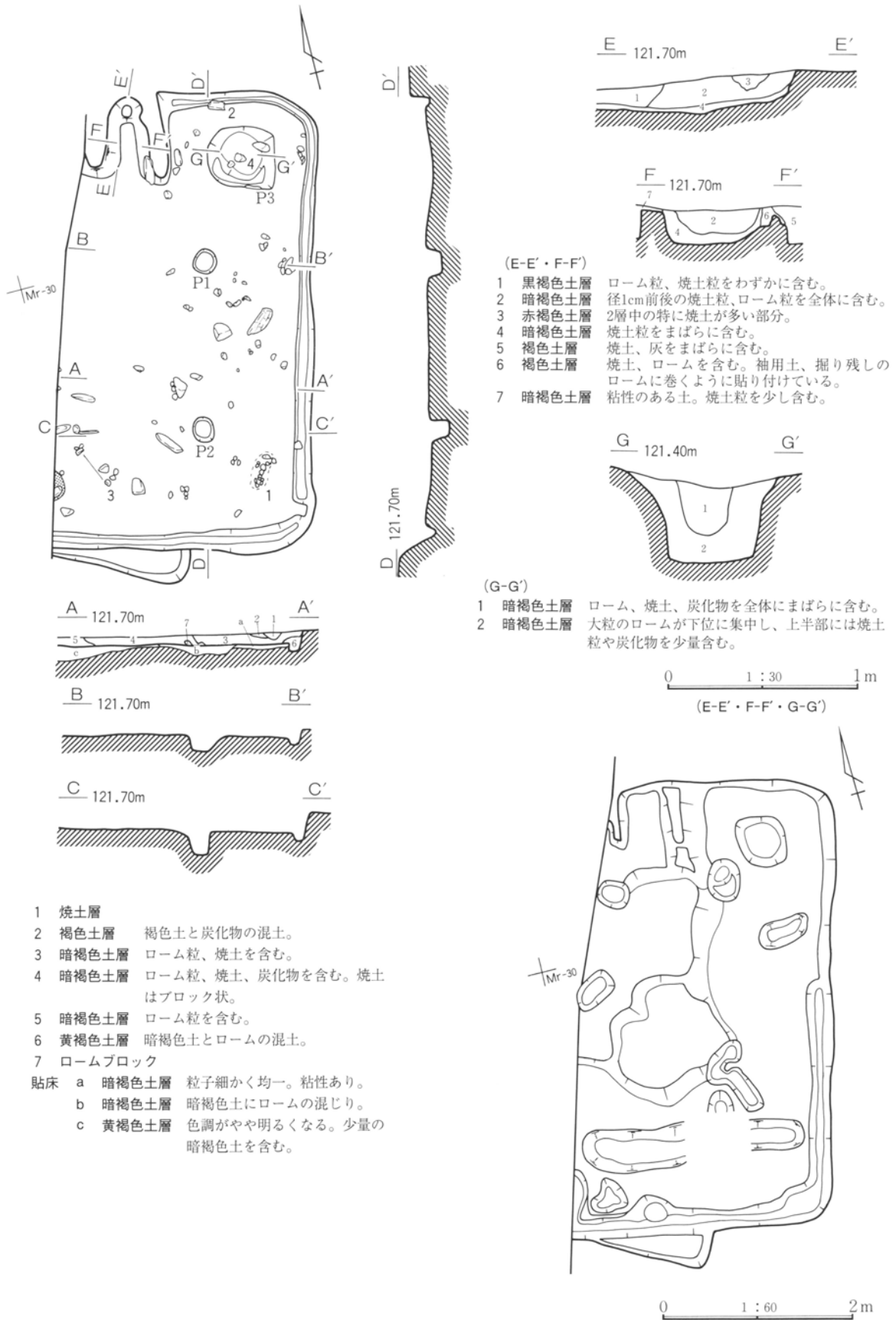
柱穴 柱穴が2個検出された。P1の深さは16cm、P2は深さ24cmである。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。P3は長径76cm、短径62cm、深さ46cmである。覆土は2層に分かれた。

遺物 床面南部から土師器の坏や甕が少量出土し



第34図 A区7号住居跡出土遺物



第35図 A区7号住居跡

A区7号住居跡

図番 PL.	土器種別 器 種	法 量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備 考
34-1 72	土師器 坏	①12.8 ②5.4	①細粒の砂、赤色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り不明瞭、口縁部横ナデ。内面ナデ。	南東部	1/2残存
34-2 72	土師器 甕	①(19.3) ②(10.2)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③鈍い黄橙色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北壁寄り	口縁部1/2残存
34-3 72	土師器 甕	①(15.5) ②(6.0)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	南部	口縁部1/3残存
34-4 72	形象埴輪 太刀	長さ：(7.5) 幅：7.7	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙色		覆土	部分

図番 PL.	器 種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
34-5-72	多孔石	完形	絹雲母石墨片岩	20.4	17.0	9.7	4350	両面に計12個の凹み穴が認められる。焼けている。	覆土 縄文

ている。

時 期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀前半の段階に相当する。

A区8号住居跡 (第36・37図、PL.25・72・73)

位 置 Mp-30・31、Mq-30・31グリッドにかけて検出された。A区10号住居跡によって北西部を壊され、A区7号住居跡の北東約50cmの所に位置している。

形 状 完掘できなかったために、現状では長辺4.7m、短辺4.6mを測る。

方 位 N-55°-E。

覆 土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5(1・2・a~c)層に分かれた。a~c層は掘り方覆土である。

壁 高 住居跡確認面より約10cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 貼床でほぼ平坦である。現状での面積は約12.7m²。床面に焼土の堆積が一部認められた。

掘り方 住居南東部で凹凸がやや顕著である。また、

床面中央部に床下土坑が存在していた。規模は長径140cm、短径85cm、深さ約40cmを測る。

周 溝 検出できなかった。

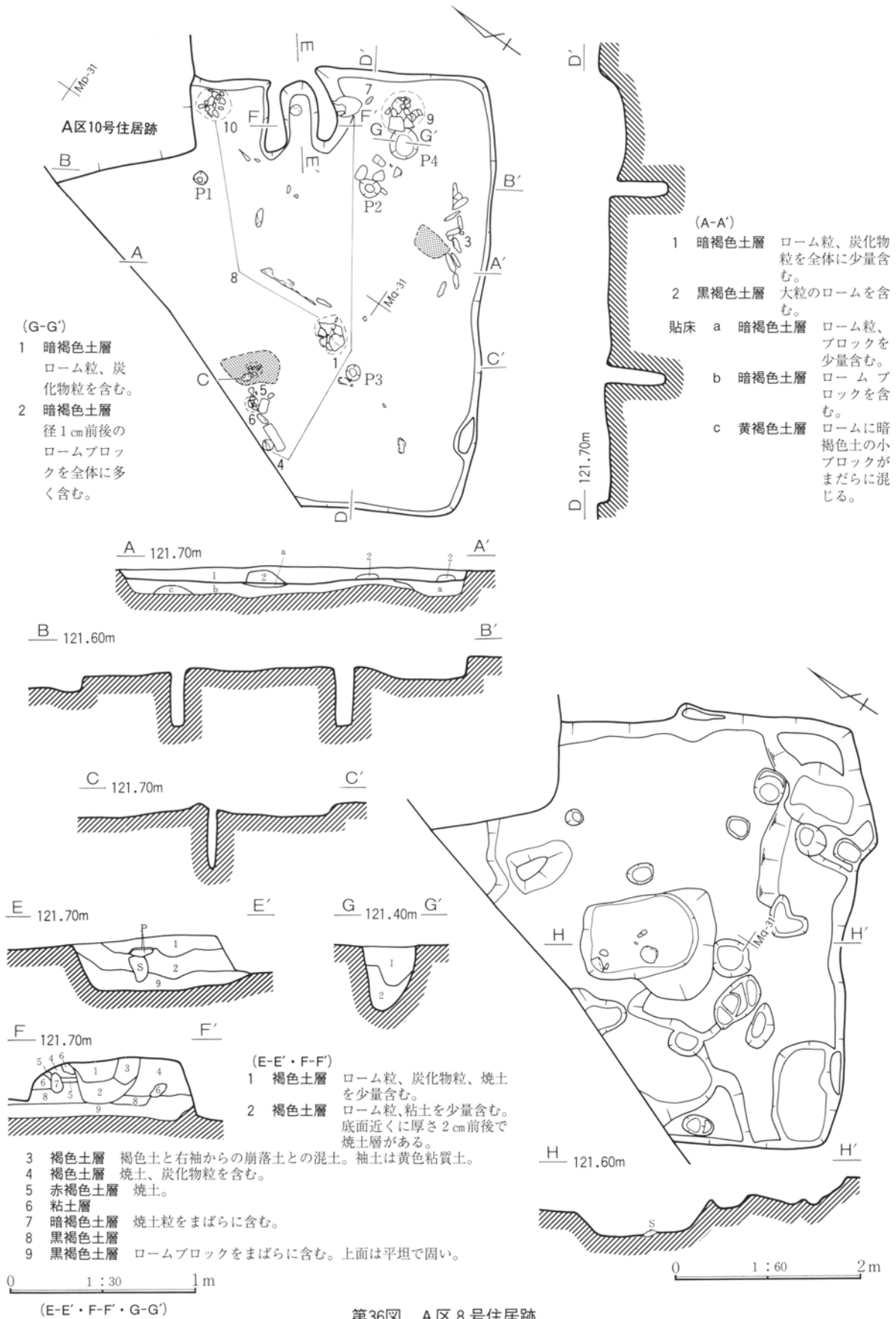
竈 北東壁中央部に位置しているものと考えられる。燃烧部を住居内に持ち袖を有する。袖部は約90cm残存している。袖の構造は、6層の灰白色粘土と7層の暗褐色土の混土を用いて馬蹄形にめぐらす。中に土器片や大粒の焼土を含むことから作り替えも考えられる。また、燃烧部には支石が残存していた。規模は煙道方向100cm、両袖方向100cmである。

柱 穴 3個の柱穴が検出された。P1は深さ58cm、P2深さ60cm、P3深さ63cmである。

貯蔵穴 床面東隅から検出された。P4は長径38cm、短径36cm、深さ46cmである。覆土は2層に分かれた。

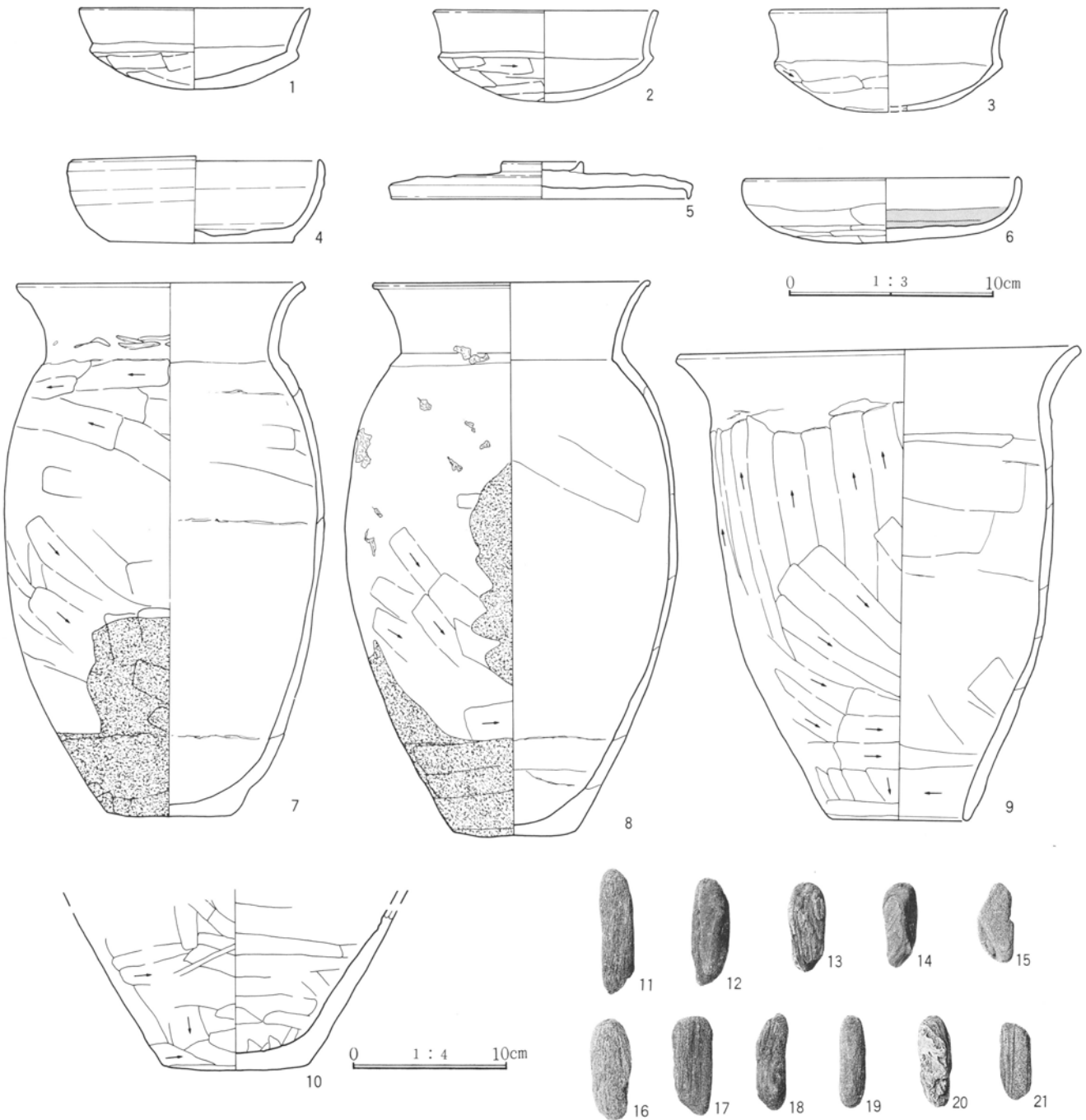
遺 物 竈袖脇から土師器甕が出土し、貯蔵穴周辺からは甑が出土している。また、南東壁中央部からこも編石が検出された。

時 期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀前半の段階に相当する。



第36図 A区8号住居跡

〔2〕 A区検出の遺構と遺物



こも編石

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
37-11	絹雲母石墨片岩	23.0	6.5	3.5	870
37-12	緑簾緑泥片岩	20.0	7.2	4.0	920
37-13	絹雲母石墨片岩	16.3	7.1	3.2	550
37-14	緑簾緑泥片岩	16.0	6.8	4.2	580
37-15	緑泥片岩	14.9	6.7	3.2	534
37-16	絹雲母石墨片岩	18.7	7.9	3.3	709

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
37-17	絹雲母石墨片岩	19.0	7.5	4.8	1000
37-18	絹雲母石墨片岩	18.0	6.5	3.5	600
37-19	絹雲母石墨片岩	17.0	5.1	3.1	472
37-20	石英片岩	17.0	5.0	4.0	580
37-21	絹雲母石墨片岩	14.3	6.0	2.0	300

第37図 A区8号住居跡出土遺物

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査

A区8号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)		①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径②器高③底径					
37-1 72	土師器 坏	①(11.2) ②3.9		①細粒の砂、赤色鉾物粒を含む。 ②酸化焰 ③明黄褐色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	P3周辺	1/2残存
37-2 72	土師器 坏	①(10.9) ②4.4		①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	覆土	1/3残存
37-3 72	土師器 坏	①(11.6) ②(4.9)		①細粒の砂、赤色鉾物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	南壁寄り	1/3残存
37-4 72	須恵器 坏	①12.3 ②4.2 ③8.9		①粗 片岩粒を含む。 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 底面回転ヘラ削り。	西部	完形
37-5 72	須恵器 蓋	摘み3.8 ②1.9 ③(14.4)		①細、白色鉾物粒を含む。 ②還元焰 ③灰黄色	右回転ロクロ整形。	西部	3/4残存
37-6 72	土師器 坏	①13.3 ②3.1		①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面吸炭 による黒色処理。	西部	口縁部一部欠損
37-7 73	土師器 甕	①18.3 ②34.2 ③8.4		①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面・胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	カマド周辺	口縁部一部欠損 炭化物付着
37-8 73	土師器 甕	①18.0 ②35.6 ③8.2		①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横 ナデ。内面丁寧なナデ。	中央部	胴部一部欠損 炭化物付着
37-9 73	土師器 甕	①(26.0) ②29.8 ③8.8		①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面 ナデ。	P4周辺	口縁部一部欠損
37-10 73	土師器 甕	②(10.9)③9.0		①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。内面ナデ。	北西壁寄り	底部

A区9号住居跡 (第38~41図、PL.26・73)

位置 Mo-31・32グリッドにかけて検出された。A区10号住居跡を壊し、A区11号住居跡と接している。

形状 長辺3.4m、短辺2.5mの長方形を呈している。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約20~38cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 貼床でやや凹凸がある。現状での面積は約

5.7㎡。

掘り方 全体的に凹凸が顕著である。

周溝 現状では全周している。幅約2~6cm、深さ5~16cmを測る。北壁下の周溝が深い。

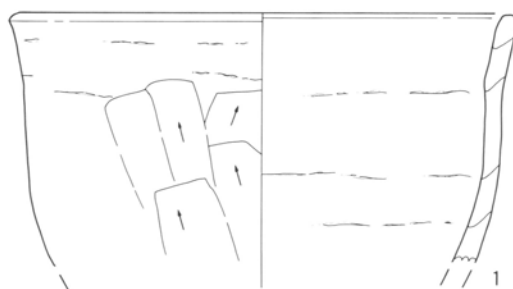
竈 検出できなかった。

柱穴 2個のピットが検出された。P1は深さ8cm、P2深さ4cmである。柱穴になるかどうかは判断つかない。

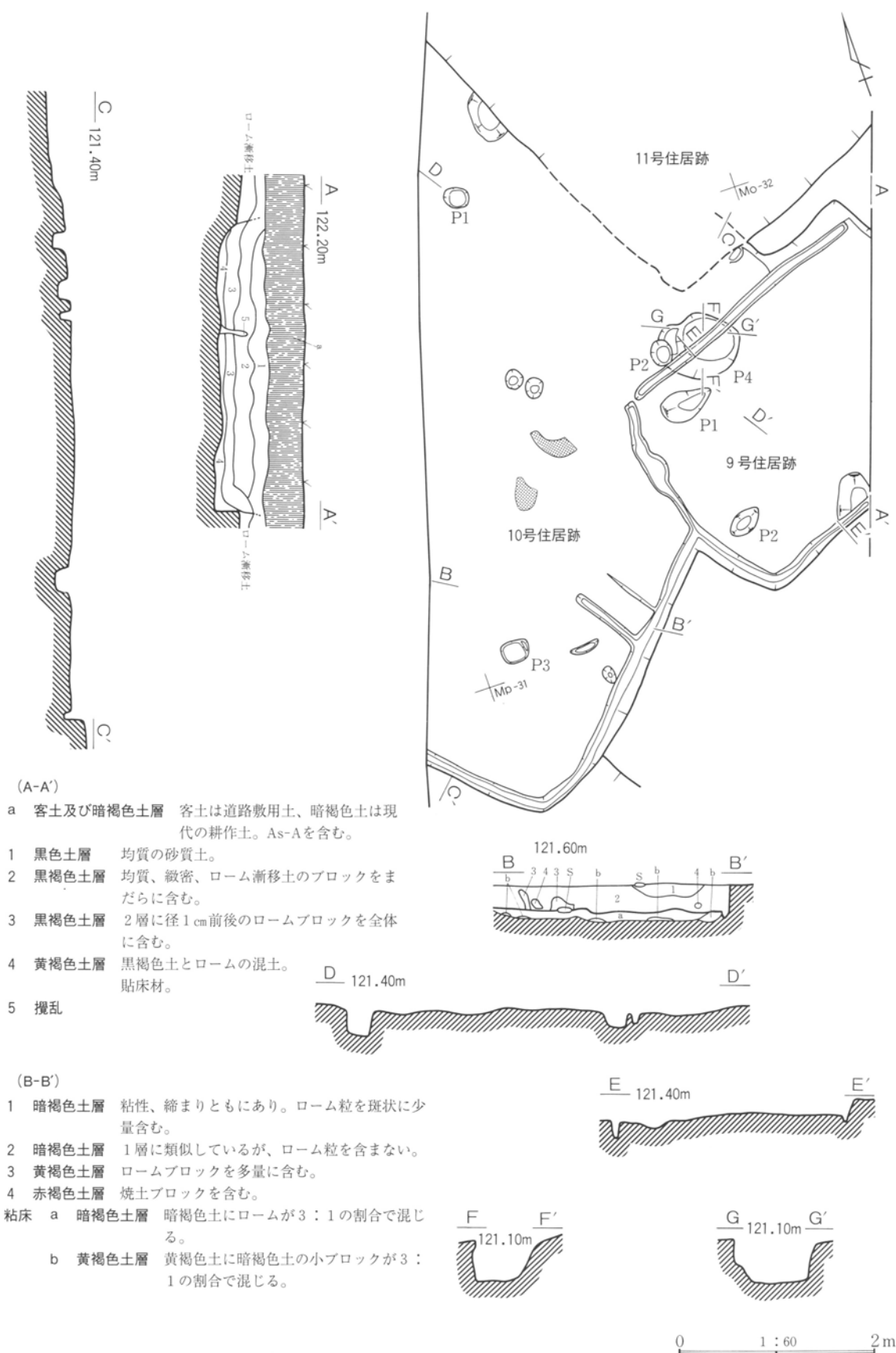
貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土からは少量の遺物が出土しているだけである。

時期 6世紀代。



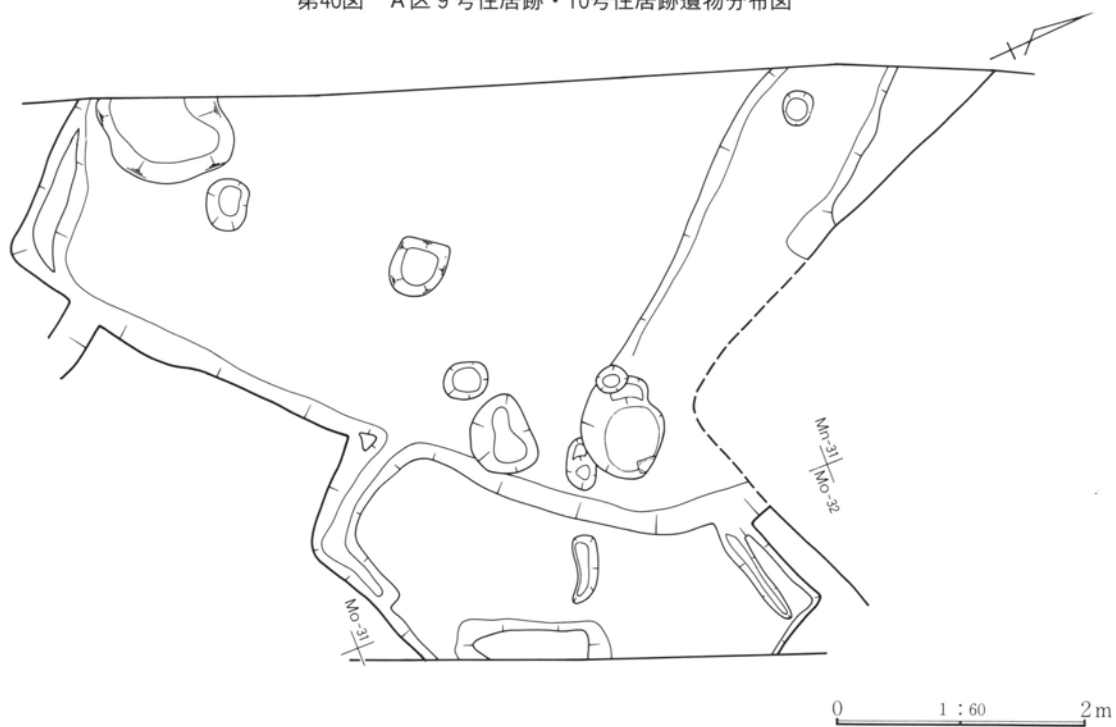
第38図 A区9号住居跡出土遺物



第39図 A区9号住居跡・10号住居跡

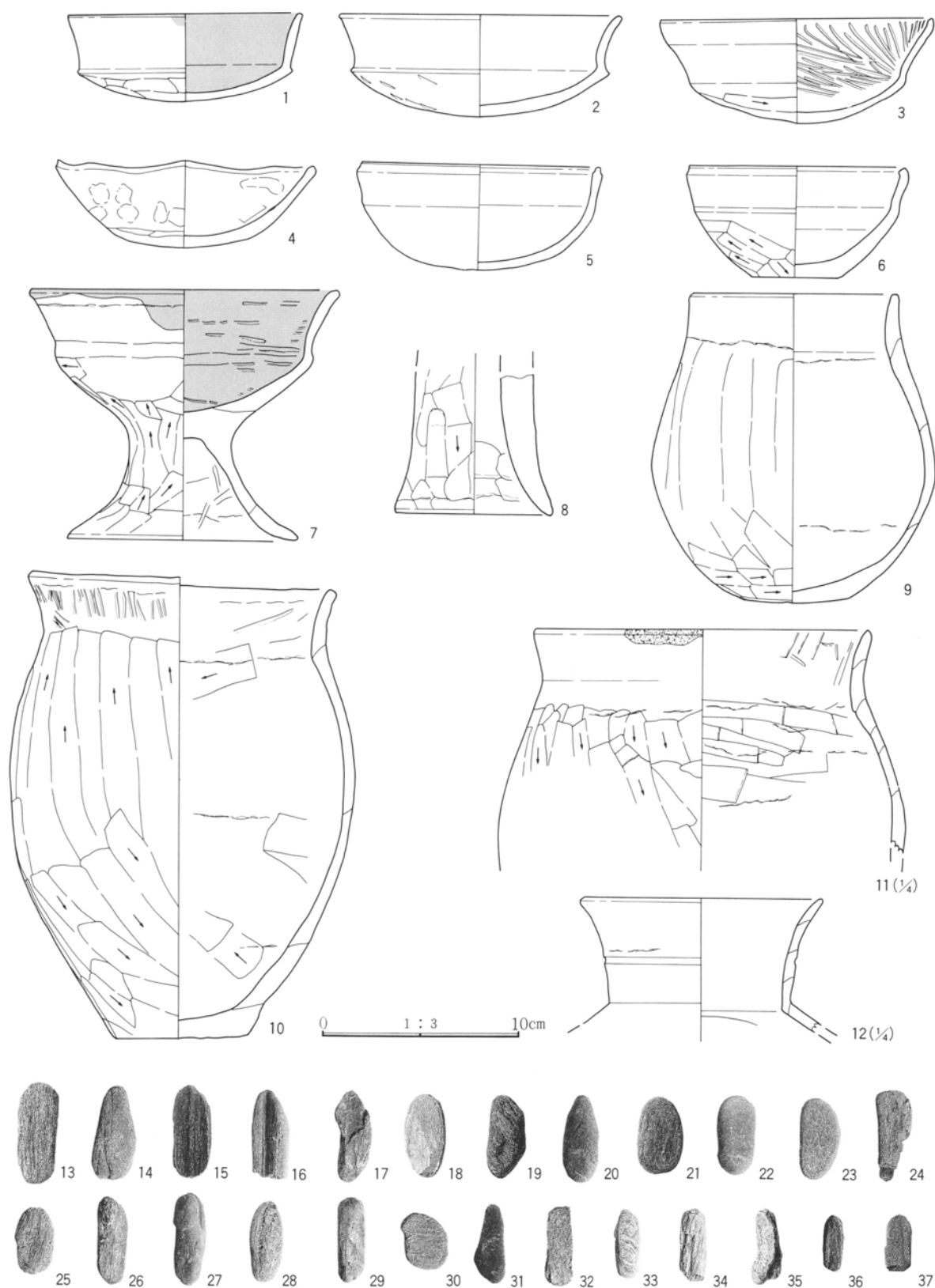


第40図 A区9号住居跡・10号住居跡遺物分布図



第41図 A区9号住居跡・10号住居跡掘り方

[2] A区検出の遺構と遺物



第42図 A区10号住居跡出土遺物

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査

A区10号住居跡(第39~42図、PL.27・73)

位置 Mn-31、Mo-30・31、Mp-30・31グリッドにかけて検出された。A区9号住居跡・11号住居跡と重複している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺6.2m、短辺4.3mである。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6(1~4・a・b)層に分かれた。a・b層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約21~26cmで床面に達する。床面から垂直に立ち上がる。

床面 やや凹凸が認められる。現状での面積は約15.6㎡。

掘り方 床面全体に凹凸が認められる。

周溝 部分的に検出された。幅5~10cm、深さ8cmである。南東壁に認められる周堀の変化は出入り口部に該当するものである。

竈 床面に地床炉が認められた。

柱穴 3個の柱穴が検出された。P1の深さは28cm、P2深さ12cm、P3深さ28cmである。

貯蔵穴 床面北東部から検出された。長径80cm、短径60cm、深さ40cmである。9号住居跡の床面下から検出された。

遺物 土師器の坏や甕が出土し、こも編石が南東壁下、出入り口部周辺から出土している。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀前半の段階に相当する。

A区9号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量(cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
38-1 73	土師器 甕	①(20.0) ②(9.7)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。輪積み痕残る。内面ナデ。	覆土	破片

A区10号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量(cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
42-1 73	土師器 坏	①11.6 ②4.4	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。内面ナデ、吸炭による黒色処理。	東部	完形
42-2 73	土師器 坏	①(14.0) ②5.0	①細粒の砂、赤色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、磨滅。口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	中央部	1/2残存
42-3 73	土師器 坏	①13.4 ②5.2	①細粒の砂、赤色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ。内面へら磨き。	南東壁寄り	3/4残存
42-4 73	土師器 坏	①(12.8) ②4.3	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、体部ナデ。内面ナデ、へらの工具痕。	南東壁寄り	2/3残存 口縁部はやや波状
42-5 73	土師器 坏	①(12.0) ②5.2	①細粒の砂、白色鉱物を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面へら削り、体部ナデ。口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	南東壁寄り	1/2残存
42-6 73	土師器 坏	①10.4 ②5.6 ③4.4	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面・体部外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	東部	2/3残存
42-7 73	土師器 高坏	①(15.4) ②12.5 ③11.5	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	脚部外面へら削り、内面へら削り、ナデ。坏部底面へら削り、口縁部横ナデ。	中央部	坏部1/3欠損 内面吸炭による黒色処理
42-8 73	土師器 高坏	②(7.0) ③(8.0)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明褐色	脚部外面へら削り。内面ナデ。	中央部	脚部1/2 羽口に転用
42-9 73	土師器 小型甕	①(10.4) ②(15.4) ③(6.0)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面・胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。外面剥落、内面ナデ。	北部	1/2残存
42-10 73	土師器 小型甕	①(15.0) ②23.0 ③6.5	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面ナデ、胴部外面へら削り。内面ナデ。	南東壁寄り	口縁から同上半一部欠損
42-11 73	土師器 甕	①(22.4) ②(15.0)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面へら削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	東部	口縁部1/3残存
42-12 73	土師器 壺	①(16.0) ②(8.7)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	口縁部横ナデ、一条の沈線。内面ナデ。	中央部	口縁部1/3残存

〔2〕 A区検出の遺構と遺物

こも編石

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
42-13	絹雲母石墨片岩	19.5	7.7	4.0	950
42-14	点紋緑泥片岩	18.0	8.2	4.6	1070
42-15	絹雲母石墨片岩	18.0	7.5	2.5	470
42-16	点紋絹雲母石墨片岩	16.8	7.6	4.0	790
42-17	石黒緑泥片岩	17.3	7.0	4.0	730
42-18	絹雲母石墨片岩	16.0	8.0	3.2	640
42-19	絹雲母石墨片岩	16.5	7.0	5.8	870
42-20	輝岩	17.2	7.0	5.3	925
42-21	絹雲母石墨片岩	14.8	8.6	3.5	660
42-22	輝緑岩	15.5	7.5	3.5	700
42-23	絹雲母石墨片岩	15.7	7.8	3.0	570
42-24	点紋絹雲母石墨片岩	17.5	6.5	2.5	370
42-25	絹雲母石墨片岩	13.0	7.5	3.2	490

A区11号住居跡 (第43~45図、PL.28・29・74)

位置 Mm-31・32、Mn-31・32、Mo-31グリッドにかけて検出された。A区10号住居跡によって壊されている。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺6m、短辺5.7mである。ほぼ正方形を呈するものと考えられる。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6(3~8)層に分かれた。8層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約40~50cmで床面に達する。床面から垂直に立ち上がる。

床面 やや凹凸が認められる。現状での面積は約32.7m²。

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
42-26	緑簾緑泥片岩	17.0	6.4	4.5	600
42-27	輝緑岩	17.4	6.8	5.5	1084
42-28	絹雲母緑泥片岩	15.5	6.0	4.3	560
42-29	絹雲母緑泥片岩	16.0	5.5	4.7	730
42-30	絹雲母石墨片岩	11.4	8.6	2.5	400
42-31	輝緑岩	17.2	7.0	5.3	920
42-32	点紋絹雲母石墨片岩	15.0	5.5	1.7	250
42-33	絹雲母石墨片岩	13.0	4.7	4.5	420
42-34	絹雲母石墨片岩	14.1	5.3	3.0	350
42-35	チャート	14.0	5.5	4.0	450
42-36	点紋絹雲母石墨片岩	10.2	4.4	3.2	200
42-37	点紋絹雲母石墨片岩	11.9	5.2	1.4	150

掘り方 床面中央部を除いた周辺で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。おそらくは北東壁の未発掘区に存在しているのであろう。

柱穴 3個の柱穴が検出された。P1の深さは31cm、P2深さ44cm、P3深さ47cmである。

貯蔵穴 床面南西隅から検出された。長径56cm、短径48cm、深さ40cmである。

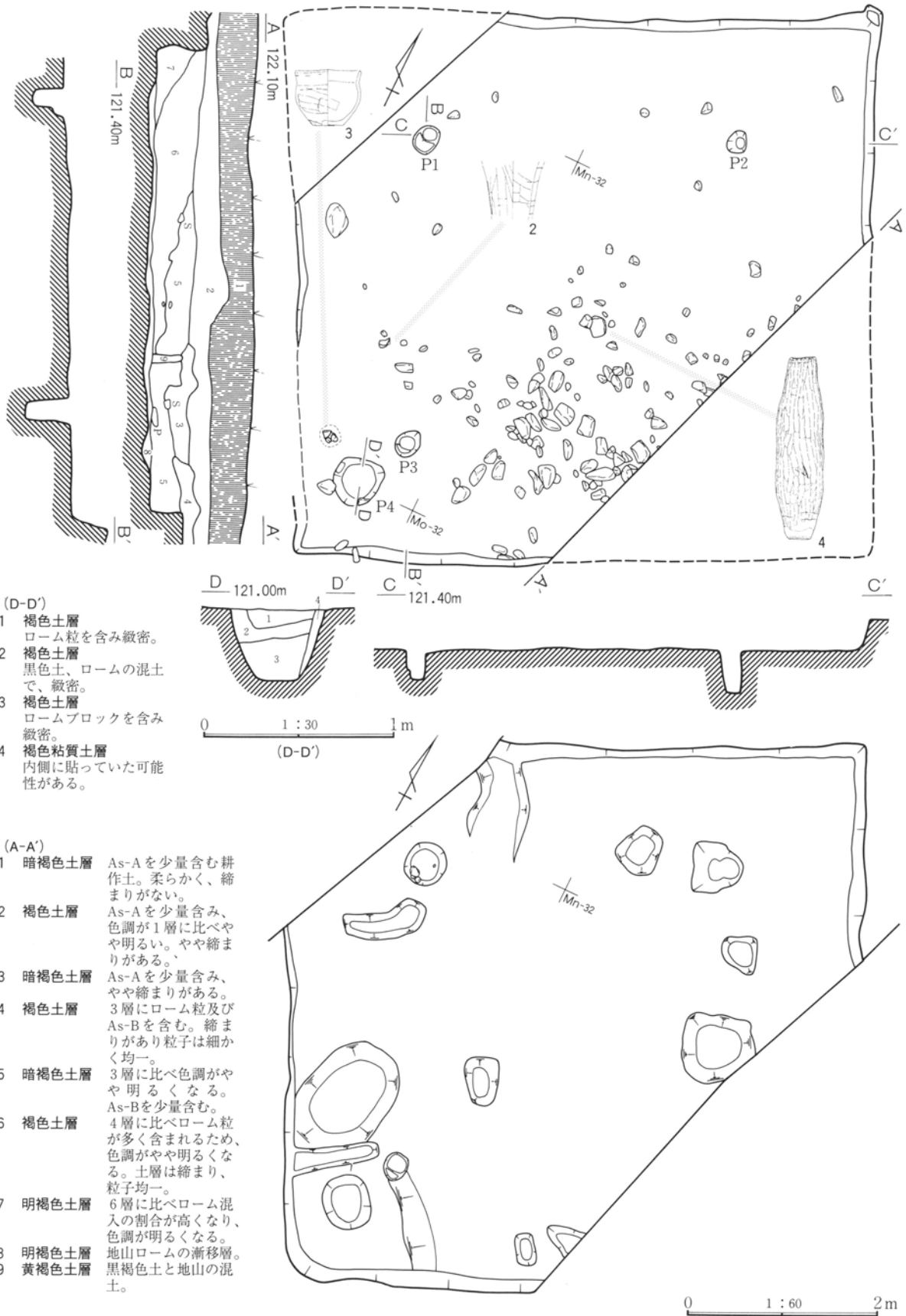
遺物 住居跡南東部から礫が多量に出土している。また、土師器の坏や甕が出土し、こも編石9点が出土している。筒形土製品は床面中央部と東部から検出された。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀の段階に相当する。

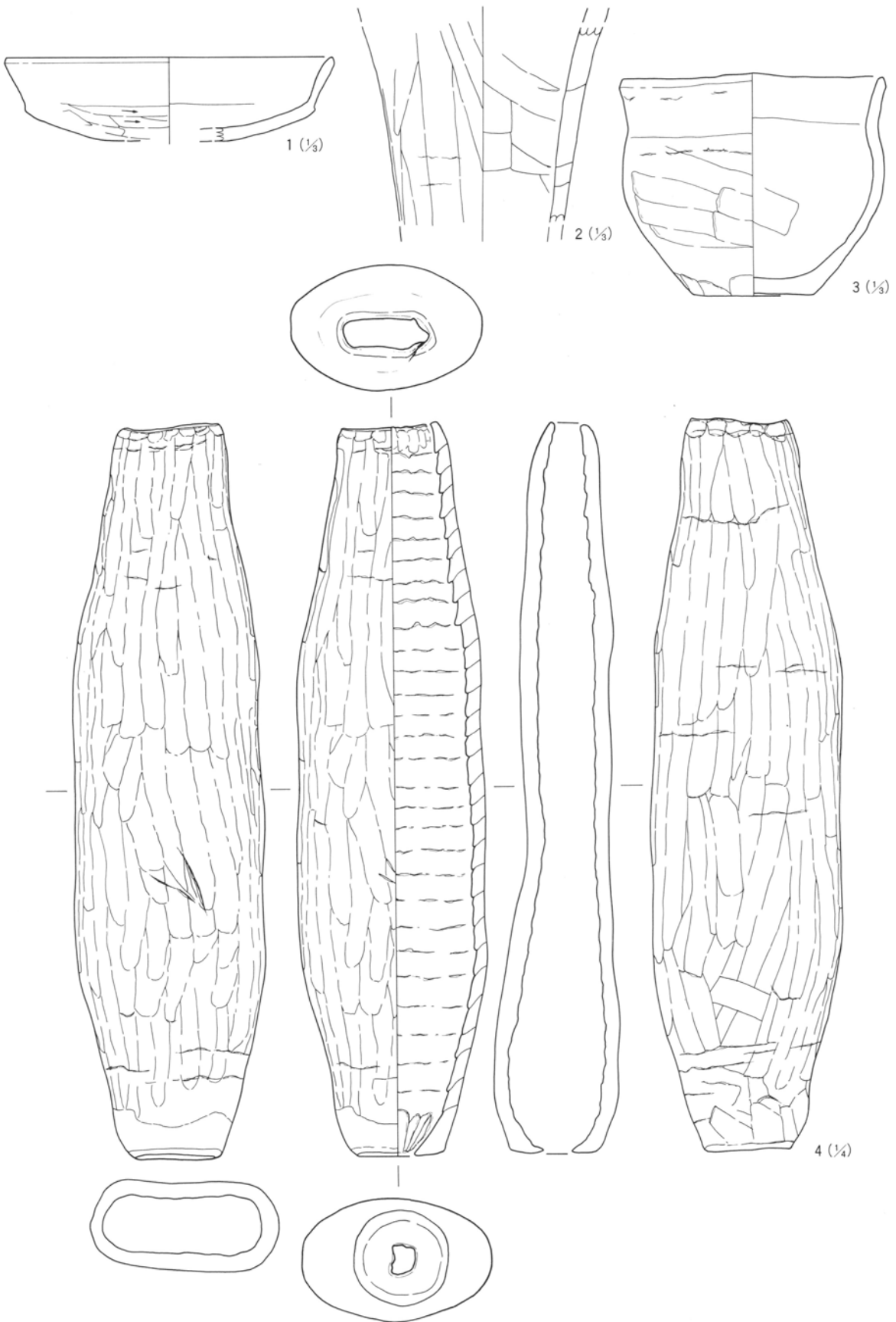
A区11号住居跡

図番 PL.	土器種別 器 種	法 量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備 考
44-2 74	土師器	長さ：(10.1) 幅：(8.5~12.5)	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	胴部内外面ナデ。 輪積み痕残る。	南西部	部分
44-3 74	土師器 鉢	①(13.4) ②11.5③(6.2)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	南西壁寄り	2/3残存。外面に輪積み痕残る
44-4 74	筒形 土製品	長さ：49.8 幅：13.0	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	外面ナデ。 内面に輪積み痕顕著に残る。	中央部 東部	完形 煙道に使用か
45-5 74	土師器 甕	①(30.9) ②(24.6)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③明褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	覆土	口縁~胴下半 1/4残存
45-6 74	弥生土器	胴部片	①細粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい黄褐色	沈線による文様。	覆土	中期

図番 PL.	器 種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
45-7-74	砥石	完形	砂岩	16.1	7.2	3.5	630	3側面を使用。	覆土
45-8-74	砥石	完形	砂岩	20.6	8.3	4.6	1200	4側面を使用。	覆土
45-9-74	紡錘車	完形	蛇紋岩	径 4.4	孔径 0.8	2.4	59.4	表面全体に目の細かい削り痕が残る。	覆土

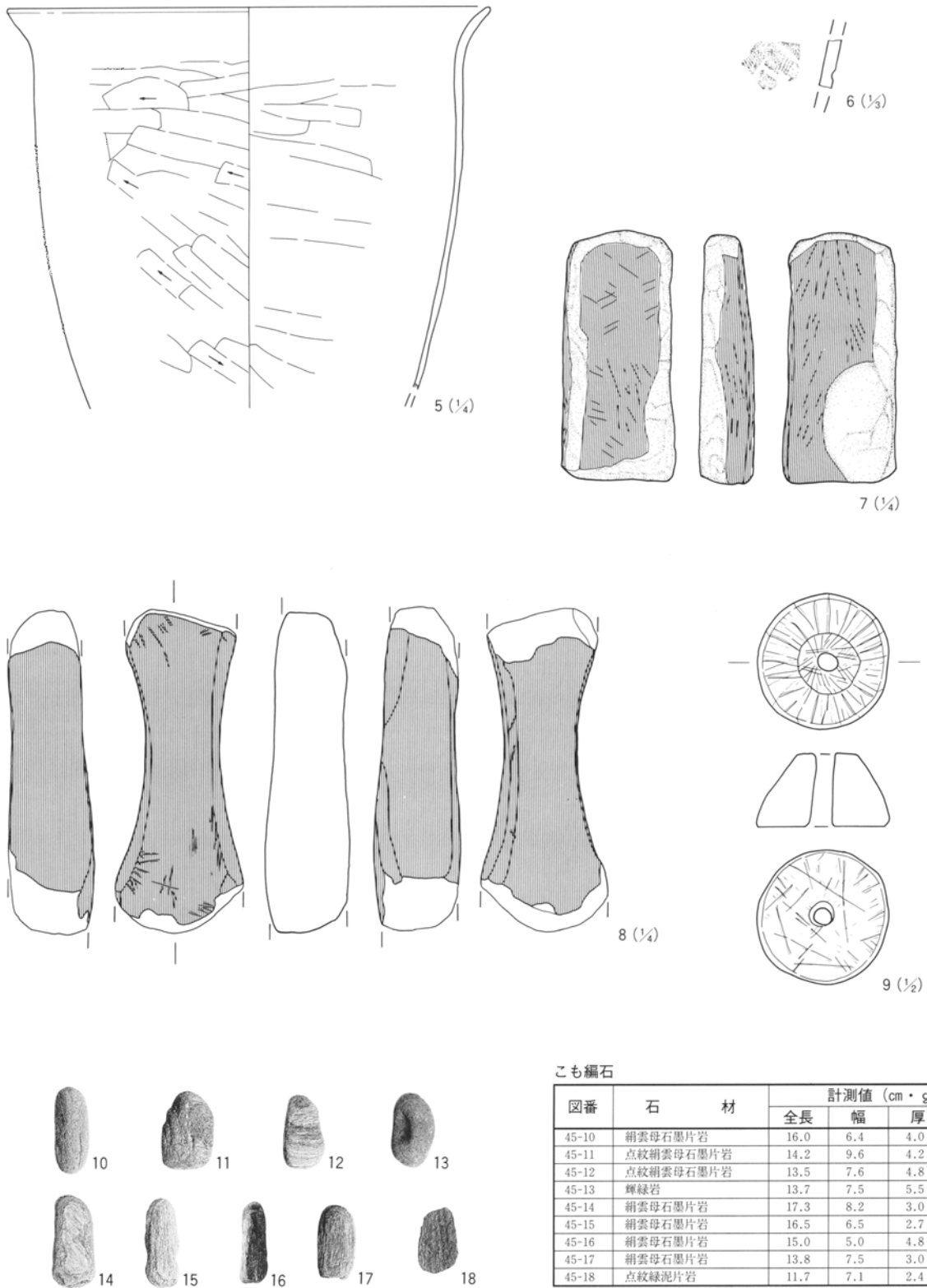


第43図 A区11号住居跡



第44図 A区11号住居跡出土遺物(1)

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



こも編石

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
45-10	絹雲母石墨片岩	16.0	6.4	4.0	600
45-11	点紋絹雲母石墨片岩	14.2	9.6	4.2	910
45-12	点紋絹雲母石墨片岩	13.5	7.6	4.8	670
45-13	輝緑岩	13.7	7.5	5.5	880
45-14	絹雲母石墨片岩	17.3	8.2	3.0	700
45-15	絹雲母石墨片岩	16.5	6.5	2.7	470
45-16	絹雲母石墨片岩	15.0	5.0	4.8	470
45-17	絹雲母石墨片岩	13.8	7.5	3.0	490
45-18	点紋緑泥片岩	11.7	7.1	2.4	300

第45図 A区11号住居跡出土遺物(2)

A区12号住居跡 (第46・47図、PL.29・30・74)

位置 MI-31・32、Mm-31・32グリッドにかけて検出された。A区13号住居跡の南西に接している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺3.3m、短辺1.8mである。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4(3~6)層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約35~40cmで床面に達する。床面から垂直に立ち上がる。

床面 やや凹凸が認められる。現状での面積は約

3m²。

掘り方 壁際で凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

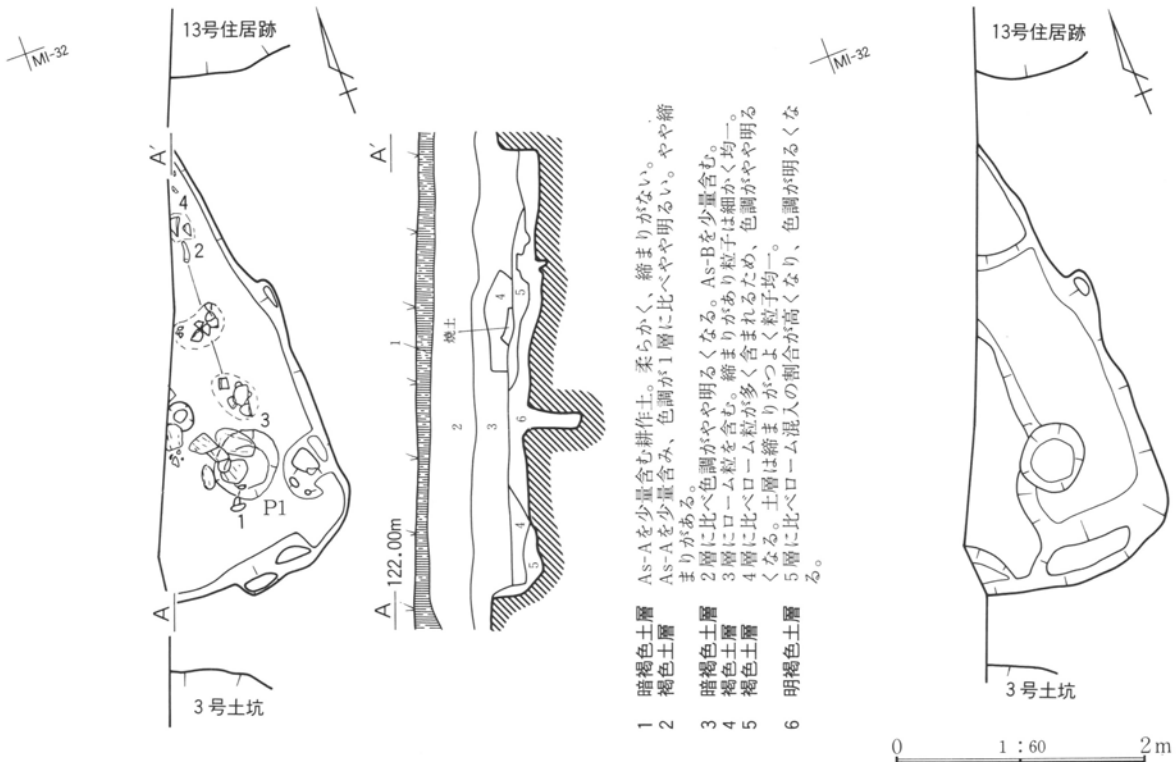
竈 検出できなかった。

柱穴 1個の柱穴が検出された。P1の深さは43cmである。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 土師器の高坏や甕が出土している。

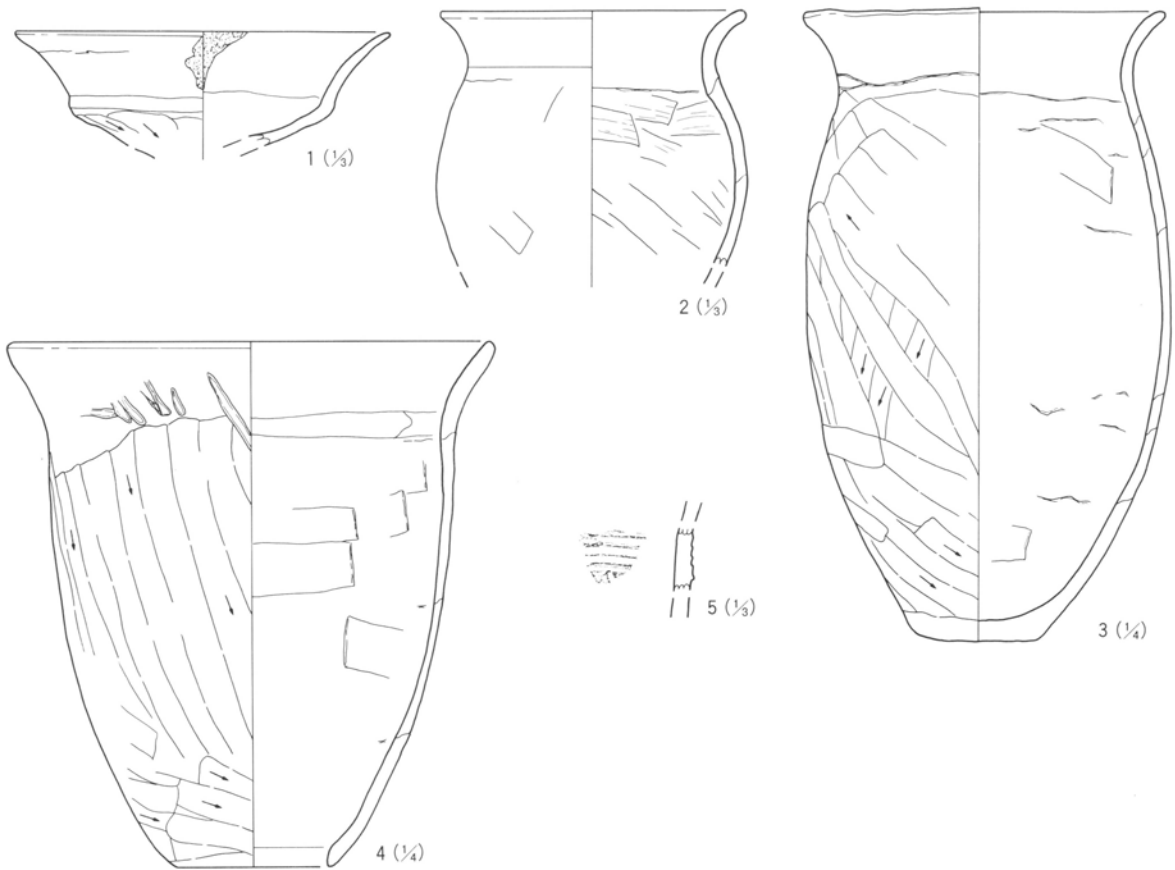
時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀前半の段階に相当する。



第46図 A区12号住居跡

A区12号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
47-1 74	土師器 高坏	①(14.7) ②(4.5)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	坏底面へラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	P1周辺	脚部欠損
47-2 74	土師器 小型甕	①(12.0) ②(10.0)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	胴部へラ削り、剥落して不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデ。	東壁寄り	口縁~胴部1/3
47-3 74	土師器 甕	①19.0 ②33.0 ③6.8	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面・胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	P1周辺	3/4残存 内面に輪積み痕
47-4 74	土師器 甕	①(25.2) ②27.4③(8.1)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	東壁寄り	1/2残存
47-5 74	弥生土器 胴部片		①中粒の砂を含む。 ②良 ③灰褐色	横走する沈線による文様。	覆土	中期



第47図 A区12号住居跡出土遺物

A区13号住居跡 (第48~54図、PL.31~33・75~78)

位置 Mj-32・33、Mk-32・33、Ml-32・33グリッドにかけて検出された。A区12号住居跡に接している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺5m、短辺4.8mである。方形を呈するものと考えられる。

方位 N-10°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6(1~3・a~c)層に分かれた。a~c層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約30~45cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約14.8m²。

掘り方 床面南部で凹凸が顕著である。

周溝 東壁下、南壁下で検出された。幅5~8cm、深さ6cmである。

竈 北壁から検出され、焼部は床面に構築されている。1/2程調査することができた。袖部約70cmが残存し、両端に袖石が残されている。焼部には支石が残されていた。

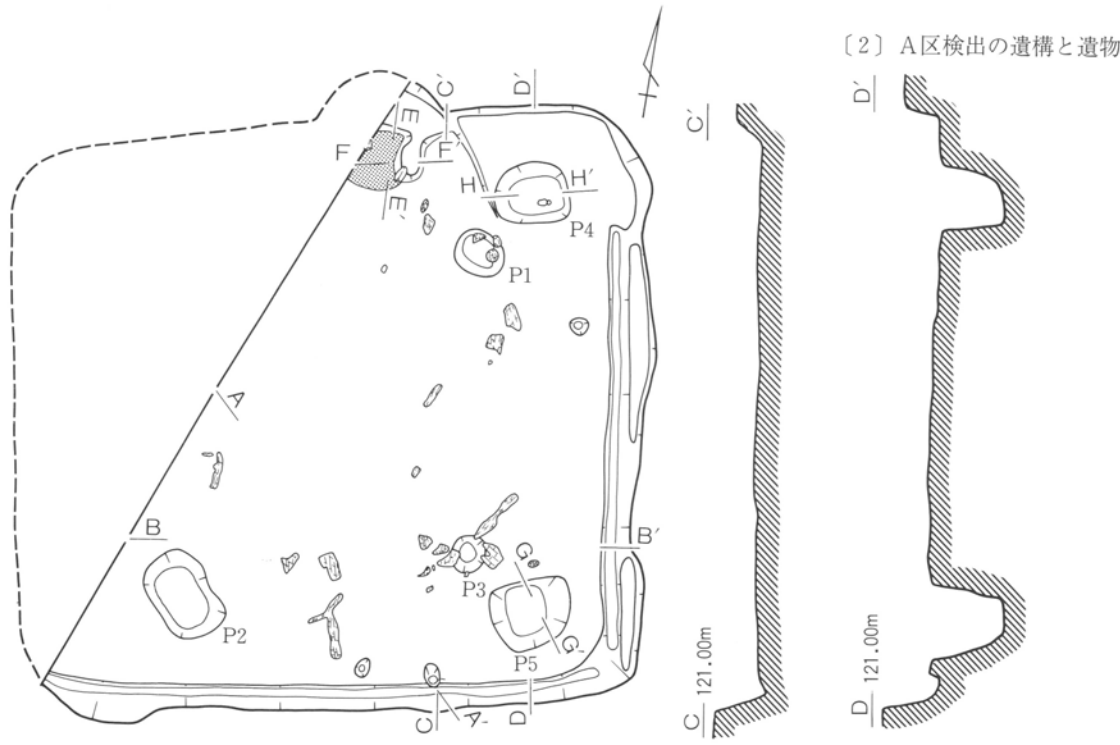
柱穴 3個の柱穴が検出された。P1の深さは43cm、P2深さ33cm、P3深さ22cmである。P1・P2周辺からは炭化材が検出された。

貯蔵穴 床面北東隅と南東隅の2箇所検出された。P4が新しい。P4は長径60cm、短径48cm、深さ46cmである。P5は長径64cm、短径54cm、深さ100cmである。

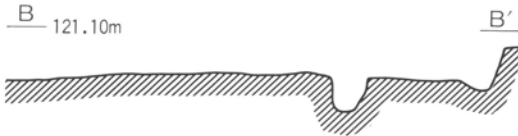
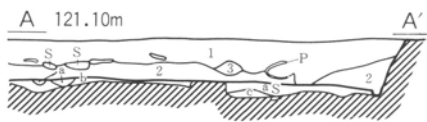
遺物 土師器の坏や甕が多量に出土している。とりわけ坏は竈南部と貯蔵穴周辺や東壁下から、甕は床面中央部西よりから出土している。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀前半の段階に相当する。

(2) A区検出の遺構と遺物



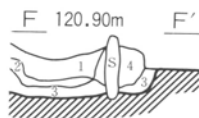
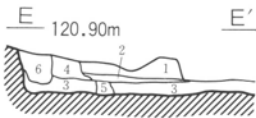
(A-A')



- 1 暗褐色土層 As-Bを少量含む。粘性、締まりある。
- 2 暗褐色土層 1層に類似。ローム粒を所々に含む。
- 3 黄褐色土層 2層にロームブロックを含む。色調がやや明るくなる。
- 貼床 a 暗褐色土層 ローム粒、粘土粒を少量含む。
- b 黄褐色土層 ローム粒を含む。
- c 黄褐色土層 ローム粒を含む。色調はbよりも明るい。

カマド (E-E'・F-F')

- 1 褐色土層 径5~10mm大の焼土を多く含む。
- 2 焼土層
- 3 黄褐色土層 黒色土とロームの混土。(掘り方)
- 4 暗褐色土層 焼土、ローム粒をまばらに含む。
- 5 褐色土層 粘性があり、焼土をわずかに含む。
- 6 青灰色粘土層 袖土。

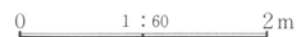
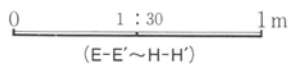


貯蔵穴 (G-G')

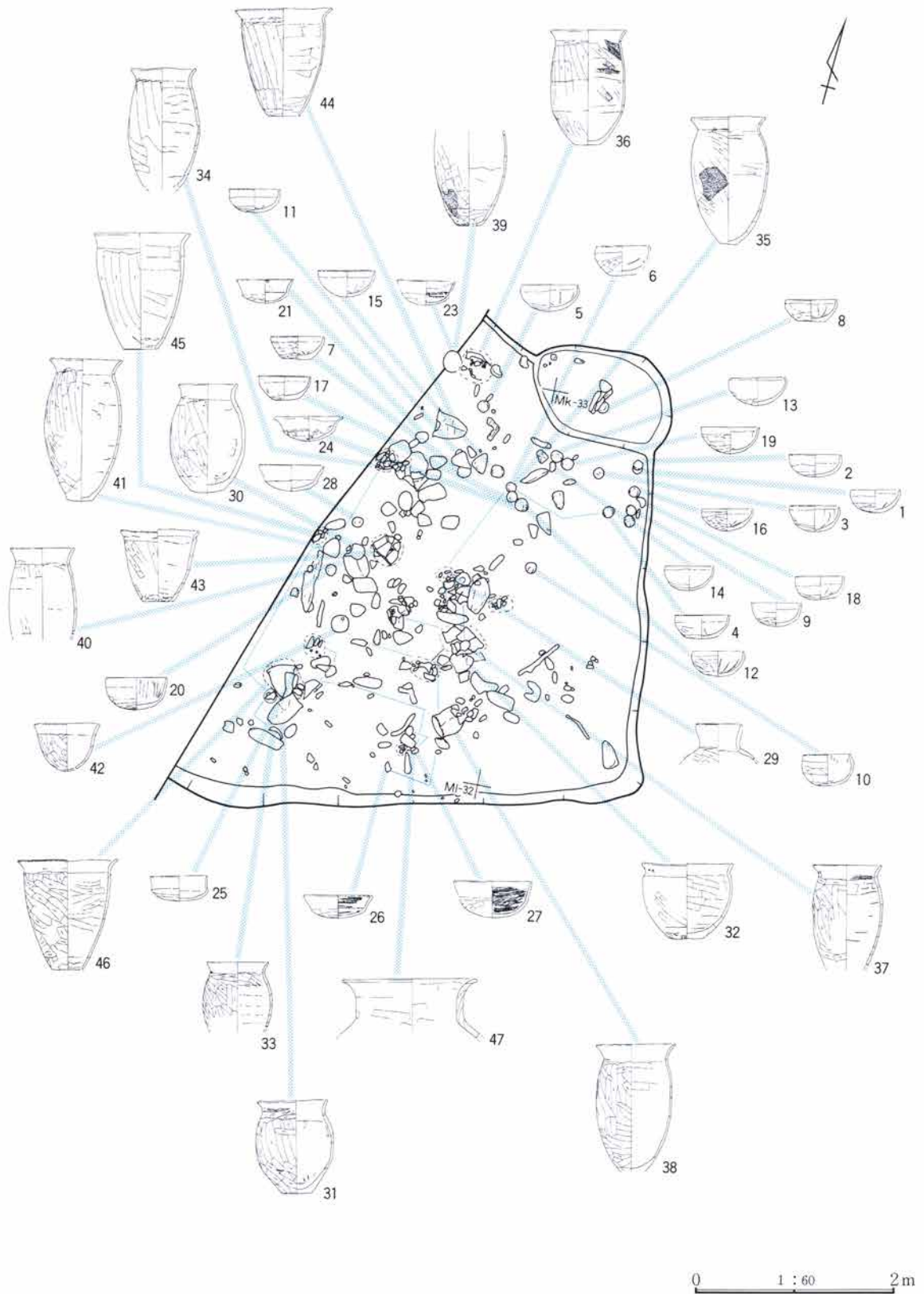
- 1 暗褐色土層 ローム粒、焼土を少量含む。
- 2 暗褐色土層 ローム粒を少量含む。
- 3 暗褐色土層 ローム粒、小石を含み、下位にはロームブロック混入。

貯蔵穴 (H-H')

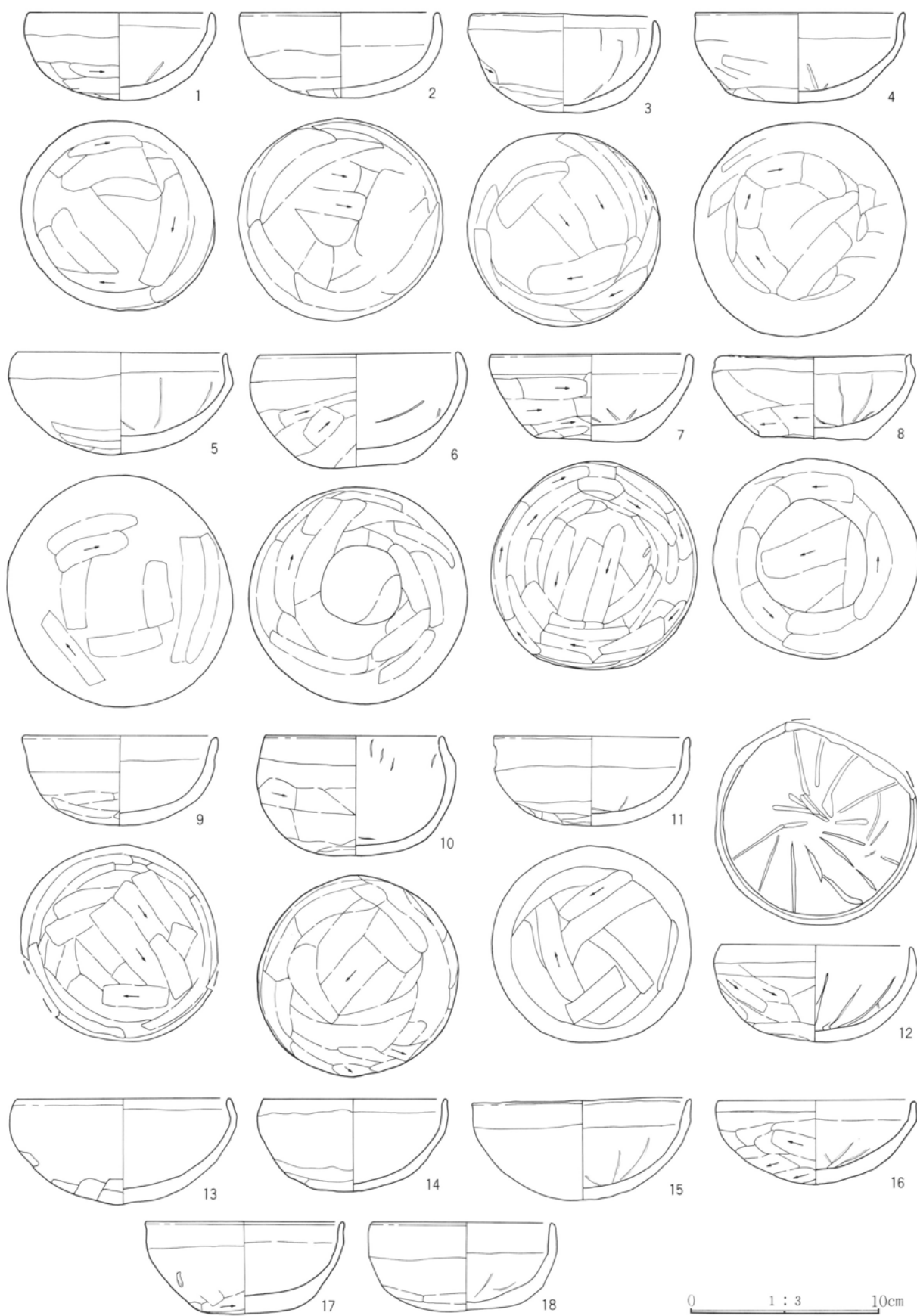
- 1 暗褐色土層 ローム、炭化物粒を少量含む。
- 2 暗褐色土層 径1cm前後のロームブロックをまばらに含む。
- 3 黄褐色土層 暗褐色土とロームブロックとの混土。



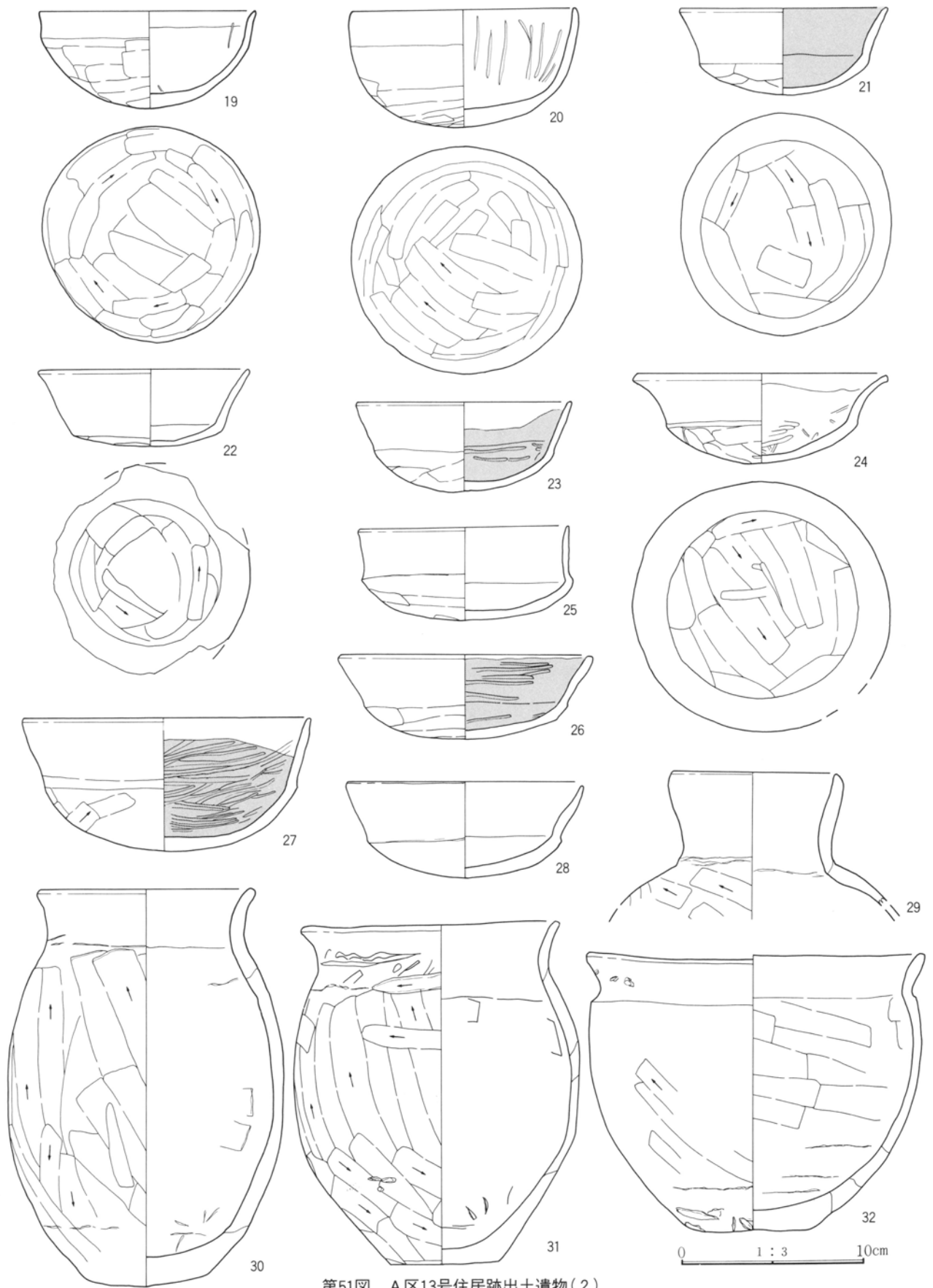
第48図 A区13号住居跡



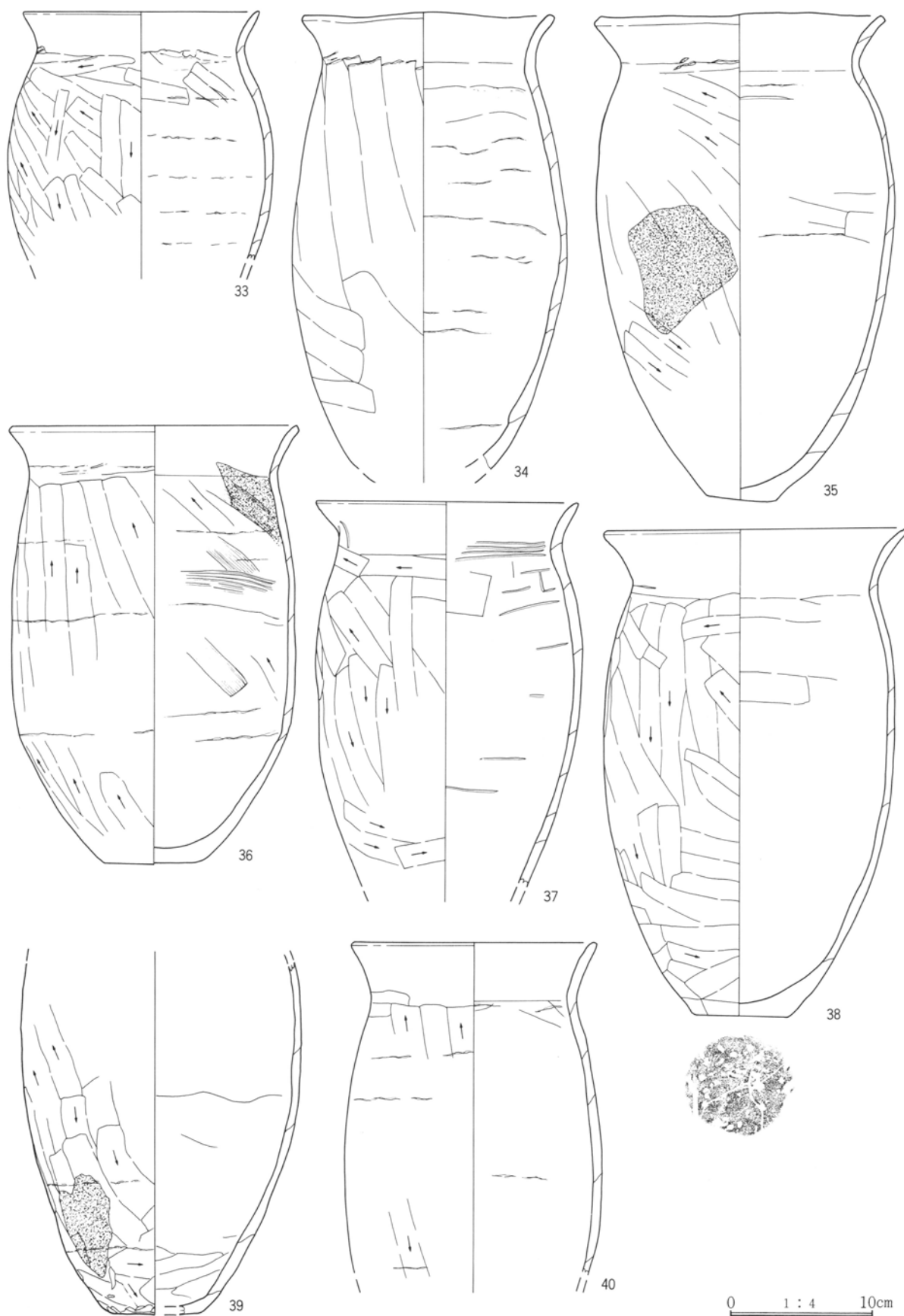
第49図 A区13号住居跡遺物分布図



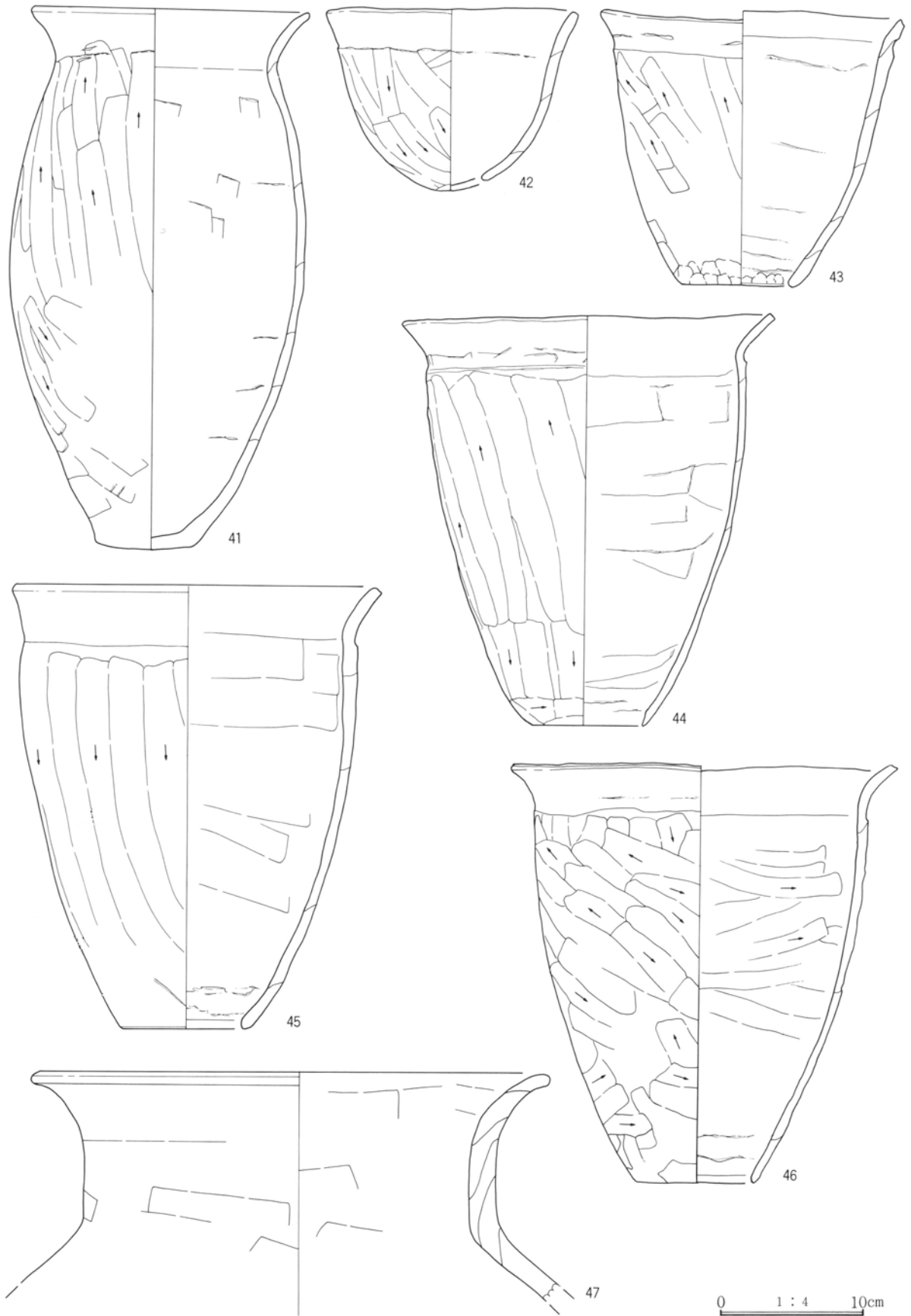
第50図 A区13号住居跡出土遺物(1)



第51図 A区13号住居跡出土遺物(2)

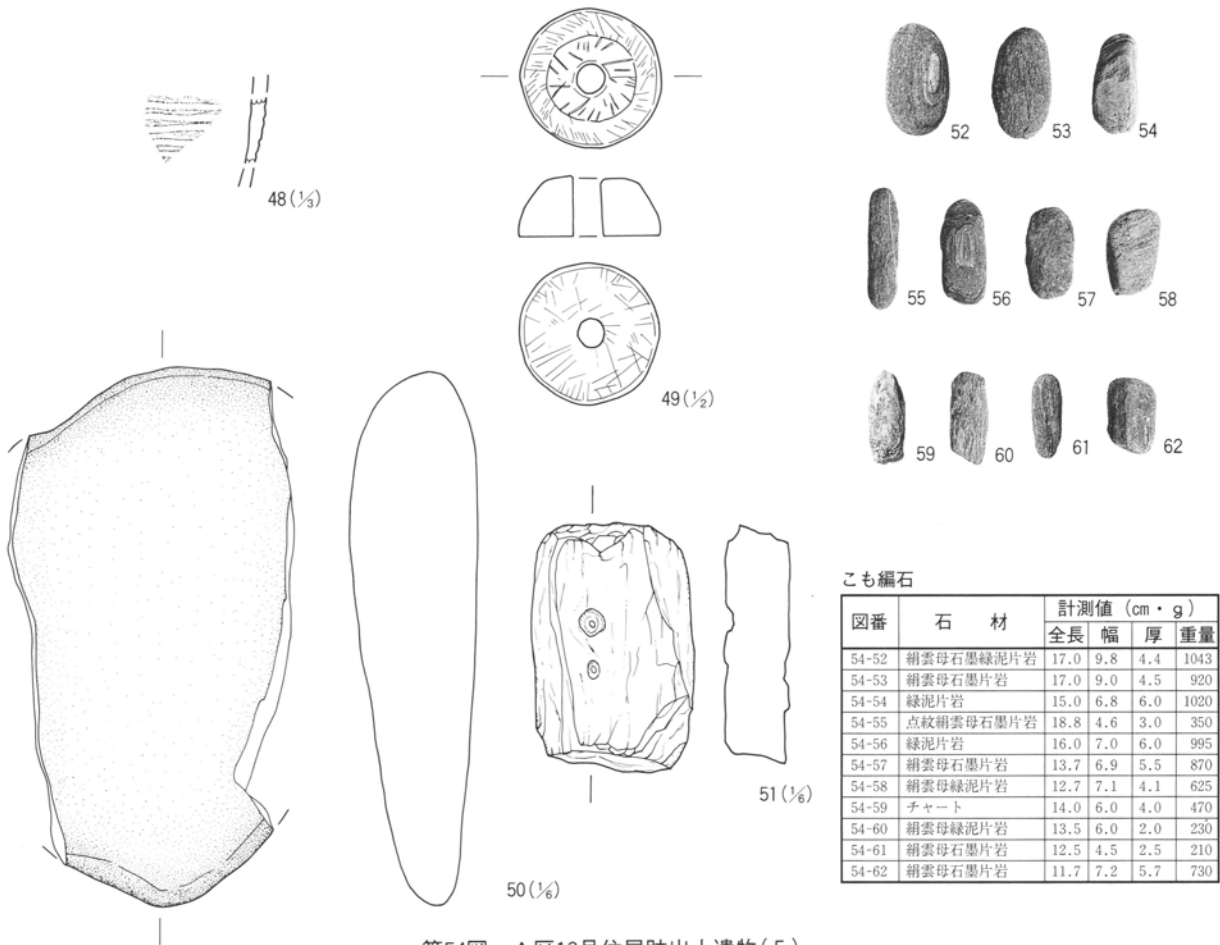


第52図 A区13号住居跡出土遺物(3)



第53図 A区13号住居跡出土遺物(4)

〔2〕 A区検出の遺構と遺物



第54図 A区13号住居跡出土遺物(5)

A区13号住居跡

図番 PL.	土器種別 器 種	法 量 (cm)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備 考
		①口径	②器高	③底径				
50-1 75	土師器 坏	①9.7 ②4.6			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③灰オリーブ色	底面ヘラ削り、体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	東壁寄り	完形
50-2 75	土師器 坏	①10.3 ②4.3			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③灰黄色	底面ヘラ削り、体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデ。	東壁寄り	ほぼ完形
50-3 75	土師器 坏	①9.9 ②5.2			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③灰白色	底面ヘラ削り、体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	北東部	完形
50-4 75	土師器 坏	①11.0 ②4.7			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	東壁寄り	完形
50-5 75	土師器 坏	①10.8 ②5.3			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	北部	完形
50-6 75	土師器 坏	①10.6 ②5.9 ③4.4			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	北東部	完形
50-7 75	土師器 坏	①10.5 ②4.6			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③灰色	底面・体部ヘラ削り、口縁部横ナデ。内 面ナデ。ヘラの工具痕。	北部	完形
50-8 75	土師器 坏	①10.0 ②4.3 ③5.6			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③灰黄褐色	底面ヘラ削り、体部ヘラ削り。口縁部横 ナデ、内面ナデ。ヘラの工具痕。	貯蔵穴	完形
50-9 75	土師器 坏	①10.0 ②4.6			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③浅黄色	底面ヘラ削り、体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	東壁寄り	完形
50-10 75	土師器 坏	①9.1 ②6.2			①粗粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③赤色	底面ヘラ削り、体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	東部	完形
50-11 75	土師器 坏	①10.2 ②4.6			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	北部	完形
50-12 75	土師器 坏	①10.0 ②5.1			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ。口縁部横ナデ。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	北東部	口縁部一部欠損

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査

図番 PL.	土器種別 器 種	法 量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備 考
50-13 75	土師器 坏	①11.3 ②5.5	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	P1	完形
50-14 75	土師器 坏	①9.7 ②4.8	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ。ヘラの工具痕。	P1	完形
50-15 75	土師器 坏	①11.4 ②5.1	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	北部	完形
50-16 75	土師器 坏	①10.2 ②4.3	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	東壁寄り	完形
50-17 75	土師器 坏	①10.5 ②4.8	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	北東部	完形
50-18 75	土師器 坏	①(9.7) ②4.6	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③明褐色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ、ヘラの工具痕。	東壁寄り	3/4残存
51-19 75	土師器 坏	①11.7 ②5.2	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、体部ヘラ削り。口縁部横 ナデ、内面ナデ。ヘラの工具痕。	P1	完形
51-20 75	土師器 坏	①12.0 ②6.3	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ、放射状のミガキ。	中央部	完形
51-21 75	土師器 坏	①11.2 ②4.6	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面吸炭 による黒色処理。	北部	完形
51-22 75	土師器 坏	①(11.5) ②4.1	①細粒の砂、赤色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ。内面ナデ。	覆土	口縁部欠損
51-23 75	土師器 坏	①11.5 ②4.8	①粗粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面吸炭 による黒色処理。ミガキ。	北壁寄り	口縁部一部欠損
51-24 75	土師器 坏	①13.5 ②4.9	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面吸炭 による黒色処理。ミガキ。	北東部	完形
51-25 75	土師器 坏	①(11.4) ②5.0	①細粒の砂、褐色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	P2周辺	口縁部一部欠損
51-26 75	土師器 坏	①(13.5) ②4.6	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り不明瞭。口縁部横ナデ・ミ ガキ。吸炭による黒色処理。	南壁寄り	2/3残存
51-27 75	土師器 坏	①15.6 ②7.1	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面吸炭 による黒色処理。ミガキ。	南部	口縁部一部欠損
51-28 75	土師器 坏	①12.7 ②5.2	①細粒の砂、褐色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り不明瞭。口縁部横ナデ。内 面ナデ。	中央部	口縁部一部欠損
51-29 76	土師器 直口壺	①9.0 ②(10.5)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部ナデ。内面ナ デ。	中央部	胴下半部欠損
51-30 76	土師器 小型甕	①11.6 ②21.2 ③6.0	①細粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横 ナデ、内面ナデ、ヘラの工具痕。	中央部	口縁部一部欠損
51-31 76	土師器 小型甕	①14.0 ②18.3 ③6.0	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、脚部外面ヘラ削り。口縁 部横ナデ、内面丁寧なナデ。	P2	完形
51-32 76	土師器 小型甕	①18.2 ②14.9 ③7.0	①細粒の砂、赤色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横 ナデ、内面丁寧なナデ。	中央部	完形
52-33 76	土師器 甕	①16.6 ②(17.2)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	脚部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面 ナデ。	P2	胴下半部欠損
52-34 76	土師器 甕	①17.5 ②(31.7)	①細粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面 ナデ。輪積み痕残る。	北部	底部欠損
52-35 76	土師器 甕	①20.4 ②33.9 ③5.0	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横 ナデ、内面ナデ。	北部	胴部一部欠損 外面煤付着
52-36 76	土師器 甕	①(20.0) ②30.5③(6.7)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。内面ナデ。	北壁寄り	口縁・底部 一部欠損
52-37 76	土師器 甕	①18.5 ②(26.7)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	脚部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面 ナデ。	中央部	底部欠損
52-38 76	土師器 甕	①21.3 ②33.8 ③5.6	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横 ナデ、内面ナデ、輪積み痕残る。	南部	ほぼ完形
52-39 77	土師器 甕	②(24.5) ③6.8	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③黄褐色	底部意図的穿孔。胴部外面ヘラ削り。内 面ナデ。	北壁寄り	胴上半部欠損 外面に炭化物付着
52-40 77	土師器 甕	①(17.2) ②(23.0)	①細粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面ヘラ削り不明瞭。口縁部横ナデ、 内面ナデ。	中央部	口縁～脚部1/2 残
53-41 77	土師器 甕	①19.2 ②37.5 ③7.0	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横 ナデ、内面丁寧なナデ。	中央部	完形 外面に煤が付着

[2] A区検出の遺構と遺物

図番 PL.	土器種別 器 種	法 量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備 考
53-42 77	土師器 小型甌	①17.6 ②12.6 ③3.5	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③灰黄褐色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	中央部	完形
53-43 77	土師器 小型甌	①20.7 ②19.0 ③7.6	①粗粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。輪積み痕残る。	中央部	完形
53-44 77	土師器 甌	①25.6 ②28.6 ③7.8	①細粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	北部	完形
53-45 77	土師器 甌	①25.6 ②30.5 ③8.8	①粗粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。輪積み痕一部残る。	中央部	ほぼ完形
53-46 77	土師器 甌	①27.0 ②28.7 ③8.2	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③灰黄色	胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	P2周辺	胴部一部欠損
53-47 77	土師器 壺	①(36.2) ②(15.8)	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	胴部外面ナデ、口縁部横ナデ。内面ナデ。	南部	口縁～胴上半 1/3
54-48 78	弥生土器 胴部片		①細粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい黄橙色	沈線が施されている。	貼床中	破片 中期

図番 PL.	器 種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
54-49-78	紡錘車	完形	滑石	径3.8	孔径0.8	1.6	35.3	表面全体に目の細かい削り痕が残る。	覆土
54-50-78	台石	部分	輝石	28.5	(15.0)	6.7	5660	両面に磨耗痕が認められる。	覆土 縄文
54-51-78	多孔石	完形	絹雲母緑泥片岩	12.7	8.5	3.4	660	片面に2個の凹み穴が認められる。	覆土 縄文

A区1号掘立柱建物跡 (第55図、PL.34)

位置 Mt-30、Mu-29・30、Mv-29グリッドにかけて検出された。A区5号住居跡の南に位置している。
 平面形・規模 完掘していないので明らかでない。
 柱穴 形状は径約16～34cmの楕円形を呈する。深さは22～36cmである。ピットから遺物の出土はなかった。
 時期 不明。

A区1号溝 (第55図、PL.34)

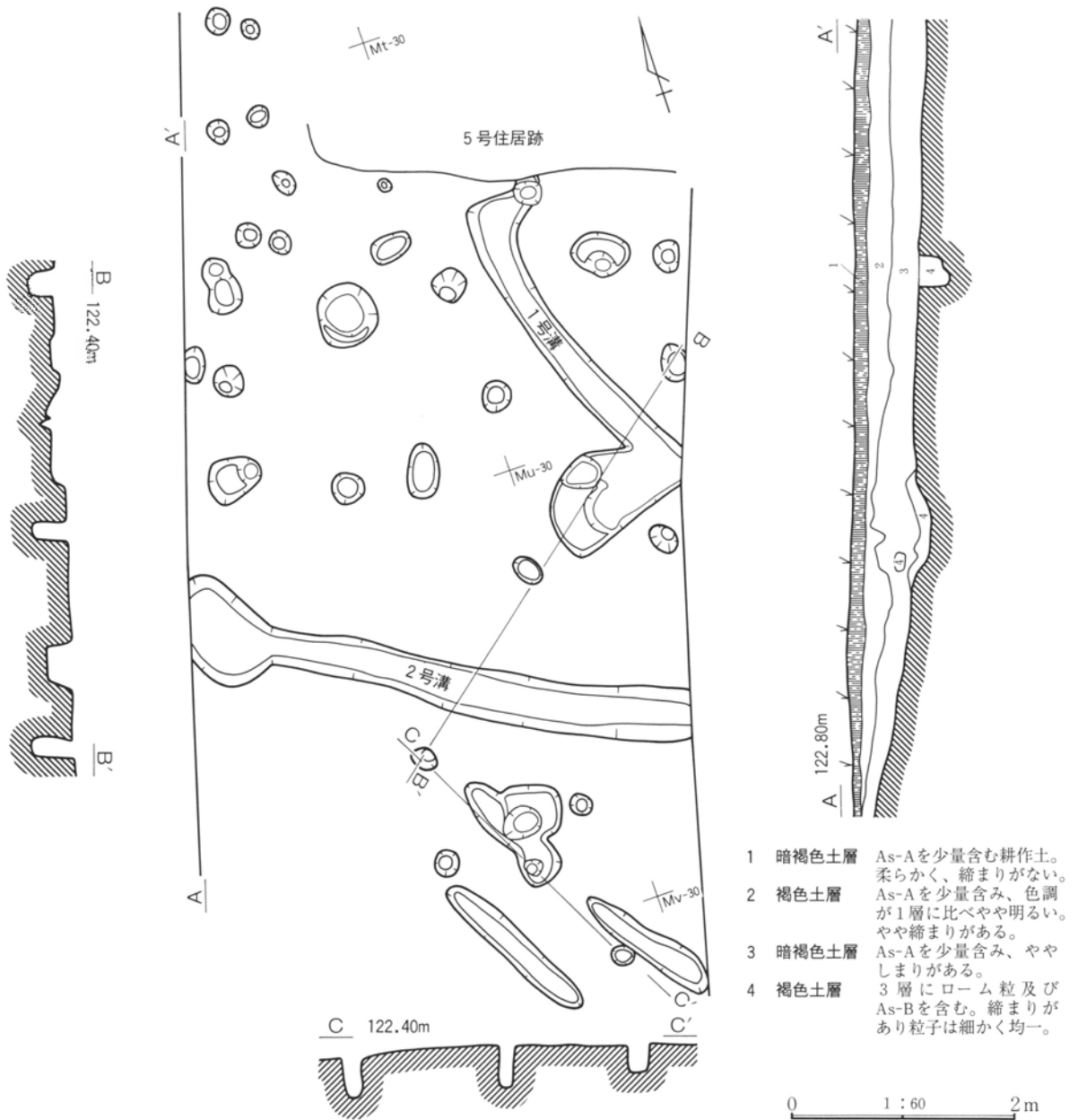
位置 Mt-30、Mu-30グリッドにかけて検出された。A区5号住居跡の南に位置し、1号掘立柱建物跡と重複している。
 規模 現状では長さ約3.1m、幅約30～46cm、深さ約6cmを測る。
 時期 不明。覆土から土師器片1点が出土している。

A区2号溝 (第55図、PL.34)

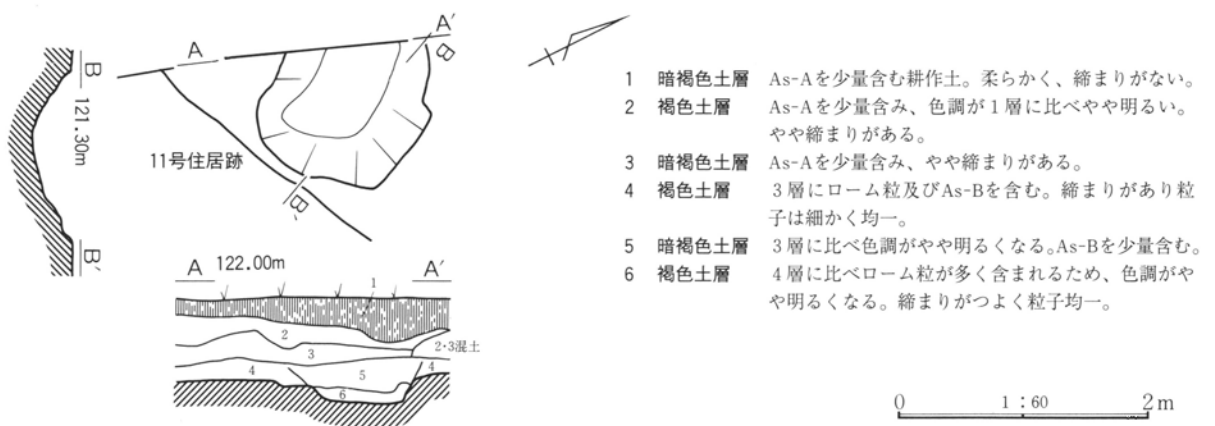
位置 Mu-29・30グリッドにかけて検出された。A区1号溝の南西約2.5mの所に位置している。
 規模 現状では長さ約4.5m、幅約36～68cm、深さ約22cmを測る。
 時期 不明。覆土からは縄文土器片1点、土師器片8点が出土している。

A区3号土坑 (第56図、PL.34)

位置 Mm-31・32グリッドにかけて検出された。A区11号住居跡、A区12号住居跡に接している。
 規模 現状では長径140cm、短径130cm、深さ約22cmを測る。
 覆土 2(5・6)層に分かれた。
 時期 不明。覆土からは遺物の出土はなかった。

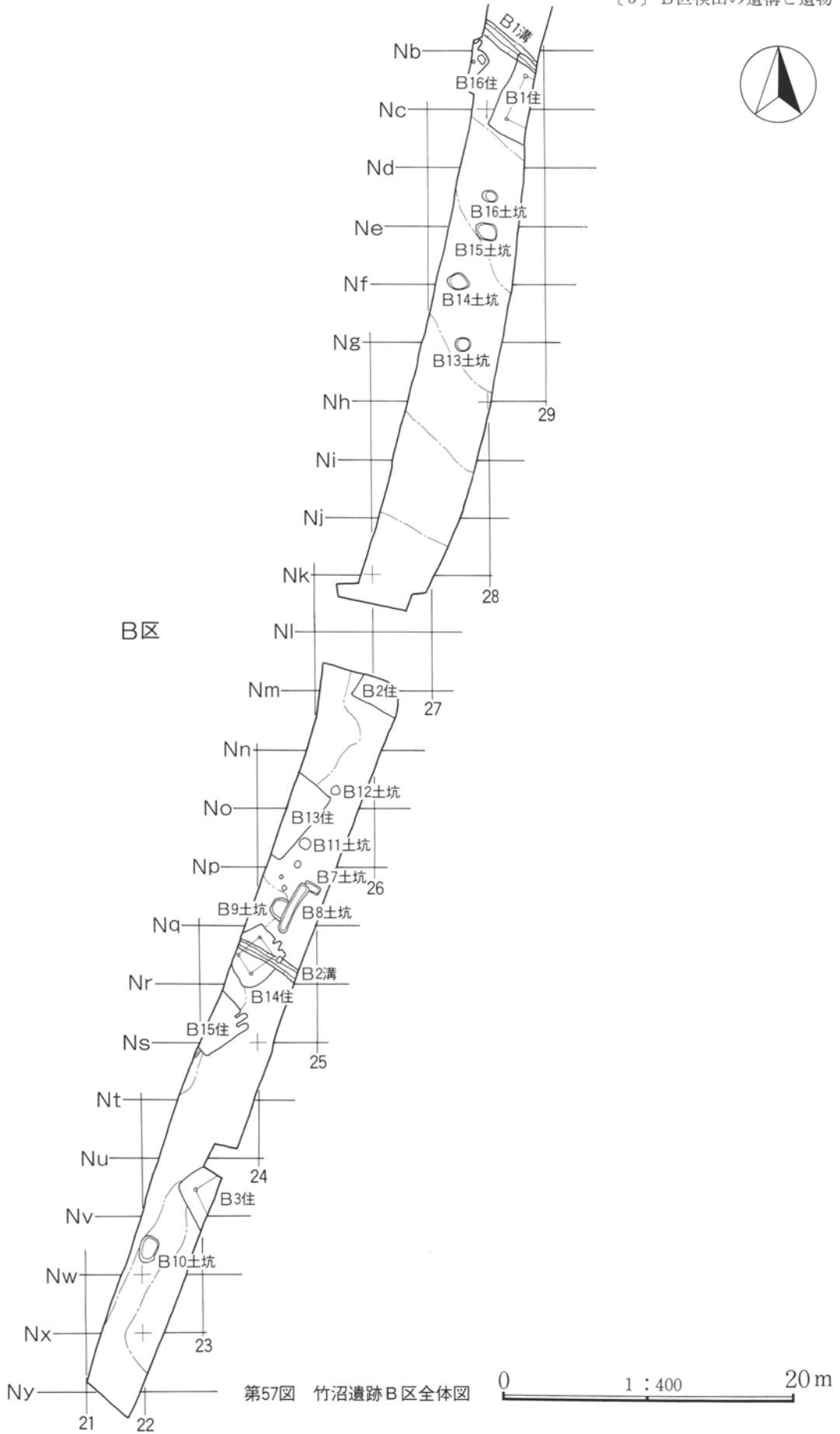


第55図 A区1号掘立柱建物跡・1号溝・2号溝



第56図 A区3号土坑

〔3〕 B区検出の遺構と遺物



[3] B区検出の遺構と遺物

B区1号住居跡 (第58・59図、PL.37・38・78)

位置 Nb-28、Nc-28グリッドにかけて検出された。B区16号住居跡の南東約2mの所に位置している。また、B区1号溝によって住居跡の北壁を壊されている。

形状 完掘できなかつたが、現状では長辺5m、短辺3mである。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は7層に分かれた。7層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約22~30cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約11.4㎡。

掘り方 床面全体に凹凸が顕著である。

周溝 南壁下、西壁下の一部で検出された。幅2~10cm、深さ2~8cmである。

竈 検出できなかつた。

柱穴 2個の柱穴が検出された。P1は長径・短径

19cm、深さは37cm、P2は長径30cm、短径27cm、深さ33cmである。

貯蔵穴 検出できなかつた。

遺物 土師器の坏や高坏、甕が出土している。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀前半の段階に相当する。

備考 当住居跡は、市教委調査 (F 1 竹沼遺跡) のBH-1号住居跡と同一住居である。

B区1号溝 (第58図、PL.46)

位置 Na-27・28、Nb-28グリッドにかけて検出された。B区1号住居跡の北に位置し、その北壁を壊している。

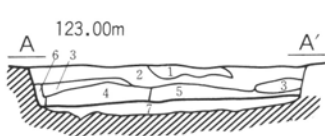
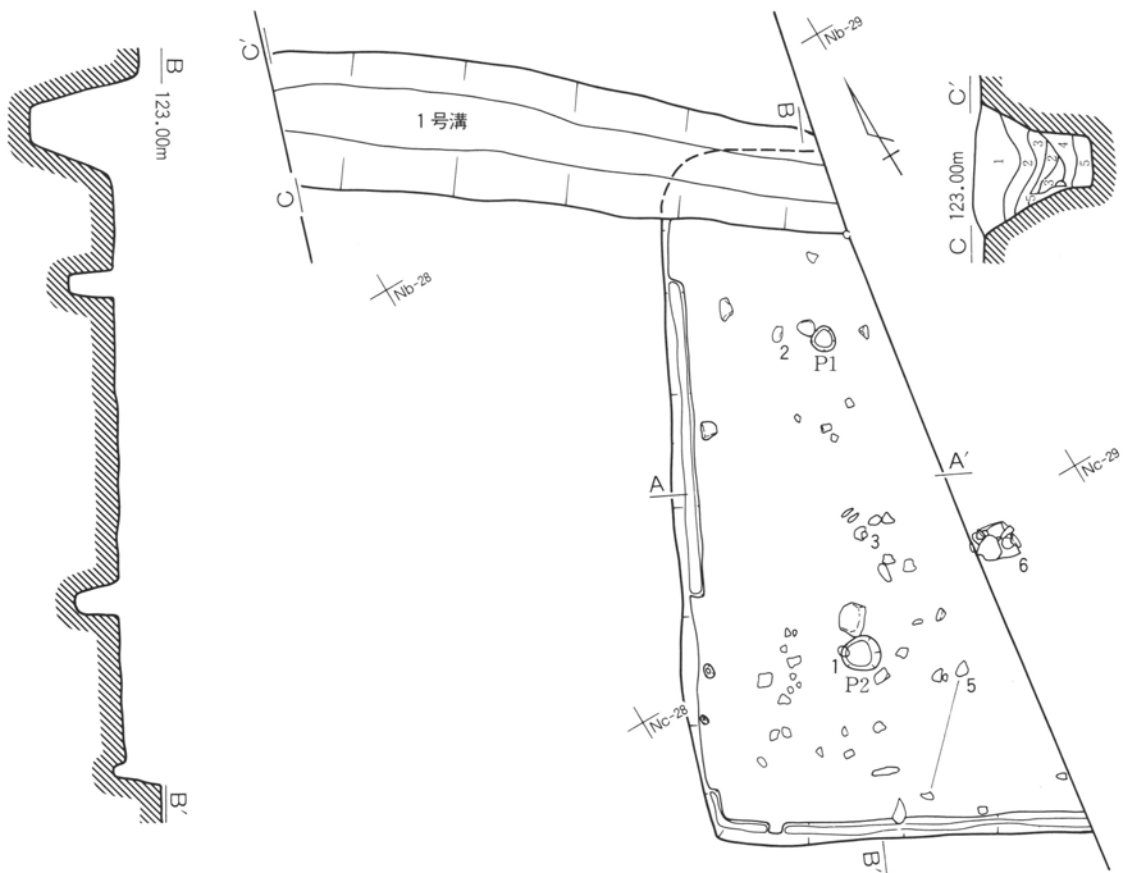
規模 現状では長さ約4.5m、幅約80~110cm、深さ約95cmを測る。

時期 不明。覆土からは遺物の出土はなかつた。

備考 南約62mの所に位置しているB区2号溝と走行と規模がほぼ一致している。

B区1号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
59-1 78	土師器 坏	①(3.9) ②(4.5)	①粗粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③褐色	底面ナデ、体部外面へら磨き。内面ナデ。	P2周辺	2/3残存
59-2 78	土師器 坏	①14.3 ②(5.6)	①細粒の砂、赤色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面へら削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	P1周辺	1/4残存
59-3 78	土師器 高坏	①(8.0) ②10.0	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙色	脚部外面へら削り、ナデ。内面へら削り。 坏内面へら磨き、黒色処理。	中央部	脚部ほぼ全周 外面に煤附着
59-4 78	土師器 高坏	②(6.6)	①粗粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	脚部外面ナデ、内面ナデ。坏内面へら磨 き、黒色処理。	覆土	部分 脚部に透かし
59-5 78	土師器 甕	①(16.0) ②(10.0)	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面へら削り、口縁部横ナデ。内面 丁寧なナデ。	南壁寄り	口縁部1/3 内面に輪積み痕
59-6 78	土師器 壺	①(28.5) ②9.1	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面ナデ。胴部外面へら削り、ナデ。内 面ナデ、へらの工具痕。	住居跡中 中央部	口縁部欠損
59-7 78	縄文土器	胴部片	①細粒の砂を含む。 ②良 ③明赤褐色	撚糸I。	覆土	中期後半

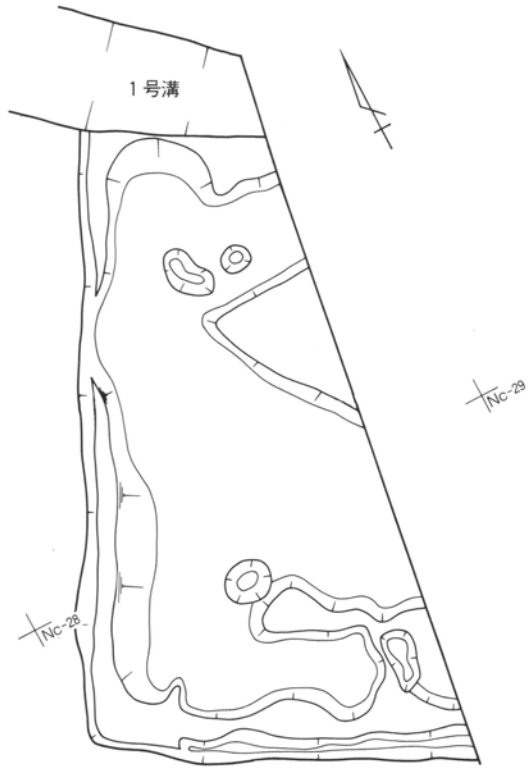


(A-A')

- 1 褐色土層 軽石粒、ローム粒を全体に含む。
- 2 黒色土層 砂質土、ローム粒を少量含む。埋土の上半部を全体に覆う。
- 3 黒色土層 2層よりも黒い色調。ローム粒等を一切含まず、2層のブロックともいえる。
- 4 褐色土層 ローム粒と褐色土との混土。炭化物、ロームブロックをまばらに含む。
- 5 褐色土層 4層に黄濁色の粘土ブロックをまばらに含む。
- 6 黄褐色土層 ロームと褐色土との混土。壁際の崩落土。
- 7 貼床 ロームと褐色土との混土。径2~3cmのロームブロックをところどころに含む。1cm程度の砂を斑点状に含む。

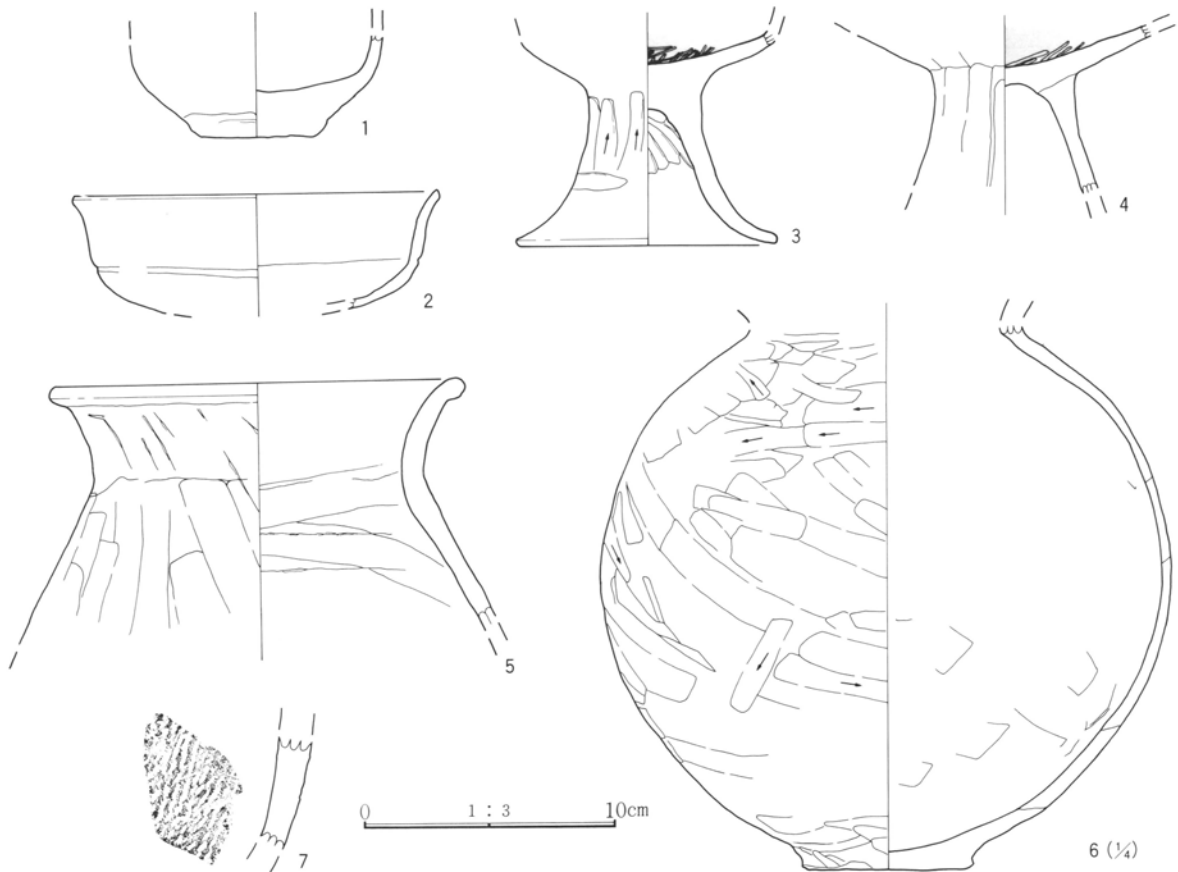
1号溝 (C-C')

- 1 褐色土層 黒色土とロームの混土。
- 2 黄褐色土層 黒色土とロームの混土。ロームが80%以上。
- 3 黄褐色土層 ローム粒を主体とする。
- 4 黄褐色土層 黒色土ブロックとロームブロックの混土。
- 5 黄褐色土層 ロームブロック。



第58図 B区1号住居跡・1号溝

0 1 : 60 2m



第59図 B区1号住居跡出土遺物

B区2号住居跡 (第60図、PL.38)

位置 N1-25・26、Nm-25・26グリッドにかけて検出された。B区13号住居跡の北東約6.5mの所に位置している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺3.4m、短辺1.7mである。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築されている。

壁高 住居跡確認面より約40~44cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約4.5㎡。

周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土からは礫が出土している。

時期 不明。市教委調査BH-2住と同一住居。

B区3号住居跡 (第61図、PL.39)

位置 Nu-22・23、Nv-22・23グリッドにかけて検出された。B区15号住居跡の南約7.5mの所に位置している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺3.7m、短辺3.1mである。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6(2~7)層に分かれた。6・7層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約35~45cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

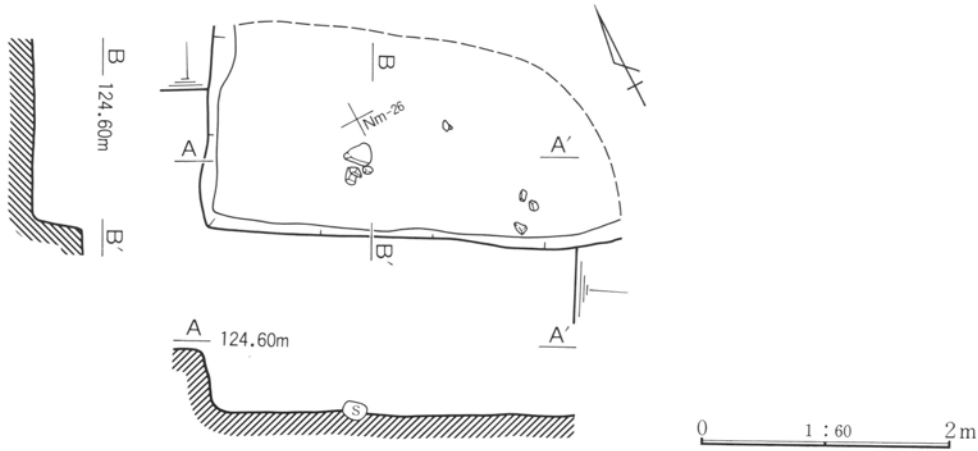
床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約6.6㎡。

掘り方 全体的に凹凸が顕著である。

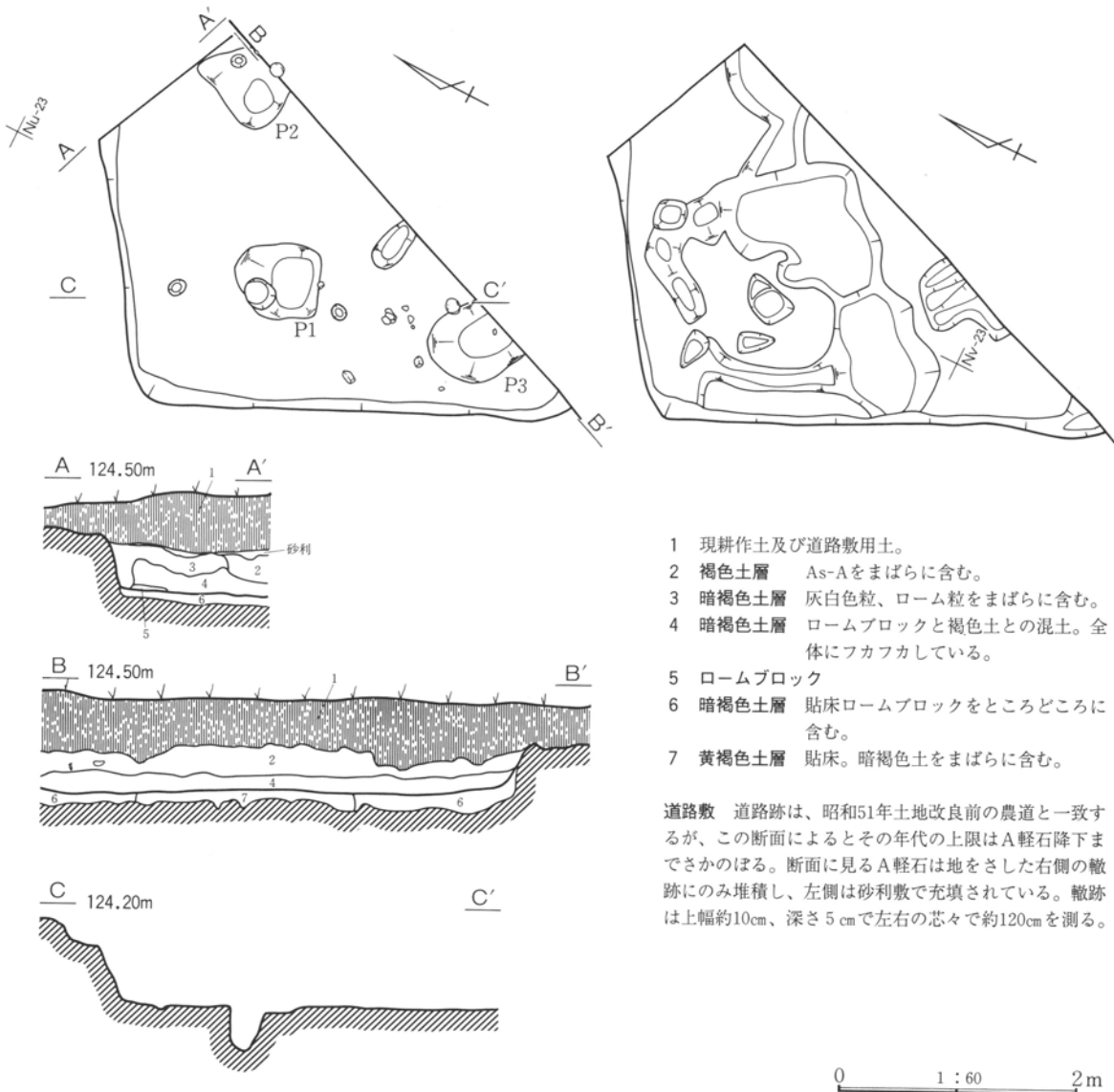
周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。

柱穴 3個のピットが検出された。P1の深さは40cm、P2深さ4cm、P3深さ5cmである。P1は柱穴に



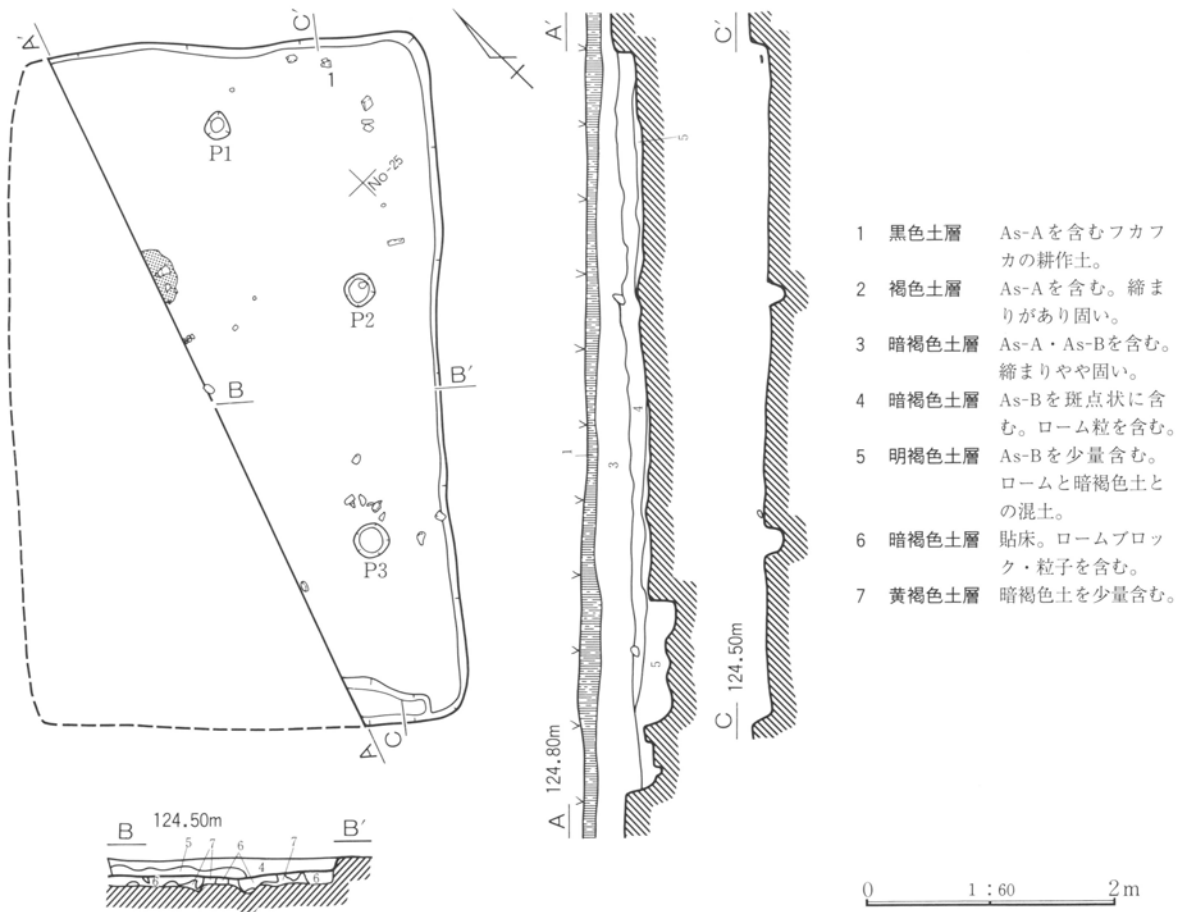
第60図 B区2号住居跡



- 1 現耕作土及び道路敷用土。
- 2 褐色土層 As-Aをまばらに含む。
- 3 暗褐色土層 灰白色粒、ローム粒をまばらに含む。
- 4 暗褐色土層 ロームブロックと褐色土との混土。全体にフカフカしている。
- 5 ロームブロック
- 6 暗褐色土層 貼床ロームブロックをところどころに含む。
- 7 黄褐色土層 貼床。暗褐色土をまばらに含む。

道路敷 道路跡は、昭和51年土地改良前の農道と一致するが、この断面によるとその年代の上限はA軽石降下までさかのぼる。断面に見るA軽石は地をさした右側の轍跡にのみ堆積し、左側は砂利敷で充填されている。轍跡は上幅約10cm、深さ5cmで左右の芯々で約120cmを測る。

第61図 B区3号住居跡



第62図 B区13号住居跡

なるものと考えられる。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 ほとんど出土していない。

時期 6世紀代。市教委調査BH-3住と同一住居。

B区13号住居跡 (第62・63図、PL.40・78)

位置 Nn-24・25、No-24・25グリッドにかけて検出された。B区2号住居跡の南西約6.2mの所に位置している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺5.5m、短辺3mである。

方位 N-42°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4(4~7)層に分かれた。6・7層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約10~15cmで床面に達す

る。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 やや凹凸がある。現状での面積は約9.9㎡。

掘り方 全体的に凹凸が認められる。

周溝 検出できなかった。

炉 床面から焼土の分布が認められた。

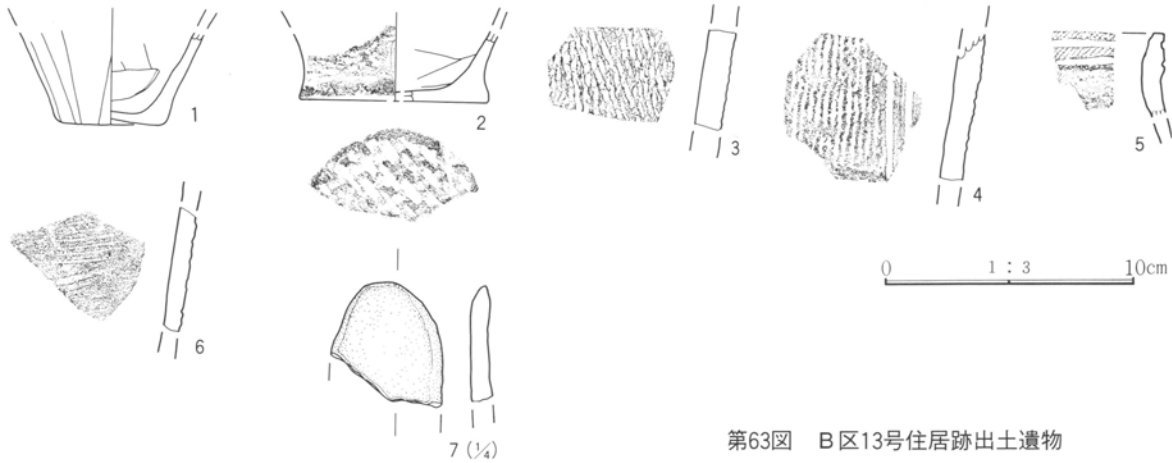
柱穴 3個のピットが検出された。P1は長径21cm、短径20cm、深さ36cm。P2は長径26cm、短径24cm、深さ13cm。P3は長径28cm、短径27cm、深さ16cmである。

遺物 覆土からは弥生後期土器片17点、縄文土器片9点が出土している。

時期 弥生後期。

B区14号住居跡 (第64~67図、PL.41・42・78・79)

位置 Np-24、Nq-23・24、Nr-23グリッドにかけて検出された。B区15号住居跡の北東約1mの所



第63図 B区13号住居跡出土遺物

B区13号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
63-1 78	弥生土器 鉢	②(3.7) ③(4.0)	①細粒の砂を含む。 ②良 ③オリーブ黒色	底面・胴部ナデ。 内面丁寧なナデ。	北壁寄り	底部～胴下半部 1/2
63-2 78	弥生土器 甕	②(3.8) ③(7.4)	①細粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい黄褐色	底面網代。胴部に縄文か。 内面ナデ。	覆土	底部1/3
63-3 78	縄文土器	胴部片	①細粒の砂を含む。 ②良 ③灰褐色	撚糸L施紋。	覆土	中期後半
63-4 78	胴部片	胴部片	①細粒の砂を含む。 ②良 ③褐色	撚糸L施紋。 沈線を垂下。	覆土	中期後半
63-5 78	弥生土器	口縁部片	①細粒の砂を含む。 ②良 ③暗赤褐色	口唇部・口縁部に縄文施紋。原体はL 二本の沈線を横走。	覆土	中期
63-6 78	弥生土器	胴部片	①細粒の砂を含む。 ②良 ③橙色	条線が施されている。	覆土	中期

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
63-7	磨石	1/2	砂岩	(6.2)	6.0	0.8~1.1	(50)	浅い凹みが認められる。	覆土

に位置している。B区2号溝によって住居跡の中央部を壊されている。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺3.7m、短辺3.4mである。方形を呈するものと考えられる。

方位 N-58°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5(1~3・8・9)層に分かれた。8・9層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約40~55cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約10.3m²。

掘り方 全体的に凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

竈 北東壁の中央部から検出され、燃焼部は床面から外側に構築されている。袖部約50cmが残存し、

支石が残されている。規模は煙道方向100cm、両袖方向90cmである。

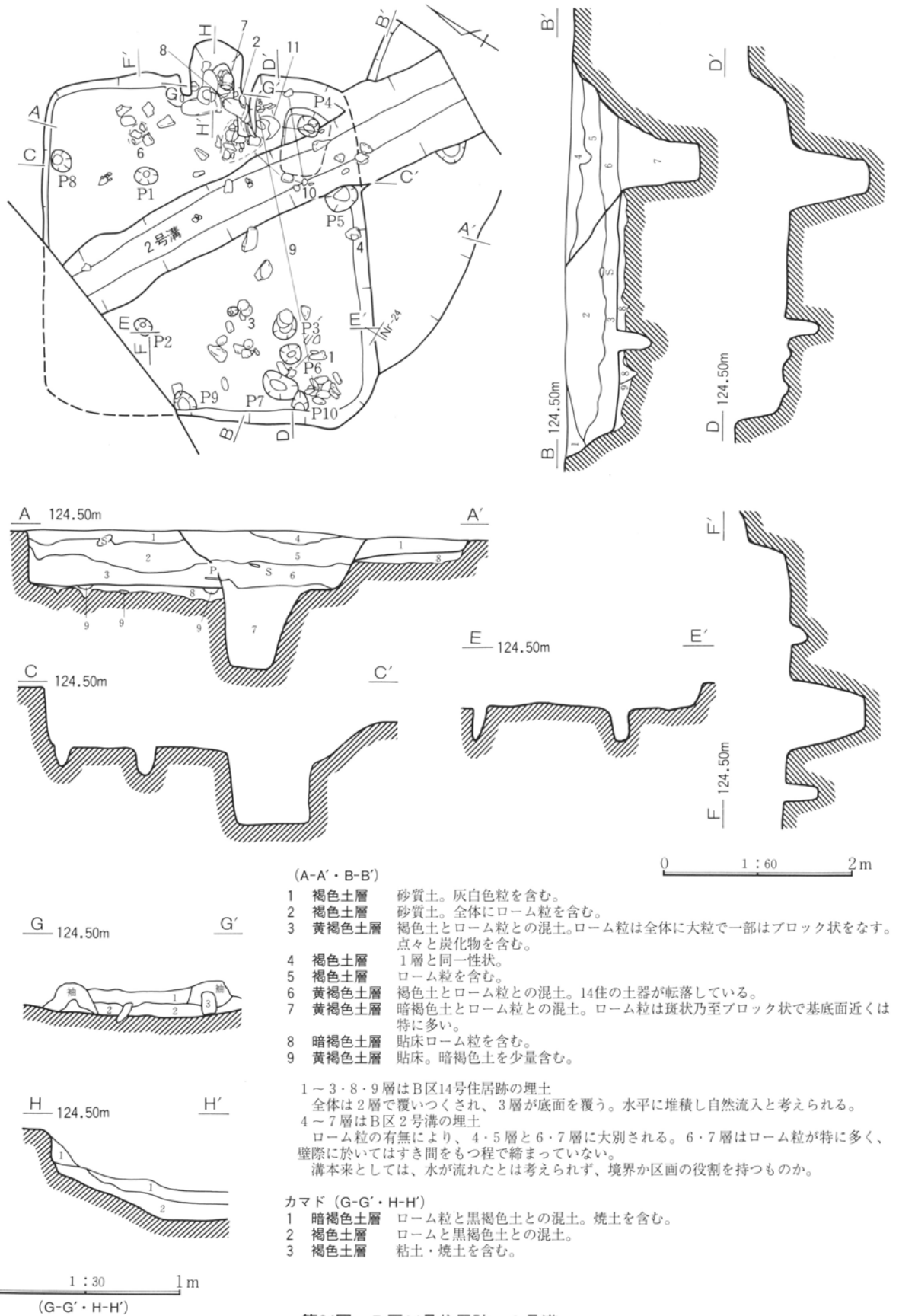
柱穴 10個のピットが検出された。P1の深さは25cm、P2深さ37cm、P3深さ32cm、P4深さ7cm、P5深さ10cm、P6深さ7cm、P7深さ8cm、P8深さ18cm、P9深さ26cm、P10深さ35cmである。P1からP3が主柱穴になる。他の1個は2号溝によって壊されたものであろう。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。2号溝によって2/3程壊されているが、推定規模は長径70cm、短径32cmである。

遺物 土師器の甕が竈内や周辺から出土している。また、こも編石は南東コーナー周辺から出土。

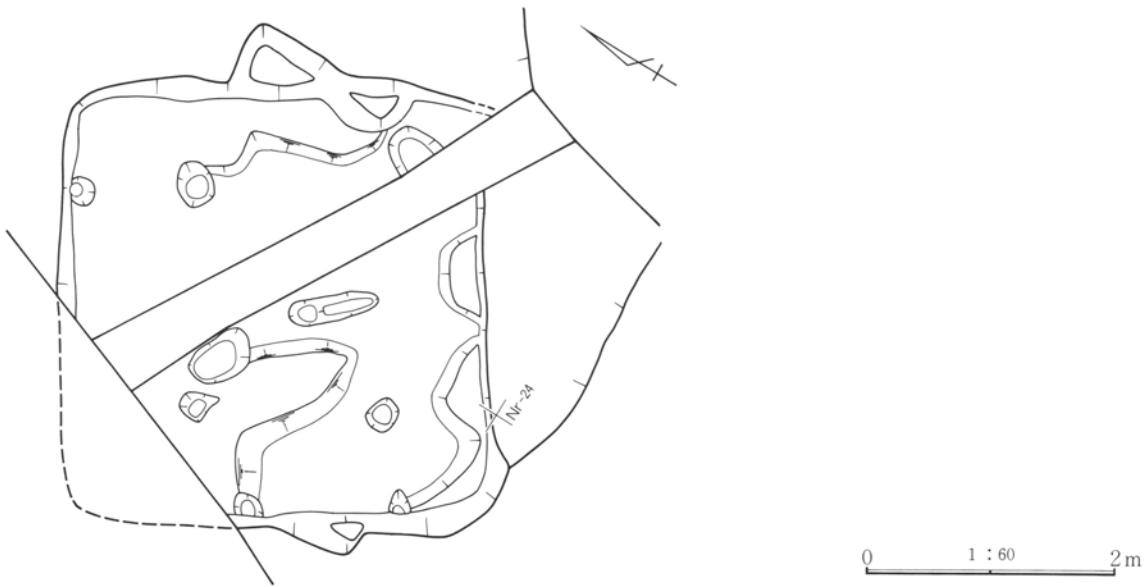
時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀後半の段階に相当する。

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



第64図 B区14号住居跡・2号溝

〔3〕 B区検出の遺構と遺物

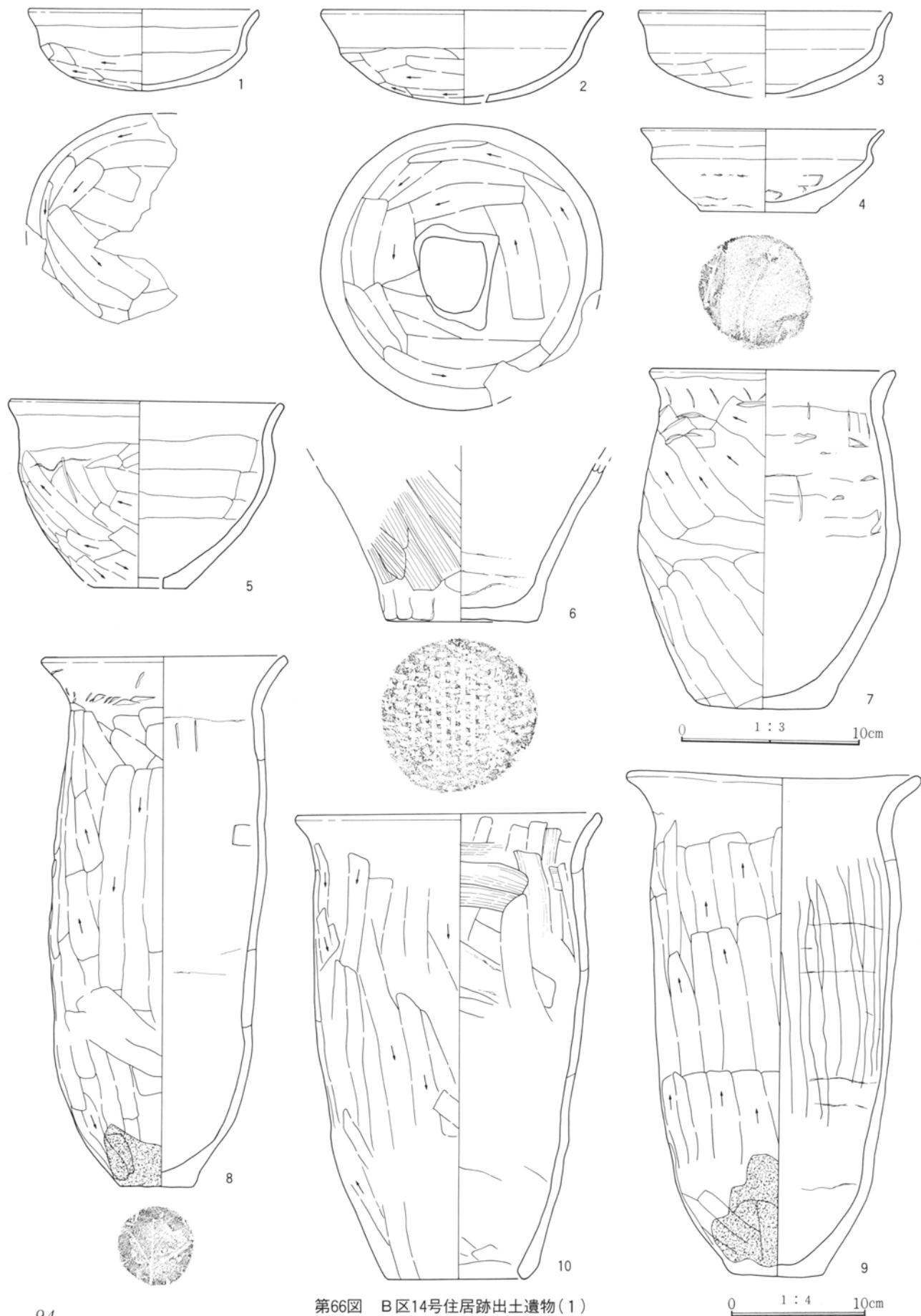


第65図 B区14号住居跡掘り方

B区14号住居跡

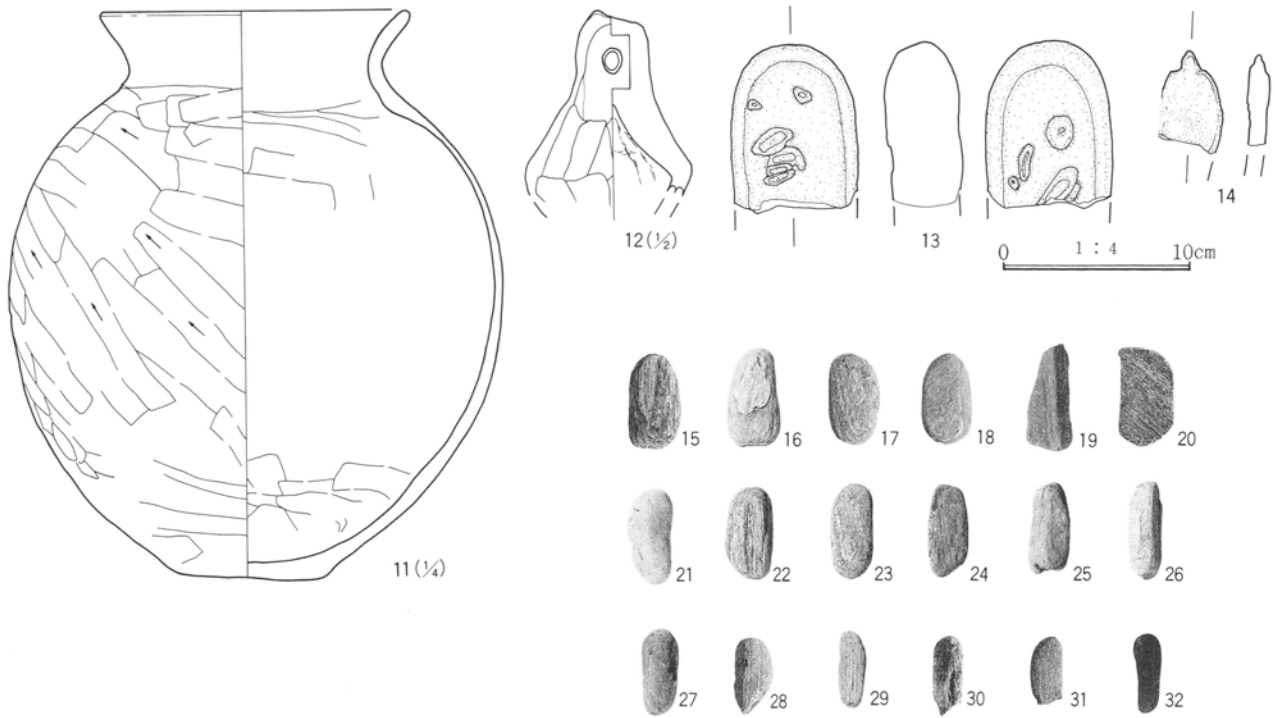
図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
66-1 78	土師器 坏	①(12.8) ②(4.5)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	P6周辺	2/3残存
66-2 78	土師器 坏	①15.6 ②(5.2)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。 荒れている。	カマド	底面一部欠損
66-3 78	土師器 坏	①14.2 ②4.9	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	中央部	完形
66-4 78	土師器 坏	①(13.5) ②4.6 ③6.4	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	東壁	口縁一部欠損
66-5 78	土師器 小型瓶	①15.7 ②10.3 ③6.0	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横 ナデ。内面丁寧なナデ。	P3	完形
66-6 78	弥生土器 甕	②(8.7) ③(8.4)	①粗粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②良 ③明黄褐色	底面に網代。胴部外面ハケメ。内面ナデ。	北西部	底部全周
66-7 78	土師器 小型甕	①13.6 ②18.7 ③7.4	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横 ナデ、内面ナデ、輪積み痕残る。	カマド	完形
66-8 79	土師器 甕	①18.3 ②39.5 ③5.4	①粗粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面木葉痕。胴部外面ヘラ削り。口縁部 横ナデ。内面ナデ、輪積み痕。	カマド	ほぼ完形
66-9 79	土師器 甕	①21.8 ②36.9 ③7.0	①粗粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り。胴部外面ヘラ削り、口縁 部横ナデ。内面ナデ、輪積み痕。	カマド周 辺	完形 外面に煤附着
66-10 79	土師器 甕	①22.3 ②34.5 ③10.2	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面 丁寧なナデ。	カマド周 辺	完形
67-11 79	土師器 壺	①16.4 ②30.0 ③8.4	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横 ナデ、内面ナデ。	カマド周 辺	胴部一部欠損
67-12 79	土鈴	②(4.8) 34.6g	①細粒の砂を含む。 ②良 ③灰黄褐色	外面ナデ、つまみ部に径6mmの円孔。	覆土	下部欠損

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
67-13-79	凹石	1/2	砂岩	(8.2)	6.7	5.0	(222)	両面に計4個の凹みが認められる。	覆土 縄文
67-14-79	石製品	2/3	砂岩	(4.9)	3.6	0.8-1.1	(250)	先端が加工されている。	覆土



第66図 B区14号住居跡出土遺物(1)

〔3〕 B区検出の遺構と遺物



こも編石

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
67-15	絹雲母石墨片岩	14.0	7.7	4.2	710
67-16	絹雲母石墨片岩	15.0	8.5	4.5	820
67-17	絹雲母石墨片岩	14.0	6.8	3.5	620
67-18	絹雲母石墨片岩	14.0	6.5	3.5	560
67-19	絹雲母石墨片岩	16.0	6.8	3.3	510
67-20	絹雲母石墨片岩	15.0	8.0	2.5	560
67-21	緑泥片岩	14.5	7.5	4.5	780
67-22	絹雲母石墨片岩	6.5	6.3	3.0	120
67-23	点紋絹雲母石墨片岩	14.5	6.0	3.2	490

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
67-24	緑簾緑泥片岩	14.0	5.0	3.5	470
67-25	緑簾緑泥片岩	14.0	6.5	5.0	690
67-26	絹雲母片岩	15.0	5.0	4.6	500
67-27	石墨緑泥片岩	13.0	5.0	4.5	560
67-28	絹雲母石墨片岩	11.5	5.0	4.5	420
67-29	緑泥片岩	11.5	4.5	1.6	120
67-30	絹雲母石墨片岩	12.0	4.5	3.0	185
67-31	絹雲母石墨片岩	12.0	4.8	2.5	220
67-32	絹雲母石墨片岩	11.5	4.5	1.5	100

第67図 B区14号住居跡出土遺物(2)

B区15号住居跡 (第68~70図、PL.42・43・79・80)

位置 Nr-23、Ns-23グリッドにかけて検出された。B区14号住居跡の南西約1mの所に位置している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺4.1m、短辺3.2mである。方形を呈するものと考えられる。

方位 N-53°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6(2・4・5・a~c)層に分かれた。a~c層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約30~45cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。中央部に粘土の堆積が認められた。現状での面積は約7.2㎡。

掘り方 全体的に凹凸が顕著である。

周溝 検出できなかった。

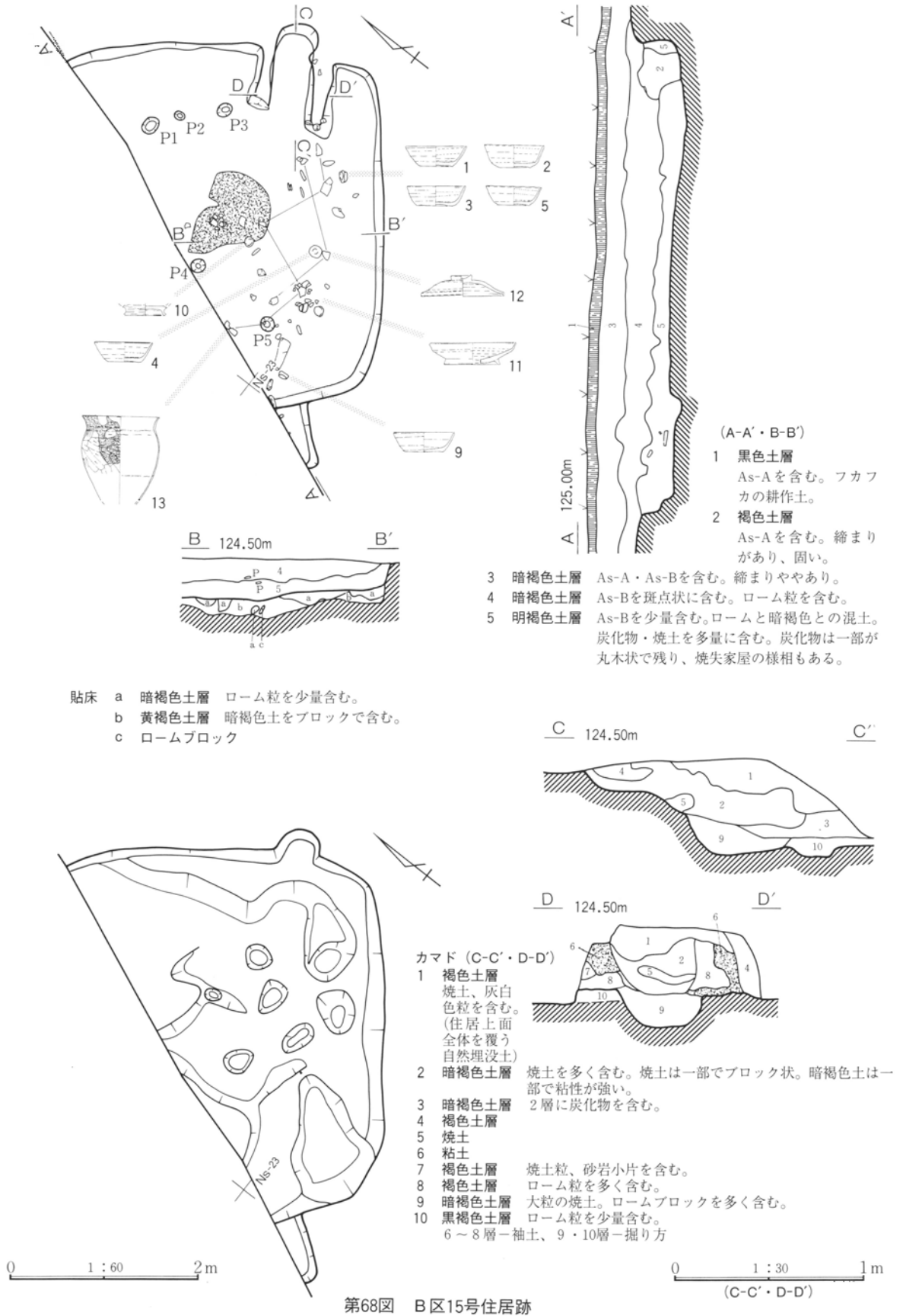
竈 北東壁から検出され、燃焼部の大部分は床面に構築されている。袖部約80cmが残存し、袖石が残されている。規模は煙道方向110cm、両袖方向95cmである。

柱穴 5個のピットが検出された。P1の深さは11cm、P2深さ4cm、P3深さ9cm、P4深さ9cm、P5深さ6cmである。いずれのピットも柱穴にはなりえない。

貯蔵穴 検出できなかった。

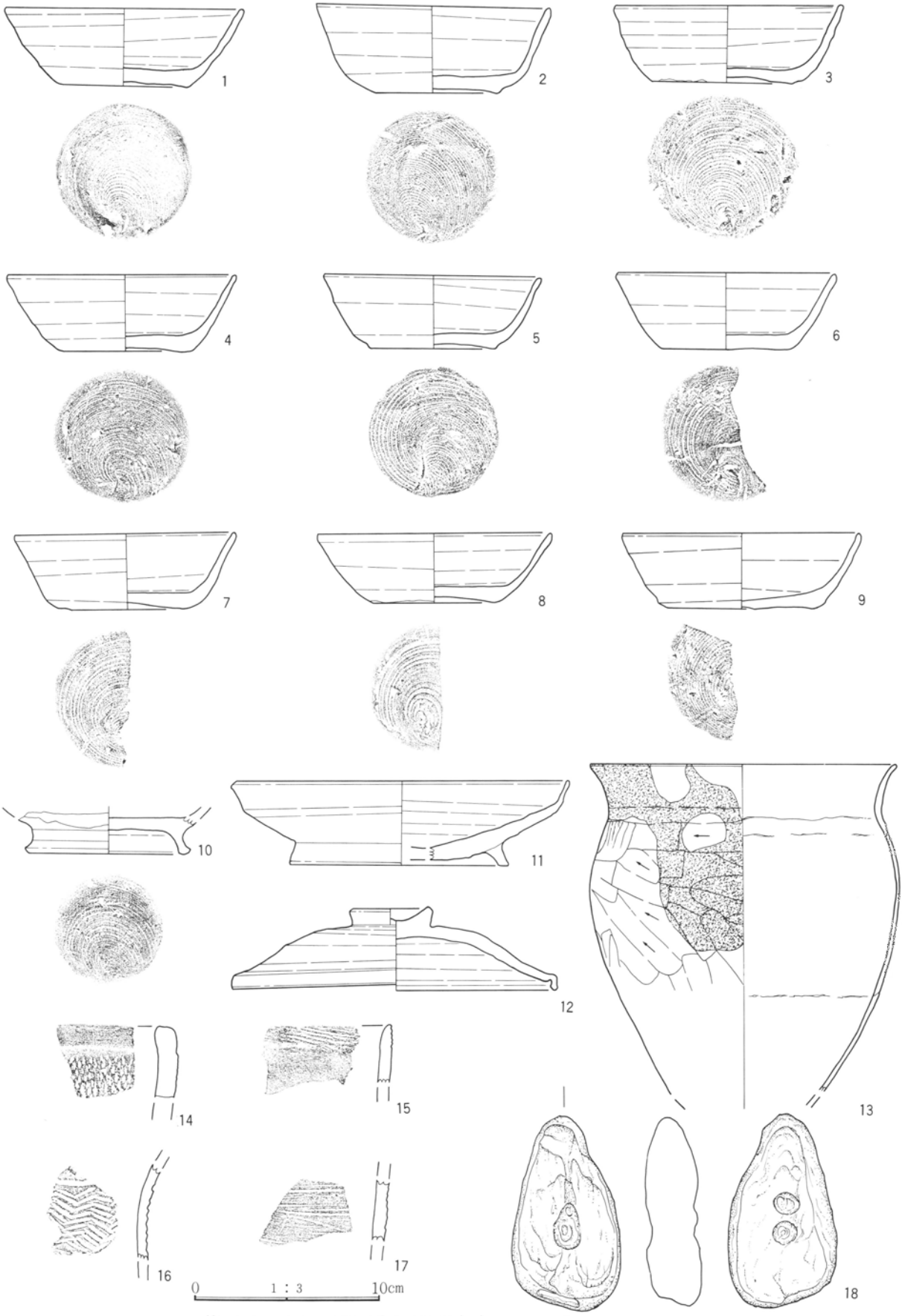
遺物 土師器の甕や須恵器の坏や蓋が出土している。また、こも編石は床面南西部から出土している。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は8世紀後半の段階に相当する。



第68図 B区15号住居跡

〔3〕 B区検出の遺構と遺物



第69図 B区15号住居跡出土遺物(1)

0 1 : 4 10cm
(13・18)

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



こも編石

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
70-19	緑濺泥片岩	16.0	6.5	2.5	525
70-20	絹雲母石墨片岩	14.5	5.2	3.5	410
70-21	緑泥片岩	13.2	6.3	2.5	296
70-22	絹雲母石墨片岩	13.8	4.6	3.3	299
70-23	点紋絹雲母石墨片岩	11.0	3.0	1.5	75
70-24	石墨片岩	10.5	4.0	1.5	100

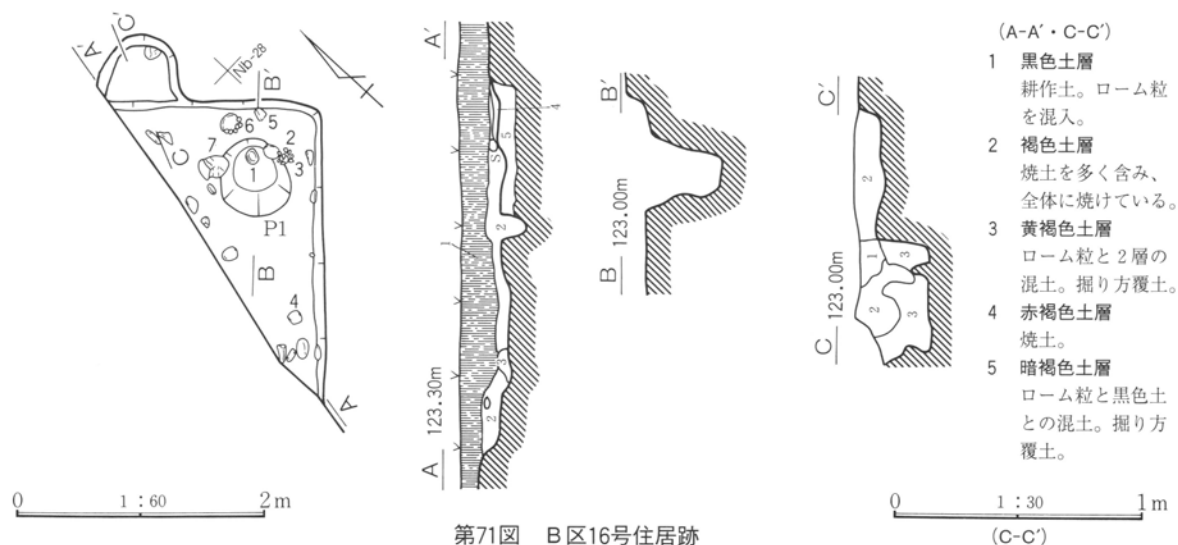
第70図 B区15号住居跡出土遺物(2)

B区15号住居跡

図番 PL.	土器種別 器 種	法 量 (cm)		①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備 考
		①口径	②器高③底径				
69-1 79	須恵器 坏	①12.8	②4.1 ③7.0	①細 片岩粒を含む。 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形 底面回転糸切り	東壁寄り	完形
69-2 79	須恵器 坏	①12.4	②4.6 ③6.8	①粗 片岩粒を含む。 ②還元焰 ③灰黄褐色	右回転ロクロ整形 底面回転糸切り	東壁寄り	完形
69-3 79	須恵器 坏	①12.2	②4.1 ③8.0	①細 片岩粒を少量含む。 ②還元焰 ③黄灰色	右回転ロクロ整形 底面回転糸切り	東壁寄り	完形
69-4 79	須恵器 坏	①12.3	②4.0 ③7.0	①細 片岩粒を少量含む。 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形 底面回転糸切り	東壁寄り	完形
69-5 79	須恵器 坏	①11.5	②3.9 ③7.0	①細 ②還元焰 ③灰黄褐色	右回転ロクロ整形 底面回転糸切り	東壁寄り	口縁一部欠損
69-6 79	須恵器 坏	①(11.8)	②4.1 ③(7.0)	①細 白色鉍物粒を含む。 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形 底面回転糸切り	覆土	1/2残存
69-7 79	須恵器 坏	①(11.8)	②4.0 ③7.0	①細 黒色鉍物粒を少量含む。 ②還元焰 ③灰オリーブ色	右回転ロクロ整形 底面回転糸切り	覆土	1/2残存
69-8 79	須恵器 坏	①(12.5)	②3.7 ③(6.5)	①細 片岩粒を少量含む。 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形 底面回転糸切り	覆土	1/2残存
69-9 79	須恵器 坏	①(12.7)	②4.0 ③(8.0)	①細 白色鉍物粒を含む。 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形 底面回転糸切り	南壁寄り	1/2残存
69-10 79	須恵器 壺	②(2.2)	③8.8	①細 片岩粒を含む。 ②還元焰 ③灰色	底面回転糸切り後、高台貼付。	中央部	高台部
69-11 79	須恵器 壺	①(18.0)	②4.5③(11.7)	①粗 片岩粒を含む。 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形 高台貼付	南東部	1/2残存
69-12 79	須恵器 蓋	摘み4.4	②4.4 ③17.3	①粗 片岩粒を含む。 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形 天井部回転ヘラ削り	東壁寄り	完形
69-13 80	土師器 甕	①(21.6)	②(23.4)	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③赤褐色	胴部ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	南西部	胴下半部欠損
69-14 80	縄文土器	口縁部片		①中粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい褐色	燃糸L施紋。 口唇部は肥厚する。	覆土	中期後半
69-15 80	弥生土器	口縁部片		①中粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい黄橙色	口縁部縄文施紋。	覆土	中期
69-16 80	弥生土器	胴部片		①細粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい褐色	山形の沈線が施されている。	覆土	中期
69-17 80	弥生土器	胴部片		①中粒の砂を含む。 ②良 ③橙色	条線が施されている。 内面は丁寧なナデ。	覆土	中期

図番 PL.	器 種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
69-18-80	凹石	完形	点紋絹雲母石 墨片岩	13.7	7.2	3.0~3.8	560	両面に計3個の凹みが認められる。	覆土 縄文

[3] B区検出の遺構と遺物



第71図 B区16号住居跡

B区16号住居跡 (第71・72図、PL.44・80)

位置 Na-27、Nb-27・28グリッドにかけて検出された。B区1号住居跡の北西約2mの所に位置している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺3m、短辺1.7mである。

方位 N-45°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4(2~4)層に分かれた。5層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約10cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床面 やや凹凸がある。現状での面積は約2.1m²。

掘り方 全体的に凹凸がある。

周溝 検出できなかった。

竈 北東壁から検出された。間口約60cm、奥行約50cmの半円状の掘り方をもつ。残存部分でロームを約5cm掘り下げている。焚口には砂岩の切石を横につけ、袖石も同様と推定される。

柱穴 検出できなかった。

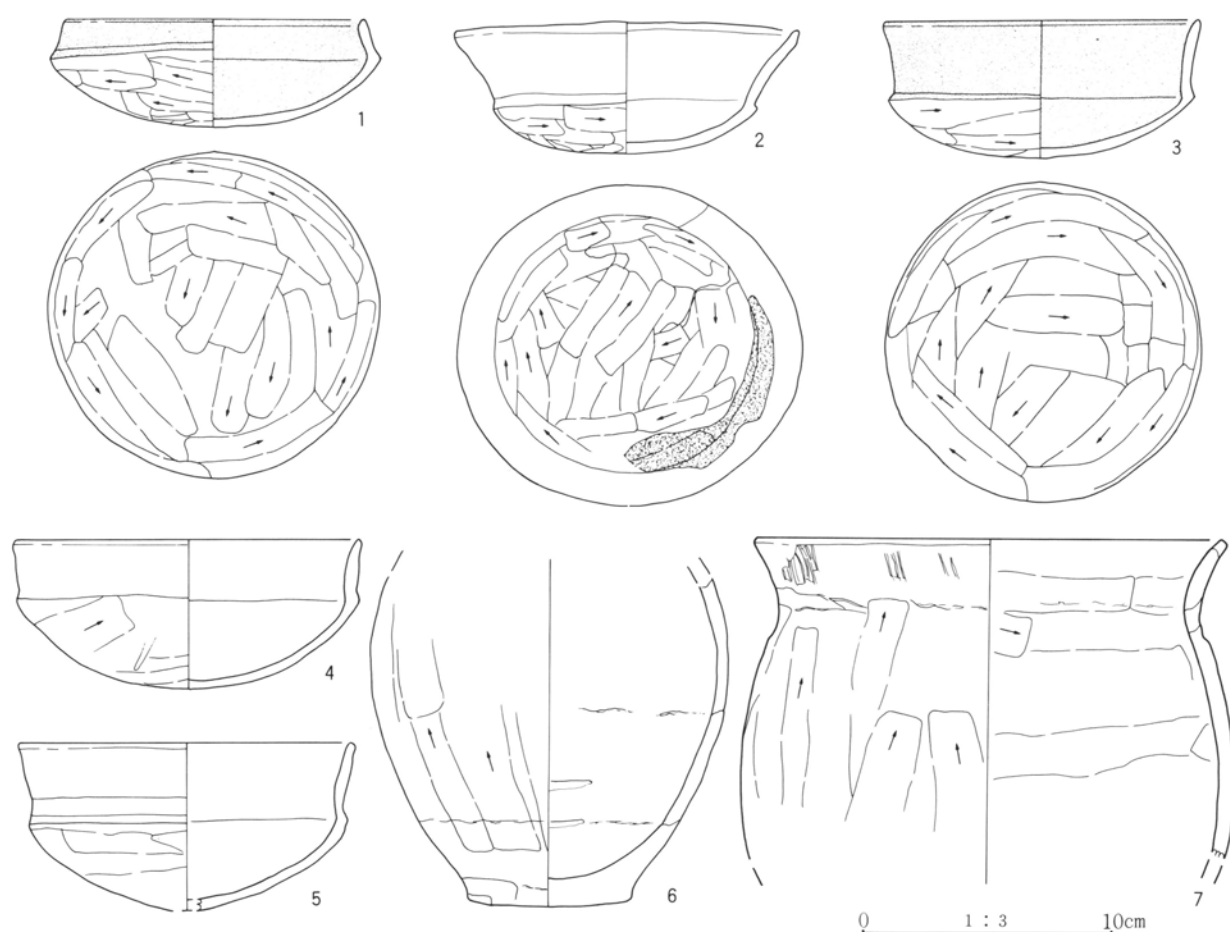
貯蔵穴 長径61cm、短径52cm、深さ55cmを測る。

遺物 貯蔵穴周辺から土師器の坏や甕が出土している。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀前半の段階に相当する。

B区16号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)		①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径	②器高③底径				
72-1 80	土師器 坏	①11.8 ②4.2		①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ内面丁寧なナデ。口縁内外面に漆と思われる痕跡。	P1	完形
72-2 80	土師器 坏	①13.6 ②5.3		①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③黄褐色	底面へら削り。口縁部、内面丁寧なナデ。	P1	完形 外面に煤が附着
72-3 80	土師器 坏	①12.4 ②5.4		①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ内面ナデ、口縁部内外面に黒漆と思われる痕跡。	P1	完形
72-4 80	土師器 坏	①(13.5) ②6.0		①細粒の砂、赤色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	北壁寄り	1/2残存
72-5 80	土師器 坏	①(13.7) ②(6.6)		①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面へら削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	北壁寄り	1/4残存
72-6 80	土師器 小型甕	②(13.0) ③6.2		①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③赤褐色	底面ナデ、胴部外面へら削り。内面丁寧なナデ。	北壁寄り	胴下半部
72-7 80	土師器 小型甕	①18.5 ②(12.5)		①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面へら削り、口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	P1	口縁~胴上半 1/3



第72図 B区16号住居跡出土遺物

B区7号土坑 (第73図、PL.45)

位置 Np-24・25グリッドにかけて検出された。8号土坑と重複している。

規模 現状では長径142cm、短径62cm、深さ約22cmを測る。

時期 不明。覆土からは遺物の出土はなかった。

B区8号土坑 (第73図、PL.45)

位置 Np-24、Nq-24グリッドにかけて検出された。7・9号土坑と重複している。

規模 長辺370cm、短辺70cm、深さ約36~50cmを測る。

時期 不明。覆土からは遺物の出土はなかった。

B区9号土坑 (第73図、PL.45)

位置 Np-24において検出された。8号土坑によって壊されている。

規模 長径128cm、短径100cm、深さ約56cmを測る。

時期 不明。覆土からは縄文土器片1点、土師器片43点、須恵器片7点が出土している。

B区10号土坑 (第73図、PL.45)

位置 Nv-21・22グリッドにかけて検出された。

規模 長径140cm、短径136cm、深さ約50cmを測る。

時期 覆土からは縄文土器片2点、土師器片18点が出土しているが、江戸期の構築。

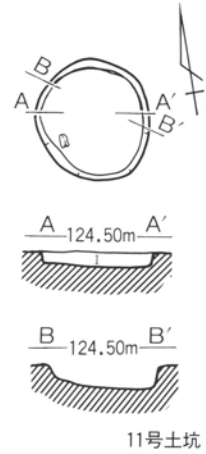
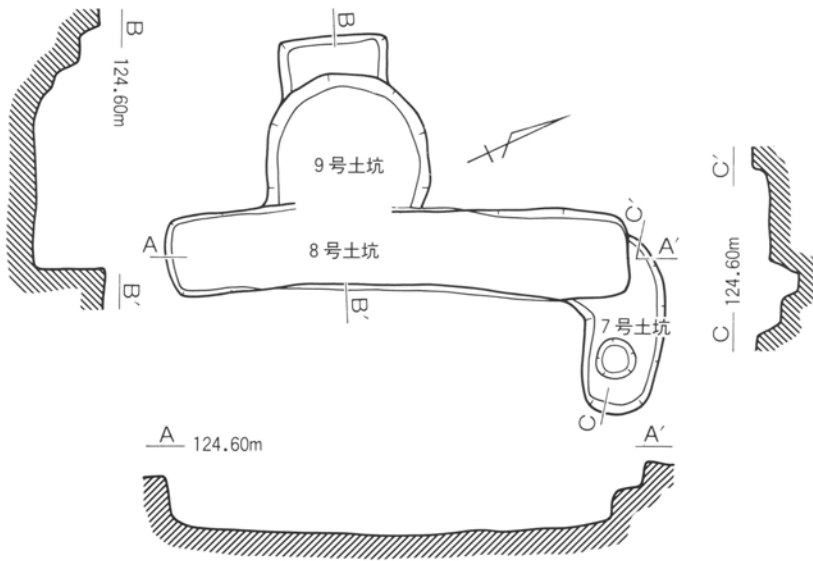
B区11号土坑 (第73図、PL.45)

位置 No-24グリッドにおいて検出された。B区13号住居跡に接している。

規模 長径98cm、短径90cm、深さ約12cmを測る。

時期 不明。覆土からは遺物の出土はなかった。

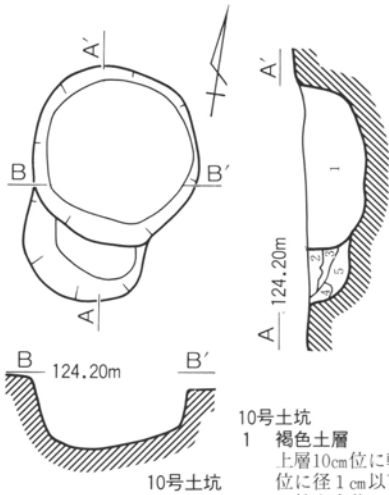
[3] B区検出の遺構と遺物



11号土坑

11号土坑

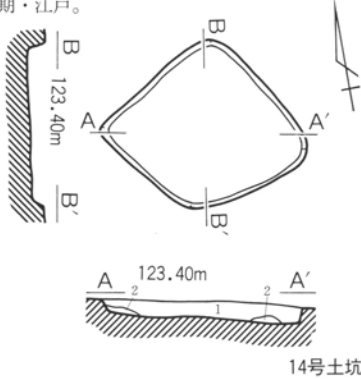
1 暗褐色土層 As-Bとローム粒を少量含む。



10号土坑

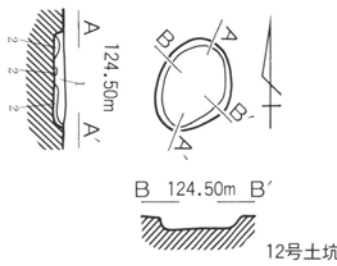
1 褐色土層
上層10cm位に軽石、下位に径1cm以下のローム粒を全体に含む。

- 2 褐色土層 1層と同一性状。軽石、ローム粒は少ない。
 - 3 褐色土層
 - 4 褐色土層 壁際の崩落土。ロームは斑状。
 - 5 褐色土層 褐色土を主体にロームと黒色土との混土。
- 2 基の土坑の埋土。1層-10号土坑、2~5層-古い土坑全体に均質、緻密で、1層については人為的に埋没か。時期・江戸。



14号土坑

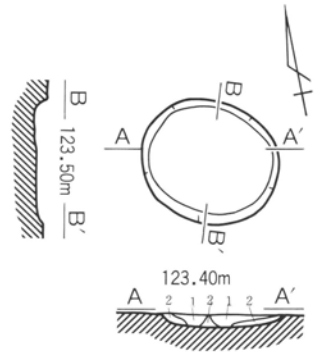
- 13・14号土坑
- 1 暗褐色土層 黒色ブロックを少量含む。
 - 2 黄褐色土層 ローム粒と黒色ブロックを混入。



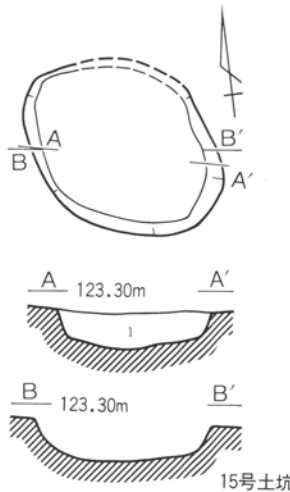
12号土坑

12号土坑

1 暗褐色土層 黒色ブロックを少量含む。
2 黄褐色土層 ロームの比率が多い。



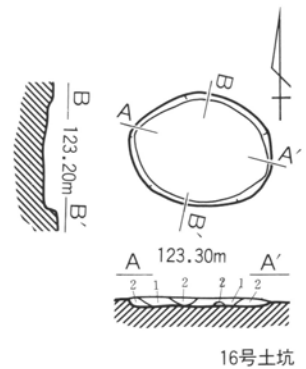
13号土坑



15号土坑

15号土坑

1 暗褐色土層 ローム小ブロックを斑点状に混入。



16号土坑

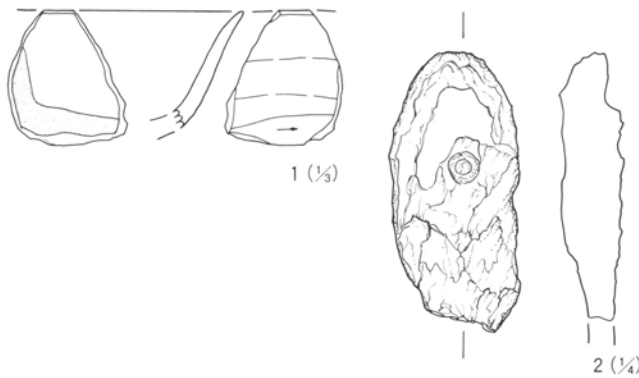
16号土坑

1 暗褐色土層 褐色土と黒色土の混土。
2 黄褐色土層 褐色土とロームブロックの混土。

0 1:60 2m

第73図 B区7号~16号土坑

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



第74図 B区9号土坑出土遺物

B区9号土坑

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
74-1 80	須恵器 坏	口縁部片	①細粒の砂を含む。 ②還元焰 ③灰色	右回転クロ整形。底面回転ヘラ削り、 内面に漆附着。		破片

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
74-2・80	凹石	完形	絹雲母石墨片岩	14.0	6.7	1.5~3.2	420	片面に1個の凹みが認められる。	覆土 縄文

B区12号土坑 (第73図、PL.46)

位置 Nn-25グリッドにおいて検出された。B区13号住居跡に近接している。

規模 長径78cm、短径58cm、深さ約8cmを測る。

時期 不明。覆土からは遺物の出土はなかった。

B区13号土坑 (第73図、PL.46)

位置 Nf-27、Ng-27グリッドにかけて検出された。B区14号土坑の南約3mの所に位置している。

規模 長径110cm、短径95cm、深さ約10cmを測る。

時期 不明。覆土からは遺物の出土はなかった。

B区14号土坑 (第73図、PL.46)

位置 Ne-27、Nf-27グリッドにかけて検出された。B区15号土坑の南西約3mの所に位置している。

規模 長径125cm、短径115cm、深さ約12cmを測る。

時期 不明。覆土からは縄文土器片2点、土師器片8点、須恵器片1点が出土している。

B区15号土坑 (第73図、PL.46)

位置 Nd-27・28、Ne-27・28グリッドにかけて検出された。B区16号土坑の南約1.4mの所に位置している。

規模 長径145cm、短径135cm、深さ約28cmを測る。

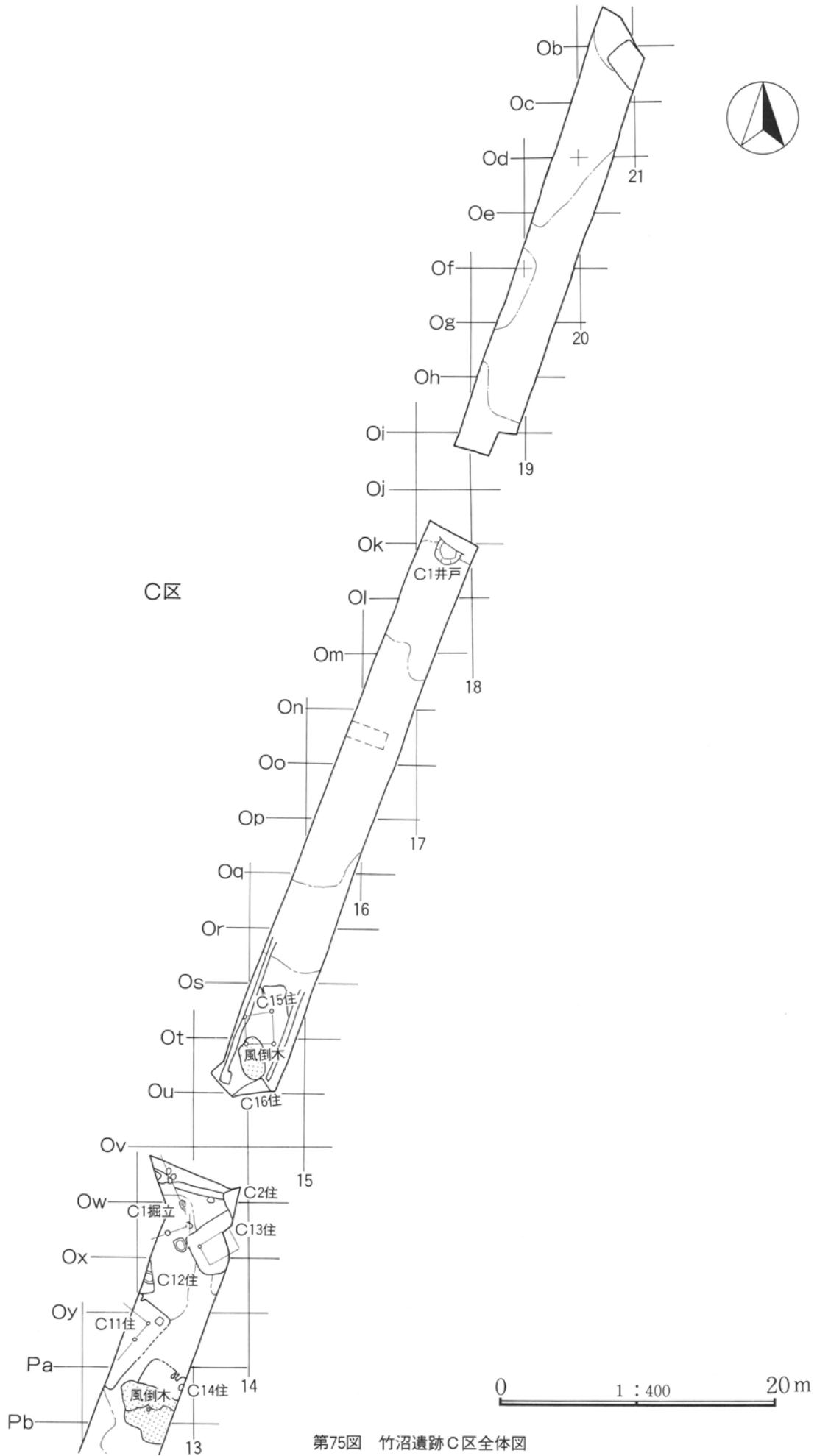
時期 不明。覆土からは遺物の出土はなかった。

B区16号土坑 (第73図)

位置 Nd-27・28グリッドにかけて検出された。B区15号土坑の北約1.4mの所に位置している。

規模 長径115cm、短径90cm、深さ約7cmを測る。

時期 不明。覆土からは遺物の出土はなかった。



第75図 竹沼遺跡C区全体図

[4] C区検出の遺構と遺物

C区11号住居跡 (第76~80図、PL.47・48・80・81)

位置 Ox-11・12、Oy-11・12、Pa-11グリッドにかけて検出された。C区14号住居跡の北西約1mの所、C区12号住居跡に接している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺6.8m、短辺3.4mである。

方位 N-42°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は7(3・a~f)層に分かれた。a~f層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約20~30cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約11.8m²。南東壁下中央部に浅い掘り込みが検出されたが、住居出入り口部になる可能性がある。

掘り方 壁に沿って幅80cm程掘り込まれている。

周溝 検出できなかった。

竈 北東壁のほぼ中央部と思われる位置から検出され、燃焼部の大部分は床面に構築されている。袖部約60cmが残存している。規模は煙道方向70cm、両袖方向55cmである。また、竈周辺には焼土・炭化物を含んだ粘土の分布が認められた。

柱穴 3個のピットが検出された。P1は長径30cm、短径20cm、深さ37cm。P2は長径65cm、短径(29cm)、深さ36cm。P4は長径27cm、短径26cm、深さ33cmである。P3は貯蔵穴になる。

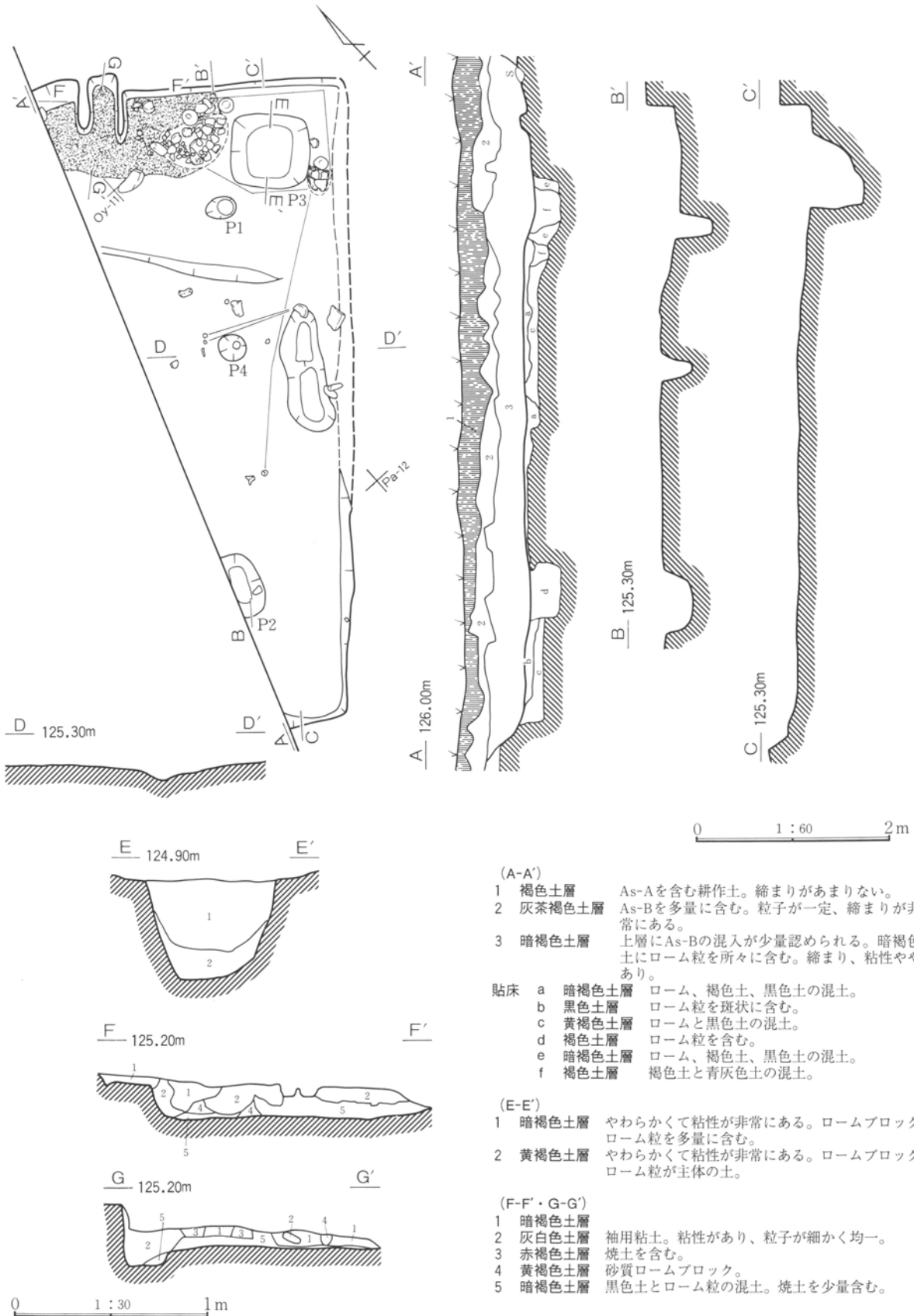
貯蔵穴 床面北東隅から検出された。規模は長径81cm、短径76cm、深さ51cmである。

遺物 土師器の坏や甕が竈と貯蔵穴の中間から出土している。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀後半の段階に相当する。

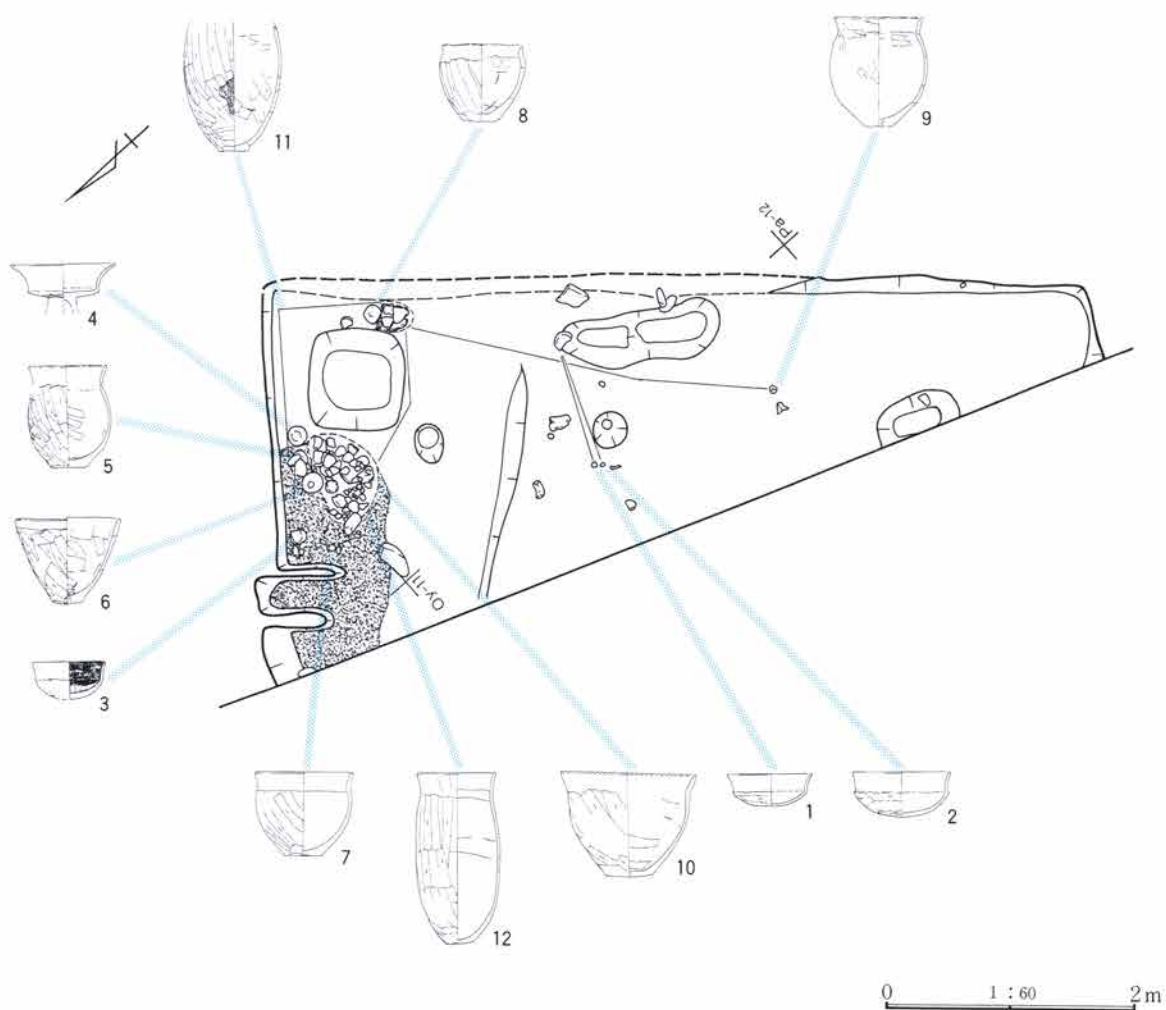
C区11号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量(cm)		①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径	②器高③底径				
79-1 80	土師器 坏	①13.4 ②5.1		①細粒の砂、赤色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	P4周辺	完形
79-2 80	土師器 坏	①11.4 ②5.9		①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面吸炭による黒色処理。ミガキ。	P4周辺	口縁部一部欠損
79-3 80	土師器 坏	①(15.5) ②(7.2)		①細粒の砂、赤色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。ヘラの工具痕。	北東壁寄り	2/3残存
79-4 80	土師器 高坏	①16.4 ②(6.9)		①細粒の砂、赤色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	坏部底面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	北東壁寄り	脚部欠損
79-5 80	土師器 小型甕	①12.4 ②16.1 ③5.5		①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面・胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	北東壁寄り	完形
79-6 80	土師器 小型甕	①16.8 ②13.6 ③5.0		①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。輪積み痕。	北東壁寄り	完形
79-7 80	土師器 鉢	①(15.7) ②(13.2)③(6.0)		①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面・胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	カマド周辺	口縁~胴下半部一部欠損
79-8 80	土師器 鉢	①12.6 ②12.1 ③5.6		①細粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面・胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。ヘラの工具痕。	貯蔵穴周辺	口縁部一部欠損
79-9 80	土師器 小型甕	①(14.2) ②17.2 ③(4.2)		①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。	貯蔵穴周辺	1/2残存
79-10 80	土師器 鉢	①21.5 ②16.5 ③7.5		①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③赤褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	貯蔵穴周辺	口縁部一部欠損
79-11 81	土師器 甕	②(26.5) ③6.4		①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。内面丁寧なナデ。	東壁寄り	胴下半部炭化物付着
79-12 81	土師器 甕	①16.8 ②36.2③5.8		①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。輪積み痕。	カマド周辺	完形

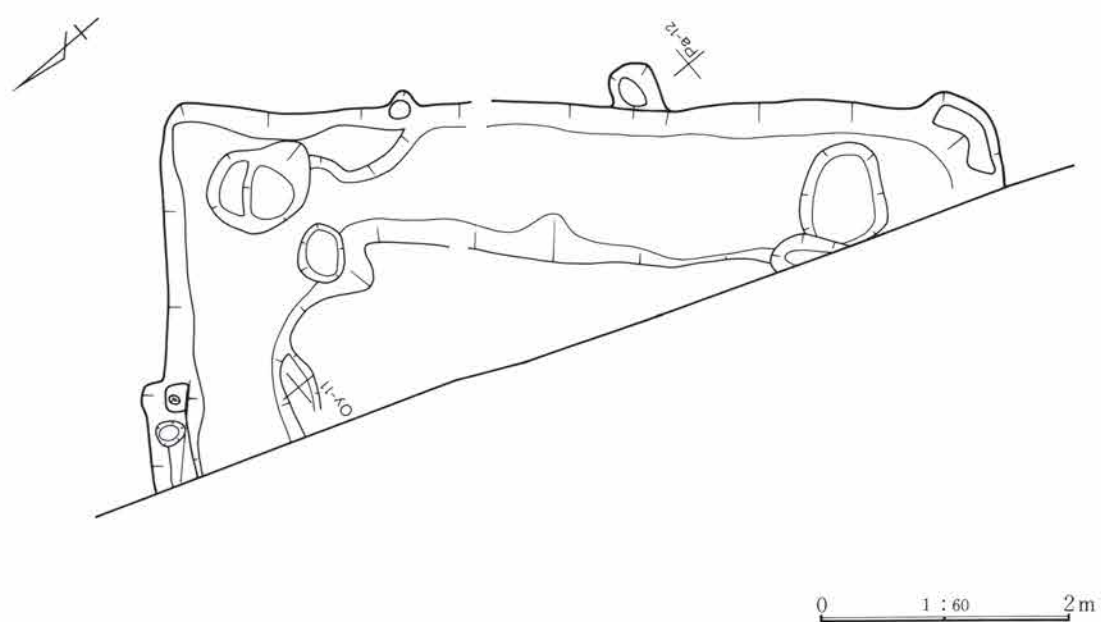


第76図 C区11号住居跡

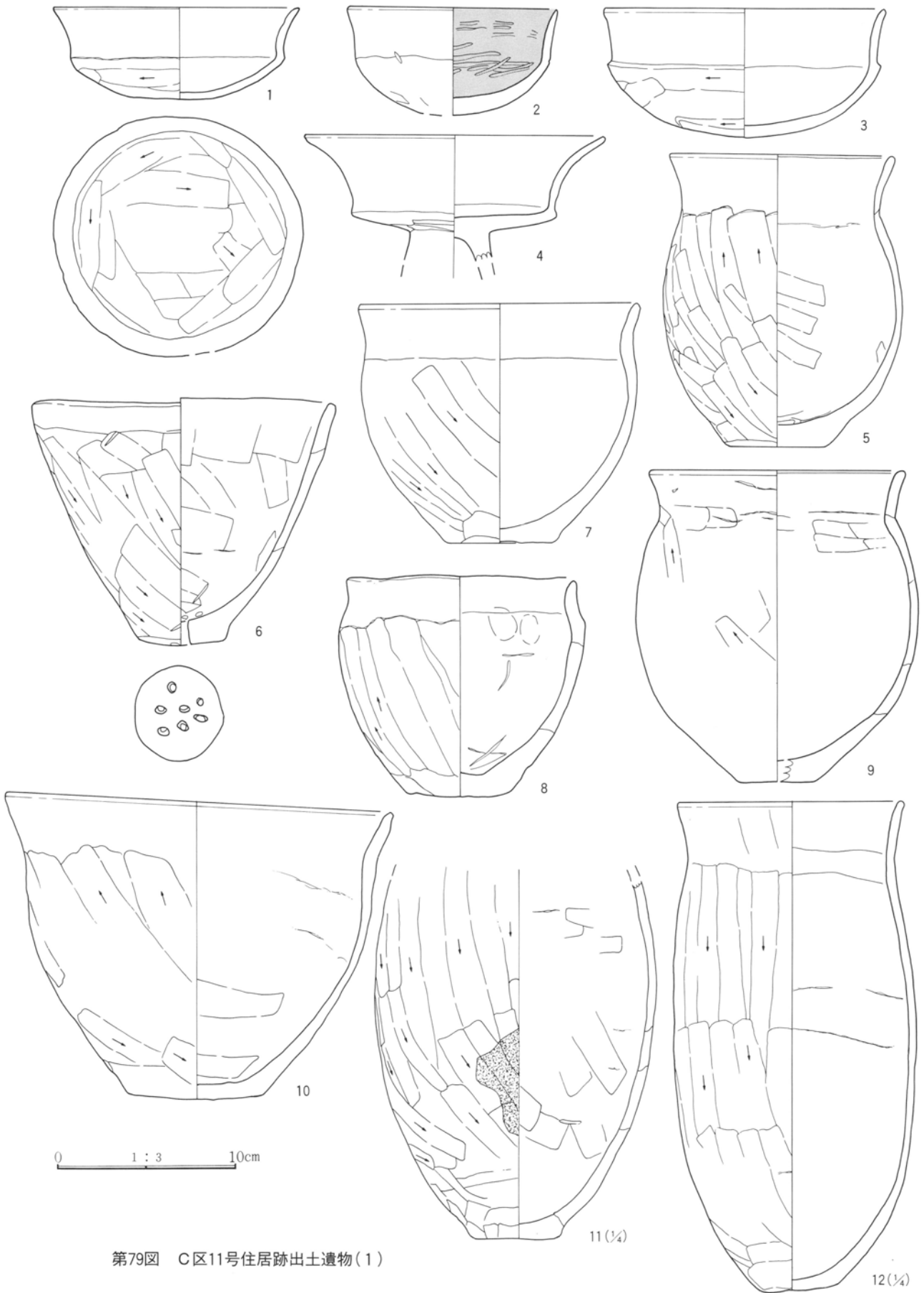
第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



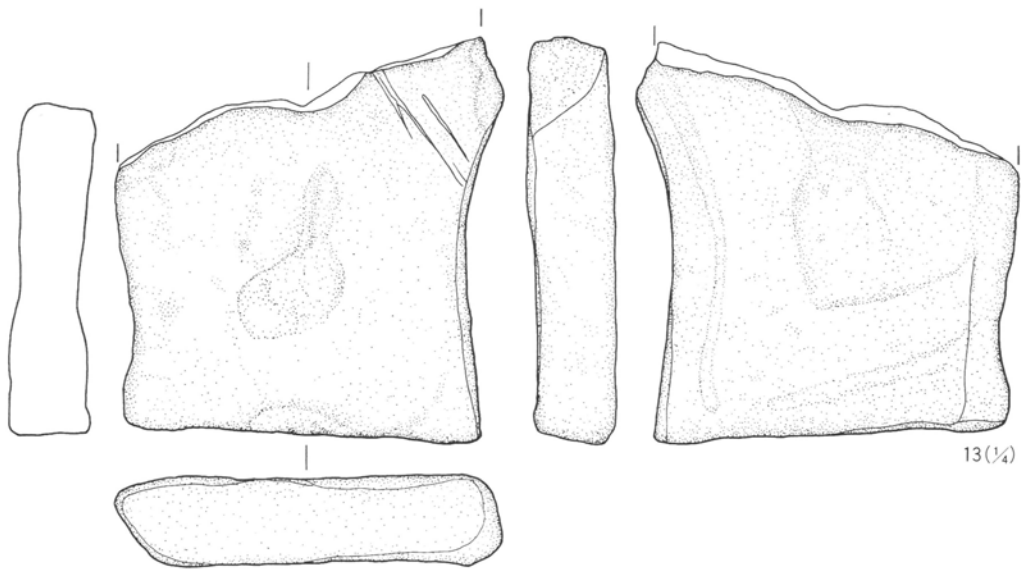
第77図 C区11号住居跡遺物分布図



第78図 C区11号住居跡掘り方



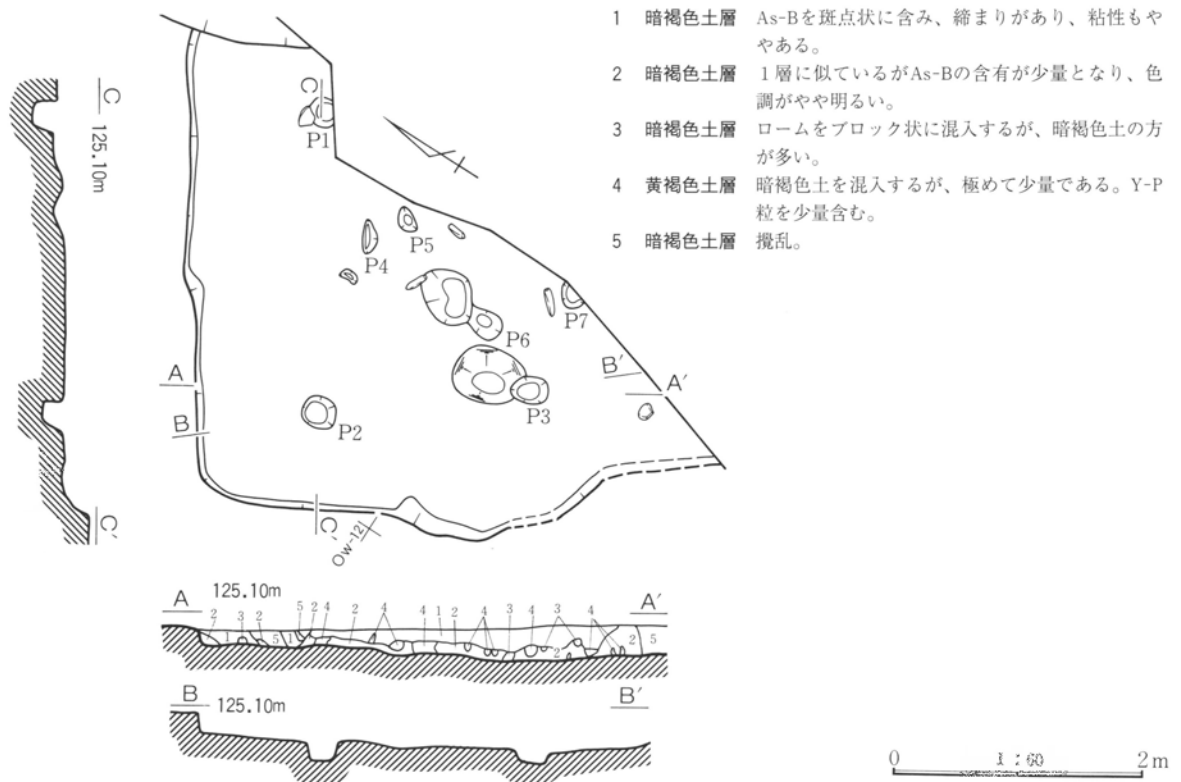
第79図 C区11号住居跡出土遺物(1)



第80図 C区11号住居跡出土遺物(2)

C区11号住居跡

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
79-13・81	砥石	一部欠損	砂岩	(21.3)	18.0	3.0~4.7	(2350)	置砥として使用。	覆土



第81図 C区13号住居跡

C区13号住居跡 (第81図、PL.50)

位置 Ow-12・13、Ox-13グリッドにかけて検出された。C区2号住居跡と重複している。

形状 完掘できなかつたが、現状では長辺4.2m、短辺3.7mである。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約10~22cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 やや凹凸がある。現状での面積は約9.2㎡。

掘り方 全体的に凹凸がある。

周溝 検出できなかつた。

竈 検出できなかつた。

柱穴 7個のピットが検出された。P1の深さは14cm、P2の深さ16cm、P3の深さ11cm、P4の深さ13cm、P5の深さ8cm、P6の深さ8cm、P7の深さ5cmである。

貯蔵穴 検出できなかつた。

遺物 覆土から遺物の出土はほとんどなかつた。

時期 覆土等から6世紀代と考えられる。

C区14号住居跡 (第82・83図、PL.51・81)

位置 Oy-12、Pa-12、Pb-12グリッドにかけて検出された。C区11号住居跡の南東約1mの所に位置している。風倒木によって住居跡の南半分を壊され

ている。

形状 完掘できなかつたが、現状では長辺5m、短辺3mである。

方位 N-31°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築されている。

壁高 住居跡確認面より約5cmで床面に達する。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約14.9㎡。

掘り方 全体的にやや凹凸がある。

周溝 検出できなかつた。

竈 北東壁の中央部と思われる位置から検出され、燃烧部の大部分は床面に構築されている。袖部約80cmが残存している。規模は煙道方向90cm、両袖方向65cmである。竈には袖石と支石、甕が残されていた。

柱穴 3個のピットが検出された。P1の深さは16cm、P2深さ27cm、P3深さ3cmである。P1・P2は主柱穴になるものと考えられる。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。完掘できなかつたが、現状での規模は長径40cm、短径(22cm)、深さ30cmである。

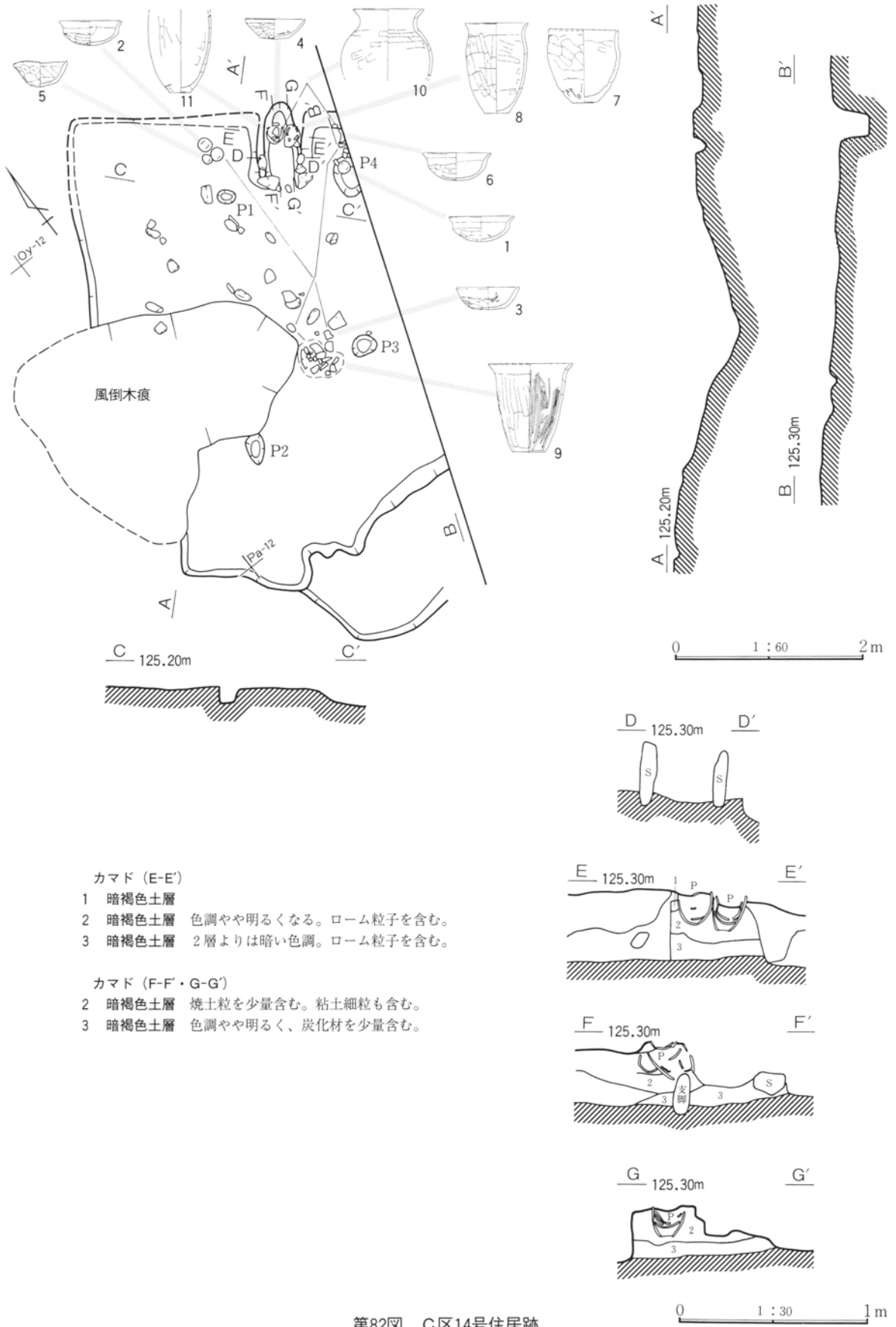
遺物 土師器の坏や甕が竈と貯蔵穴の周辺から出土している。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀前半の段階に相当する。

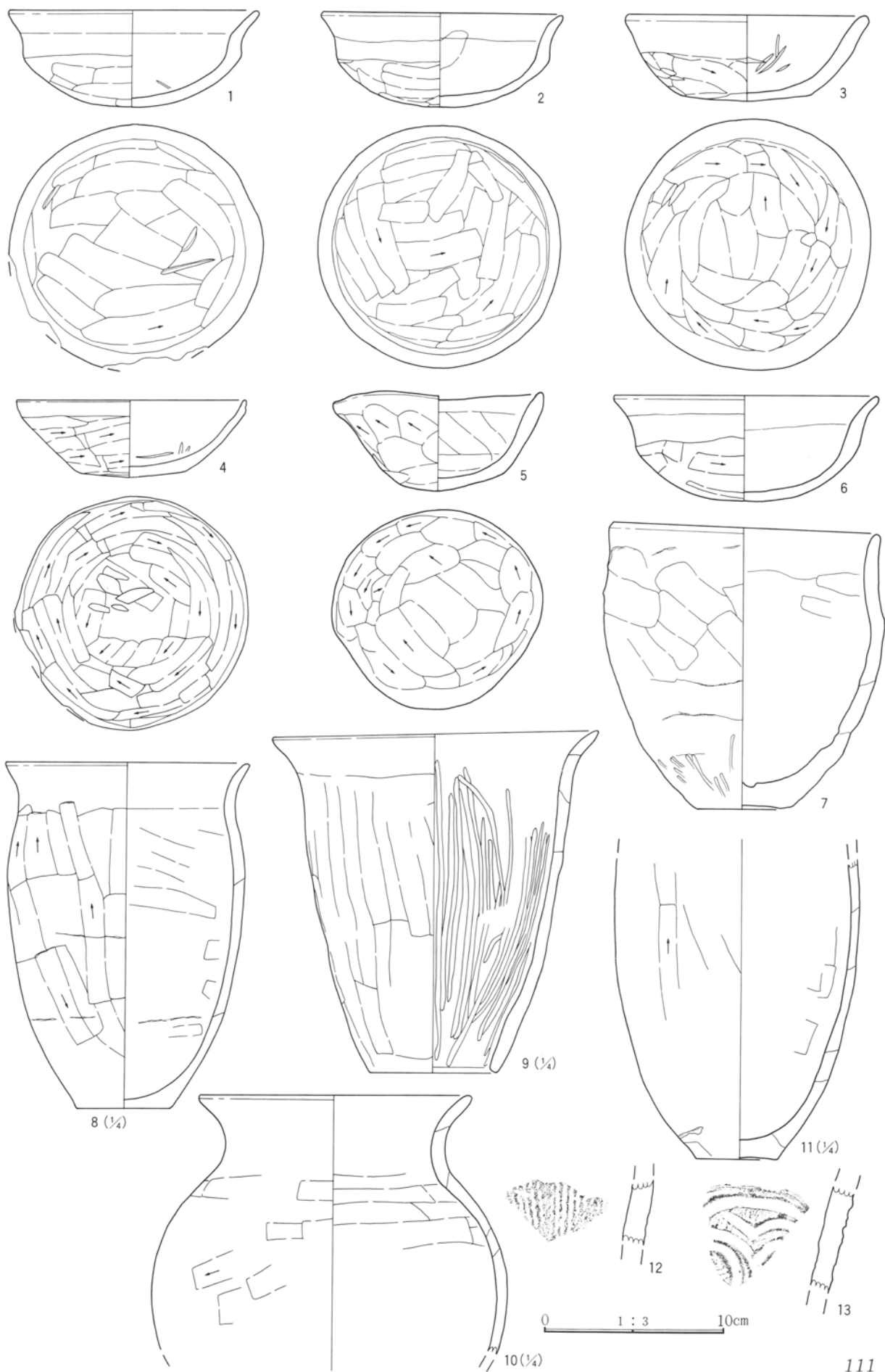
C区14号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
83-1 81	土師器 坏	①13.5 ②5.3	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。ヘラの工具痕。	P4内	ほぼ完形
83-2 81	土師器 坏	①13.2 ②5.1	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。ヘラの工具痕。	北壁寄り	完形
83-3 81	土師器 坏	①13.2 ②4.6 ③7.0	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面・体部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ。ヘラの工具痕。	中央部	完形 器厚は厚い
83-4 81	土師器 坏	①12.5 ②4.2 ③6.1	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面・体部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。ヘラの工具痕。	カマド	完形
83-5 81	土師器 坏	①11.4 ②5.3	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面・体部ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	北壁寄り	完形 器厚は厚い
83-6 81	土師器 坏	①14.3 ②5.8	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北東壁寄り	ほぼ完形
83-7 81	土師器 小型甕	①14.8 ②15.4 ③5.6	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	カマド	口縁部一部欠損
83-8 81	土師器 甕	①17.8 ②25.2 ③7.0	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面剥落、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	カマド	口縁~胴上半部一部欠損

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



第82図 C区14号住居跡



第83图 C区14号住居跡出土遺物

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査

C区14号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)		①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径	②器高				
83-9 81	土師器 甗	①24.0 ②24.8	③9.3	①細粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焙 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ、ミガキ。	中央部	胴部一部欠損
83-10 81	土師器 壺	①20.0 ②(18.9)		①細粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焙 ③橙色	胴部外面ヘラ削り不明瞭、口縁部横ナデ。内面ナデ。	カマド	胴下半部欠損
83-11 81	土師器 甕	①(21.9) ②(6.0)		①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焙 ③赤褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り不明瞭。内面ナデ。	カマド	胴上半部欠損
83-12 81	縄文土器	胴部片		①中粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい褐色	捺糸し施紋。	覆土	中期後半
83-13 81	縄文土器	胴部片		①中粒の砂を含む。 ②良 ③灰褐色	沈線による文様。	覆土	中期

C区15号住居跡 (第84・85図、PL.52・82)

位置 Os-13・14、Ot-13・14グリッドにかけて検出された。C区16号住居跡と接し、C区2号住居跡の北約8mの所に位置している。風倒木によって住居跡の南部を壊されている。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺6.8m、短辺4.7mである。

方位 N-7°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約10cmで床面に達する。

床面 やや凹凸がある。現状での面積は約23.8㎡。

周溝 検出できなかった。

竈 北壁から検出されたが、残存状況は非常に悪く、焼土の堆積が認められただけであった。

柱穴 10個のピットが検出された。このうちP1~P4は支柱穴になると考えられる。P1の深さは25cm、P2深さ15cm、P3深さ35cm、P4深さ42cmである。P5は貯蔵穴になる。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。規模は長径63cm、短径60cm、深さ20cmである。

遺物 土師器壺の破片や小型土器が出土してい

る。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀の段階に相当する。

C区16号住居跡 (第84図、PL.49)

位置 Ot-13・14グリッドにかけて検出された。C区15号住居跡の南に接している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺2.3m、短辺1.5mである。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築されている。

壁高 住居跡確認面より約16~30cmで床面に達する。

床面 やや凹凸がある。現状での面積は約1.9㎡。

周溝 検出できなかった。

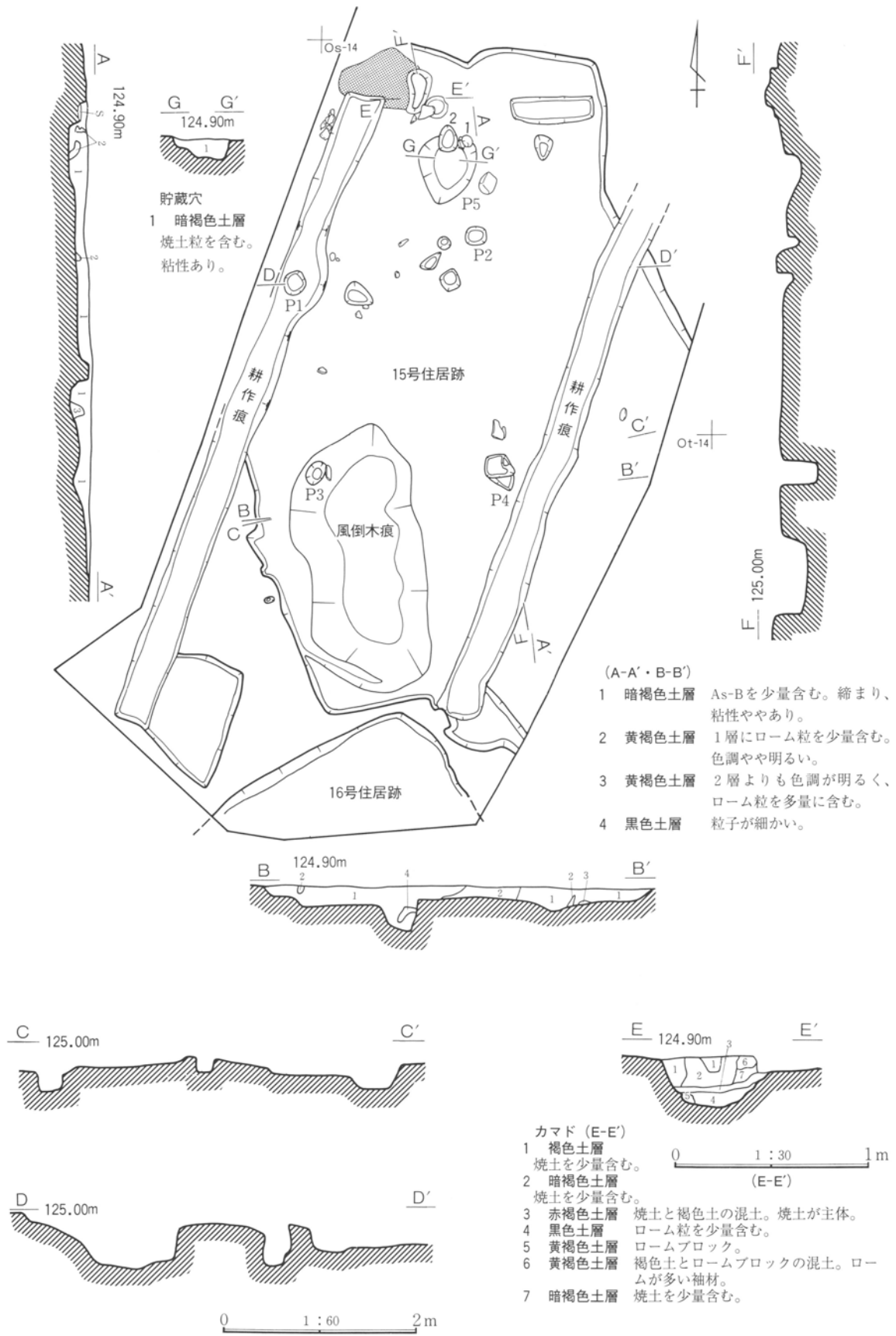
竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

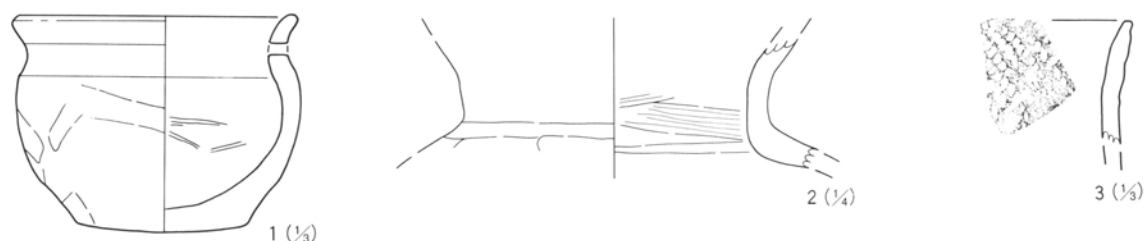
遺物 覆土からは遺物の出土はなかった。

時期 6世紀代。



第84図 C区15号住居跡・16号住居跡

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



第85図 C区15号住居跡出土遺物

C区15号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
85-1 82	土師器 鉢	①11.3 ②8.5 ③6.8	①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	P5周辺	完形 口縁部に 一対の穿孔
85-2 82	土師器 壺	②(6.8)	①粗粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面ヘラ削り不明瞭、口縁部横ナデ。 内面ナデ。	P5周辺	頸部全周
85-3 82	縄文土器	口縁部片	①細粒の砂を含む。 ②良 ③褐灰色	縄文施紋。原体はR比横位。 内面ナデ。	覆土	中期後半

C区2号住居跡 (第86図、PL.47)

位置 Ov-13、Ow-13グリッドにかけて検出された。C区13号住居跡と重複している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺2.5m、短辺1.2mである。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築されている。

壁高 住居跡確認面より約24~28cmで床面に達する。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約1.1m²。

周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土からは遺物の出土はなかった。

時期 奈良時代。市教委調査CH-2住と同一住居。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は3層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約18~30cmで床面に達する。

床面 やや凹凸がある。現状での面積は約1.6m²。

周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土からは遺物の出土はなかった。

時期 6世紀代。

C区1号掘立柱建物跡 (第86図、PL.52)

位置 Ov-12、Ow-12グリッドにかけて検出された。C区13号住居跡に接している。

規模 完掘できなかったために不明であるが、2間×3間になるものと考えられる。

柱穴 形状は径約38~56cmの楕円形を呈する。深さは6~41cmである。ピットから遺物の出土はなかった。

時期 不明。

C区12号住居跡 (第86図、PL.49)

位置 Ox-12グリッドにおいて検出された。C区11号住居跡に接している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺2.5m、短辺1.2mである。

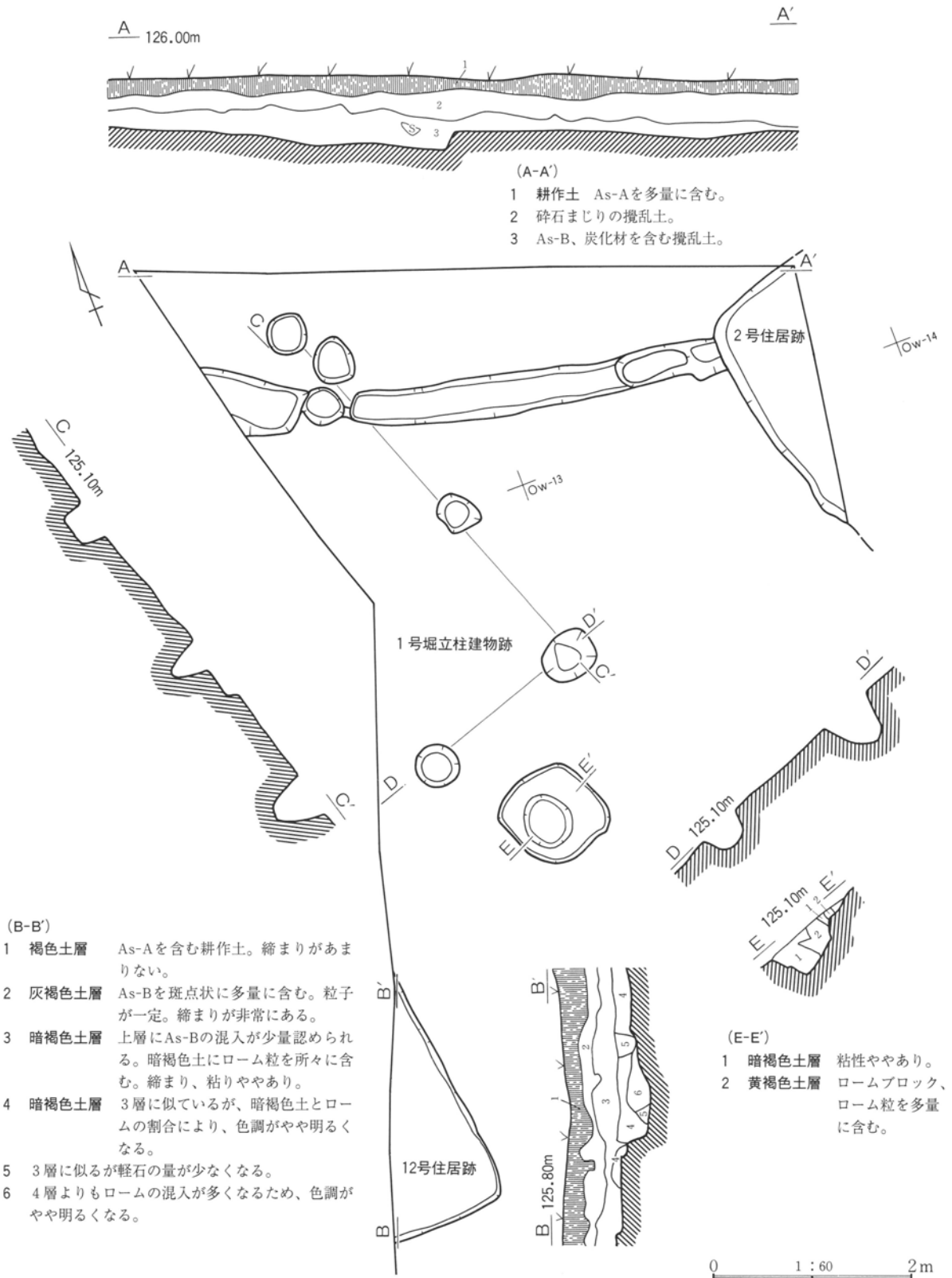
方位 不明。

C区1号井戸 (第87・88図、PL.82)

位置 Dj-17、Dk-17グリッドにかけて検出された。

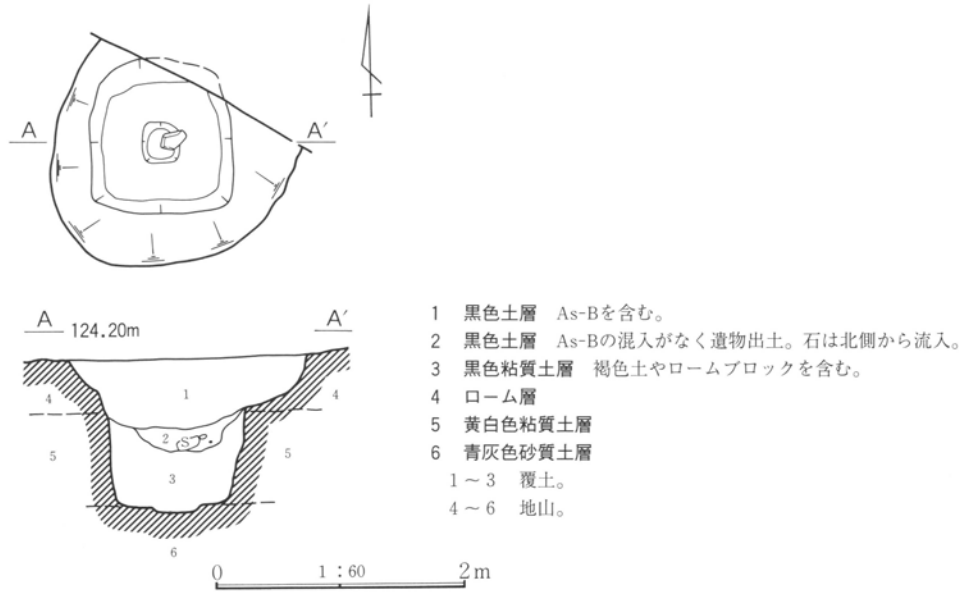
規模 確認面から30cm付近までは円形を呈し、さら

[4] C区検出の遺構と遺物

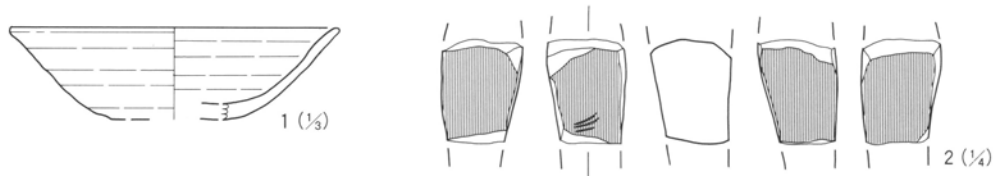


第86図 C区2号住居跡・12号住居跡・1号掘立柱建物跡

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



第87図 C区1号井戸



第88図 C区1号井戸出土遺物

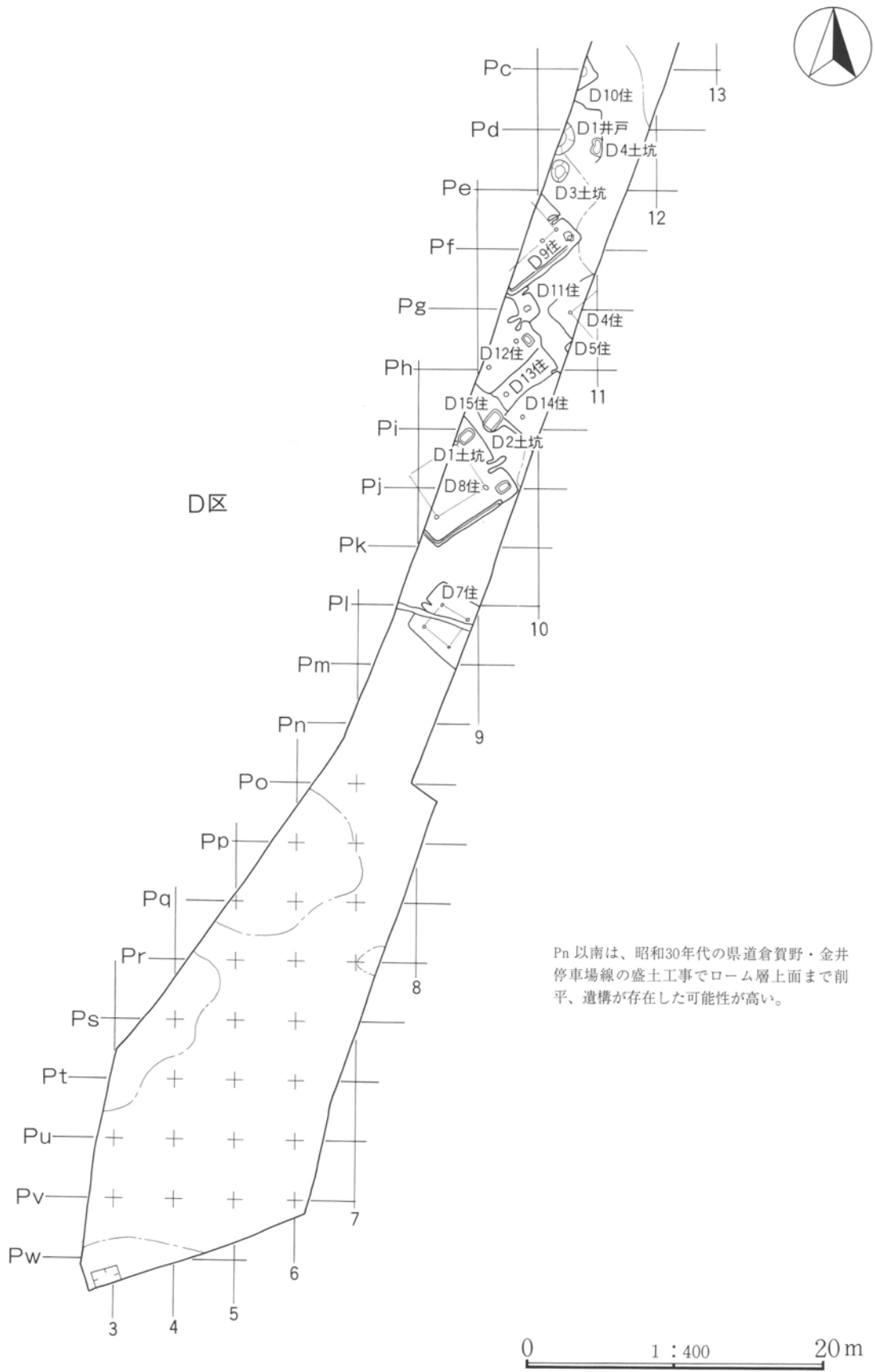
C区1号井戸

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)		①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径②器高③底径					
88-1 82	須恵器 坏	①(13.1) ②(3.6)③(5.0)		①細 白色鉍物粒を含む。 ②還元焰 ③灰オリーブ色	右回転クワ整形。	覆土	1/4残存

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
88-2・82	砥石	部分	砂岩	(5.5)	(4.1)	3.3~4.1	(160)	4側面を使用。	覆土

に方形に掘り込まれている。上面の規模は長径190cm、短径(155cm)である。方形の掘り込みは長

辺125cm、短辺123cm、深さ82cmである。確認面からの深さは123cmとなる。



Pn 以南は、昭和30年代の県道倉賀野・金井
 停車場線の盛土工事でローム層上面まで削
 平、遺構が存在した可能性が高い。

第89図 竹沼遺跡D区全体図

[5] D区検出の遺構と遺物

D区4号住居跡 (第90・91図、PL.56・82)

位置 Pf-10、Pg-10グリッドにかけて検出された。D区9号住居跡の南東約2mの所、D区5号住居跡と接している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺4.7m、短辺2.7mである。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5(3~5・a・b)層に分かれた。a・b層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約25cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約6m²。

掘り方 全体的にやや凹凸がある。

周溝 現状では全周している。幅約5~10cm、深さ約5~9cmである。

竈 検出できなかった。

柱穴 7個のピットが検出された。このうちP1は柱穴になる。P1の深さは22cm、P2深さ11cm、P3深さ8cm、P4深さ3cm、P5深さ5cm、P6深さ8cm、P7深さ3cmである。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土からは土師器片4点、縄文土器片2点が

出土している。

時期 明確な時期は不明であるが、当住居跡は6世紀の段階に相当すると考えられる。市教委調査DH-4住と同一住居。

D区5号住居跡 (第91図、PL.56)

位置 Pg-10グリッドにおいて検出された。D区4号住居跡に接している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺0.7m、短辺0.4mである。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は2層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約36cmで床面に達する。

床面 やや凹凸がある。現状での面積は約0.1m²。

周溝 検出できなかった。

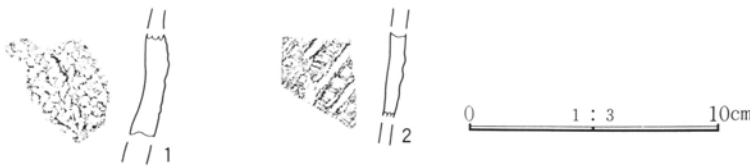
竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土からは遺物の出土はなかった。

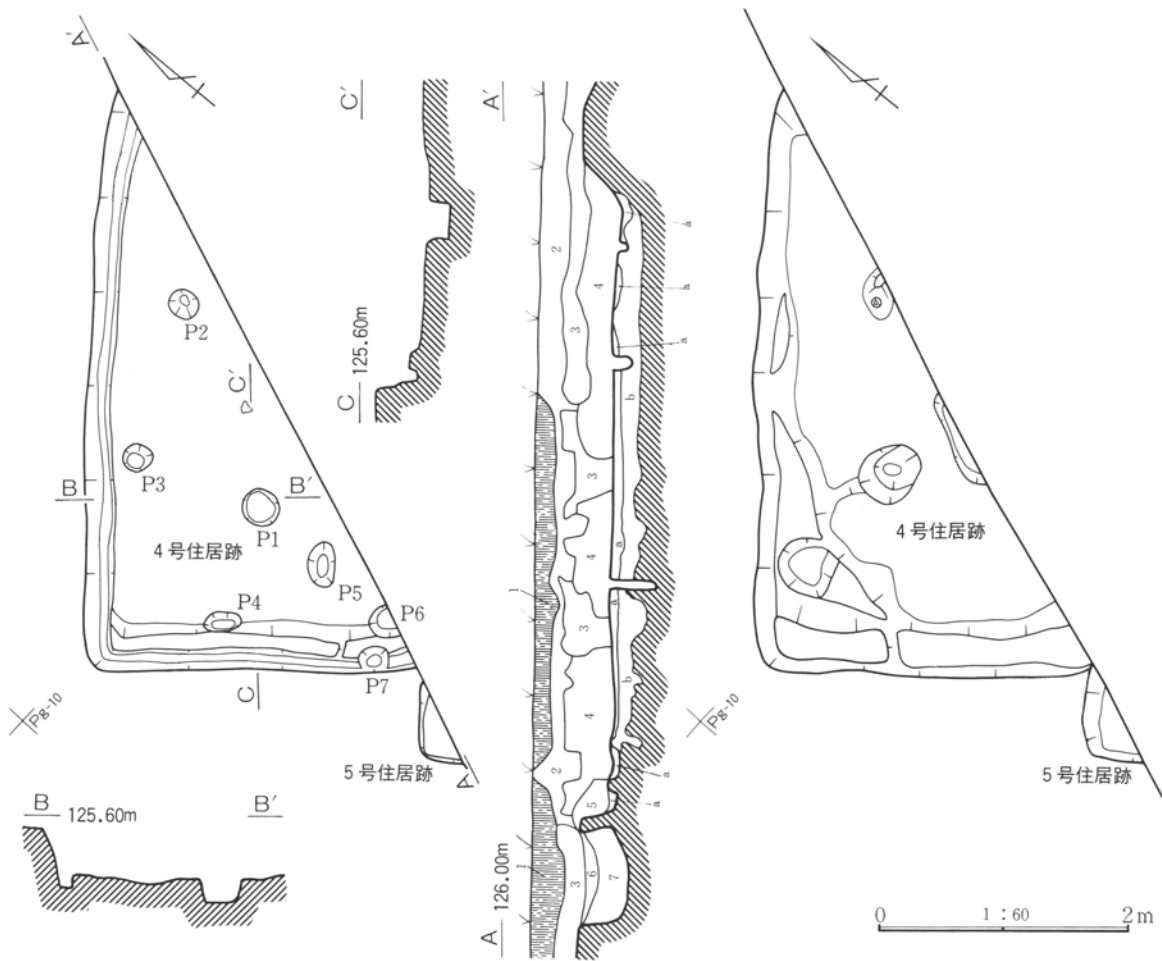
時期 6世紀代。市教委調査DH-5住と同一住居。滑石工房址。



第90図 D区4号住居跡出土遺物

D区4号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
			①胎土	②焼成	③色調			
90-1 82	縄文土器	胴部片	①細粒の砂、繊維を含む。 ②良 ③にぶい黄褐色	縄文施紋。組紐。乱推。内面は丁寧な調整。	覆土	前期関山式		
90-2 82	縄文土器	胴部片	①細粒の砂、繊維を含む。 ②良 ③灰褐色	縄文施紋。原体は直前段合燃。内面は丁寧な調整。	覆土	前期関山式		



- 1 攪乱土 バラス、細石、不純物を含む。
 - 2 灰茶褐色土層 As-Bを斑点状に含む。粒子が一定、締まりが非常にある。
 - 3 暗褐色土層 As-Bの混入が少量認められ、暗褐色土にローム粒を所々に含む。
 - 4 暗褐色土層 3層に似ているが、暗褐色土とロームの割合により色調がやや明るくなる。
 - 5 黄褐色土層 地山ロームを少量含んだ層。粘性、締まりがある。
 - 6 暗褐色土層 やや固く締まり粘性あり。ロームブロック・ローム粒子を含む。
 - 7 暗褐色土層 やや固く締まり粘性非常にあり。ロームブロック・ローム粒子を多量に含む。
- 掘り方 a 黄褐色土層 ロームと黒色土との混土。貼床材、固い。
 b 暗褐色土層 ロームと黒色土、褐色土との混土。各々は5cm大のブロック状。

第91図 D区4号住居跡・5号住居跡

D区7号住居跡 (第92~94図、PL.57・58・82)

位置 Pk-8、P1-7・8、Pm-8グリッドにかけて検出された。D区8号住居跡の南約2mの所に位置している。住居跡中央部を耕作溝によって壊されている。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺4.5m、短辺4.1mである。

方位 N-53°-W。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は7(3~6・a~c)層に分かれた。a~c層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約10~23cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約14.6㎡。

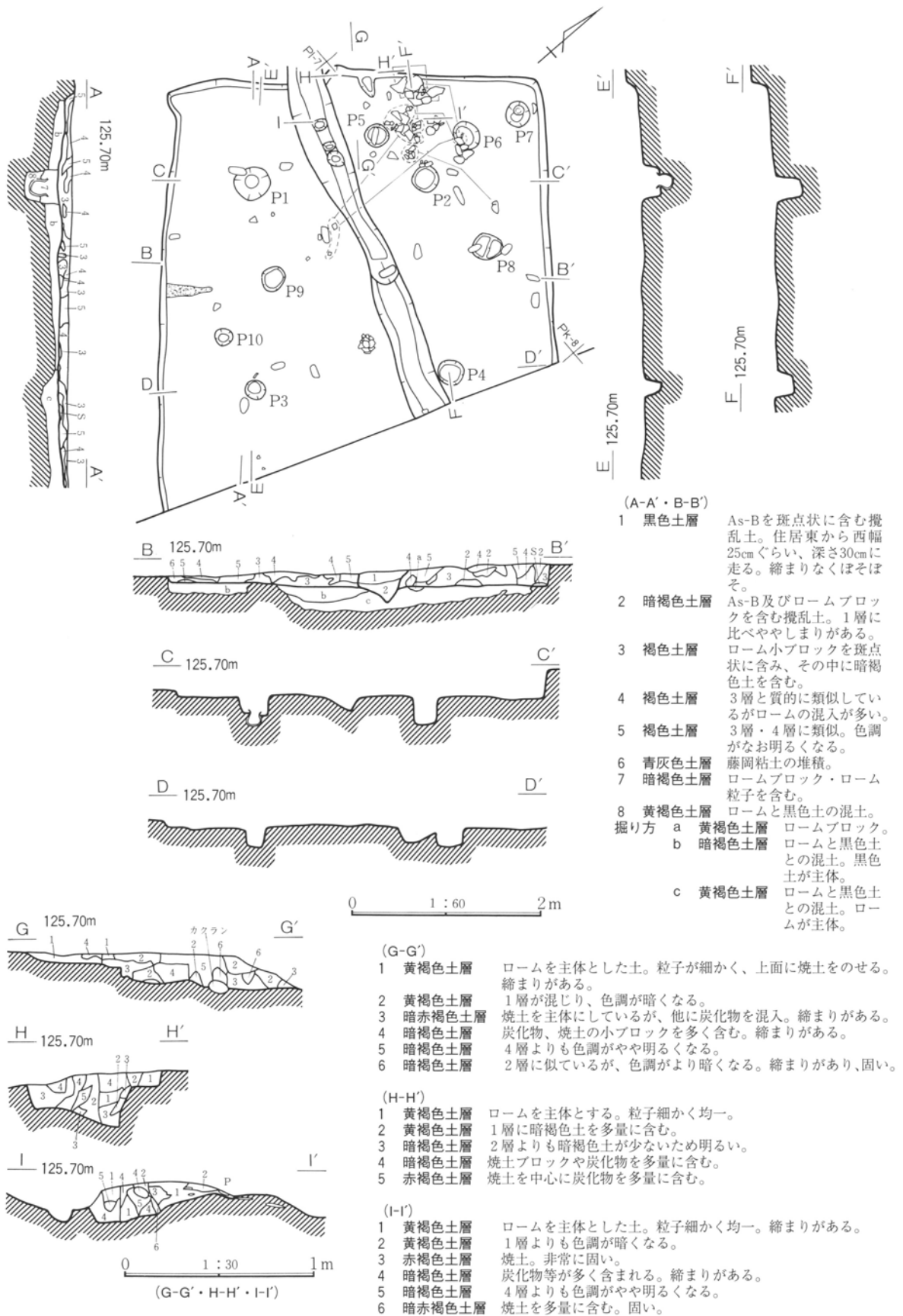
掘り方 全体的にやや凹凸がある。

周溝 検出できなかった。

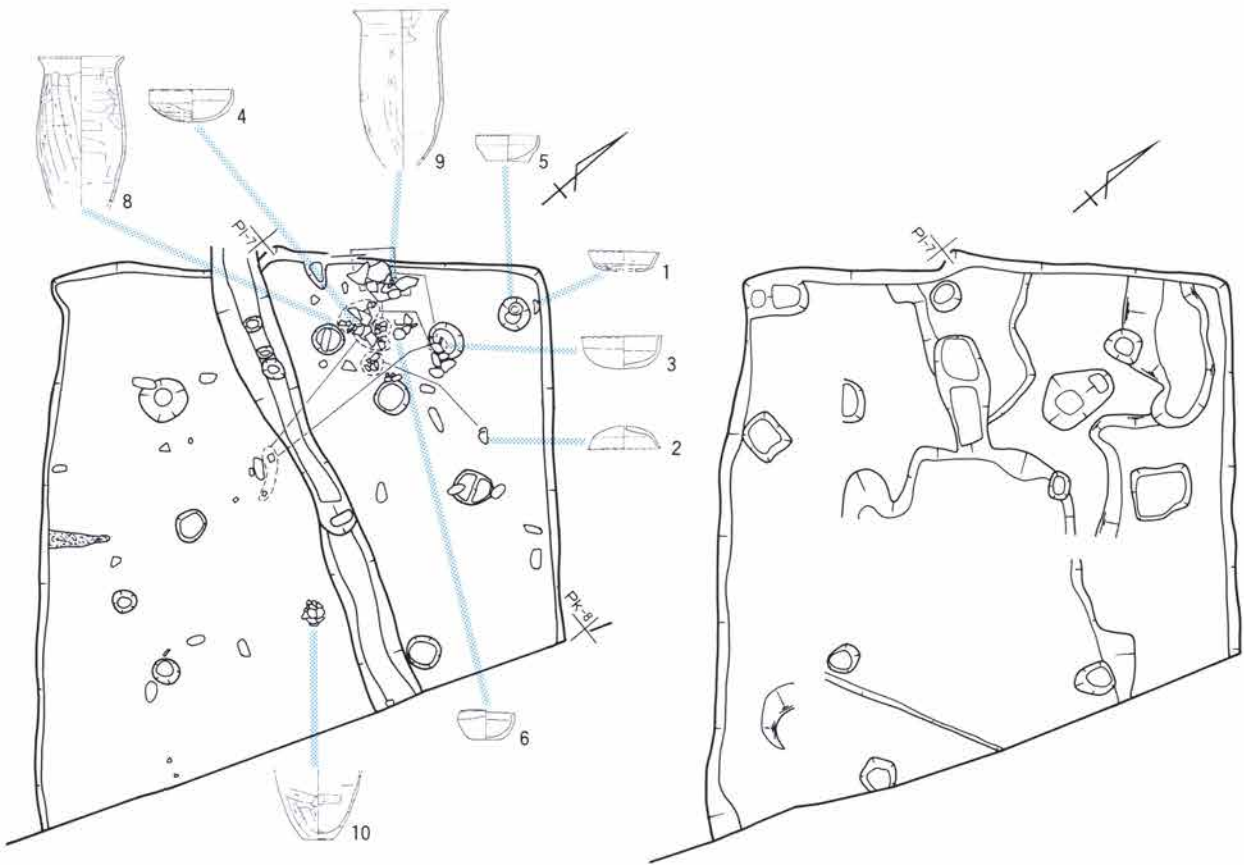
竈 北西壁の中央部から検出され、燃烧部の大部分は床面に構築されている。袖部約30cmが残存している。規模は煙道方向30cm、両袖方向推定70cmである。

柱穴 9個のピットが検出された。P1~P4が主柱穴となる。P1の深さは30cm、P2深さ28cm、P3深さ20cm、P4深さ20cmである。P5深さ5cm、P8深さ20cm、P9深さ15cm、P10深さ8cmである。

貯蔵穴 P6・P7が該当する可能性がある。P6の規



第92図 D区7号住居跡



第93図 D区7号住居跡遺物分布図と掘り方

0 1:60 2m

模は長径30cm、短径24cm、深さ13cm、P7の規模は長径26cm、短径24cm、深さ20cmである。

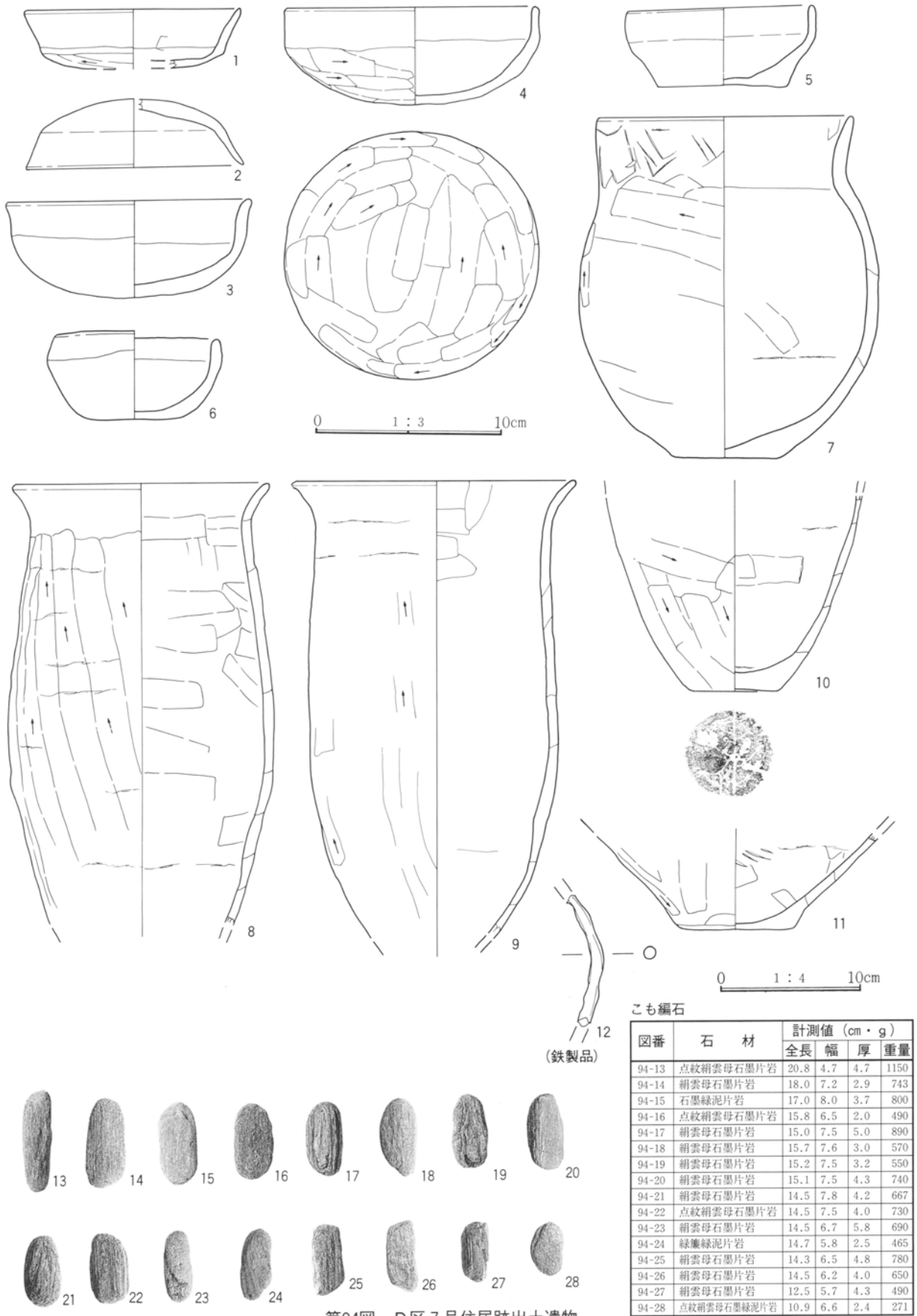
時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀後半の段階に相当する。

遺物 土師器の坏や甕が竈周辺と貯蔵穴内から出土している。

D区7号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径	②器高	③底径				
94-1 82	土師器 坏	①(11.5) ②(3.2)			①細粒の砂、赤色鉾物粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北壁寄り	1/3残存
94-2 82	須恵器 蓋	①(11.5) ②3.6			①細 ②還元焰 ③灰白色	右回転クロコ整形	北東部	1/2残存
94-3 82	土師器 坏	①12.9 ②5.1			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り不明瞭。口縁部横ナデ。内面ナデ。	P6	3/4残存
94-4 82	土師器 坏	①13.2 ②5.1			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	カマド周辺	口縁部一部欠損
94-5 82	土師器 坏	①10.0 ②4.1 ③6.8			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ。内面ナデ。	P7	口縁部一部欠損
94-6 82	土師器 坏	①8.8 ②4.7			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面・体部ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	P6周辺	完形
94-7 82	土師器 甕	①13.6 ②18.0 ③5.6			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ。内面ナデ。	覆土	完形
94-8 82	土師器 甕	①(18.3) ②(31.1)			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	カマド周辺	口縁～胴下半部残存

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



こも編石

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
94-13	点紋絹雲母石墨片岩	20.8	4.7	4.7	1150
94-14	絹雲母石墨片岩	18.0	7.2	2.9	743
94-15	石墨緑泥片岩	17.0	8.0	3.7	800
94-16	点紋絹雲母石墨片岩	15.8	6.5	2.0	490
94-17	絹雲母石墨片岩	15.0	7.5	5.0	890
94-18	絹雲母石墨片岩	15.7	7.6	3.0	570
94-19	絹雲母石墨片岩	15.2	7.5	3.2	550
94-20	絹雲母石墨片岩	15.1	7.5	4.3	740
94-21	絹雲母石墨片岩	14.5	7.8	4.2	667
94-22	点紋絹雲母石墨片岩	14.5	7.5	4.0	730
94-23	絹雲母石墨片岩	14.5	6.7	5.8	690
94-24	緑簾緑泥片岩	14.7	5.8	2.5	465
94-25	絹雲母石墨片岩	14.3	6.5	4.8	780
94-26	絹雲母石墨片岩	14.5	6.2	4.0	650
94-27	絹雲母石墨片岩	12.5	5.7	4.3	490
94-28	点紋絹雲母石墨緑泥片岩	10.9	6.6	2.4	271

第94図 D区7号住居跡出土遺物

[5] D区検出の遺構と遺物

D区7号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径	②器高	③底径				
94-9 82	土師器 甕	①20.0 ②(32.9)			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。輪積み痕残る。内面ナデ。	北西壁寄り	口縁一部・底部欠損
94-10 82	土師器 甕	①(13.7) ②(6.2)			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③灰黄褐色	底面木葉痕、胴部外面へラ削り。内面ナデ。	中央部	胴下半部 内面に煤付着
94-11 82	土師器 壺	②(6.8) ③8.6			①細粒の砂、褐色鉱物粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	覆土	底部全周

D区8号住居跡 (第95~98図、PL.58~60・82・83)

位置 Ph-8、Pi-8・9、Pj-8・9グリッドにかけて検出された。D区14号住居跡の南西約2mの所に位置している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺7m、短辺6.3mである。

方位 N-57°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6 (1~4・a・b) 層に分かれた。a・b層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約10~25cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約24.9㎡。

掘り方 床面中央部を除いてやや凹凸がある。

周溝 ほぼ全周している。幅約10~16cm、深さ約4~9cmである。

竈 北東壁から検出され、燃焼部の大部分は床面に構築されている。袖部約90cmが残存している。規模は煙道方向150cm、両袖方向92cmである。

柱穴 5個のピットが検出された。P1~P3が支柱穴となる。P1の深さは60cm、P2深さ48cm、P3深さ42cmである。P4は貯蔵穴にある。P5は深さ18cm。

貯蔵穴 P4が該当する。規模は長径125cm、短径90cm、深さ38cmである。

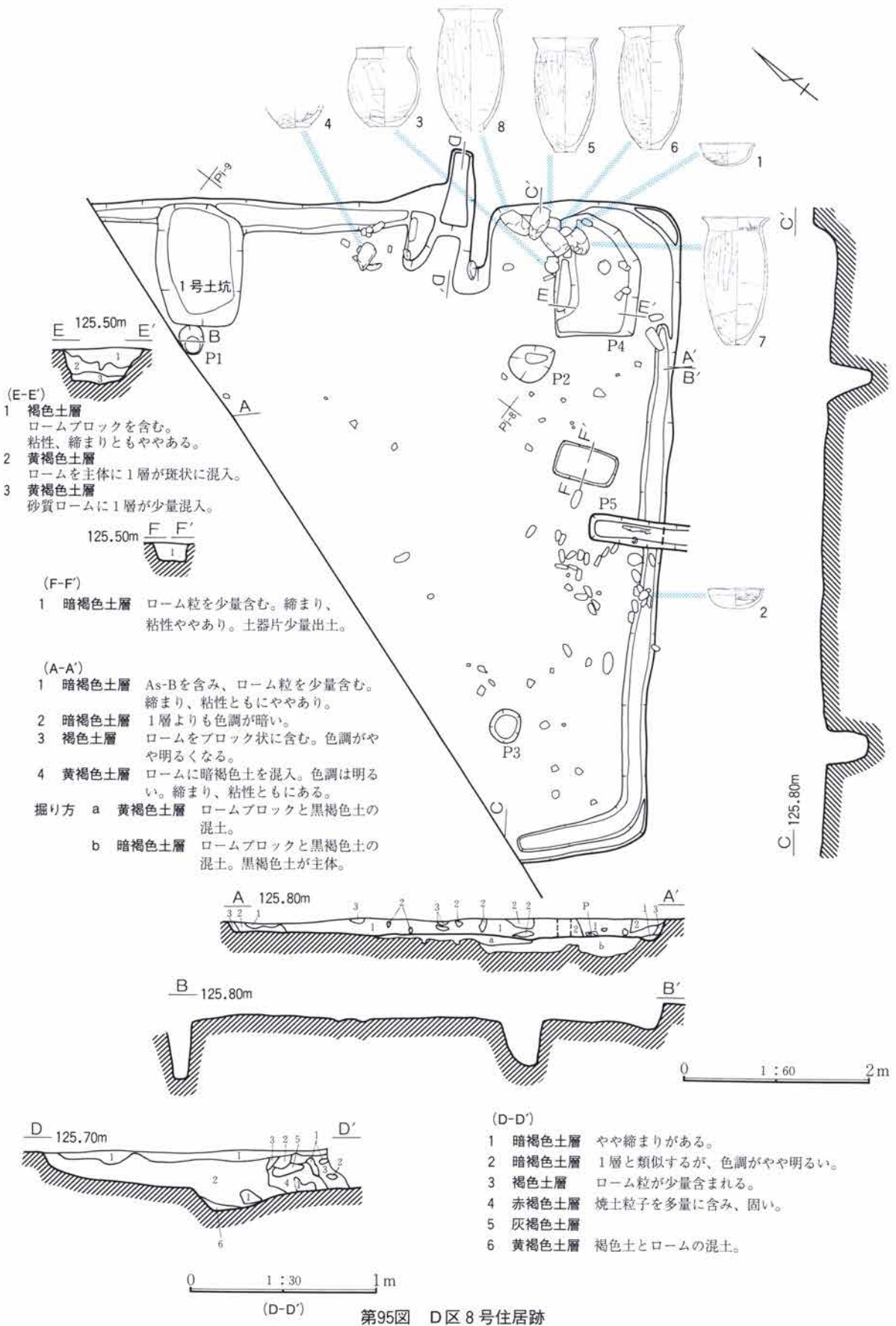
遺物 土師器の坏や甕が竈と貯蔵穴の周辺から、こも編石は南東壁中央部下から出土している。

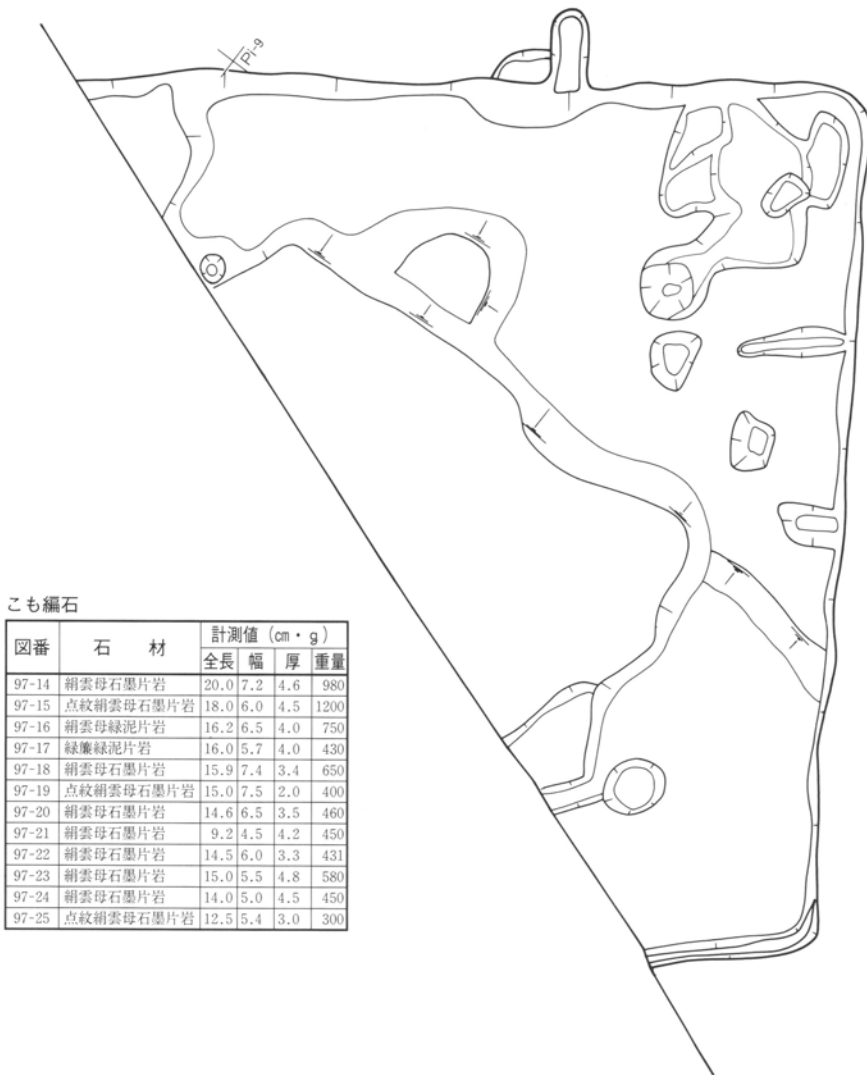
時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀後半の段階に相当する。

D区8号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径	②器高	③底径				
98-1 82	土師器 坏	①11.8 ②4.8			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面へラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	貯蔵穴	完形
98-2 82	土師器 坏	①12.0 ②4.2			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明黄褐色	底面へラ削り不明瞭、体部ナデ。口縁部横ナデ、内面吸炭による黒色処理、荒れている。	南東壁寄り	完形
98-3 82	土師器 小型甕	①(11.3) ②16.6 ③6.0			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③暗赤褐色	底面ナデ、胴部外面へラ削り不明瞭。口縁部横ナデ、内面ナデ。	貯蔵穴	2/3残存
98-4 82	土師器 甕	②(3.6) ③6.0			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面木葉痕、胴部外面へラ削り。内面ナデ。	北東壁寄り	底部2/3欠損
98-5 83	土師器 甕	①18.3 ②32.7 ③6.0			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	底面・胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	北東壁寄り	口縁~胴下半 1/3欠損
98-6 83	土師器 甕	①18.6 ②35.2 ③5.3			①粗粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面木葉痕、胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	貯蔵穴	口縁部一部欠損
98-7 83	土師器 甕	①(19.1) ②36.3 ③5.2			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面木葉痕、胴部外面へラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。輪積み痕。	貯蔵穴	胴部一部欠損
98-8 83	土師器 甕	①(17.7) ②(34.5)			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③赤褐色	胴部外面へラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	北東壁寄り	口縁~胴上半 1/2欠損 底部欠損
98-9 83	弥生土器	胴部片			①中粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい橙色	縄文施紋。原体はR止。 沈線による区画。	覆土	中期

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状況
				全長	幅	厚	重量		
98-11-83	凹石	完形	点紋緑泥片岩	18.2	7.5	3.2~3.8	800	片面に2個の凹みが認められる。	覆土 縄文
98-12-83	磨石	完形	絹雲母片岩	6.2	5.5	1.6	58	両面に磨耗痕が認められる。	覆土
98-13-83	磨石	完形	緑泥片岩	10.7	3.8	1.3	100	両面に磨耗痕が認められる。	覆土





こも編石

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
97-14	絹雲母石墨片岩	20.0	7.2	4.6	980
97-15	点紋絹雲母石墨片岩	18.0	6.0	4.5	1200
97-16	絹雲母緑泥片岩	16.2	6.5	4.0	750
97-17	緑簾緑泥片岩	16.0	5.7	4.0	430
97-18	絹雲母石墨片岩	15.9	7.4	3.4	650
97-19	点紋絹雲母石墨片岩	15.0	7.5	2.0	400
97-20	絹雲母石墨片岩	14.6	6.5	3.5	460
97-21	絹雲母石墨片岩	9.2	4.5	4.2	450
97-22	絹雲母石墨片岩	14.5	6.0	3.3	431
97-23	絹雲母石墨片岩	15.0	5.5	4.8	580
97-24	絹雲母石墨片岩	14.0	5.0	4.5	450
97-25	点紋絹雲母石墨片岩	12.5	5.4	3.0	300

こも編石

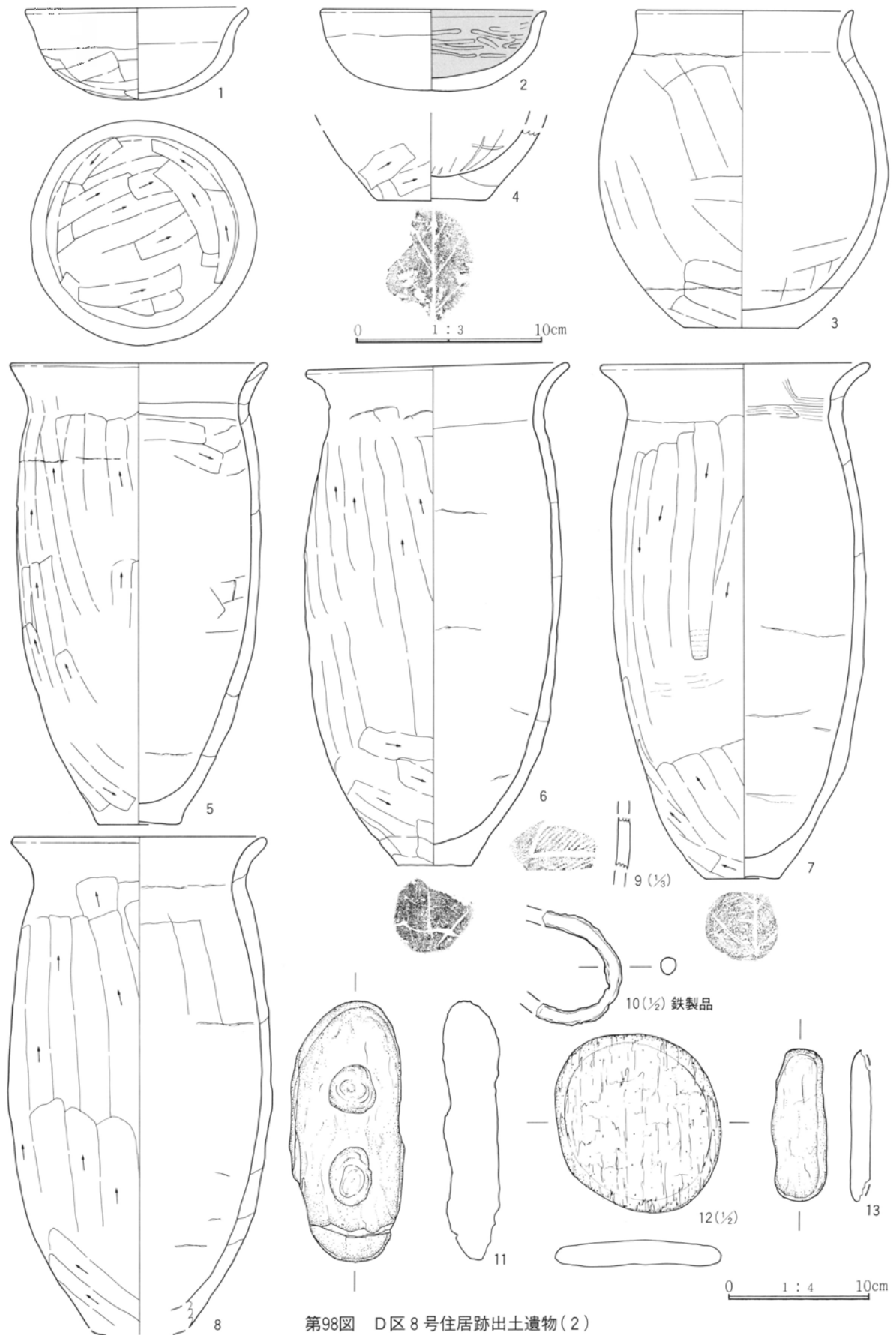
図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
97-26	絹雲母石墨片岩	13.8	6.2	4.0	420
97-27	絹雲母石墨片岩	13.5	4.2	3.5	310
97-28	絹雲母石墨片岩	13.8	4.5	3.5	420
97-29	絹雲母石墨片岩	13.5	5.0	3.3	340
97-30	絹雲母石墨片岩	12.5	5.3	2.7	340
97-31	絹雲母石墨片岩	13.0	6.7	4.0	470
97-32	絹雲母石墨片岩	12.8	5.3	4.5	420
97-33	点紋絹雲母石墨片岩	12.7	6.5	3.5	400
97-34	絹雲母石墨片岩	12.0	6.5	4.5	490
97-35	絹雲母石墨片岩	12.0	6.0	3.5	350
97-36	点紋絹雲母石墨片岩	12.8	6.7	2.9	380
97-37	点紋絹雲母石墨片岩	12.9	6.5	3.0	400
97-38	緑簾緑泥片岩	14.0	5.8	3.0	450
97-39	点紋絹雲母石墨片岩	12.5	5.4	3.0	300
97-40	点紋絹雲母石墨片岩	12.5	5.0	2.7	270
97-41	絹雲母石墨片岩	12.5	6.0	3.5	300
97-42	絹雲母石墨片岩	12.3	5.6	4.0	420
97-43	点紋絹雲母石墨片岩	11.8	5.0	3.0	280
97-44	絹雲母石墨片岩	11.5	5.6	2.6	280
97-45	絹雲母石墨片岩	11.0	6.8	2.4	270
97-46	絹雲母石墨片岩	8.7	7.0	3.0	240

0 1 : 60 2m

第96図 D区8号住居跡掘り方



第97図 D区8号住居跡出土遺物(1)



第98図 D区8号住居跡出土遺物(2)

[5] D区検出の遺構と遺物

D区9号住居跡 (第99~104図、PL.60~62・83・84)

位置 Pe-9・10、Pf-9・10グリッドにかけて検出された。D区11号住居跡と重複している。

形状 完掘できなかつたが、現状では長辺6.3m、短辺4.1mである。

方位 N-48°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は6 (1~4・a・b) 層に分かれた。a・b層は掘り方覆土である。

壁高 住居跡確認面より約10~20cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約13.6m²。

掘り方 床面中央部を除いてやや凹凸がある。

周溝 部分的に検出された。幅約10~18cm、深さ約7cmである。

竈 北東壁から検出され、燃焼部の大部分は床面に構築されている。袖部約90cmが残存し、左右に袖石が残る。その上面には凝灰岩の切石を鳥居状に架す。内部には甕2個体が検出された。規模は煙道方向100cm、両袖方向60cmである。

柱穴 4個のピットが検出された。P1の深さは19cm、P2は貯蔵穴である。P3深さ20cm、P4深さ16cmである。

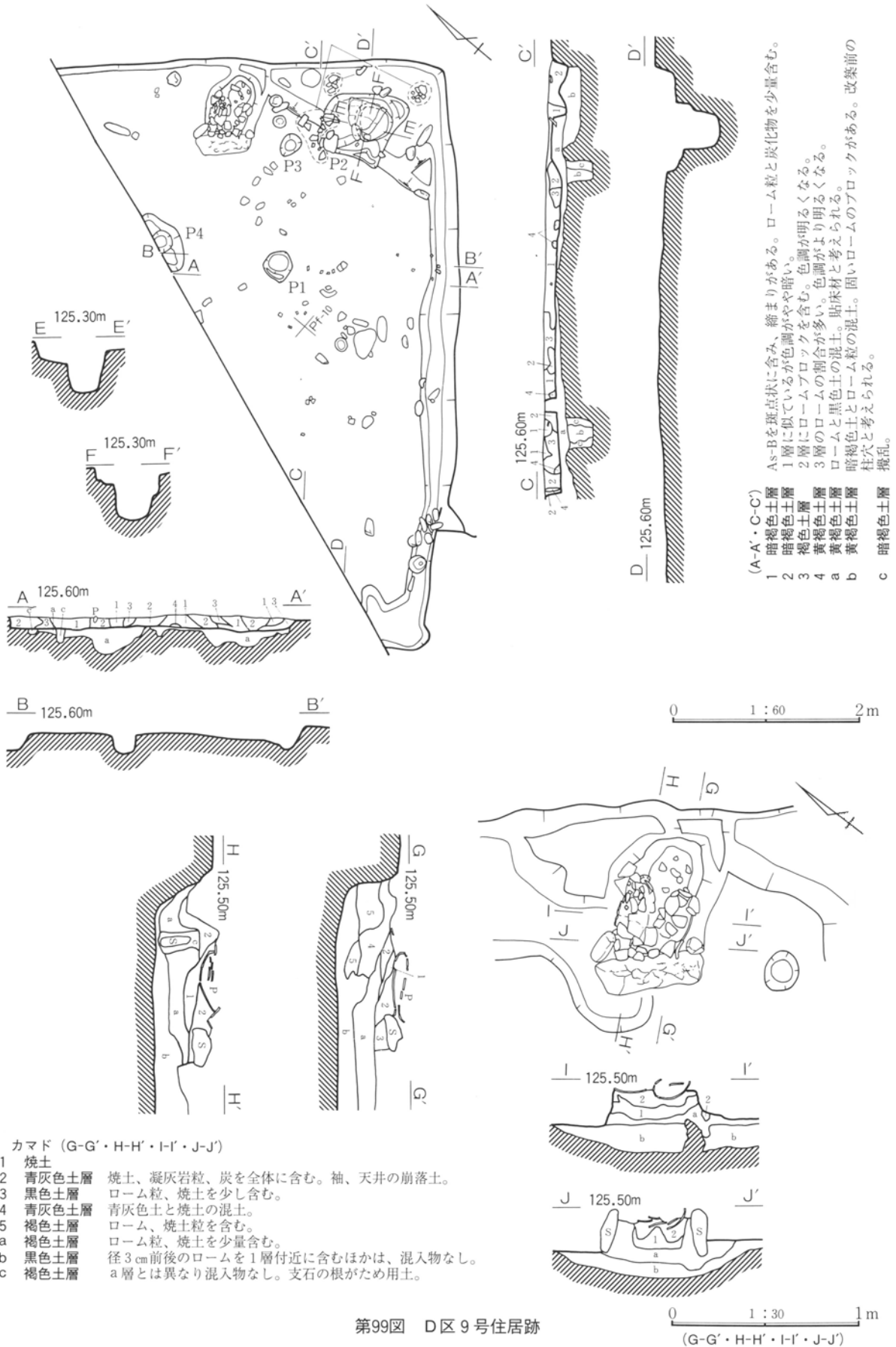
貯蔵穴 P2が該当する。規模は長径74cm、短径68cm、深さ58cmである。

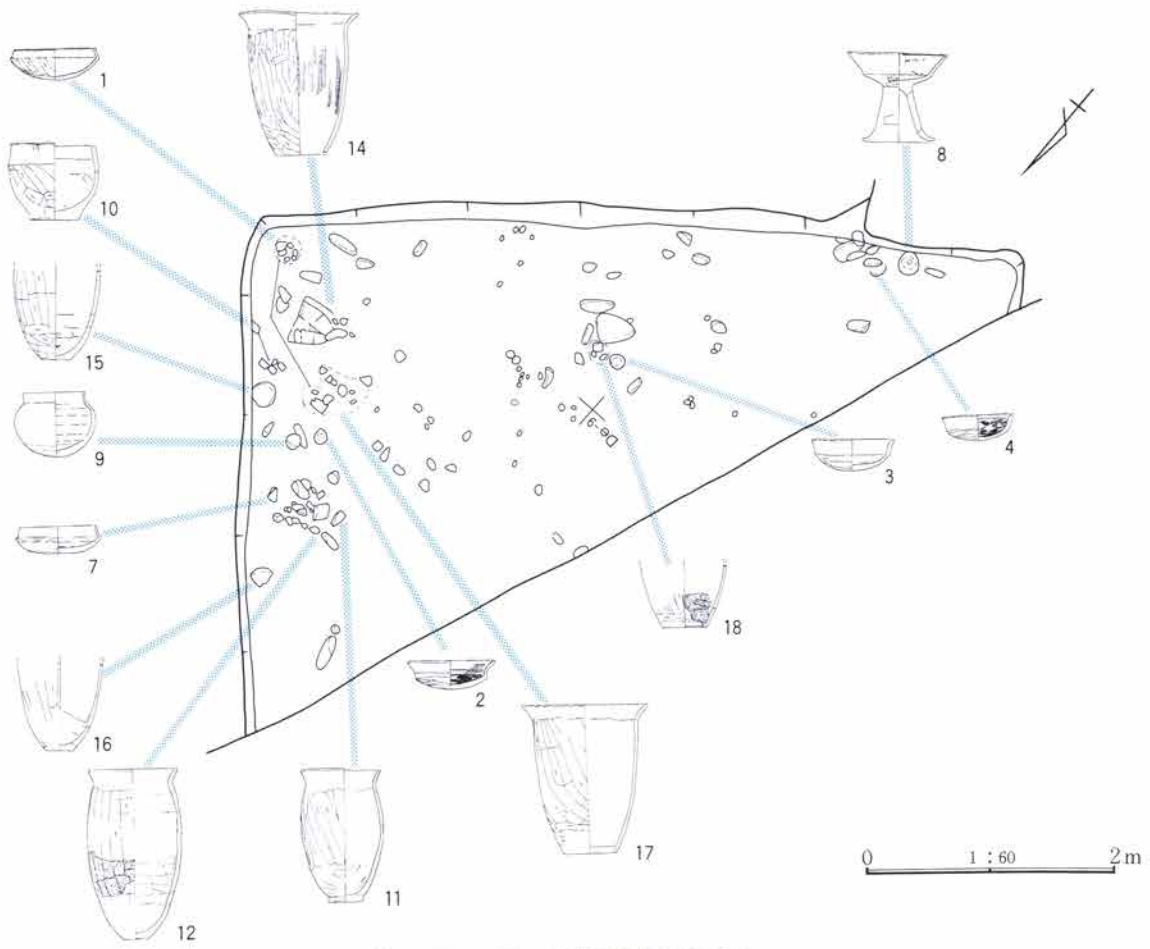
遺物 土師器の坏や甕が竈と貯蔵穴の周辺から出土している。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀前半の段階に相当する。

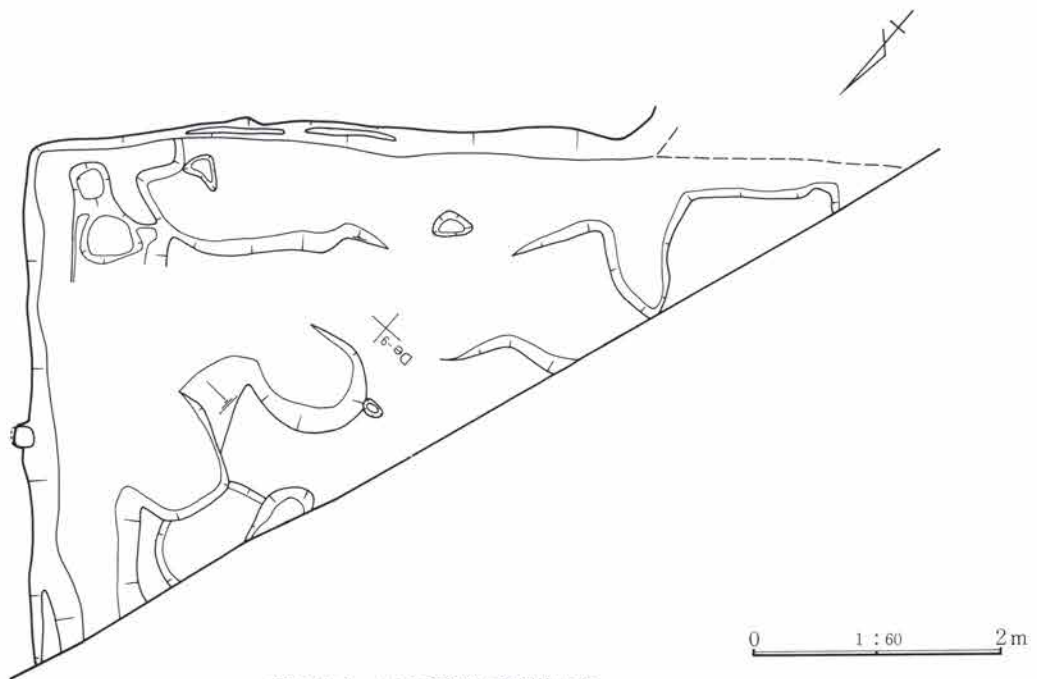
D区9号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径	②器高	③底径				
102-1 83	土師器 坏	①12.8 ②4.9			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③褐色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面丁寧なナデ、口縁外面~内面に黒漆。	東壁寄り	ほぼ完形
102-2 83	土師器 坏	①14.0 ②4.5 ③11.5			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③灰黄色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面吸炭による黒色処理、ミガキ。	北東部	完形
102-3 83	土師器 坏	①13.0 ②5.0			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙褐色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面ナデ。	南東部	完形
102-4 83	土師器 坏	①11.5 ②4.0			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ。内面吸炭による黒色処理、ミガキ。	南東壁寄り	完形
102-5 83	土師器 坏	①(12.2) ②4.5			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り不明瞭、口縁部横ナデ、内面ナデ。	覆土	3/4残存
102-6 83	須恵器 坏	①(10.8) ②3.5			①細 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形 底面回転ヘラ削り	覆土	2/3残存
102-7 83	須恵器 坏	①12.1 ②4.3			①細 片岩粒を含む。 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形 底面回転ヘラ削り	カマド	口縁部欠損
102-8 83	土師器 高坏	①15.7 ②14.1③(11.0)			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③明褐色	脚部外面ヘラ削り、内面ナデ。坏部内面吸炭による黒色処理。	南東部	脚部一部欠損
102-9 83	須恵器 短頸壺	①(9.9) ②10.4			①細 白色鈹物粒を含む。 ②酸化焰 ③灰色	右回転ロクロ整形 底面回転ヘラ削り	北東部	口縁部一部欠損
102-10 83	土師器 鉢	①13.2 ②12.0 ③8.0			①細粒の砂、褐色鈹物粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	北東壁寄り	胴部一部欠損
102-11 84	土師器 甕	①16.8 ②28.7 ③7.2			①細粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③明黄褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面ナデ。	カマド	胴部一部欠損
103-12 84	土師器 甕	①(18.5) ②35.6 ③5.4			①粗粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面木葉痕、胴部外面ヘラ削り。口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	カマド	口縁部一部欠損
103-13 84	土師器 甕	①19.3 ②35.5 ③6.2			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③褐色	底面木葉痕、胴部外面ナデ。口縁部横ナデ、内面ナデ。	覆土	胴部一部欠損
103-14 84	土師器 甕	①25.8 ②30.0③(10.5)			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。ミガキ。	貯蔵穴	完形



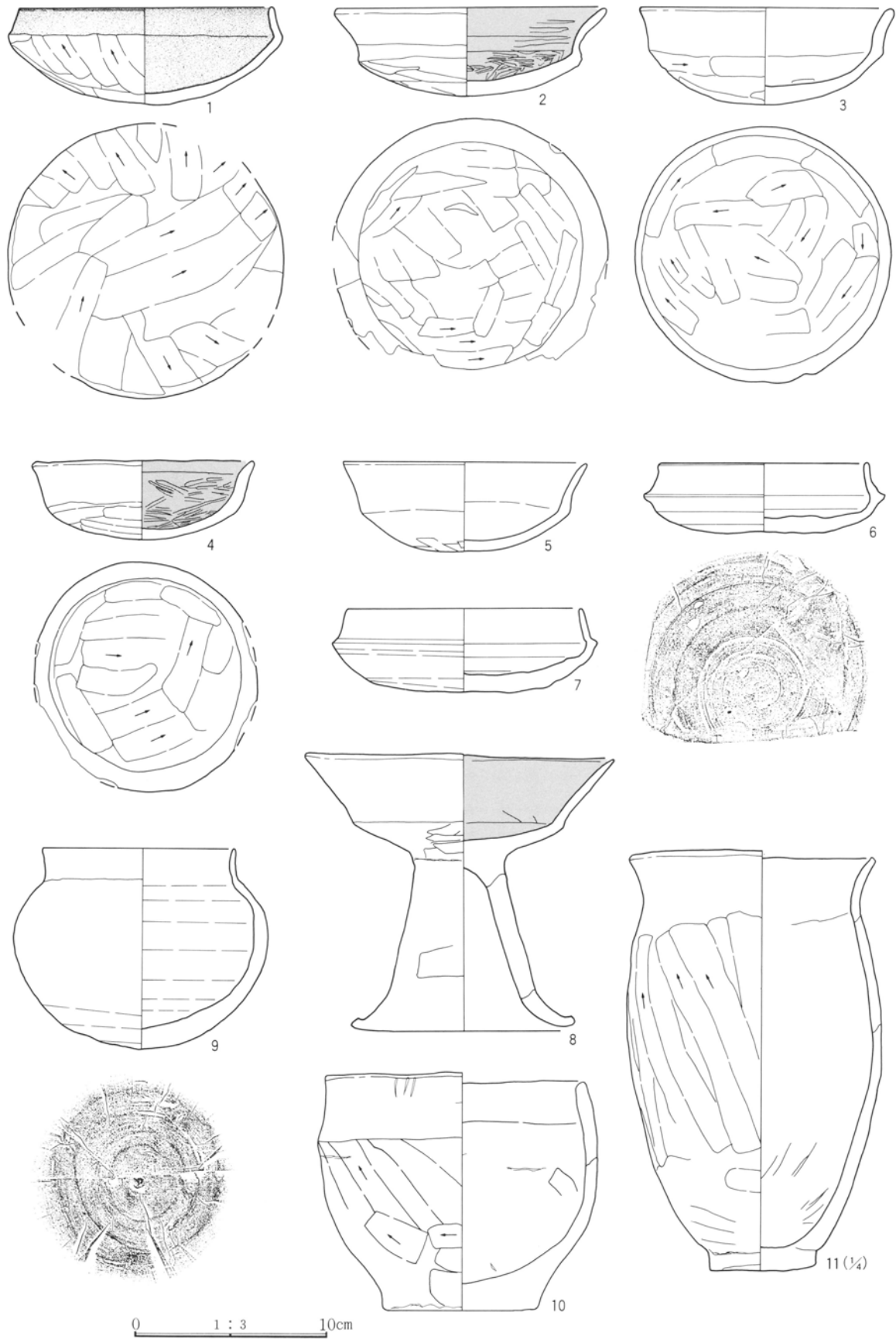


第100図 D区9号住居跡遺物分布図

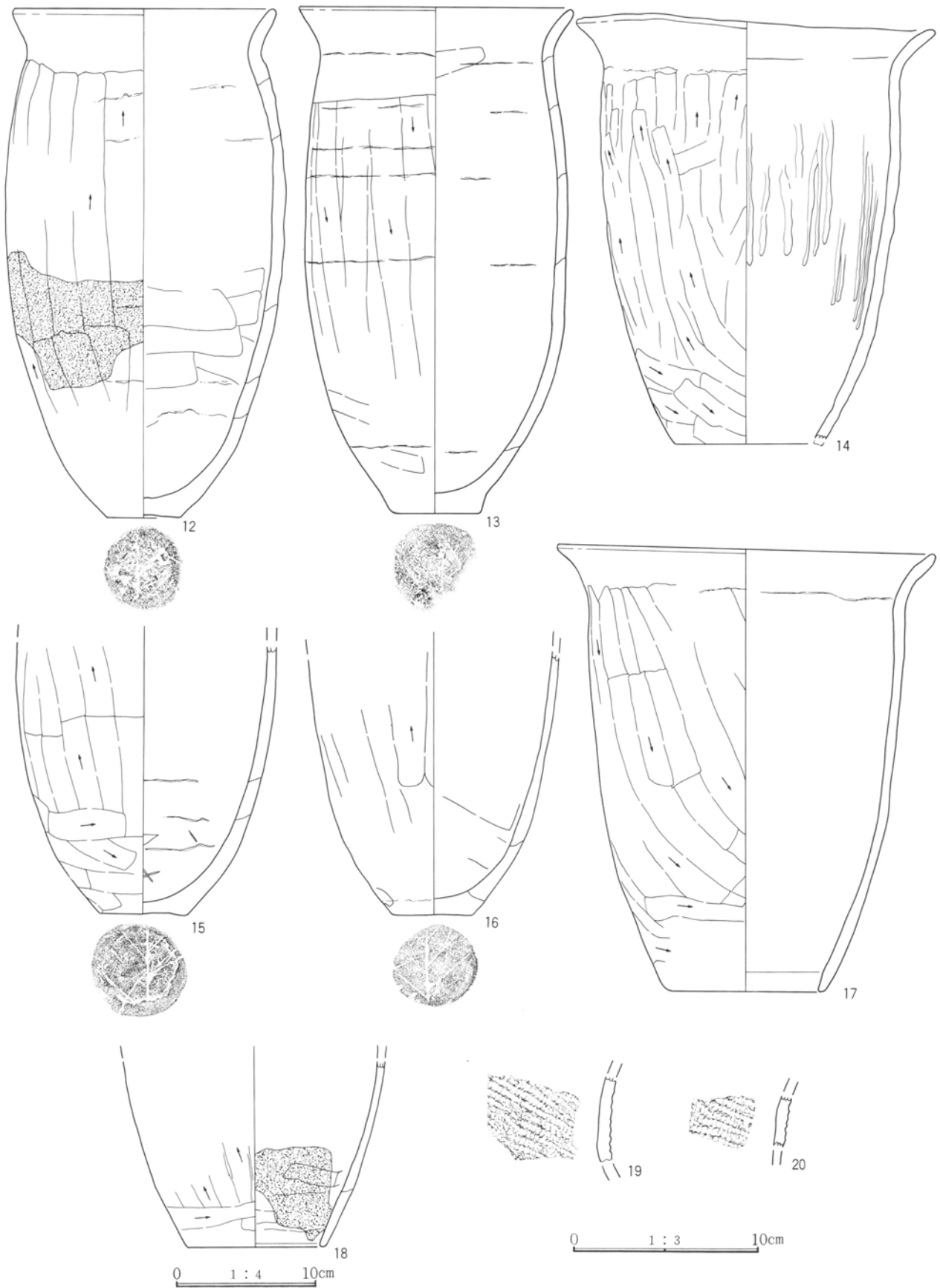


第101図 D区9号住居跡掘り方

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査

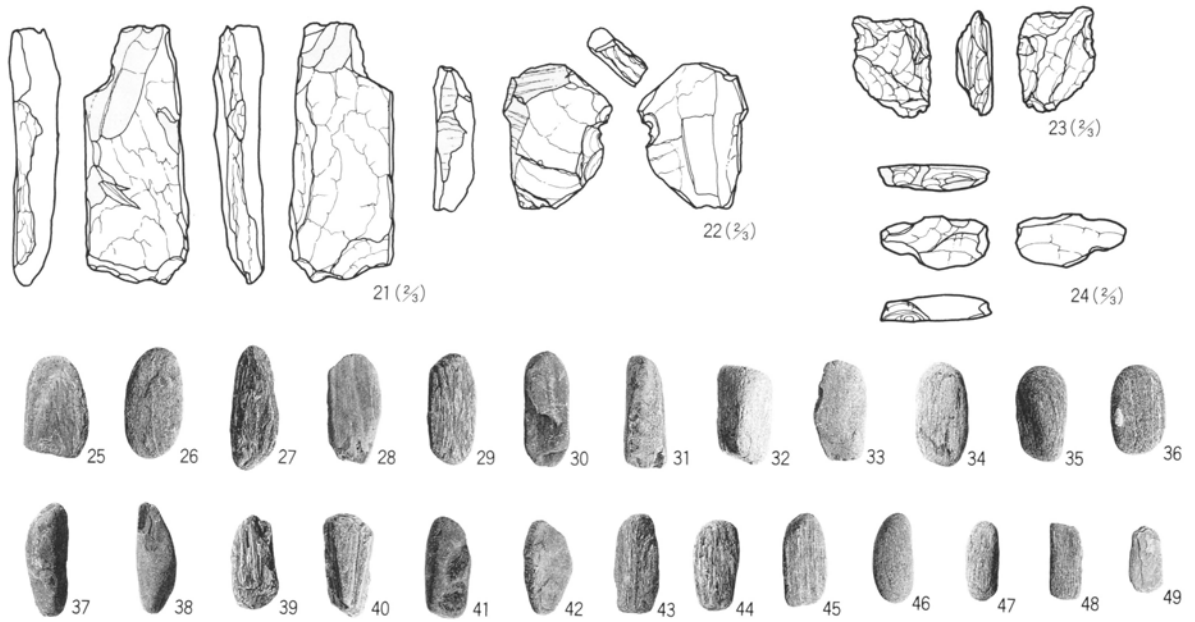


第102図 D区9号住居跡出土遺物(1)



第103図 D区9号住居跡出土遺物(2)

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



第104図 D区9号住居跡出土遺物(3)

D区9号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径 ②器高 ③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
103-15 84	土師器 甕	②(19.1) ③6.5	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面木葉痕、胴部外面ヘラ削り。 内面丁寧なナデ。	北東壁寄り	胴上半部欠損
103-16 84	土師器 甕	②(18.7) ③5.8	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③黄褐色	底面木葉痕、胴部外面ヘラ削り。 内面丁寧なナデ。	北東壁寄り	胴上半部欠損
103-17 84	土師器 甕	①27.0 ②31.5 ③10.8	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面 丁寧なナデ。	貯蔵穴周辺	胴部一部欠損
103-18 84	土師器 甕	②13.0 ③9.5	①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り。 内面ナデ。ミガキ。	南東部	底部全周 内面炭化物付着
103-19 84	縄文土器	胴部片	①細粒の砂を含む。 ②良 ③明赤褐色	縄文施紋。原体はR 比横位。 内面は丁寧な調整。	覆土	中期前半
103-20 84	縄文土器	胴部片	①細粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい赤褐色	縄文施紋。原体はR 比横位。 内面はやや丁寧な調整。	覆土	中期前半

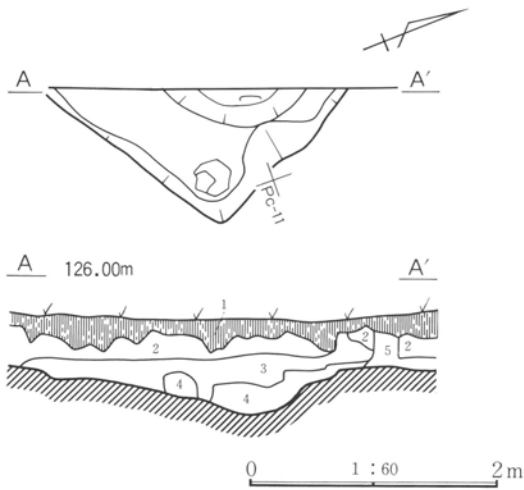
図番 PL.	器種	石材	計測値 (cm・g)				所見	出土状態
			最大長	最大幅	最大厚	重量		
104-21 84	剥片	滑石	5.10	2.10	1.00	12.5	左、右側は工具痕の後、折り取り。	覆土
104-22 84	剥片	滑石	2.90	1.10	0.70	6.8	勾玉形制品。	覆土
104-23 84	剥片	滑石	2.05	1.50	0.70	2.2	打面は階段状の剥離面(図の右側)。	覆土
104-24 84	剥片	滑石	1.05	2.20	0.50	1.2	上面は、刀子痕 折れ面で形成される。	覆土

こも編石

図番	石材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
104-25	絹雲母石墨緑泥片岩	15.5	9.5	3.0	780
104-26	絹雲母石墨片岩	17.0	8.6	5.8	1200
104-27	絹雲母石墨片岩	19.0	7.6	4.5	900
104-28	緑泥片岩	16.5	8.0	3.3	676
104-29	絹雲母石墨片岩	16.8	7.5	4.5	800
104-30	緑簾緑泥片岩	17.8	6.0	2.5	620
104-31	絹雲母石墨片岩	17.0	6.5	4.7	920
104-32	絹雲母石墨緑泥片岩	14.0	8.0	5.8	1200
104-33	点紋絹雲母石墨緑泥片岩	15.0	6.5	4.0	700
104-34	絹雲母石墨片岩	16.0	8.0	4.0	920
104-35	点紋絹雲母石墨片岩	14.3	7.6	5.5	900
104-36	点紋絹雲母石墨片岩	13.8	7.0	2.8	550
104-37	輝緑岩	17.4	6.0	3.5	780

図番	石材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
104-38	輝緑岩	17.0	4.5	4.0	755
104-39	石墨片岩	14.3	7.0	4.4	590
104-40	石英片岩	16.0	7.0	6.0	980
104-41	輝緑岩	15.2	7.5	5.5	1019
104-42	絹雲母石墨片岩	14.5	7.6	3.5	470
104-43	点紋絹雲母石墨片岩	15.0	6.8	2.8	450
104-44	絹雲母石墨片岩	13.9	6.9	4.5	706
104-45	絹雲母石墨片岩	13.7	7.5	4.0	620
104-46	絹雲母石墨片岩	13.5	6.0	4.3	550
104-47	絹雲母石墨片岩	11.8	5.0	3.5	320
104-48	絹雲母石墨片岩	11.7	5.0	2.0	240
104-49	緑泥片岩	10.2	5.0	1.1	101

〔5〕 D区検出の遺構と遺物



- 1 褐色土層 As-Aを含む耕作土。締まりがあまりない。
- 2 灰茶褐色土層 As-Bを斑点状に多量に含む。粒子が一定。締まりが非常にある。
- 3 暗褐色土層 上層にAs-Bの混入が少量認められる。暗褐色土にローム粒を所々に含む。締まり、粘性ややあり。
- 4 暗褐色土層 3層に似ているが、暗褐色土とロームの割合により色調がやや明るくなる。
- 5 灰茶褐色土層 2層にローム粒を少量含んだ層。

第105図 D区10号住居跡

D区10号住居跡 (第105図、PL.62)

位置 Pb-10、Pc-10・11グリッドにかけて検出された。D区9号住居跡の北8mの所に位置している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺1.8m、短辺1.5mである。

方位 不明。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は2層に分かれた。

壁高 住居跡確認面より約15cmで床面に達する。

床面 凹凸がある。現状での面積は約1m²。

周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 覆土からは遺物の出土はほとんどなかった。

時期 覆土の状態から6世紀代と考えられる。

D区11号住居跡 (第106～109図、PL.63)

位置 Pf-9・10、Pg-9・10グリッドにかけて検出された。D区9・12号住居跡によって壊されている。

形状 現状では長辺2.1m、短辺1.5mである。

方位 N-60°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築されている。

壁高 住居跡確認面より約24cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約2.7m²。

掘り方 やや凹凸がある。

周溝 検出できなかった。

竈 北東壁から検出され、燃焼部の大部分は床面に構築されている。袖部約80cmが残存している。規模は煙道方向110cm、両袖方向(50cm)である。

柱穴 検出できなかった。

貯蔵穴 床面北東隅から検出された。規模は長径90cm、短径65cm、深さ25cmである。

遺物 竈周辺から土師器の甕が少量出土している。

時期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世紀の段階に相当する。

D区12号住居跡(第106～112図、PL.64・65・85・86)

位置 Pf-9、Pg-9・10、Ph-8・9グリッドにかけて検出された。D区11・13・15号住居跡を壊している。

形状 完掘できなかったが、現状では長辺5.3m、短辺4mである。

方位 N-45°-E。

覆土 ローム層を掘り込んで竪穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は5層に分かれた。

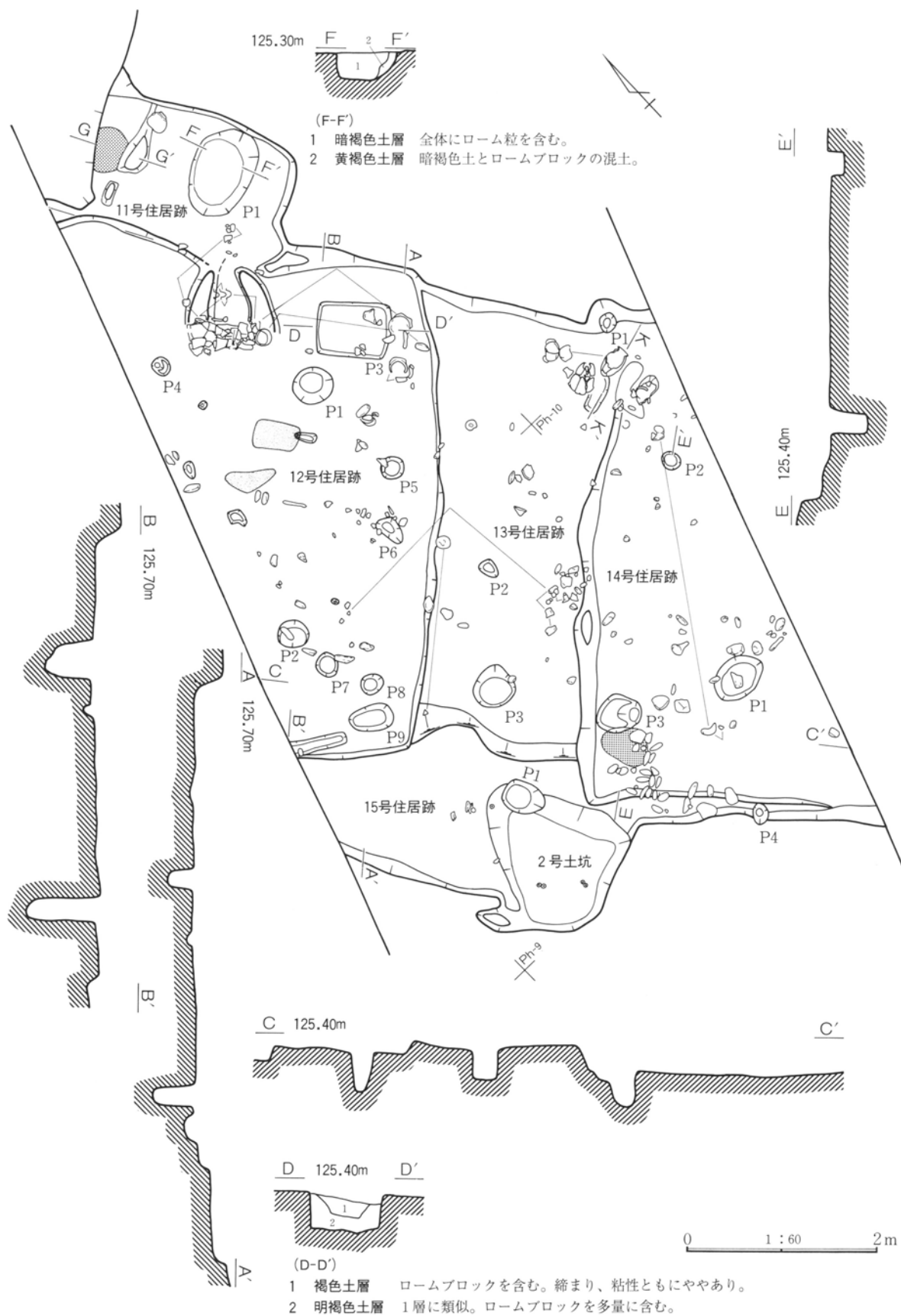
壁高 住居跡確認面より約20cmで床面に達する。床面からほぼ垂直に立ち上がる。

床面 ほぼ平坦である。現状での面積は約12.5m²。

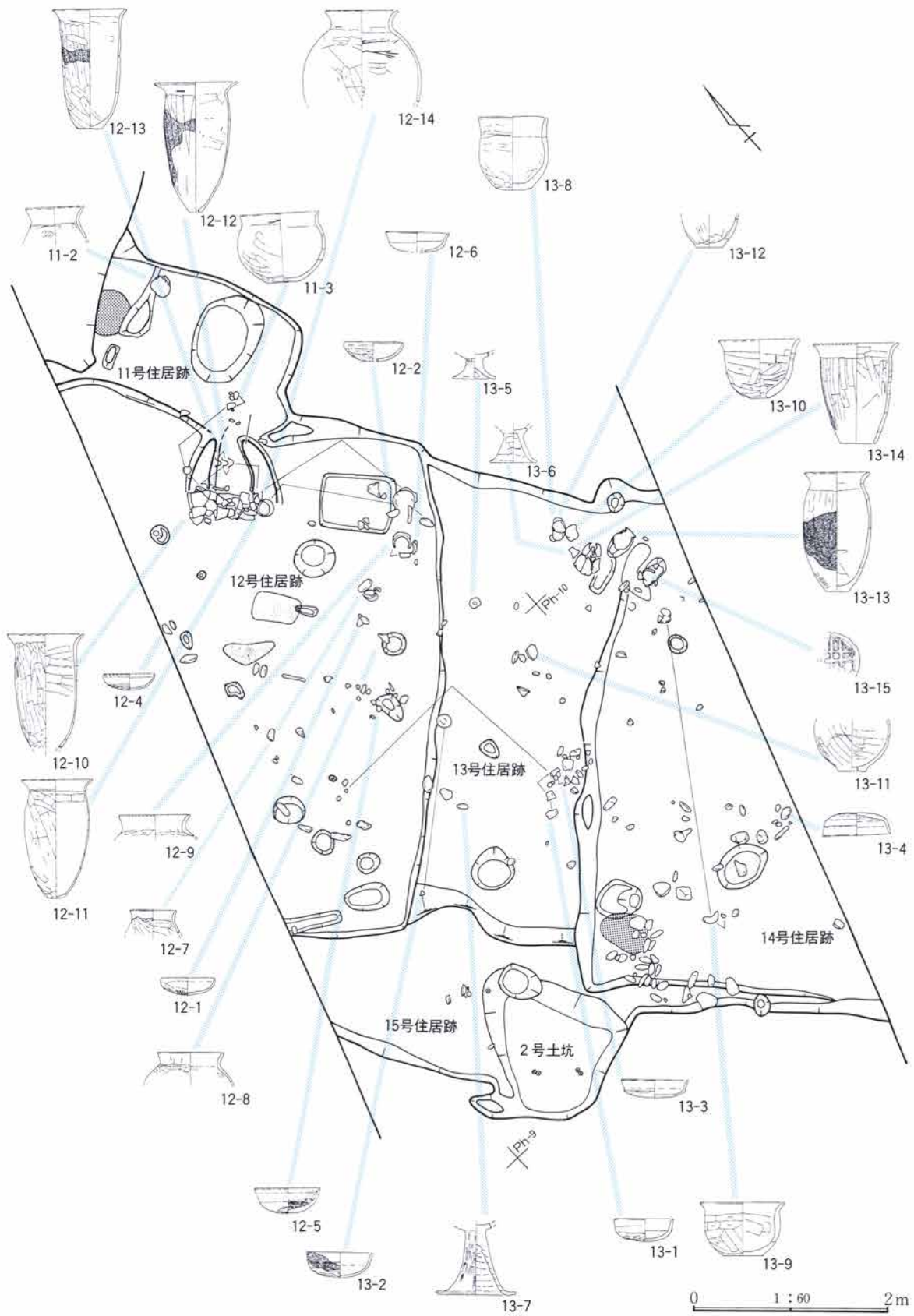
掘り方 床面中央部を除いてやや凹凸がある。

周溝 検出できなかった。

竈 北東壁から検出され、燃焼部の大部分は床面に構築されている。袖部約80cmが残存している。内部からは甕4個体が検出された。規模は煙道方向90cm、両袖方向95cmである。

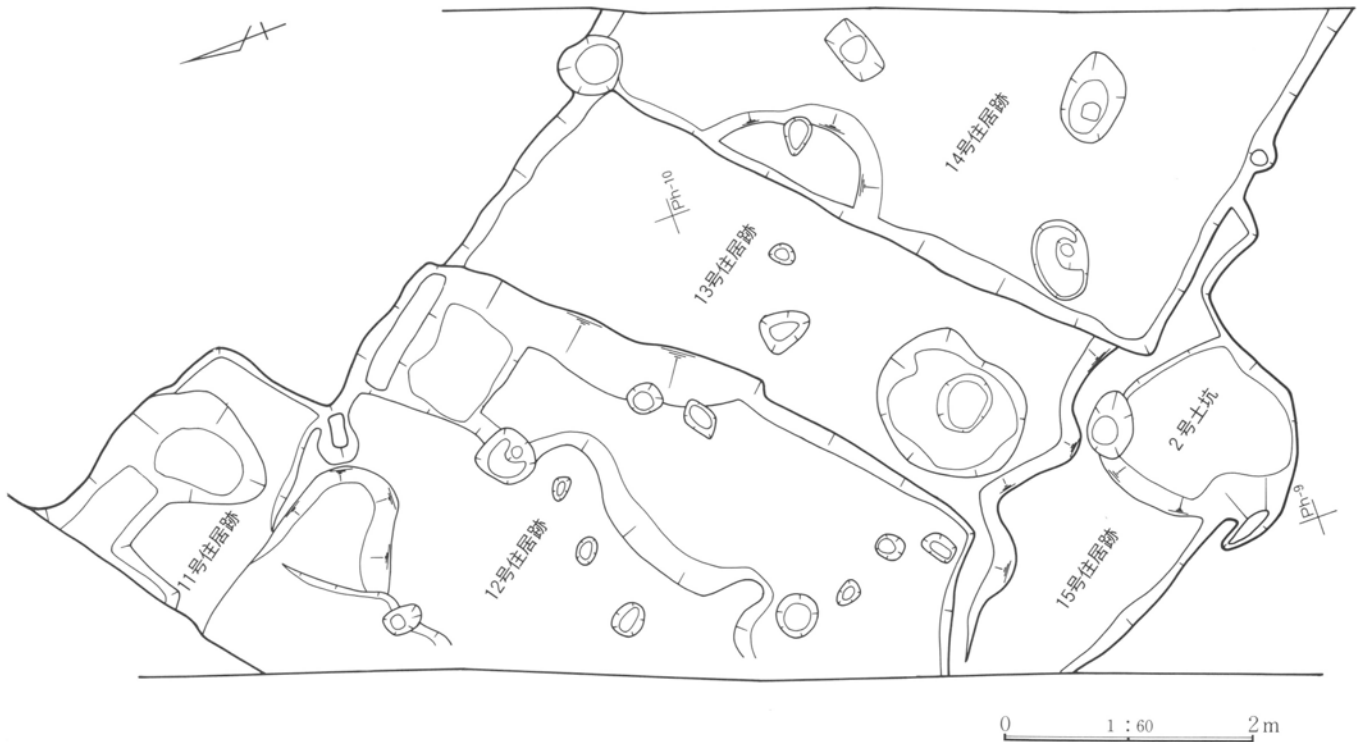
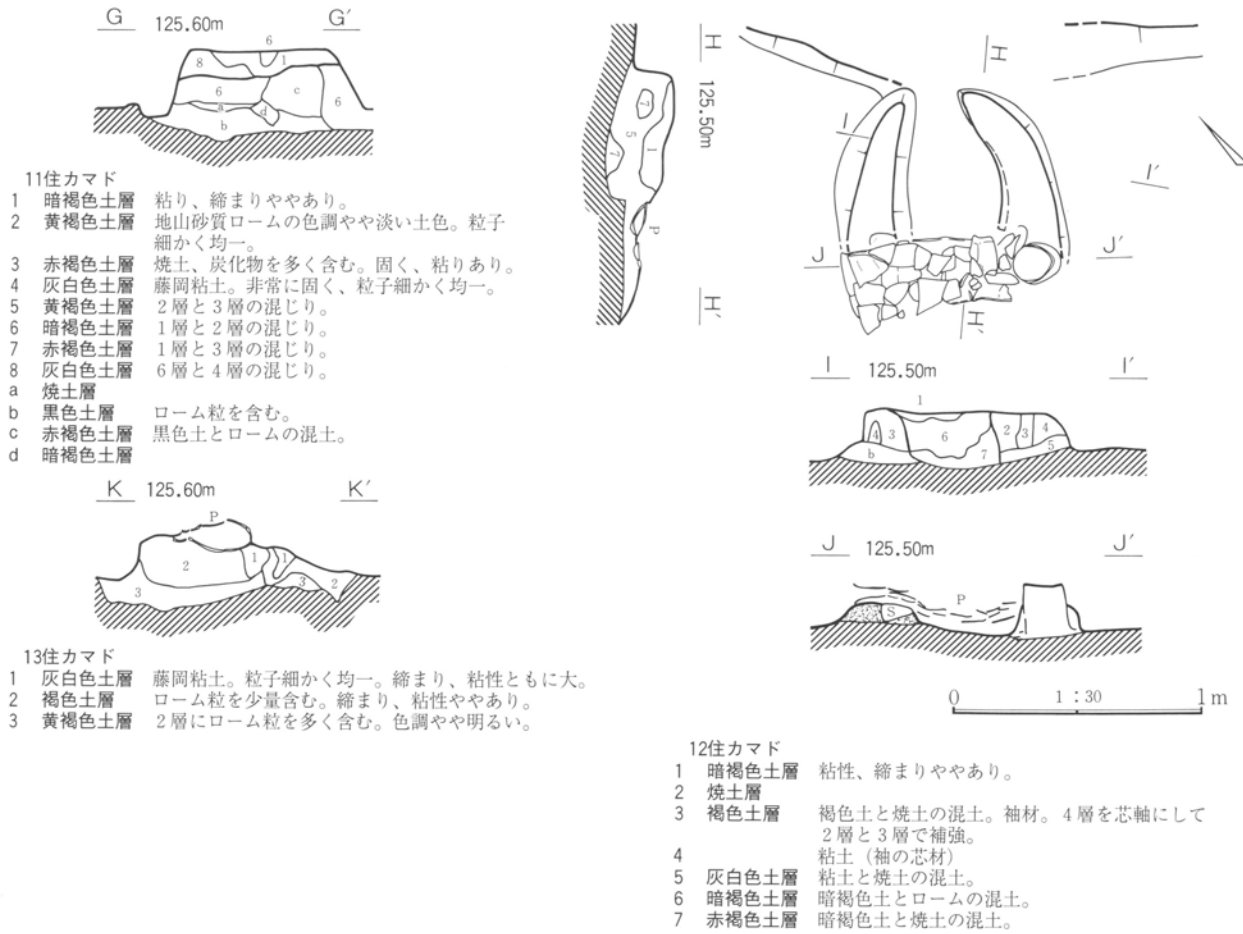


第106図 D区11号・12号・13号・14号・15号住居跡・2号土坑



第107図 D区11号・12号・13号・14号・15号住居跡遺物分布図

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



第108図 D区11号・12号・13号・14号・15号住居跡

〔5〕 D区検出の遺構と遺物

柱 穴 9個のピットが検出された。P1の深さは50cm、P2深さ74cmである。P3は貯蔵穴。P4深さ31cm、P5深さ25cm、P6深さ5cm、P7深さ26cm、P8深さ45cm、P9深さ15cmである。

貯蔵穴 P3が該当する。規模は長径80cm、短径56cm、深さ35cmである。

遺 物 土師器の坏や甕が竈と貯蔵穴の周辺から出土している。

時 期 出土遺物から判断すると、当住居跡は7世紀後半の段階に相当する。

D区13号住居跡 (第106~108・113~115図、PL.64・66・67・86・87)

位 置 Pg-9・10、Ph-8・9グリッドにかけて検出された。D区12・14・15号住居跡と重複している。14号住居跡を壊し、12号住居跡によって壊されている。

形 状 完掘できなかったが、現状では長辺4.8m、短辺4.7mである。

方 位 N-45°-E。

覆 土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は2層に分かれた。

壁 高 住居跡確認面より約20cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 やや凹凸が認められる。現状での面積は約7.2m²。

掘り方 床面中央部を除いてやや凹凸がある。

周 溝 検出できなかった。

竈 北東壁から検出され、燃烧部の大部分は床面に構築されている。内部からは甌・甕3個体が検出された。規模は煙道方向90cm、両袖方向90cmである。

柱 穴 3個のピットが検出された。P1の深さは20cm、P2深さ8cm、P3深さ22cmである。P3は柱穴になるものと考えられる。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺 物 土師器の坏や甕が竈の周辺から出土している。

時 期 出土遺物から判断すると、当住居跡は6世

紀後半の段階に相当する。

D区14号住居跡 (第106~108・115図、PL.66・67・87)

位 置 Ph-9・10、Pi-9グリッドにかけて検出された。D区13・15号住居跡と重複している。13号住居跡によって壊されている。

形 状 完掘できなかったが、現状では長辺5.2m、短辺3.2mである。

方 位 不明。

覆 土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築され、そこに堆積した覆土は4層に分かれた。

壁 高 住居跡確認面より約40~60cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 やや凹凸が認められる。現状での面積は約8.6m²。

掘り方 床面中央部を除いてやや凹凸がある。

周 溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。

柱 穴 3個のピットが検出された。P1の深さは46cm、P2深さ18cm、P3深さ40cmである。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺 物 土師器の坏や甕が少量出土している。

時 期 重複関係から考えると、当住居跡は6世紀後半以前の段階に相当する。

D区15号住居跡 (第106~108図、PL.66)

位 置 Ph-8・9グリッドにかけて検出された。D区12・13・14号住居跡、2号土坑と重複している。

形 状 完掘できなかったが、現状では長辺3.5m、短辺1.7mである。

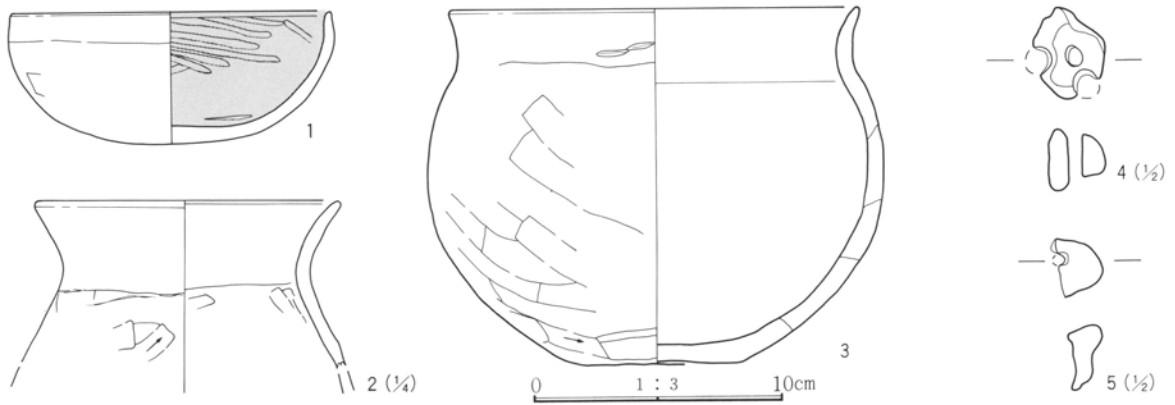
方 位 不明。

覆 土 ローム層を掘り込んで堅穴住居は構築されている。

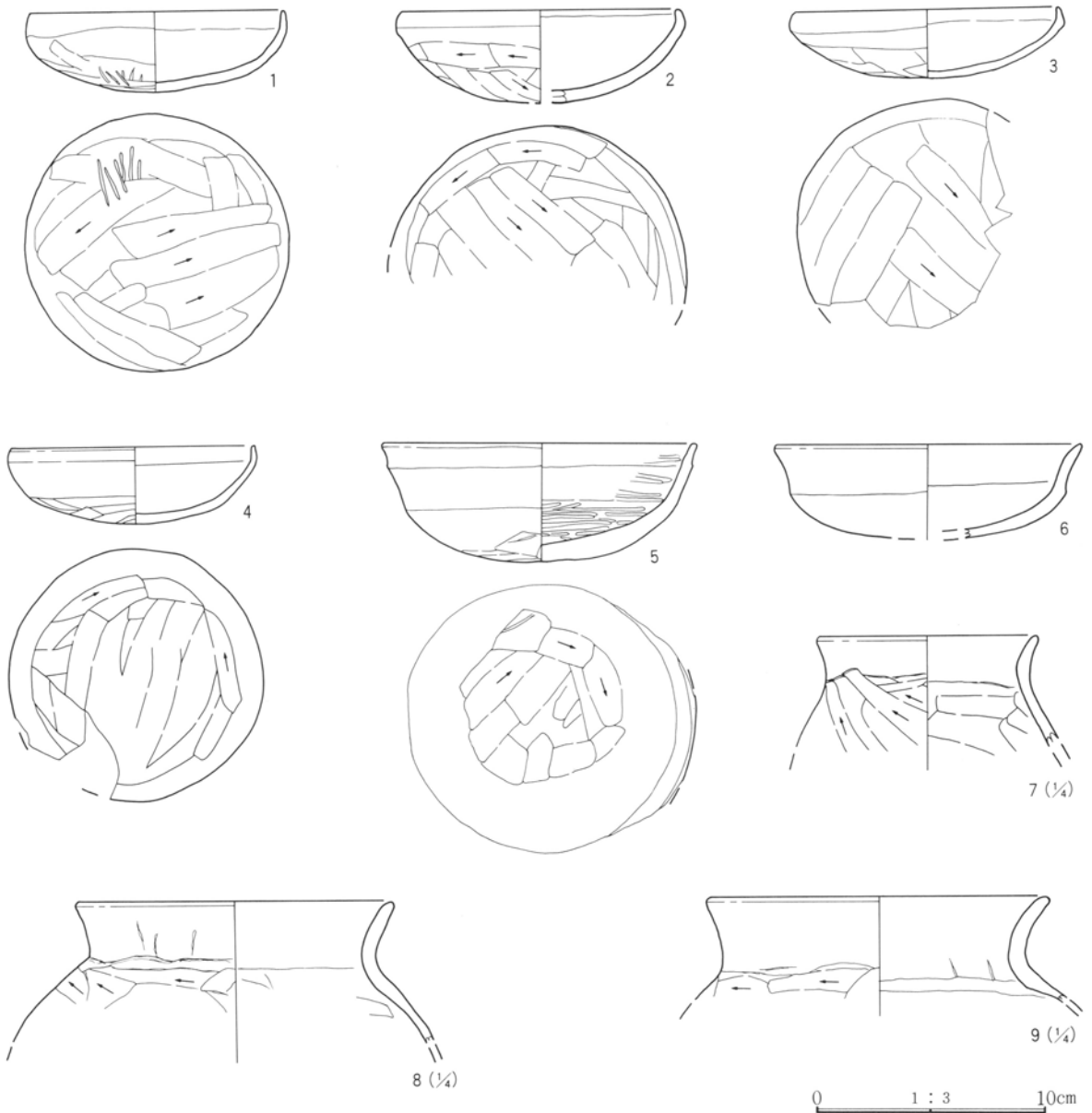
壁 高 住居跡確認面より約10cmで床面に達する。床面からはほぼ垂直に立ち上がる。

床 面 やや凹凸が認められる。現状での面積は約4.4m²。

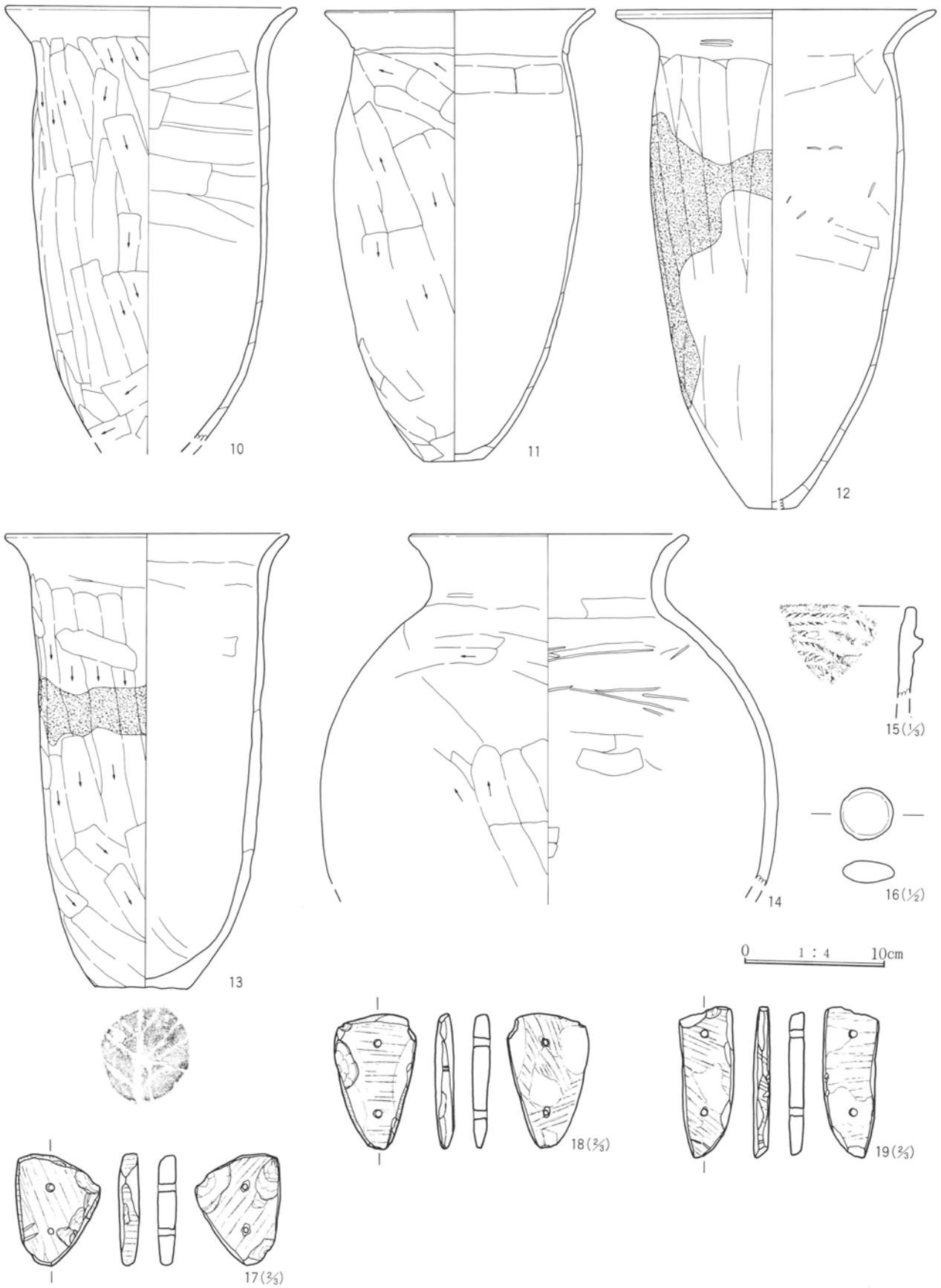
掘り方 床面中央部を除いてやや凹凸がある。



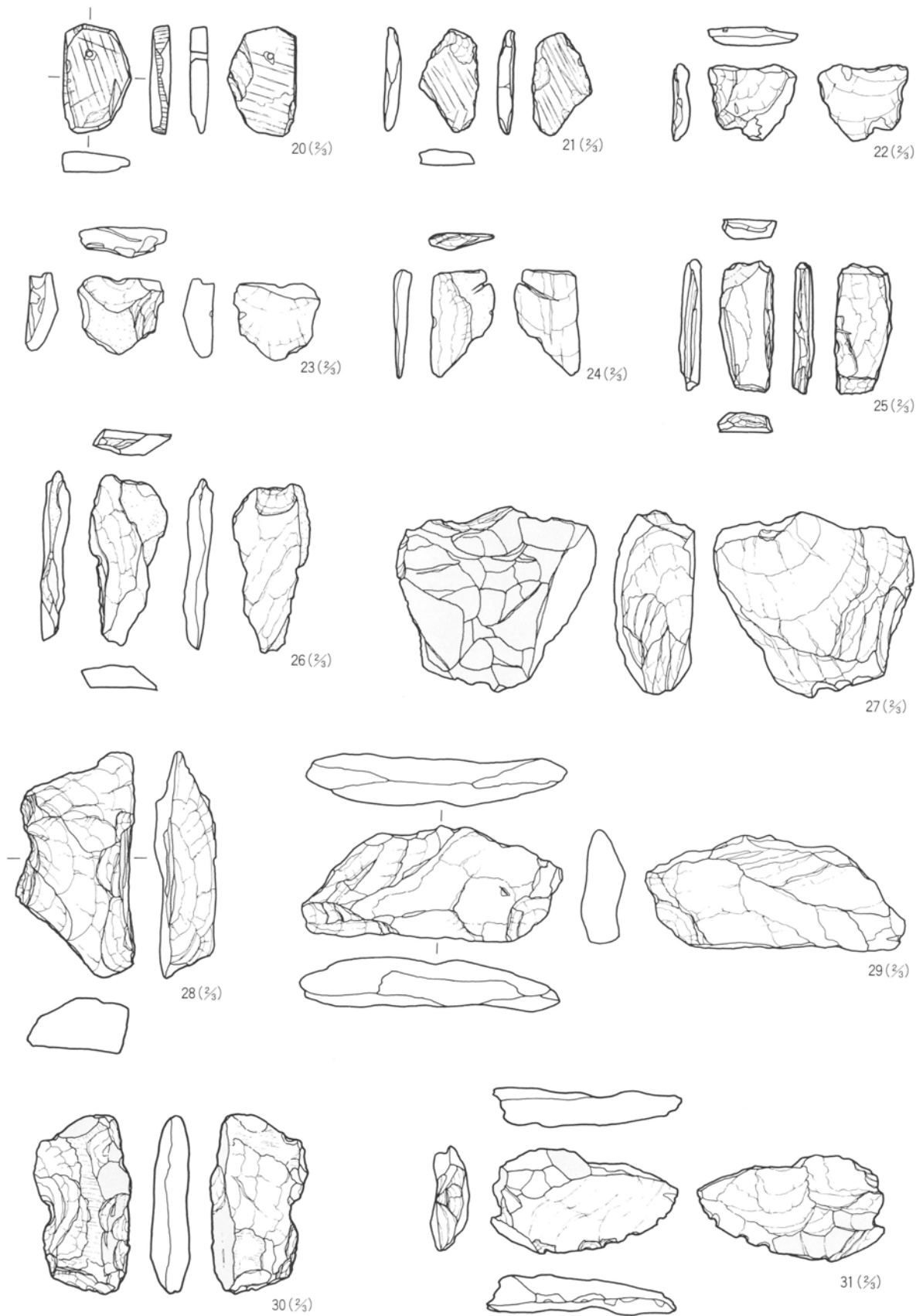
D区11号住居跡出土遺物



第109図 D区11号・12号住居跡出土遺物(1)

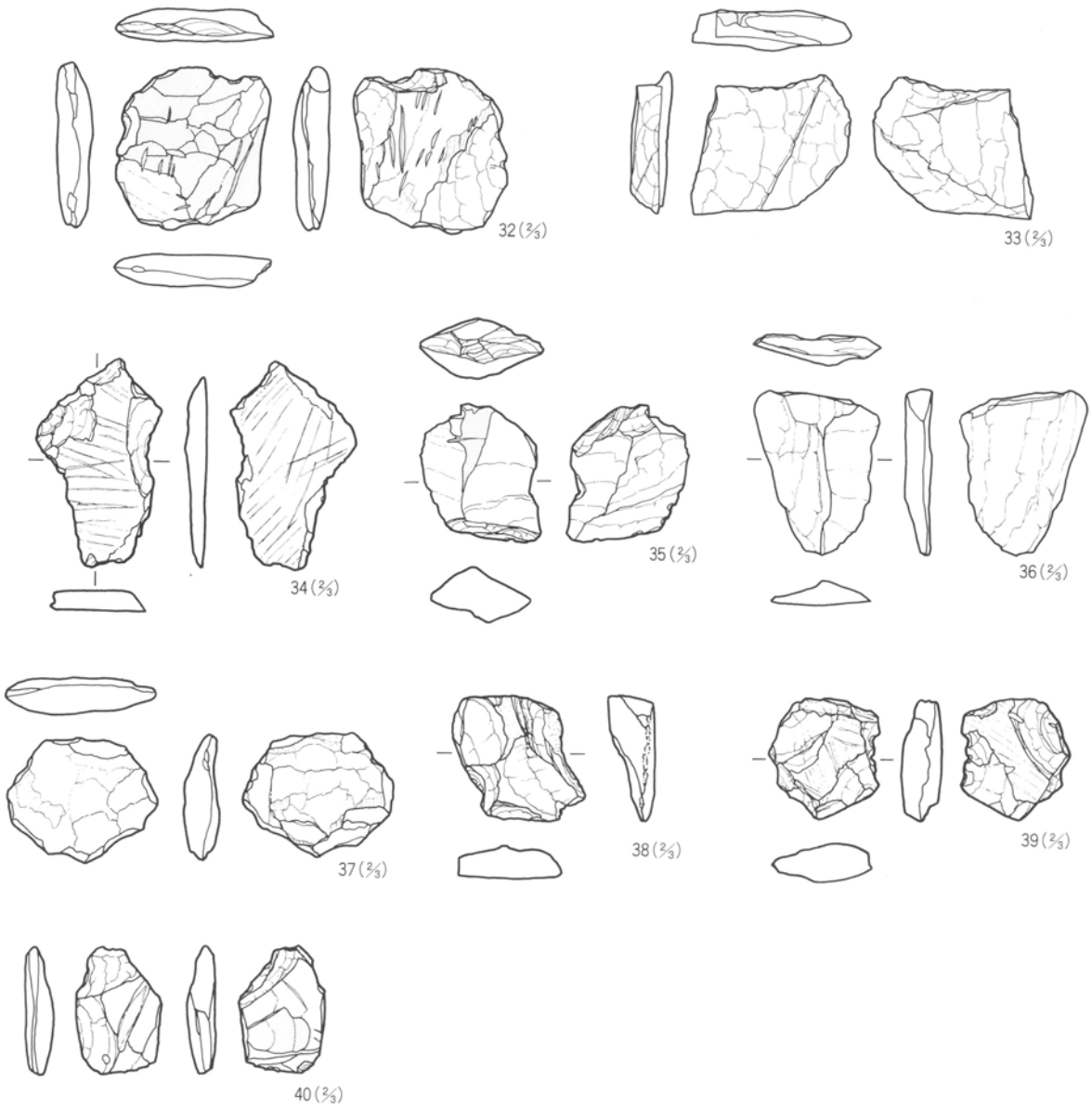


第110図 D区12号住居跡出土遺物(2)



第111図 D区12号住居跡出土遺物(3)

[5] D区検出の遺構と遺物

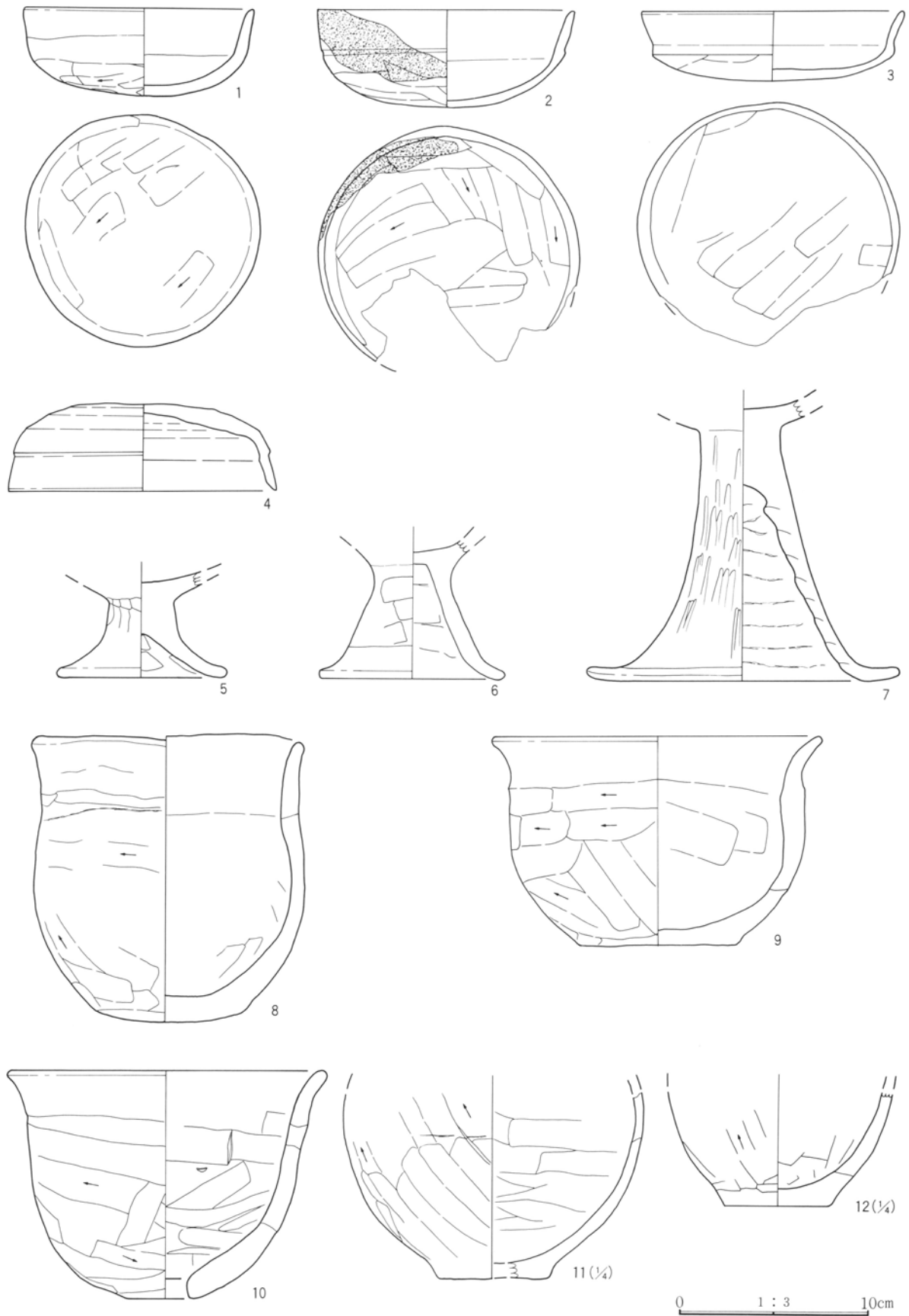


こも編石

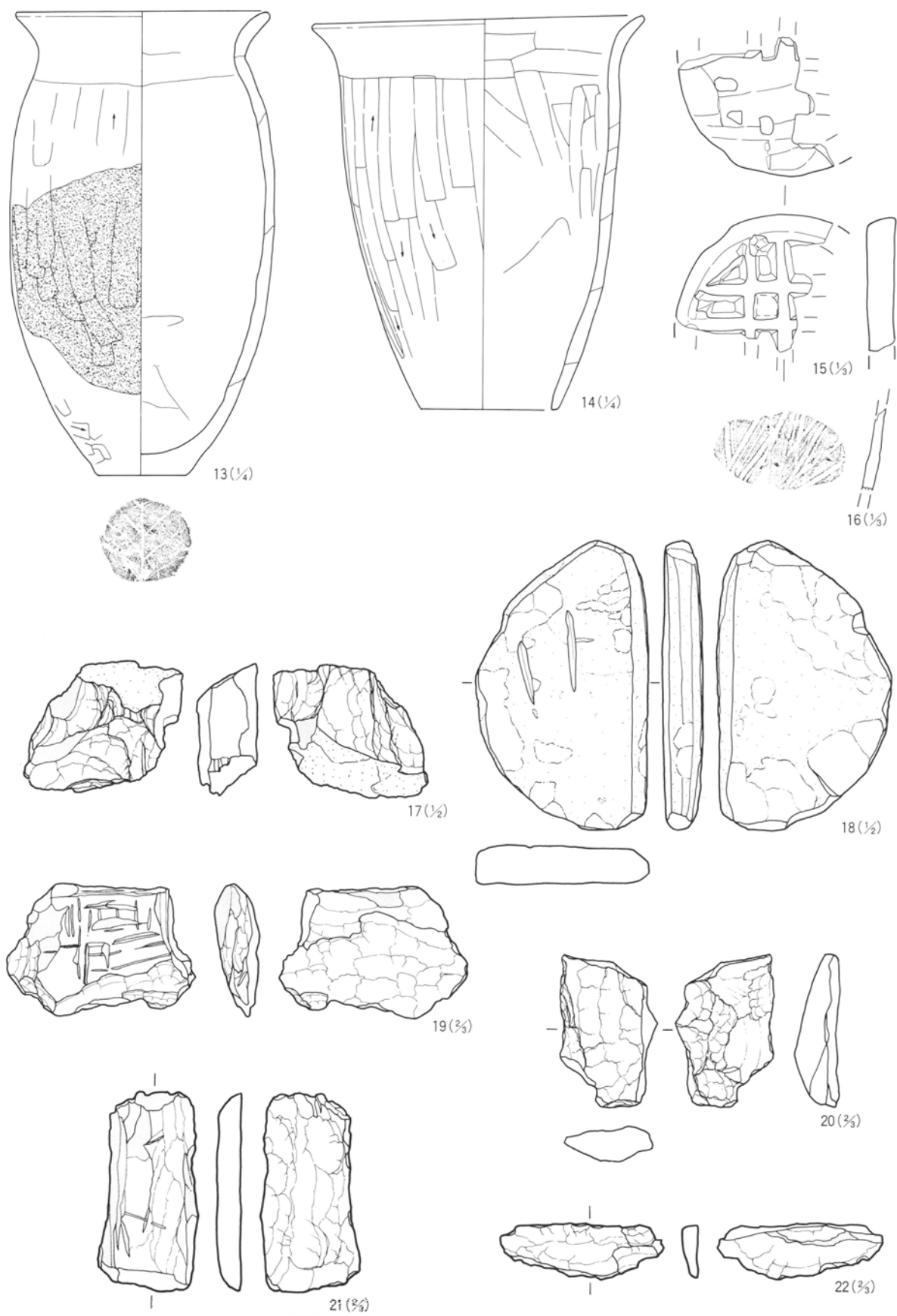
図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
112-41	絹雲母石墨片岩	15.0	7.5	3.5	550
112-42	絹雲母石墨片岩	15.5	4.7	3.5	320
112-43	緑泥片岩	14.3	5.5	3.5	400
112-44	絹雲母石墨片岩	13.5	5.4	3.2	370
112-45	輝緑岩	13.0	4.5	4.0	450
112-46	点紋絹雲母石墨片岩	12.3	5.0	2.5	220
112-47	緑糜緑泥片岩	12.1	5.1	2.8	332
112-48	石墨緑泥片岩	11.5	5.0	2.5	210
112-49	絹雲母石墨片岩	10.5	5.8	2.5	189
112-50	絹雲母石墨片岩	11.0	5.4	2.0	182

第112図 D区12号住居跡出土遺物(4)

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査

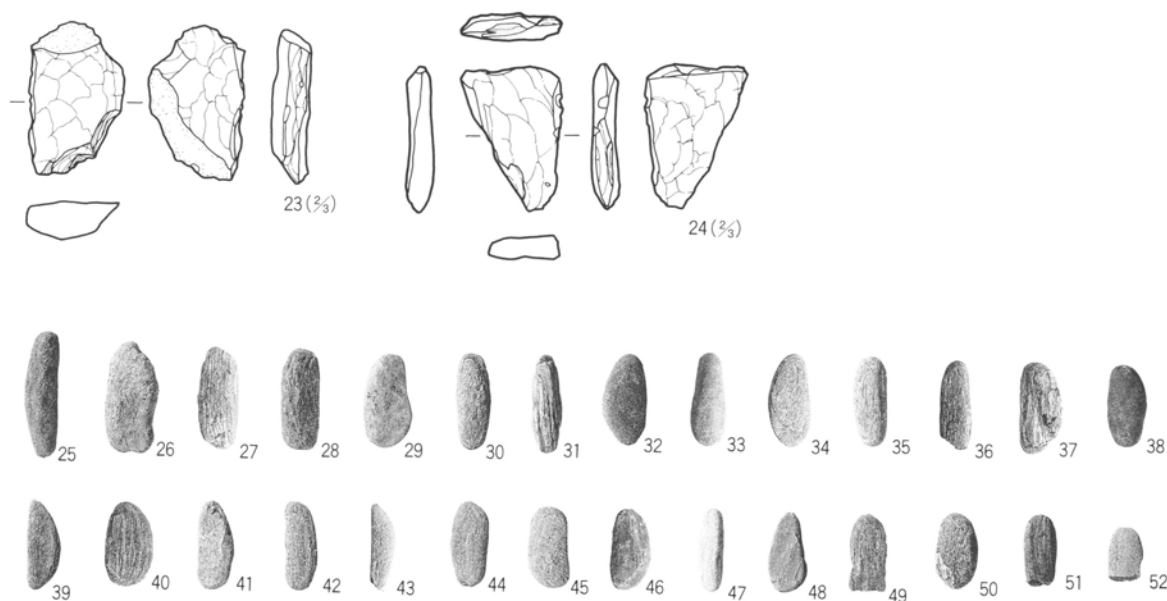


第113図 D区13号住居跡出土遺物(1)



第114図 D区13号住居跡出土遺物(2)

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査

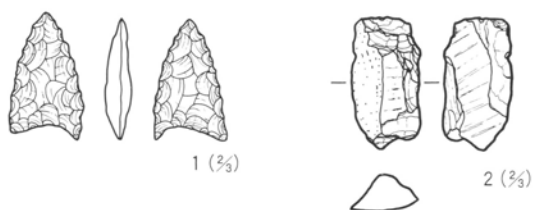


こも編石

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
115-25	絹雲母石墨片岩	19.3	5.0	3.0	480
115-26	絹雲母石墨片岩	16.8	8.5	5.0	1080
115-27	絹雲母緑泥片岩	15.4	6.6	4.5	680
115-28	絹雲母石墨片岩	15.4	5.3	6.8	622
115-29	輝緑岩	14.2	7.0	2.8	410
115-30	点紋絹雲母石墨緑泥片岩	14.8	4.5	3.0	390
115-31	石墨片岩	15.0	4.5	4.3	360
115-32	緑泥片岩	13.7	5.5	3.8	440
115-33	輝緑岩	14.0	5.5	3.4	380
115-34	絹雲母石墨片岩	14.0	6.3	2.5	320
115-35	点紋絹雲母石墨片岩	14.0	4.8	3.0	350
115-36	絹雲母石墨片岩	13.1	4.8	2.6	290
115-37	輝緑岩	14.0	5.5	3.0	450
115-38	緑泥片岩	12.5	5.0	2.8	400

図番	石 材	計測値 (cm・g)			
		全長	幅	厚	重量
115-39	絹雲母石墨片岩	13.7	5.3	2.5	280
115-40	点紋絹雲母石墨緑泥片岩	12.8	6.8	2.4	360
115-41	絹雲母緑泥片岩	13.3	5.0	3.0	350
115-42	絹雲母石墨片岩	13.8	5.0	2.3	260
115-43	絹雲母石墨片岩	13.5	3.8	3.0	250
115-44	絹雲母石墨片岩	13.0	5.6	2.0	250
115-45	絹雲母石墨片岩	12.0	6.0	3.0	440
115-46	緑泥片岩	12.2	5.5	3.2	400
115-47	絹雲母片岩	12.6	4.0	2.2	170
115-48	点紋緑泥片岩	12.0	6.5	2.5	240
115-49	絹雲母石墨片岩	11.8	5.8	2.0	200
115-50	絹雲母石墨片岩	11.5	6.6	3.5	410
115-51	輝緑岩	10.8	5.5	3.0	300
115-52	絹雲母石墨片岩	8.5	5.5	3.0	200

D区13号住居跡出土遺物(3)



D区14号住居跡出土遺物

第115図 D区13号・14号住居跡出土遺物

〔5〕D区検出の遺構と遺物

D区11号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径	②器高	③底径				
109-1 85	土師器 坏	①(12.8) ②5.2			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り不明瞭。口縁部横ナデ、内面ナデ。	覆土	1/2残存
109-2 85	土師器 甕	①16.0 ②(9.4)			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	カマド脇	口縁～胴上半
109-3 85	土師器 小型甕	①(16.3) ②14.1③(7.0)			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り不明瞭、口縁部横ナデ。内面吸炭による黒色処理、ミガキ。	貯蔵穴南	1/2残存
109-4 85	土製品	重量3.4 g			①細粒の砂を含む。 ②やや良 ③橙色	3個所の穿孔が認められる。	覆土	部分
109-5 85	土製品	重量1.3 g			①細粒の砂を含む。 ②やや良 ③橙色	1個所の穿孔が認められる。	覆土	部分

D区12号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径	②器高	③底径				
109-1 85	土師器 坏	①10.9 ②3.4			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	覆土	完形
109-2 85	土師器 坏	①(12.0) ②(4.0)			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面・体部ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	貯蔵穴	1/2残存
109-3 85	土師器 坏	①(11.4) ②(2.9)			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	覆土	1/3残存
109-4 85	土師器 坏	①10.4 ②3.3			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	床面中央部	ほぼ完形
109-5 86	土師器 坏	①(13.5) ②5.0			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。ミガキ。	東壁寄り	3/4残存
109-6 85	土師器 坏	①(13.2) ②(4.1)			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色	底面ヘラ削り、体部ナデ、口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	貯蔵穴周辺	1/4残存
109-7 85	土師器 壺	①(12.8) ②(6.4)			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	床面中央部	口縁部全周
109-8 85	土師器 壺	①18.4 ②(8.9)			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	東壁寄り	口縁部全周
109-9 85	土師器 甕	①19.7 ②(6.0)			①細粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	貯蔵穴周辺	口縁部全周
110-10 85	土師器 甕	①20.8 ②(30.4)			①粗粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	カマド	底部欠損
110-11 85	土師器 甕	①19.5 ②32.2 ③4.3			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	カマド	胴部一部欠損
110-12 85	土師器 甕	①22.8 ②35.7③(3.5)			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	カマド	胴下半部一部欠損
110-13 85	土師器 甕	①20.2 ②31.9 ③6.9			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面木葉痕、胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面丁寧なナデ。	カマド	完形
110-14 85	土師器 壺	①(20.0) ②(25.6)			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい黄褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	カマド	口縁～胴下半 1/4
110-15 86	縄文土器	口縁部片			①中粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい橙色	波状口縁部片。 細い粘土紐にきざみ。	覆土	前期諸磯b式
110-16 86	土製品	重量2 g			①細粒の砂を含む。 ②良 ③橙色		覆土	完形

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査

D区12号住居跡

図番 PL.	器種	石材	計測値 (cm・g)				所見	出土状態
			最大長	最大幅	最大厚	重量		
110-17 86	剣形	滑石	3.00	2.25	0.50	4.8	穿孔方向は表→裏。	覆土
110-18 86	剣形	滑石	3.60	2.15	0.50	4.8	穿孔方向は表→裏。	覆土
110-19 86	剣形	滑石	4.05	1.45	0.40	4.0	穿孔方向は裏→表。	覆土
111-20 86	勾玉	滑石	2.80	1.70	0.50	4.0	穿孔方向は裏→表。	覆土
111-21 86	勾玉	滑石	2.60	1.50	0.40	2.0	研磨工程。	覆土
111-22 86	剥片	滑石	1.95	2.30	0.45	2.2	打面、左側折り取り。裏面に工具痕。	覆土
111-23 86	剥片	滑石	2.00	2.20	0.70	3.7		覆土
111-24 86	剥片	滑石	2.75	1.65	0.40	1.6	打面折り取り。	覆土
111-25 86	剥片	滑石	3.40	1.40	0.50	3.8	主剥離面の方向不明。側面はすべて折り取り。裏面側に二次加工(上面の削り痕、下部の剥離痕)あり。	覆土
111-26 86	剥片	滑石	4.35	2.00	0.60	5.3	左側に加工痕。打面に加工痕。	覆土
111-27 86	紡錘車	滑石	4.80	5.20	2.00	52.2	刀子ケズリによる成形。	覆土
111-28 86	石核	蛇紋岩	5.75	3.05	1.55	31.0	鉄製工具による打割痕が残る。	覆土
111-29 86	剥片	滑石	2.90	6.70	1.25	27.7	勾玉の素材。	覆土
111-30 86	剥片	滑石	4.55	2.50	1.00	12.5	正面左辺から基辺に向けて、正・反の打撃による二次加工。基辺は前段の剥離痕が、工具痕を切っている。正面のテカリは自然面か?	覆土
111-31 86	剥片	滑石	2.70	4.80	0.90	12.3	背面は珪化が強く、テカリがある。	覆土
112-32 86	剥片	滑石	3.50	3.30	0.75	10.7	背面に穿孔痕と削り痕、左側に削り痕。	覆土
112-33 86	剥片	滑石	3.05	3.40	0.75	9.7	左側、上面(打面)折り取り。	覆土
112-34 86	勾玉	滑石	4.45	2.70	0.45	5.9	研磨工程。	覆土
112-35 86	剥片	滑石	3.00	2.60	1.30	9.0	打面部分と背面に削り痕あり。	覆土
112-36 86	剥片	滑石	3.50	2.70	0.50	4.9	打面折り取り。	覆土
112-37 86	剥片	滑石	2.65	3.20	0.75	5.9	背面構成不明。打面は階段状の剥離面。加工痕なし。	覆土
112-38 86	剥片	滑石	2.70	2.85	0.95	6.7		覆土
112-39 86	剥片	滑石	2.60	2.30	0.85	5.6		覆土
112-40 86	剥片	滑石	2.75	1.85	0.60	3.5	折断後ケズリ成形。	覆土

D区13号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
113-2 86	土師器 坏	①13.5 ②5.2	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	住居跡西部	口縁部一部欠損
113-3 86	土師器 坏	①13.5 ②3.1	①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	底面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面ナデ。	住居跡南部	3/4残存

[5] D区検出の遺構と遺物

D区13号住居跡

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
		①口径	②器高	③底径				
113-4 86	須恵器 蓋	①13.9 ②4.6			①細 褐色鈹物粒を含む。 ②還元焰 ③灰色	右回転クロコ整形 天井部回転ヘラ削り	住居跡東 部	ほぼ完形
113-5 86	土師器 高坏	②(5.5) ③(8.8)			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③橙色	脚部外面ヘラ削り、内面ナデ。	住居跡西 部	坏部欠損
113-6 86	土師器 高坏	②(7.2) ③(9.7)			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	脚部外面ヘラ削り、内面ナデ。	カマド周 辺	坏部欠損
113-7 86	土師器 高坏	②(14.6) ③(16.1)			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③橙色	脚部外面ミガキ。内面輪積み痕顕著に残 る。	住居跡南 部	脚部全周
113-8 86	土師器 小型甕	①13.9 ②14.8 ③7.8			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り、口縁部横 ナデ、輪積み痕、内面丁寧なナデ。	カマド周 辺	完形
113-9 86	土師器 鉢	①(17.0) ②10.8 ③(8.2)			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面・胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、 内面ナデ。	住居跡南 部	3/4残存
113-10 86	土師器 甌	①16.4 ②11.8 ③3.0			①細粒の砂、片岩粒を少量含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面 丁寧なナデ。	カマド周 辺	完形
113-11 86	土師器 壺	②(13.0) ③(7.2)			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③橙色	胴部外面ヘラ削り不明瞭。内面ナデ、輪 積み痕。	住居跡中 央部	底部1/2残存
113-12 86	土師器 甕	②(7.8) ③(7.5)			①細粒の砂、片岩粒を含む。 ②酸化焰 ③にぶい赤褐色	底面ナデ、胴部外面ヘラ削り。内面ナデ。	カマド周 辺	底部全周
114-13 87	土師器 甕	①(17.8) ②32.4 ③6.3			①細粒の砂、片岩粒を多量に含む。 ②酸化焰 ③にぶい橙色	底面木葉痕、胴部外面ヘラ削り。口縁部 横ナデ、内面ナデ。	カマド	口縁部一部欠損
114-14 87	土師器 甌	①23.4 ②26.9 ③9.5			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③明赤褐色	胴部外面ヘラ削り、口縁部横ナデ、内面 丁寧なナデ。	カマド	完形
114-15 86	土製品	①(6.2) ②(7.2)			①細粒の砂を含む。 ②酸化焰 ③にぶい褐色		カマド	1/4残存
114-16 86	弥生土器	胴部片			①細粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい褐色	条痕が施されている。 内面に炭化物が付着。	覆土	中期

D区13号住居跡

図番 PL.	器種	石 材	計測値 (cm・g)				所 見	出土状態
			最大長	最大幅	最大厚	重量		
114-17 87	剥片	滑石	4.60	5.50	2.10	48.1		覆土
114-18 87	砥石	砂岩	10.15	6.10	1.40	102.2		覆土
114-19 87	剥片	滑石	3.45	4.95	1.10	20.2	正面に刀子痕あり。右側は折り取り。	覆土
114-20 87	剥片	滑石	4.00	2.55	1.10	11.1	打面は剥離時の折れ。右側面は折り取り。	覆土
114-21 87	剥片	滑石	5.20	2.60	0.60	12.8	正面の削り痕は主要剥離面に切られている。	覆土
114-22 87	剥片	滑石	1.50	4.30	0.40	2.9	打面は剥離時に欠損。	覆土
115-23 87	剥片	滑石	3.05	1.90	0.70	5.4	側面折り取り。	覆土
115-24 87	剥片	滑石	2.90	2.00	0.50	3.3	側面、打面を工具で傷つけて折り取り。	覆土

第3章 竹沼(A～D区)遺跡の調査

D区14号住居跡

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
115-1 87	石鏃	完形	黒曜石	2.5	1.5	0.5	1.3	側縁は外湾し、基部の扱りは浅い逆U字状を呈す。	貼床中

図番 PL.	器種	石 材	計測値 (cm・g)				所 見	出土状態
			最大長	最大幅	最大厚	重量		
115-2 87	剥片	滑石	2.60	1.30	0.70	2.7		覆土

周溝 検出できなかった。

竈 検出できなかった。

柱穴 1個のピットが検出された。P1の深さは26cm。

貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 ほとんど出土していない。

時期 不明。重複関係から考えると、当住居跡は6世紀後半以前の段階に相当する。

D区1号土坑 (第116図、PL.67)

位置 Pi-8グリッドにおいて検出された。D区8号住居跡を壊している。

規模 長径140cm、短径90cm、深さ20cmを測る。

覆土 3層に分かれた。土師器片3点が出土している。

時期 不明。

D区4号土坑 (第116図、PL.67)

位置 Pd-10・11グリッドにかけて検出された。D区1号井戸の東約1mの所に位置している。

規模 長径110cm、短径105cm、深さ13cmを測る。

覆土 3層に分かれた。遺物の出土はなかった。

時期 不明。

D区1号井戸 (第116・117図、PL.67・87)

位置 Pc-10、Pd-10グリッドにおいて検出された。完掘できなかった。

規模 現状では、長径250cm、短径90cm、深さ135cmを測る。

覆土 4層に分かれた。

時期 不明。

D区2号土坑 (第116・117図、PL.64・87)

位置 Ph-9グリッドにおいて検出された。D区15号住居跡を壊している。

規模 長径165cm、短径130cm、深さ30cmを測る。

覆土 古銭が出土している。

時期 中世。

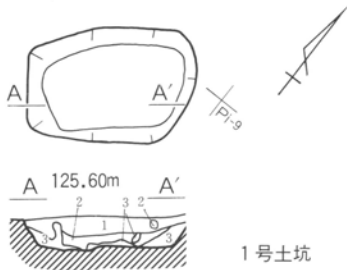
D区3号土坑 (第116図、PL.67)

位置 Pd-10グリッドにおいて検出された。D区1号井戸に接している。

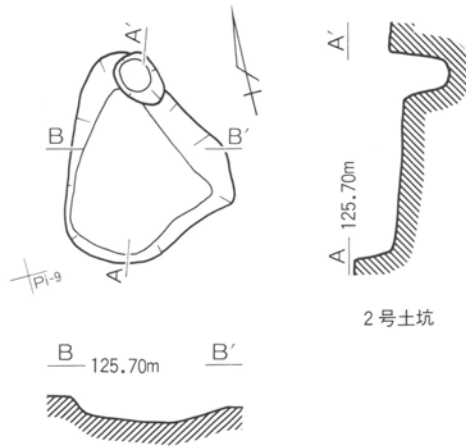
規模 長径130cm、短径120cm、深さ28cmを測る。

覆土 遺物の出土はなかった。

時期 不明。



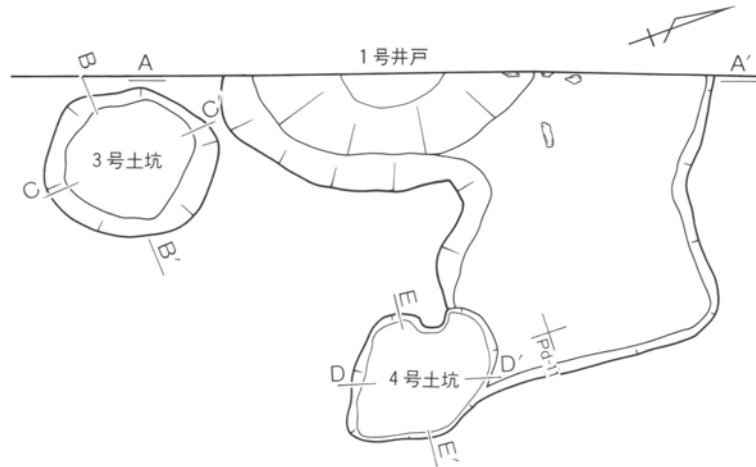
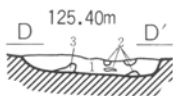
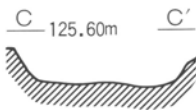
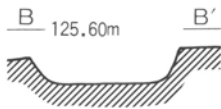
1号土坑



2号土坑

D区1号土坑

- 1 暗褐色土層 As-Bを斑点状に含む。締まりがあり、粒子が細かい。粘性はあまりない。
- 2 黄褐色土層 1層と3層の混じり。比率は3層が多く、ブロック状に混入。粘性、締まりややあり。
- 3 黄褐色土層 ロームの割合が多く、均一に入り込んでいる。締まりはややあり、粘性もある。



D区4号土坑

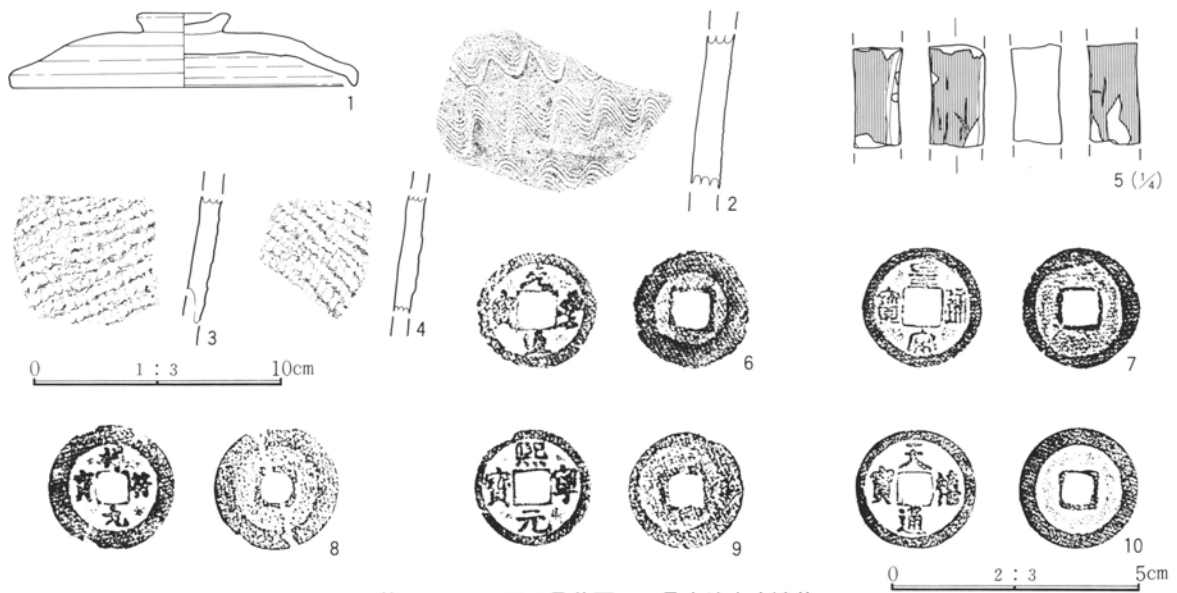
- 1 暗褐色土層 As-Bを斑点状に含む。締まりがあり、粒子が細かい。粘性はあまりない。
- 2 黄褐色土層 1層と3層の混じりだが、3層を多く含む。締まり、粘性ともにややある。
- 3 黄褐色土層 ロームを多量に含む。締まり、粘性ともに2層よりある。

D区1号井戸

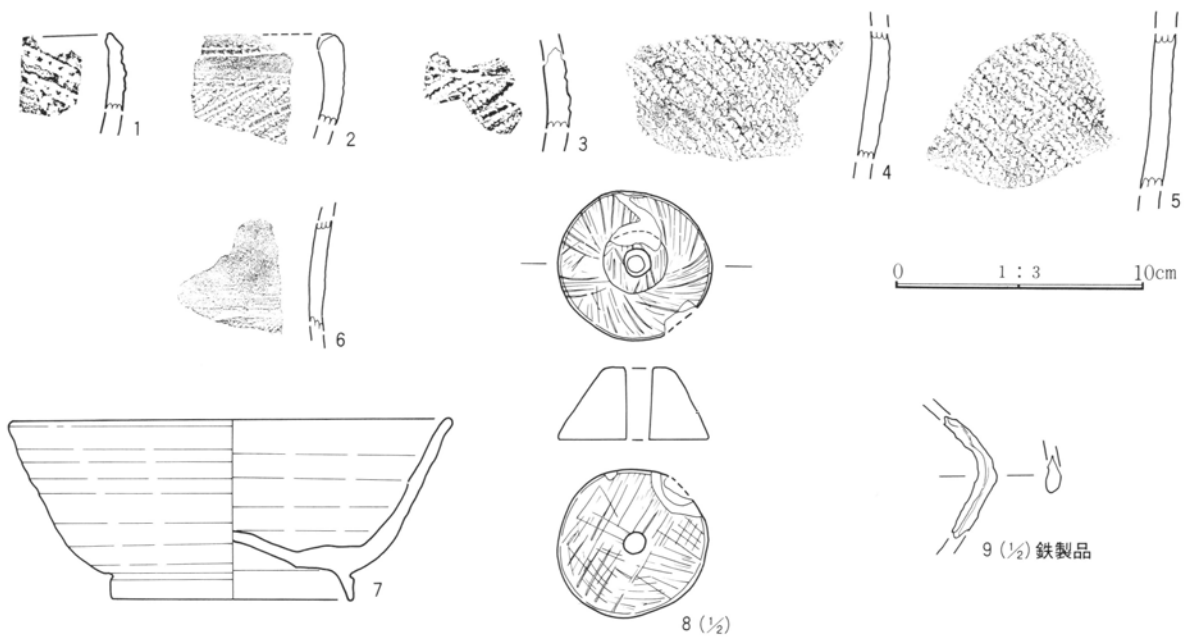
- 1 褐色土層 As-Aを含む耕作土。締まりがあまりない。
- 2 灰褐色土層 As-Bを斑点状に多量に含む。粒子が一定。締まり非常にある。
- 3 暗褐色土層 上層にAs-Bの混入が少量認められる。暗褐色土にローム粒を所々に含む。締まり、粘性ややあり。
- 4 3層に似るが軽石の量が少なくなる。
- 5 4層に似るが軽石が見られない。
- 6 暗褐色土層 3層に似ているが、暗褐色土とロームの割合により、色調がやや明るくなる。
- 7 6層よりもロームの混入が多くなるため、やや色調が明るくなる。

第116図 D区1号・2号・3号・4号土坑・1号井戸

第3章 竹沼(A~D区)遺跡の調査



第117図 D区1号井戸・2号土坑出土遺物



第118図 D区表採

D区1号井戸

図番 PL.	土器種別 器種	法量 (cm) ①口径②器高③底径	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備考
			①胎土	②焼成	③色調			
117-1 87	須恵器 蓋	②(2.9) ③(13.8)	①粗 片岩粒含む。	②還元焰	③灰色	右回転クロコ整形	覆土	1/4残存
117-2 87	須恵器 甕	頸部片	①細 白色鉾物粒を含む。	②還元焰	③灰色	波状文。	覆土	
117-3 87	縄文土器	胴部片	①細粒の砂を含む。	②良	③にぶい黄橙色	縄文施紋。原体はL 縦。 内面は丁寧な調整。	覆土	中期前半
117-4 87	縄文土器	胴部片	①細粒の砂、繊維を含む。	②良	③にぶい褐色	縄文施紋。原体はR 比横位。 内面は横方向の調整。	覆土	前期黒浜式

〔5〕D区検出の遺構と遺物

D区1号井戸

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				全長	幅	厚	重量		
117-5-87	砥石	部分	砂岩	(5.4)	2.8	2.3~2.6	(60)	4側面を使用。	覆土

図番 PL.	器種	遺存状況	計測値 (g・mm)			種 類・年 代	出土状態	
			重量	銭径(タテ・ヨコ)	銭厚			
117-6-87	古銭	一部欠損	(2.75)	2.38	2.38	0.9~1.3	元豊通寶 北宋元豊元年 西暦1078年	D区2号土坑
117-7-87	古銭	完形	1.39	2.4	2.35	0.8~1.1	皇宋通寶 寶元元年 西暦1039年	D区2号土坑
117-8-87	古銭	一部欠損	(2.51)	2.5	2.5	0.6~1.1	祥符元寶 北宋大中祥符元年 西暦1008年	D区2号土坑
117-9-87	古銭	完形	2.59	2.38	2.35	0.8~1.1	熙寧元寶 北宋熙寧元年 西暦1068年	D区2号土坑
117-10-87	古銭	完形	3.53	2.4	2.4	1.0~1.6	天禧通寶 北宋天禧元年 西暦1018年	D区2号土坑

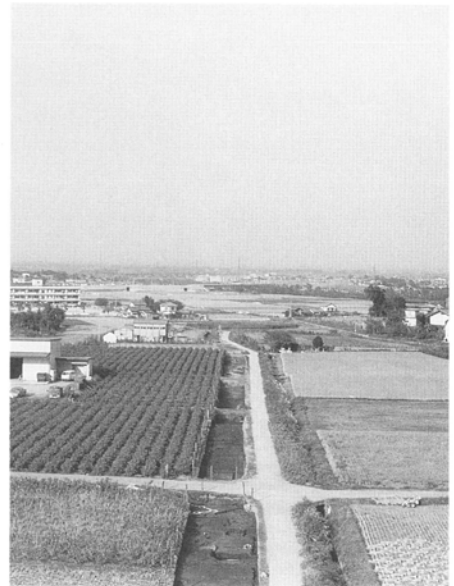
D区表採

図番 PL.	土器種別 器種	法 量 (cm)		①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	出土状態	残存状況 備 考
		①口径②器高③底径					
118-1 87	縄文土器	口縁部片		①細粒の砂、繊維を含む。 ②良 ③にぶい赤褐色	半截竹管による平行沈線、刺突が施されている。	表採	前期黒浜式
118-2 87	縄文土器	口縁部片		①細粒の砂、繊維を含む。 ②良 ③赤褐色	縄文施紋。原体はL Ⅱ半截竹管による刺突。内面横ミガキ。	表採	前期黒浜式
118-3 87	縄文土器	胴部片		①細粒の砂、繊維を含む。 ②やや良 ③赤褐色	縄文施紋。原体はL Ⅱ半截竹管による刺突。内面横ミガキ。	表採	前期黒浜式
118-4 87	縄文土器	胴部片		①細粒の砂、繊維を含む。 ②良 ③にぶい黄橙色	縄文施紋。原体はR Ⅱ横位。 内面はやや丁寧な調整。	表採	前期黒浜式
118-5 87	縄文土器	胴部片		①細粒の砂、繊維を含む。 ②良 ③灰褐色	縄文施紋。原体はR Ⅱ横位。 内面はやや丁寧な調整。	表採	前期黒浜式
118-6 87	弥生土器	胴部片		①細粒の砂を含む。 ②良 ③にぶい赤褐色	縄文施紋。原体はL Ⅱ。	表採	中期
118-7 87	須恵器 壺	①16.7 ②7.0 ③9.5		①細 白色鈹物粒を含む。 ②還元焰 ③灰色	右回転ロクロ整形。 高台貼付。	表採	ほぼ完形

図番 PL.	器種	遺存状況	石 材	計測値 (cm・g)				特 徴	出土状態
				径	孔径	厚	重量		
118-8-87	紡錘車	一部欠損	蛇紋岩	4.0	0.7	1.9	35.0	表面全体に目の細い削り痕が残る。	表採

第4章

分析とまとめ



竹沼遺跡

〔1〕 緑埜遺跡群 植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

緑埜遺跡は群馬県藤岡市に所在し、鎗川の支流である鮎川左岸の段丘上に位置する。

今回、発掘調査が行われた2区～5区の発掘区では、天仁元年（1108年）の示標テフラである浅間B軽石（As-B：新井、1979）および天明三年（1783年）の示標テフラである浅間A軽石（As-A：新井、1979）の堆積が認められた。As-B直下の黒色土層では畠址（4区：6層）・水田址（2区：7層、3区：7層、5区：5層）などの遺構が確認されている。しかし、条里制区画に符合する遺構は確認されていない。また、本遺跡の水田形態は、畦畔を構築せず、等高線に沿って溝で区画されている。一方、As-A下位では畠址が検出されており、As-A降灰以前に畑作が行われていたことが想定されている。

今回の自然科学分析調査では、現地にて発掘調査担当者と協議を行い、As-B下位に堆積する黒色土層に主眼をおいて、As-B降灰以前の稲作の様態を検討することとした。また、明確な遺構は検出されていないが、As-A下位の堆積層を対象として、As-A降灰以前の畑作に関する検討を行うこととした。

現地調査時の土層観察では、各土層中の花粉化石が酸化作用により分解・消失していることが予想されたため、比較的酸化作用に強く、イネ科の栽培植物、特にイネ属の有無を検討する上で有効な植物珪酸体分析を行った。

1. 試料

試料採取地点は、水田址・畠址が検出された2区（F1-55）・3区（Ic-55）・4区（Ju-55）・5区（Km-55）を対象とし、As-A降灰以前の土層からAs-B下位の水田址・畠址の耕作土を中心に、長さ5～29cmの柱状ブロック試料を採取した。採取したブロック試料は、室内にて層相などを観察し、分析目的を考慮しながら分析試料を抽出した（図1）。

2. 分析方法と結果の表示方法

分析は、近藤・佐瀬（1986）の方法を参考にした*¹。試料中の植物珪酸体は、過酸化水素水（H₂O₂）・塩酸（HCl）処理、超音波処理（70w、250KHz、1分間）、沈定法、重液分離法（臭化亜鉛、比重2.3）の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを封入（封入剤：プリユウラックス）し、プレパラートを作成して、400倍の光学顕微鏡下で全面を走査する。その間に、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計算する。

引用文献

新井房夫「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』157、p.41-52 1979

*1：近藤・佐瀬（1986）の方法は、イネ科植物体内の植物珪酸体の組成および生産量が異なる（近藤、1983）ことを考慮して、植物体に形成される植物珪酸体全てを同定の対象とし、種類毎の出現率から過去の植生や栽培植物の有無を推定するものである。例えば、イネ（イネ属）では機動細胞珪酸体の生産量が多いが、コムギ（イチゴツナギ亜科オオムギ族）などでは機動細胞珪酸体がほとんど形成されない。

近藤鎌三・佐瀬隆「植物珪酸体分析、その特性と応用」『第四紀研究』25、p.31-64 1986

計数結果を一覧表に示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から稲作および畑作について検証するために、植物珪酸体組成図を作成した。各種類 (Taxa) の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体ごとに、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

3. 植物珪酸体の産状

計数結果および各地点の植物珪酸体組成を、図2～5に示す。イネ科葉部起源の植物珪酸体は各区試料で多く検出される。その保存状態は短細胞珪酸体で良好であるが、機動細胞珪酸体では不良であり、表面に多数の小孔 (溶食痕) が生じているものが認められる。

各区では植物珪酸体組成の層位的変化はみられず、As-B降下以前とAs-A降下以前ではほぼ同様である。

栽培植物であるイネ族イネ属 (以下、イネ属とする) の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体は、As-B降灰以前の水田址 (2区: 7層、3区: 7層、5区: 5層)・島址 (4区: 6層) の耕作土でわずかながら検出される。また、各区ではキビ族のヒエ属・キビ属・エノコログサ属、イチゴツナギ亜科のオオムギ族などの短細胞珪酸体もわずかに検出される。ただし、現状の植物珪酸体の分類では、これらの植物珪酸体が栽培種に由来したのか否かを判別することは困難である。

以上のほかに、各区試料からはタケ亜科 (ネザサ節・その他)、ヨシ属、ウシクサ族 (コブナグサ属・ススキ属)、イチゴツナギ亜科 (その他) の短細胞珪酸体あるいは機動細胞珪酸体が産出する。これらの種類の出現率はほぼ同様であり、その中ではタケ亜科が高率に出現する。また、細胞列もわずかながら認められる。

一方、As-A降灰以前の堆積層 (5区: 2層、4区: 2層、3区: 2層、2区: 3層・4層) でも、イネ属の植物珪酸体がわずかながら検出される。また、4区を除いてヒエ属・キビ属・オオムギ属などの植物珪酸体もわずかながら検出するが、これらが栽培種に由来したのか否かを判別することは困難である。

4. 本調査区の農耕について

ここでは、今回の分析結果と現水田耕土のイネ属出現率を比較して、As-A降灰以前およびAs-B降灰前後の稲作の消長について検討する。

イネ属の出現率を判断基準とした過去の稲作について、現状では稲作耕土中での植物珪酸体の堆積過程が判明していないために議論の余地もある。しかし、この手法は過去の稲作の消長を考察する上で示唆に富むものと思われる。現在の水田耕土におけるイネ属の出現率としては、近藤 (1988) の調査例がある。それによれば、イナワラ堆肥連用 (8年間、500kg/10a/年) の水田土壌表層では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率は16%を示すとされている。

今回の分析結果では、As-Bで埋没した水田址あるいは畠址のうち、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が2区7層最上部で9.6%の値を得たが、3区7層最上部、4区6層最上部、5区5層最上部では、イネ属機動細胞珪酸体の検出個数が十分でないために出現率を算出できなかった。ただし、各区の遺構検出面下位では、10%前後の出現率が得られた。また、As-A降灰以前の土層では各区試料の検出個数が十分でないために、機動細胞珪酸体の出現率を算出できなかった試料があったものの、2区・3区・4区では概して10%前後の出現率が得られた。これらの値は、現在の水田土壌表層における出現率と比較して低い。しかし、各区のほとんどの土層からは、イネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がともに検出された。また、As-B降灰以前の土層から、ともに水田址あるいは畠址が検出されている。

以上のことから、2区・3区・5区ではAs-B降灰以前に稲作が行われていたと推定される。これについては、低湿地などの湿潤な環境下に生育することが多いヨシ属・コブナグサ属を伴うことから水田耕作であった可能性がある。この点については、遺構内の水分状態を明らかにするために、珪藻分析でさらに検討する必要がある。

ところで、各区のAs-A降灰以前の土層では栽培種か否かの判別が困難であるものの、キビ族のヒエ属・キビ属・エノコログサ属、イチゴツナギ亜科のオムギ族など、畑作物の栽培種を含む種類の短細胞珪酸体もわずかに検出された。今回検出された植物珪酸体が栽培種に由来すると仮定すれば、イネだけでなくムギ・キビなどの栽培が行われた可能性がある。なお、現在では畑作を行う際に畝の保温・保湿材として稲藁が、また肥料として稲藁堆肥が使用されることがある。仮に当時このような形で稲藁が使用されたとすれば、検出されたイネ属珪酸体は利用された稲藁に由来する可能性も考えられる。4区や2区～5区より検出されたイネ属が栽培されたものか、稲藁に由来するものかの判別はつきにくく、今後の類例の蓄積をさらに進める必要があろう。

植物珪酸体組成からみて、As-A降灰以前まで生育していた種類にあまり変化がなく、本調査区の近辺にはタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたと推定される。現在では、ネザサ節は光の射す開けた地面に生育し（室井、1960）、ススキ属やイチゴツナギ亜科の仲間は比較的乾いた場所に、ヨシ属、コブナグサ属は低湿地などの湿潤な環境下に生育することが多い。このことから、周囲に存在した湿潤な場所にはヨシ属、コブナグサ属が、地面に光の射すやや乾いた場所ではネザサ節、ススキ属、イチゴツナギ亜科の仲間が生育していたと考えられる。

本調査区で得られた分析調査結果は、これまで緑埜地区遺跡群で行われたAs-B降灰時の水田耕土を対象とした分析調査結果と調和的であり、緑埜地区における平安時代の稲作（水田耕作）の存在を支持するものとなった。なお、本調査区の発掘調査から畠址が検出され、その畠址を用いたイネやムギなどの

室井 緯「竹笹の生態を中心とした分布」『富士竹類植物園報告』p.103-122 1960

栽培や稲藁の利用の可能性も予想された。また、平安時代以降では稲作の存在が予想されるものの、水田址は検出されていない。これらより、緑埜地区が水田耕作に適した地形にあるのにも関わらず、何らかの要因により畑作耕地化したと推定される。これらの点は緑埜地区の稲作の様態を考える上で十分に留意しておきたい。

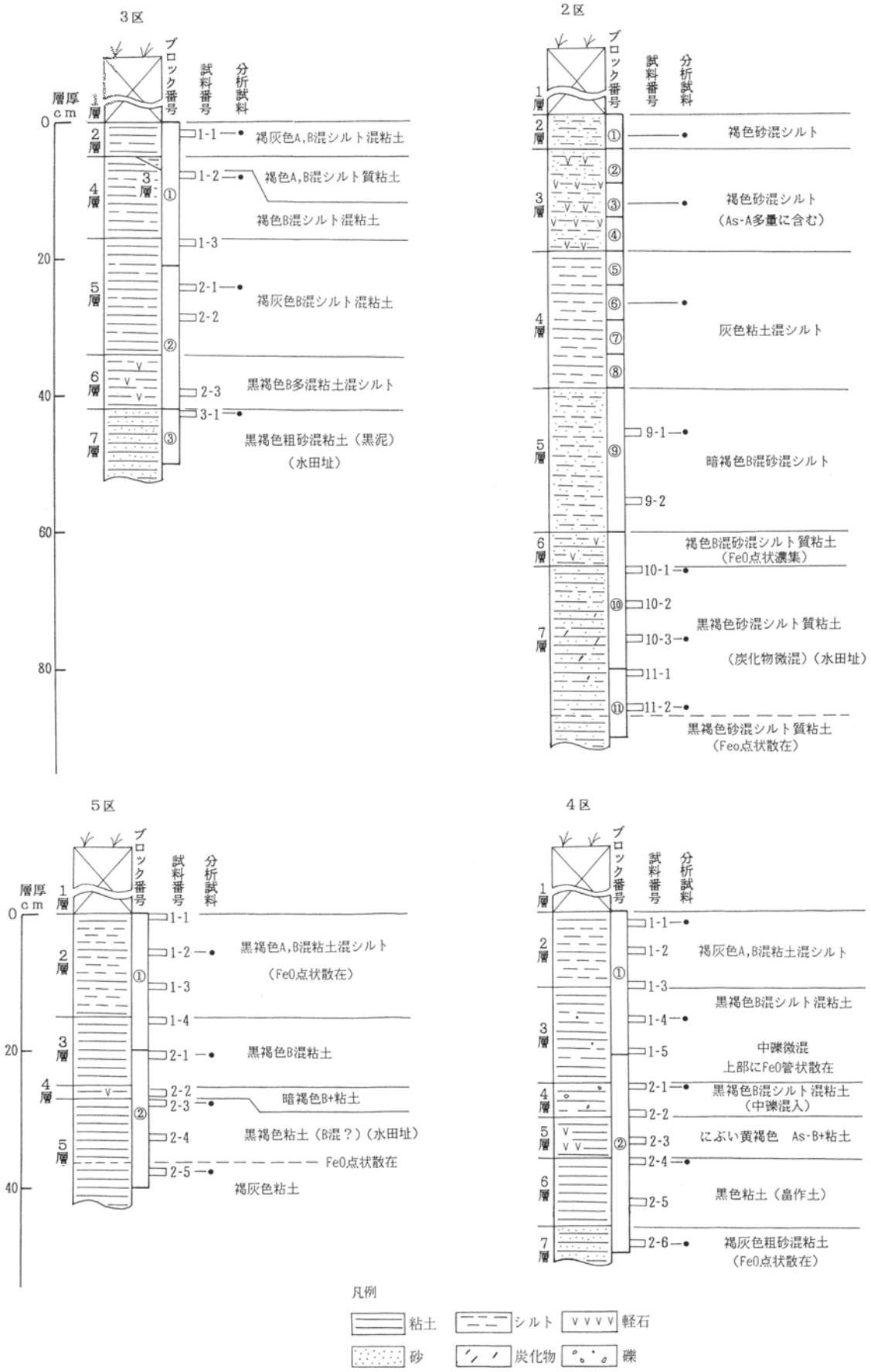


図1 緑埜遺跡 各区の模式柱状図と分析試料

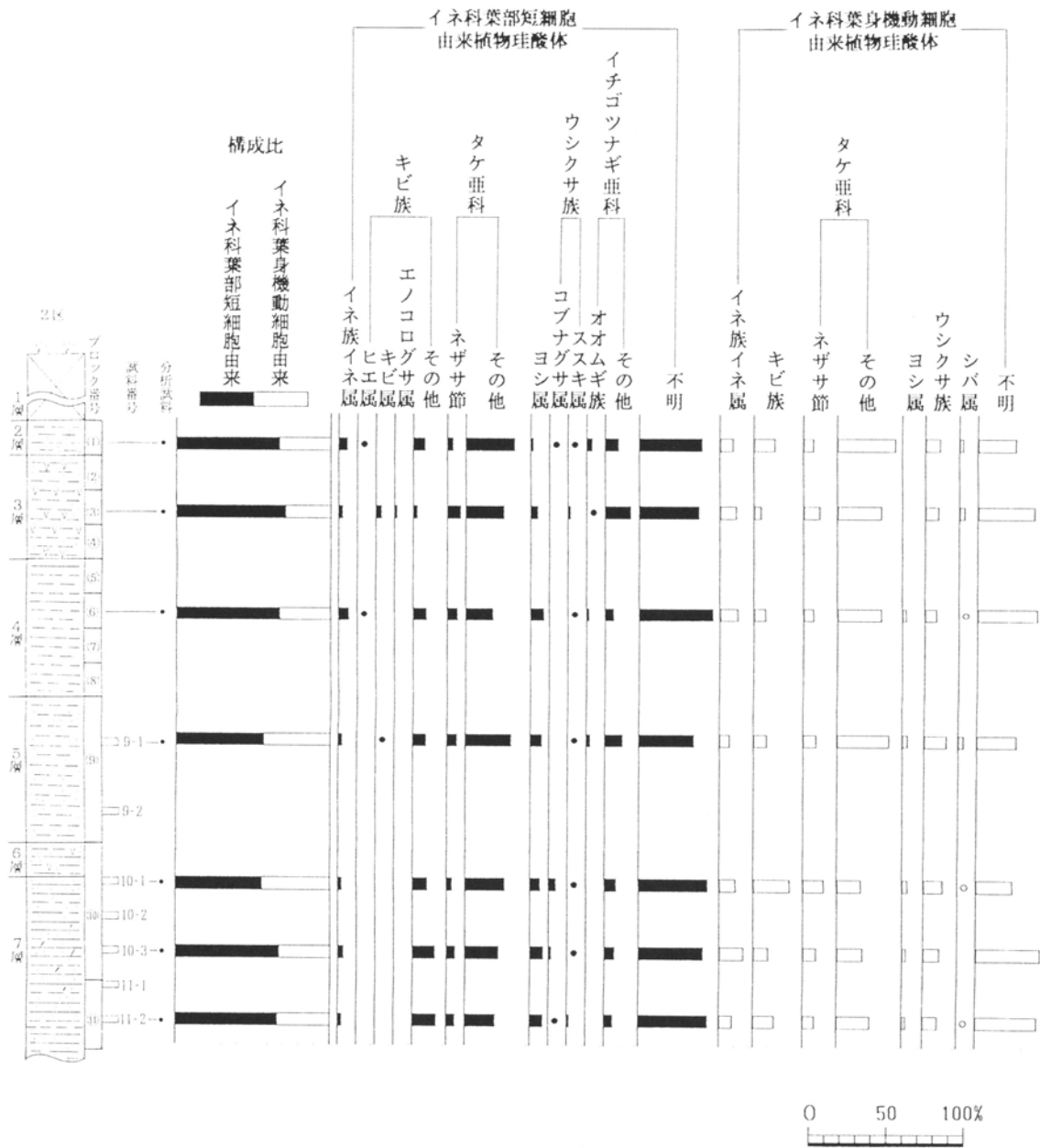


図2 緑茎遺跡 2区試料 植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体はイネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体はイネ科葉身機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満をあらわす。

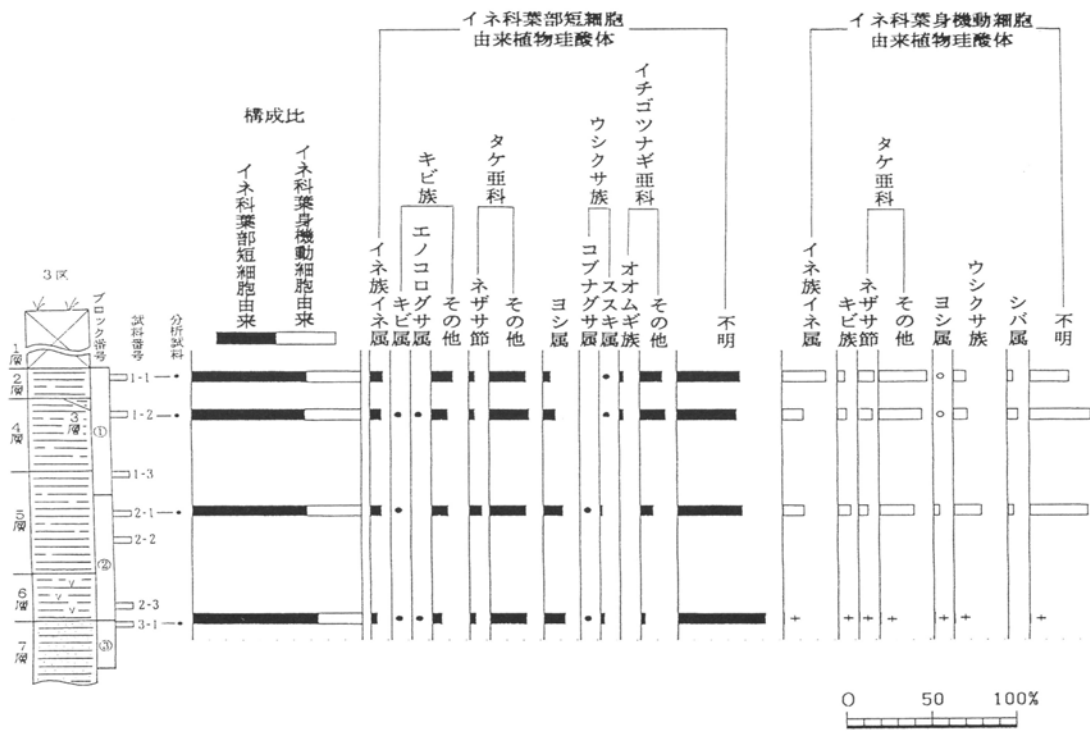


図3 緑柱遺跡 3区試料 植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体はイネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体はイネ科葉身機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満をあらわす。+は、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料において出現した種類をあらわす。

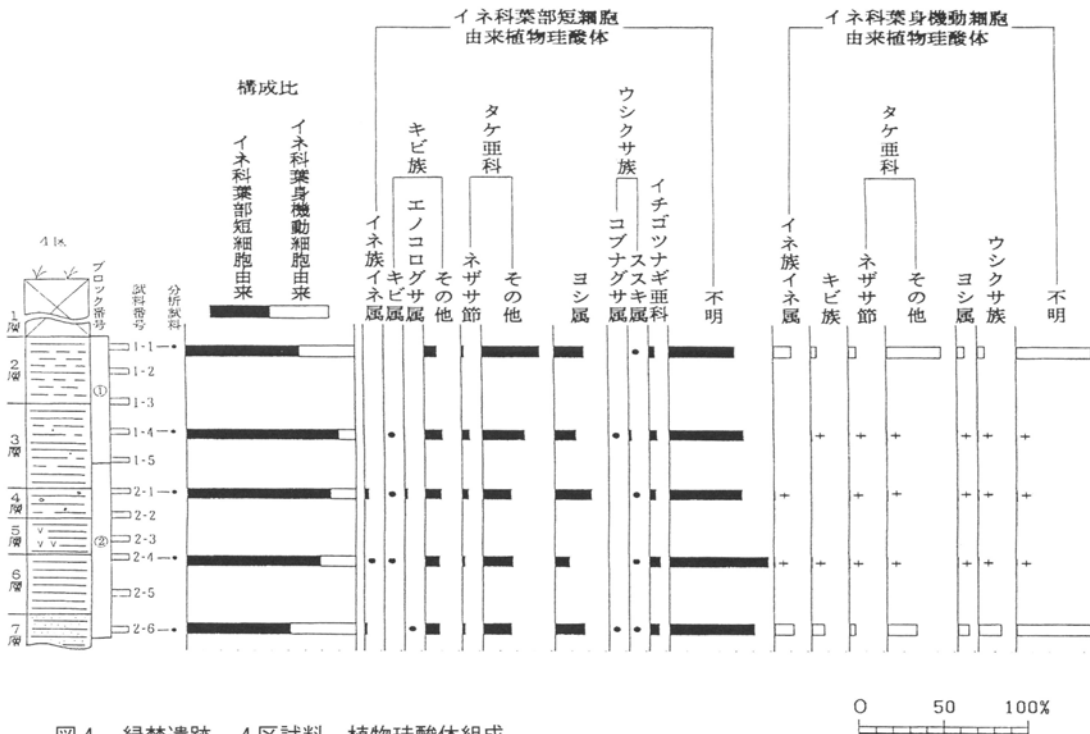


図4 緑柱遺跡 4区試料 植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体はイネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体はイネ科葉身機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満をあらわす。+は、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料において出現した種類をあらわす。

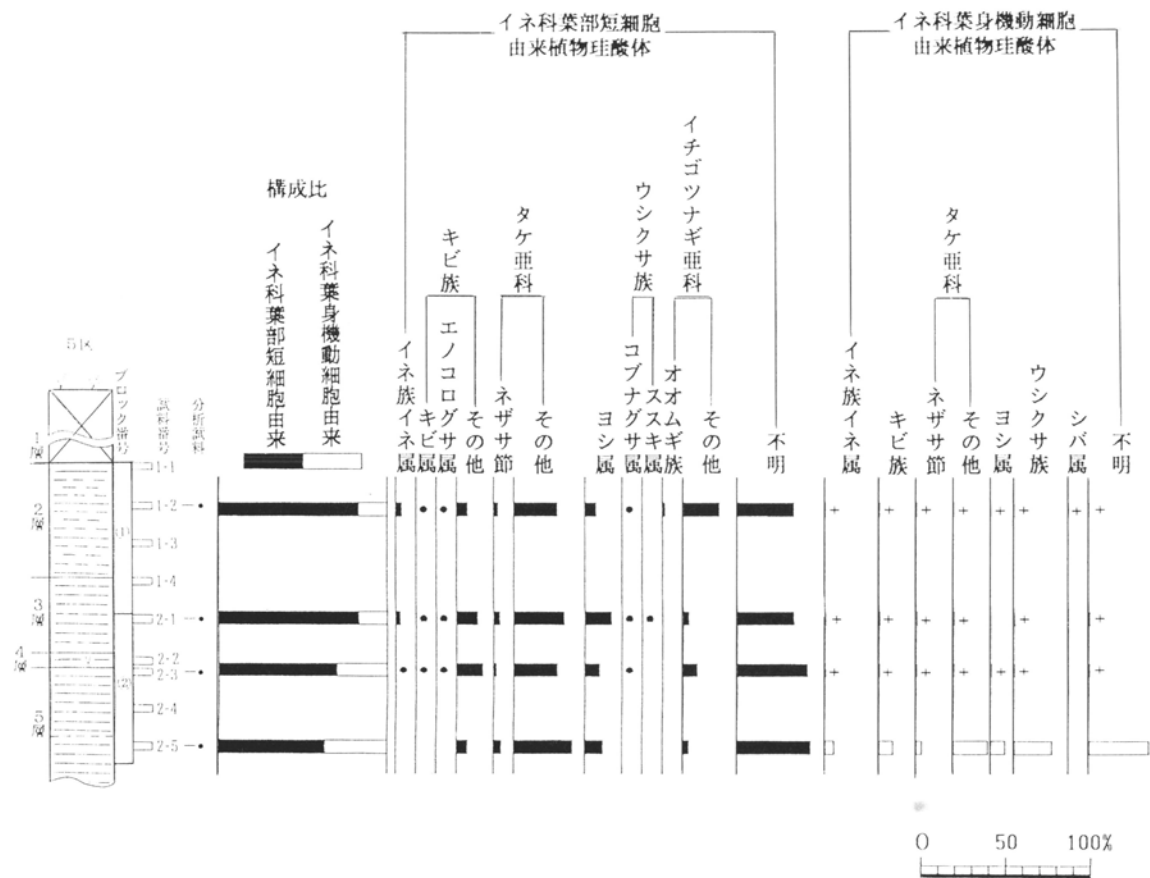
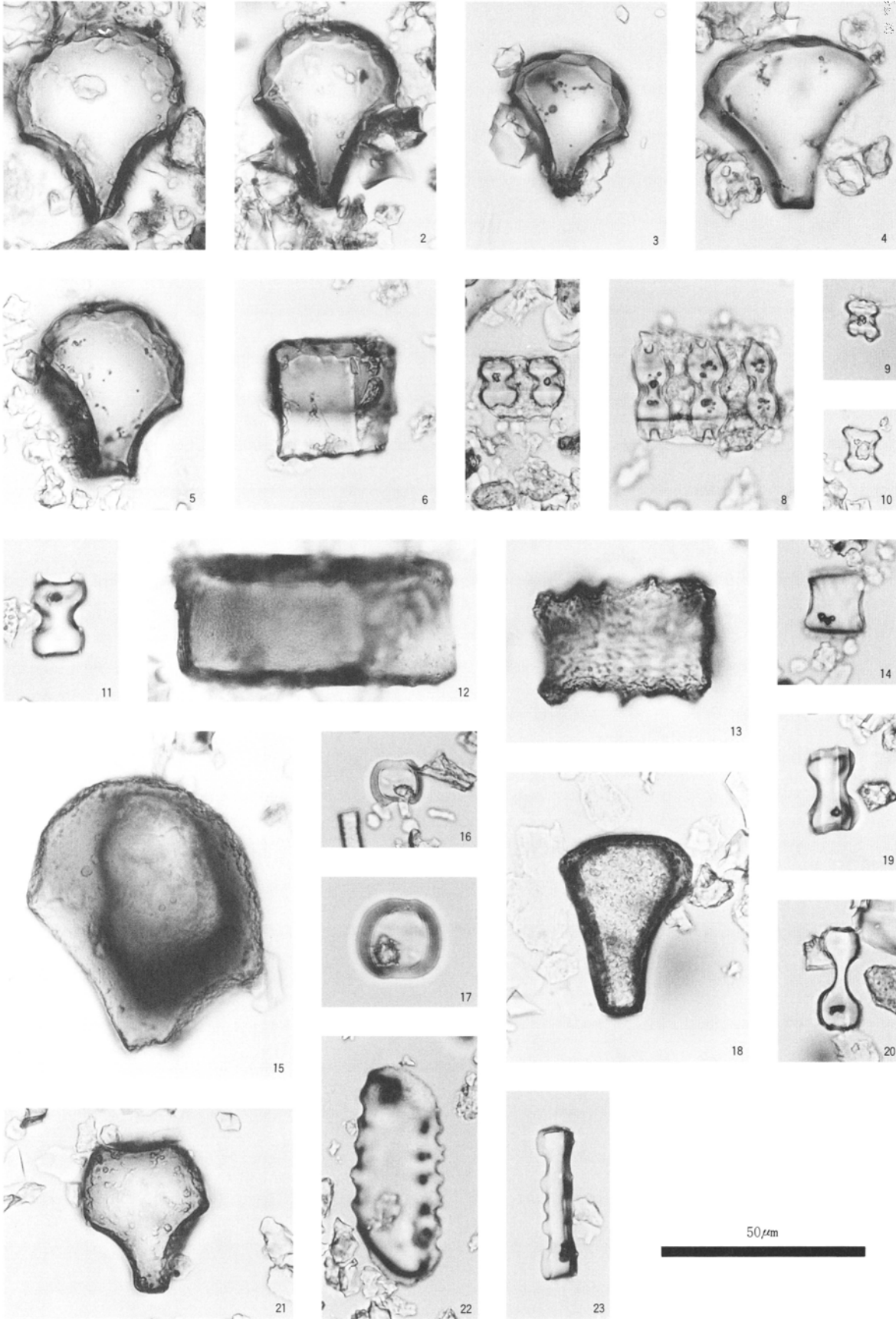


図5 緑茎遺跡 5区試料 植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体はイネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体はイネ科葉身機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満をあらわす。+は、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料において出現した種類をあらわす。

植物珪酸体の顕微鏡写真



〔2〕竹沼遺跡で石材として取り扱った その種類と地質的関連

陣内 圭一

1. 当遺跡の地形および地質的特徴

緑埜地域は地形上からみると、南西から北東に緩傾斜する地盤上に位置している。当遺跡は標高位凡そ110m付近で、現在では桑畑や水田がよく発達した農耕地帯に在り、北部には幹線の国道254号線が東西に走り、西側には程近く一般県道金井・倉賀野停車場線が南北に走る交通上からも好都合な要地であることは、古代人の考察も同じであるのかと想う。当地域は、往時においては、鑄川及び鮎川のはん濫原であった地盤であり洪積世の時点において、非常に厚層な河岸段丘礫層を形成しているものであり、所によっては、鮎川の河川流氷は、伏流状態をなす部分もみられるものである。

この広大な扇状地的な河岸段丘は、当地域においては、鮎川方向に傾斜する地形をなしており、旧河川敷は一段と断崖で河岸が形成されていて、洪水などの危険に襲われる難を免れることのできる地点であると先住民は選択したものであろう。

地質的にみると、当地域の基盤は、新生代第三紀中部中新世の吉井層である。この吉井層は、泥岩・砂岩がよく発達し互層をなし、凝灰岩層を挟在するのが一般的な層序である。平成2年度末頃、吉井町吉井の東部、国道254号線の南側路肩で、凝灰岩層の崩壊に対する施工が大きく実施されていたが、凝灰岩の挟在をよくみせてくれていた。その凝灰岩層の露頭がみえなくなったのは残念である。

その基盤上に厚層な砂礫土層を堆積している当地点は、先住民にとって居住の拠点としては、すこぶる好適地であったと考えられる。それは、第一に日照が快適であり、次いで、生活用水が近接していることであり、更に農耕にもこと欠かない土質状態である。

現在は、灌漑用水路が、西部の竹沼貯水池から大堀用水路で、水田分布を拡大して好都合の状態にしている地域である。

一般的な地質状態は、洪積世の砂礫土層の上部に薄層の粘土に礫を僅かに混入する地層と粘性土層とで凡そ数10cm位で、その上部を浅間火山の褐色板鼻軽石層が薄層で覆いその上部に風化した軽石層が普通1m位存在し、その上部を黄色板鼻軽石層が凡そ20cm位の層厚で被覆している。その上部は、鮎川などの河川作用で堆積した砂質シルトの沖積層が所によっては、50～60cm程の層厚で、耕作土層としての堆積状態をみせている。

以上のような地形及び地質に恵まれた当地点は、先住民の生活環境として、好適なものであったと考えられるが、この地を捨てざるを得なかった理由は知らない。

参考文献
『関東ローム』1965 築地書簡

[2] 竹沼遺跡で石材として取り扱ったその種類と地質的関連

2. 当遺跡の石材に関連をもつ地質的環境

a. 石材の数量と成因別について

竹沼遺跡において、石材として、取り扱った数量は、総数1,711点*で40種類の岩石であった。これらを成因別に分けてみると、火成岩類が9種類の211点で、総数量の12.3%を占めるものである。ついで、堆積岩類は10種類で98点あり、総数量の5.7%に当たる少量である。さらに変成岩類は21種類の1,402点であり、総数量比81.9%と非常に多量である。この変成岩類の特殊な状況などについては、後の項の記述によって、ご了解を頂きたいと思うところである。

*竹沼遺跡のA～D区出土の礫の総数。住居跡カマドやこも編石、その他覆土中から出土した礫すべてを含んでいる。

更に、個々の石材については、項を改めて、解説を加えることとし、ここでは、石材鑑定分別にかかわりをもった、分類別・成因別表を掲げることとする。

(1)火成岩の分類表

産出状態	造岩鉱物	石英	斜長石	アルカリ長石 準長石	輝石
		カリ長石			
		雲母	角閃石		かんらん岩
		その他の鉱物			
深成岩的	花崗岩 花崗閃緑岩	閃緑岩	はんれい岩	超塩基性岩	
半深成岩的	花崗斑岩	ひん岩	輝緑岩		
火山岩的	流紋岩 石英安山岩	安山岩 粗面岩	玄武岩		
SiO ₂ (%)		66%	52%	45%	
色指数(有色鉱物の量)	(白っぽい)	10%	40% (濃い色)	70%	

(2)堆積岩の分類と地質時代該当表

未固結	泥 粘土	砂	礫	火山灰 軽石 岩屑	石灰岩類	第四紀	新生代
固結	シルト岩 泥岩 泥板岩	砂岩	礫岩	凝灰岩 集塊岩	石灰軟泥 泥石灰		
甚固結	粘板岩	硬砂岩 珪岩	雑色珪岩	角礫凝灰岩 輝緑凝塊岩	石灰岩 (大理石)	中生代 古生代	

(3)沈澱岩の分類表

鹹質溶液	珪質溶液	石灰質溶液	鉄質溶液
岩塩 カリ塩	珪華 チャート 角岩	灰華 縞状石灰岩	鉄華 黄土石

(4)変成岩の分類表

原岩	接触変成岩	広域変成岩		
		低度変成	中程度変成	強度変成
砂質岩	ホルンヘルス	珪質千枚岩	石英片岩 絹雲母片岩 紅簾片岩	準片麻岩
粘土質岩	ホルンヘルス 堇青石ホルンヘルス	千枚岩 石墨千枚岩	黒雲母片岩 雲母片岩 珪線石片岩	
凝灰質岩	ホルンヘルス 陽起石ホルンヘルス	所謂〔輝岩〕 オットレライト千枚岩 藍閃片岩	緑泥片岩 緑簾片岩 角閃岩	
蛇紋岩			滑石片岩	
石灰岩	晶質石灰岩	晶質石灰岩(大理石)	石灰片岩	
鉄質岩			赤鉄鉱片岩	

b. 石材の種類・産地の予想・特徴の一端

石材の鑑定は、顕微鏡による造岩鉱物の決定に及ぶことなく、肉眼によってのみの観察を主としたものであり、大まかな岩石の種類別であることを、最初に申し上げ、さらに産地点の想定等は、拙い経験によるものであり、適切な解説には程遠いこととなると思う。以下個々の石材について、先に掲げた分類表の項分けなどに従って、簡単な説明を加えることとする。

* 岩石名の右に記した()内の数字は、個数を示す。

(1) 火成岩類について

①蛇紋岩(3)* 産地は鮎川上流で、御荷鉾式変成岩分布地帯には広域に露頭がみられる岩石である。この岩石は、普通には暗緑色の緻密な脂感があるので、他の岩石と区別し易い。また、硬度が3~4位と低いので、軟らかく細工しやすい石材である。所によっては、赤色などを交え、五色石などと珍重される岩石である。

②角閃岩(5) 鮎川上流域で、前者と同様な地帯に存在し、角閃石の集合体であり、その集合状態は繊維状、片状である。特に岩塊の比重が大きく、他の岩石と比べて重く、新しい面は灰黒色の輝があるなどの特徴がはっきりみえるものである。

③斑斕岩(1) 産地は、前者同様に鮎川上流域地帯と想定される。緑黒色柱状の結晶がみえるのは、角閃石であり、斜長石が混入している状態がある。全体として濃い色合いで「黒みかげ」などといわれ、墓石などには珍重される美しさがあるものである。

④閃緑岩(3) 産地は鮎川流域である。主として下仁田町付近から上流付近に産出するものであるが、当地点は鮎川のはん濫原であった時点を考えれば、当遺跡付近での転在はあってしかるべきである。深成岩であり、黒味があった、角閃石の柱状結晶がみえるものである。やや白っぽい石英閃緑岩質のものもみえる。

⑤輝緑岩(165) 産地は鮎川上流域である。普通暗緑色、灰緑色細粒の岩石である。この岩石は、古生層中に岩脈状態でみられることもある。上野村で神流川を横断する岩脈を観察したことがあった。御荷鉾式変成岩帯には岩床として存在する岩石である。

この岩石は曹長石と輝石や輝石から変わった緑泥石を含んでいるものとされている。当遺跡では、火成岩類の中で最多量の存在を占めているものである。

⑥石英斑岩(2) 産地は鮎川沿岸であるので、段丘礫層中に混在しているものである。岩石の石基が有色鉱物に乏しいので、全体として白っぽくみえるのが特徴であり、濃緑色にみえるのは黒雲母である。また石英の斑晶がよくみえる。

⑦安山岩(12) 産地は鮎川流域でなく、鮎川流域のものである。一般に斑状で、色指数は40または35~10位で、浅黒い色の仲間で、輝石安山岩などでは、輝石がよくみえるものである。自然の露頭では板状の節理がよく発達しているのが

みられる。なお、しそ輝石、角閃石安山岩なども包括して、すべて安山岩とした。この岩石は鑄の谷では古来から庭石や敷石に使用された。

⑧石英安山岩(2) 産地は鑄川上流である。SiO₂平均値が66%を越す仲間で白っぽい斑状をなす火山岩で、色指数が10以下に入るものである。この岩石も石材として、鑄川中上流地域では、建造物によく使用されていたものである。南牧川流域での櫛石は、コンクリート建造が盛んになる以前では珍重された建築石材であった。

⑨流紋岩(18) 産地は鮎川流域にはなく、おそらく、南牧川上流地域、南牧村砥沢は古来から、その産地として有名である。酸性の岩石で、岩石の色は帯白、帯褐その他緑がかかったものなどあるが、一般的に砥石材として使用されている。特に虎の斑のような縞状に流紋構造をもつものが珍重され、刃物の研磨材として、家庭用、大工用刃物を研ぐ中砥的なものである。遺跡の中でも研磨に利用された様子が石材に残っていた。

(2) 堆積岩類について

堆積岩の分類表の項立てに従って、固結度の低いものから高いものへと、地質時代の若い新生代から中生代・古生代のものへと列記したい。

①砂岩(17) 当遺跡を擁する地域の基盤は、第三紀中部中新世の吉井層であるが、この地層を形成する岩石は、主として、砂岩と泥岩であり、凝灰岩を挟するものである。

その中の砂岩は、遺跡でも研磨材として、刃物などを研ぐ荒砥材として用いられたものであろう。海底に堆積した砂の固結形成された岩石である。この地域の南西にある牛伏山(490m)付近には、砂岩を形成する砂粒の粒度が大きく花崗質の牛伏砂岩といわれるものが分布している。共に砂岩であり、見かけの上で、粒子が流水の作用で運搬されたものであるので、丸味を帯びているのが特徴である。またよく、帯褐色であるが、これは、含有する鉄分が酸化して、褐鉄鉱となったためである。

②泥岩(砂質泥岩)(9) 産地は前者と同様当地域の基盤岩中に存在するものであるが泥岩として粘土のみから形成されたものであったら、風化が激しく作用して崩壊してしまうが、砂分を混在した砂質泥岩であったので、崩壊しないでいた石材である。

③凝灰岩(10) 産地は前者と同様であり、砂岩と泥岩の互層中に挟在している。主に灰白色の堆積岩で、第三期の頃の火山噴火による降灰の堆積岩である。比較的耐火性に富んでいるので、「かまど」材に使用されたかと想定するものである。

岩質は砂岩や泥岩と異なり、火山灰として軽石粒を混在するのが特徴である。

④凝灰質砂岩(4) 産地は前者と同様である。砂分を含有することは、凝灰岩の形成された周辺地帯であって、砂分の混入が作用しているものであろう。

⑤頁岩(2) 産地は鑄川上流であろう。剝離性の発達した泥質岩で、泥板岩と

もいう。

頁岩が更にかたくなり、剝離性の増したものは粘板岩とよばれるものである。

⑥硬砂岩(3) 産地は鮎川上流の秩父古世層地帯から運搬されたものである。安山岩と見まちがえるような、褐灰色の顔つきをしているが、新しい面では、安山岩では組成鉱物に結晶形がみえるが、硬砂岩では、粒子が円形であるのが多く、硬堅である。

⑦輝緑凝灰岩(2) 産地や漂着状況は前者と同じである。古生代における火山噴火による火山灰の堆積形成されたもので、古世層中に挟在され分布している。暗赤紫色や緑色であり、白色の石灰岩の斑紋があることが多く、見分けの観点にもなる。硬度は低い、庭石などに「ブドウ石」などといわれて、使われる。

⑧チャート(26) 産地は前者同様で、鮎川上流地域に広く分布する古生代の堆積岩である。灰色や赤色、白色で非常に硬く、ハンマーで打つと火花が飛び一種独特のキナ臭いにおいがする。カチカチ石そのもので、石英分 SiO_2 が95%に達するものもある。

⑨珪岩(21) 産地など前者と同じであるが、石英質砂岩などといわれ、白色ガラス質光沢をもつ、硬度が高く古世層中に分布している岩石である。

⑩赤色珪質板岩(4) 産地は古世層地帯であるので、前者と同じように鮎川によって運ばれた岩石である。赤色板状の石英分よりなるもので、赤色珪質頁岩ともいう。平板状に劈開するが硬度は高いものである。

(3) 変成岩類について

変成岩分類表の項立てにそって、接触変成岩類から広域変成岩類と、更に低度変成のものから、中程度変成のものへ、なお砂質岩から粘土質岩へと当遺跡群でみられた石材について、列記することとする。

①熱変成岩(10) 鎭川沿岸では好都合に採取される石材である。遺跡で生活を営んだ人々は、硬質の岩石であるので、石器工作に貴重な資料として、採集されたものであろう。火成岩の貫入などによって接触した岩石が熱変成岩(ホルンヘルス)となったものである。鎭川でみかけるものは、新しい面は黒灰色でガラスのように貝殻状断口をみせ、また、珪質化している。表面が風化しているので、打破すると特徴がわかる。

②石英片岩(130) 分類表の砂質岩の中程度変成岩であり、珪石ともいう。鮎川の中流に広く分布する三波川変成岩帯を産地とする。白色で他の変成岩層中に挟在され、硬度が高く、 SiO_2 の純度の高いものである。

③千枚岩(3) 細粒堆積岩源の細粒変成岩で、細粒で片理がよく発達しているので薄板状によく割れ易いのでこの名がある。産地は、古世層分布地帯縁辺部でよくみられる。

④絹雲母片岩(40) 砂質岩の中程度変成岩類である。以下掲げる変成岩類、すなわち結晶片岩類は、その鉱物組成が多種多様であり、その含有する種類についても、多い少ないがある。この場合、その岩石名を呼ぶとき、普通識別に際

して、その造岩鉱物の少なくみえる鉱物名をさきあげ、順次多量に混在する鉱物名を連ね、石英は多量であるがこれを加えないのが普通の習わしである。この絹雲母石英片岩も絹雲母片岩と呼ぶ。これら結晶片岩類は鮎川流域に広く分布するので、以下産地の特記を略したい。

⑤**石墨絹雲母片岩(10)** 美しく絹糸光沢をみせている絹雲母片岩に、わずかに石墨を混在している石材である。これらの岩石は、河川作用で運搬され、片理構造も手伝ってか、平板状、または、短棒状に造形され、往時の生活に生かされたことになる。

⑥**石墨片岩(4)** 前者同様な変成岩であり、風化の進んだこの岩石片は指先に黒鉛のように付着する。断層面では、やや高純度の石墨塊に接する。石墨は鉛筆の芯に使う。

⑦**絹雲母石墨片岩(671)** この石材は、当遺跡の総石材量の39%を越す量を示しているものである。このことは、当遺跡にこの石材の産地が接近した地点にあることが、唯一の特色であり、また、それだけに利用価値が高かったものであると想定される。

⑧**点紋絹雲母石墨片岩(131)** 絹雲母石墨片岩に、ボツボツと白色の点紋を散在する岩石であり、点紋は曹長石などである。前者と同様な産地である。

⑨**紅簾絹雲母石墨片岩(3)** この石材は絹雲母石墨片岩に、美しい細い短柱状の紅簾石を混在するものである。紅簾絹雲母片岩であると、みごとな岩石である。

⑩**絹雲母緑泥石片岩(7)** この石材は前者と同様に石基は石墨片岩であり、それに緑泥石と極くわずかな絹雲母を混在しているものである。

⑪**脆雲母石墨片岩(1)** この石材は、石基は石墨片岩であり、それに、雲母と外観は似ているが、雲母より脆弱で、剝離片は弾性に乏しい脆雲母が混在している。

⑫**絹雲母脆雲母片岩(1)** この石材は、石基が脆雲母であって、そこに、絹雲母が混在している岩石組成である。前者と共に珍しい石材であった。

⑬**緑泥片岩(91)** この石材は、緑色で、往時から片理構造をもつ結晶片岩ということで、板碑などに活用されたものである。当遺跡では、その数量が比較的少量である。

⑭**点紋緑泥片岩(21)** この石材は緑泥片岩に、白色のボツボツと点紋をもつものである。点紋は曹長石などであり、また、黄鉄鉱をも点在するものもみかけた。

⑮**絹雲母緑泥片岩(39)** この石材は緑泥片岩に、絹雲母が混在しているもので、緑色の基底に絹糸光沢の絹雲母が混入したきれいな岩石である。

⑯**石墨緑泥片岩(11)** この石材は、緑色の石基に、わずかに石墨が加わって、黒味を帯びた状態の岩石である。

⑰**絹雲母石墨緑泥片岩(12)** この石材は、緑泥片岩の石基に、石墨とさらにわ

ずかな絹雲母を筋状に混在しているものである。

⑱点紋絹雲母緑泥片岩(31) この石材は、石基は緑泥片岩であり、絹雲母とさらにわずかに点紋状に曹長石、斜長石などを散在している状態の岩石である。

⑲緑簾緑泥片岩(58) この石材は、緑泥石の深緑色と緑簾石の黄緑色とを斑状に交え、さらに白色の石英が織りなす模様的美しさをもつ岩石である。三波石として、鑑賞用石材として、天下の銘石となっているものが、この岩石である。

⑳輝岩(37) この岩石は、凝灰質岩の広域変成岩で、低度変成を受けたものである。緑色変成岩であり、片理構造のあまり発達していない岩石である。

㉑滑石片岩(83) 三波川結晶変成岩地帯に産出する岩石であるので、鮎川流域には滑石が採鉱された地点が分布している。蛇紋岩が変成作用を受けて生成された岩石で、多くは灰白色で、極めて軟らかく、爪で傷がつく、最も硬度の低い岩石である。なお、真珠光沢があり、指で触れると、蠟のような脂感がある。潤滑剤として使われたり、細工に珍重される石材であり、遺跡に生活過程のあとを残しているようである。

c. 鮎川を主とする石材概況

当竹沼遺跡で取扱われた石材を概観するに当たり、付近の地質的な分布状態から、考察を加えることとする。石材すなわち、岩石がその地点に存在するには、その地盤が岩石によって形成されていて、風化現象によって生活に活用し易い状態におかれるか、岩石が自然現象によって、運搬されているか、また人為的に、人の力で運搬される、等々が想定されるのである。当地点においては、河川動力による運搬堆積された岩石の礫を、生活に利用したものが主体であると考えられる。

このことに、最大の影響を及ぼしているのが、鮎川である。鮎川は1級河川であり、源を藤岡市上日野、赤久縄山(1,522m)の西部で分水嶺となる杖植峠付近に発し、高崎市山名付近で鎗川に合流するまで、延々33,809mを流下するものである。当遺跡付近は、最終合流点より、4km程上流地点付近に位置することをみると、いかに大きな影響を受けて形成された地盤であるかが察知される。なお、当地点付近は、先にも記したように、鎗川のはん濫原にも属する地域であるので、鎗川流域に分布する地質地帯からの岩石が、礫として段丘礫層形成に関与していることは必定であり、見逃せないことである。以下、地質図により、石材の産地等に関連づけて結論化したい。

(1) 秩父古生層

鮎川の上流は、地質図でみられるように、秩父古生層地帯を流下するもので、当地でみかけることのできる硬砂岩、輝緑凝灰岩、チャートや珪岩などは、秩父古生層地帯から運搬されたものであろう。

(2) 三波川結晶片岩層

鮎川は、全延長の凡そ80%は、地質図(図1)でみられるように、三波川結



図1 群馬県地質図の〔鉈川沿岸〕
(内外地図株式会社から)

参考文献

- 『地質学ハンドブック』1966 朝倉書店
- 『地学事典』1983 平凡社
- 『原色岩石図鑑』1955 保育社
- 『かぶらの自然』1972 かぶら理科研究会
- 『関東地方-日本の地図3』1988 共立出版
- 『関東地方-日本地方地質誌』1980 朝倉書店
- 『田篠中原遺跡』1990 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

晶片岩地帯を侵食して、地質構成物質を、下流である当地域に運搬堆積したものである。従って当遺跡で見られる石材の80%を超える多量の種類が、三波川結晶片岩類となっていることは当然のことであると賢察いただけるのである。岩石は、全体として片理構造がよく発達していること、比較的短小な割れ形をすることなどが、特殊な生活用品として活用されたようであるのは、この地質構成に預っている岩石の一大特色であるといえる。

(3) 中生代の地層

当遺跡では、頁岩が混入していたが、これは、鉈川流域の産物であるものと

想定される。鮎川の流域には、中生代の地質分布地帯はみられないのである。

(4) 第三紀の地層

鮎川が三波川結晶片岩地帯を流出した下流地帯は、新生代第三紀中新世の富岡層群の分布する地域となる。ここで、砂岩、泥岩、凝灰岩などが基盤岩となるので、当遺跡で活用されていることが確認される。

(5) 火成岩層と熱変成岩

普通の火山岩層や火成岩漿の貫入起源による接触熱変成岩層は、鮎川の流域においては、みることのできないものである。然し、輝緑岩は岩脈などとして分布しているので産出がある。ほか、当遺跡へ、搬入されている火成岩や熱変成岩は、鎭川の河川作用、または、人力によって運ばれたものであろうと思う。

以上で、先人が、生活の中で、各種石材の特徴を試行錯誤を繰り返しながら、石材を資材化してゆかれた姿に対して、敬意を表しつつ行き届かぬコメントを終わらせていただきます。

〔3〕 鎚川流域の古墳時代玉作

女屋和志雄

1. はじめに

竹沼遺跡は、鮎川の谷口に位置する集落である。その時期は、古墳時代では前期と後期の2つがあり、谷地の対岸にある緑埜上郷遺跡を含めると前期から後期の様相を知ることができる。この時期、下流の白石古墳群では白石稲荷山古墳以後も七興山古墳や二子山古墳、萩原塚古墳が作られ、鮎川対岸には後期群墳集の平井古墳群がある。竹沼やその周辺遺跡は、それら古墳被葬者を支えた集落の一つである。ここで検出された玉作は、6世紀中頃の滑石製模造品を集団で生産しており流域でも典型となる資料である。ここでは、石製品と滑石製模造品を玉作として一括し、現在知られている県内玉作資料の半数を占める鎚川流域での特徴をあげる。

2. 研究抄史

群馬県では、滑石製模造品の出土が数多く知られている。古くは、赤城山榎石や境町姥石などの祭祀遺跡、最近では集落に加えて豪族居館もあげられる⁽¹⁾。また、5世紀前半の藤岡市白石稲荷山古墳や6世紀初頭の安中市築瀬二子塚古墳などでは、武器・農工具に地方色を帯びた杵や盤、履などが副葬されている。古墳への副葬が衰退するに伴い、集落での出土が増加する傾向にあり、生産背景、製品の供給関係をつかむことが課題といえる。

工房については、戦前に伊勢崎市八寸城山遺跡が子持勾玉の製作跡と推定されていた。初めて実態を明らかにしたのが、昭和36年甘楽郡甘楽町笹遺跡の調査である⁽²⁾。そこでは、調査された12軒のうち3軒が古墳時代後期の滑石製模造品工房で、剣形や勾玉、白玉、紡錘車などが製作されていた。専門集団の形態、結晶質片岩の工具類や砂岩製砥石の豊富さは、工房の内容を知るのに十分であった。その後、昭和51年に藤岡市竹沼遺跡が調査され、白玉と紡錘車の製作工程が復元されている。ここでは谷地をはさんで複数の工房があり、笹遺跡との比較資料となるばかりでなく、本格的な生産実態を明らかにした。また、原石の滑石質蛇紋岩について、鮎川上流日野地域が産出地に推定され、産地と工房との関係が初めて指摘された。昭和54年には、高崎市下佐野遺跡で古墳時代前期の工房が調査され⁽³⁾、県内での玉作の導入期の様相が明らかにされた。中でも、碧玉質から滑石質への転換が三波川変成帯の滑石質蛇紋岩を介している点で、導入後の展開を知る資料となった。その後は、調査の増加とともに工房数も増し21遺跡がある(図1)。鎚川流域での集中がみられる一方で、非三波川系と思われる頁岩製の模造品の存在が明らかになり、新たな資料が加えられている。また、古墳時代以後、布生産に関係させて紡錘車に推移していくことが言及⁽⁴⁾されている⁽⁵⁾。

3. 県内の古墳時代玉作

群馬県の玉作は、4世紀の導入期、5・6世紀の展開期に区分される。

その特徴は、(1) 関東地方では最も早く滑石質材への転換を図ること

(2) 導入後、5・6世紀を通じて生産を継続すること

(3) 豊富な原石産出地である三波川変成帯があること

があげられる。

4世紀中頃、畿内政権下にあった北陸地方玉作は解体する。東日本の玉作は、これを契機にはじまり各地域に遺跡が出現する。長野県では、4世紀後半の丸子町社軍神遺跡、望月町後沖遺跡などがあり、北陸技法で碧玉製管玉やその他石製品が製作されている。関東地方では、遅くとも4世紀末頃までに神奈川県海老名市本郷遺跡、千葉県香取郡下総町大和田遺跡、茨城県土浦市烏山遺跡などで生産が始まる。⁽⁶⁾

群馬県では、高崎市下佐野遺跡、同市新保田中村前遺跡、前橋市芳賀東部団地遺跡がある。県中央部での立地は、毛野中樞勢力下での生産と考えられる。下佐野遺跡では、4世紀後半で3期に区分される3群7軒の工房が検出されている。I期は、滑石質蛇紋岩に混在して碧玉でも管玉を生産、II・III期になると滑石質蛇紋岩のみになり、勾玉、管玉に加えて本村型琴柱形石製品を生産している。本村型琴柱形石製品は、福井県、長野県、埼玉県、静岡県、千葉県、山形県で出土しており、下佐野遺跡の製品流通範囲を示すとも考えられる。

展開期は、滑石製模造品製作の最盛期で、古墳への多葬を画期におおよそ5世紀と6世紀に分けられる。関東地方では、6世紀中頃まで生産が継続し、栃木県でも5世紀後半には小山市で生産がはじまる。埼玉県では、比企郡川島町正直遺跡で6世紀代にも碧玉製管玉が生産され、武蔵国を南北に二分した玉作の様相が指摘されている。⁽⁷⁾ 県内では、5世紀前半から6世紀中頃にかけての古墳に副葬されること、7世紀前後まで生産が継続する点に特徴がある。

5世紀の工房は、後半代の4遺跡で検出されている。主に滑石質蛇紋岩で、管玉、勾玉、白玉、剣形、有孔円板、紡錘車を生産している。4世紀代とは原石や技法の点で継続性がみられるが、古墳に特徴的な器種は含まれず集落と古墳とは本来工房を別にすると考えられる。5世紀後半太田市鶴山古墳の刀子は、熟練した複数の工人か工房の手になると指摘されているが、⁽⁸⁾ 副葬品向け専業工人の存在が暗示される。

6世紀の工房は、14遺跡で検出されている。県西部では、鎭川の支流、神流川、烏川に沿ってまとまる。滑石でも硬軟、色調の点で明瞭な差異がみられ、多元化した生産形態を反映している。県東部でも、伊勢崎市八寸大道上遺跡で主に白玉が生産されている。また、豪族居館の伊勢崎市原之城遺跡や前橋市大屋敷遺跡など、主に利根川以東に頁岩を用いた模造品が分布する。生産形態は不明だが、⁽⁹⁾ 原石産地には足尾山地が推定されている。専業形態を確立した西部に容認された、東部の自立への動きといえる。

4. 鐮川流域の玉作

鐮川は、長野県境付近の水源から県南西部を流れて烏川に合流する。南には、三波川変成帯の北縁にあたる赤久縄山を最高峰とする山並みが連なる。ここからは、滑石や蛇紋岩、結晶質片岩、砂岩が豊富に産出し、原石や工具として利用されている。鐮の谷と呼ばれる流域は、川沿いの段丘上に多くの遺跡がある。古墳時代では、谷の入口に盟主ともいえる白石古墳群、中流の甘楽町には谷で最大の6世紀後半笹森稲荷古墳、同じく富岡市には豪族居館の本宿郷土遺跡、7千点以上の滑石製模造品が出土した祭祀遺構の久保遺跡がある。

工房は、5世紀後半から6世紀後半までの10遺跡で検出されている。その分布は、高田川、丹生川、雄川、白倉川、鮎川の支流ごとにまとまる傾向と鐮川との合流点に近いことが特徴である。原石入手の容易さと製品の流通を意図した立地といえる。現状では地理的な点から、高田川・丹生川流域、雄川・白倉川流域、鮎川流域の3つに群別することができる。6世紀初頭から中頃に生産の最盛期があること、拠点集落での集団による専業生産が共通した特徴である。

恵下原、笹、甘楽条里、竹沼の各遺跡は、その典型で複数の工房による量産形態を知ることができる。そこでは、勾玉、白玉、剣形、有孔円板の模造品と紡錘車が生産されている。5世紀代は古墳副葬品に共通する作りの精巧さ、最盛期は集落需要を反映した量産・粗製化、6世紀後半は白玉と紡錘車が主流となる、特徴の推移があげられる。原石は、滑石質蛇紋岩が広く流通する一方で、時期が下るに従い滑石でも軟質のものや白色系のものが主流となる。量産への対応と加工の容易さが大きな理由である。

鐮川流域での生産は、古墳への滑石製模造品の副葬とその流行で専業化をたどる。古墳への副葬は、前方後円墳に限らず円墳にまで普及し石製品に代わる需要を生んだ。しかし、6世紀初頭には衰退に向かい、集落での祭祀が盛行する。滑石製模造品は、祭祀具のひとつに加えられ広い範囲で流通する。その需要に三波川変成帯への地の利で集団を形成し、専業で生産したのが鐮川流域である。しかし、6世紀中頃には古墳への副葬は衰退、集落での祭祀も子持勾玉や須恵器の流行で需要を失い、急速に規模を縮小して生産の幕を閉じる。

註1 東日本埋蔵文化財研究会『古墳時代の祭祀』（1993）

2 群馬県立博物館『笹遺跡－鐮川流域における滑石製品出土遺跡の研究』（群馬県立博物館研究報告 1963）

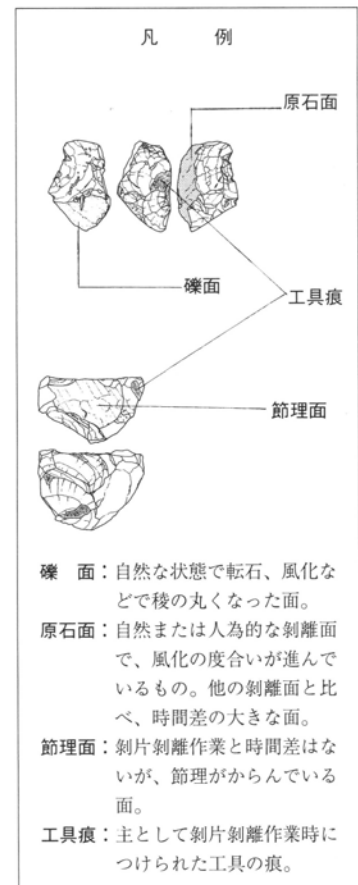
3 藤岡市教育委員会『F1 竹沼遺跡』（1978）

4 群馬県埋蔵文化財調査事業団『下佐野遺跡Ⅱ地区』（1986）

5 中沢 悟・春山秀幸・関口功一「古代布生産と在地社会－矢田遺跡出土紡錘車の分析を通して」『群馬の考古学』（1988）

6 寺村光晴『古代玉作形成史の研究』（1980）

7 石岡憲雄「北武蔵の玉作」『研究紀要』第2号 埼玉県立歴史資料館（1980）



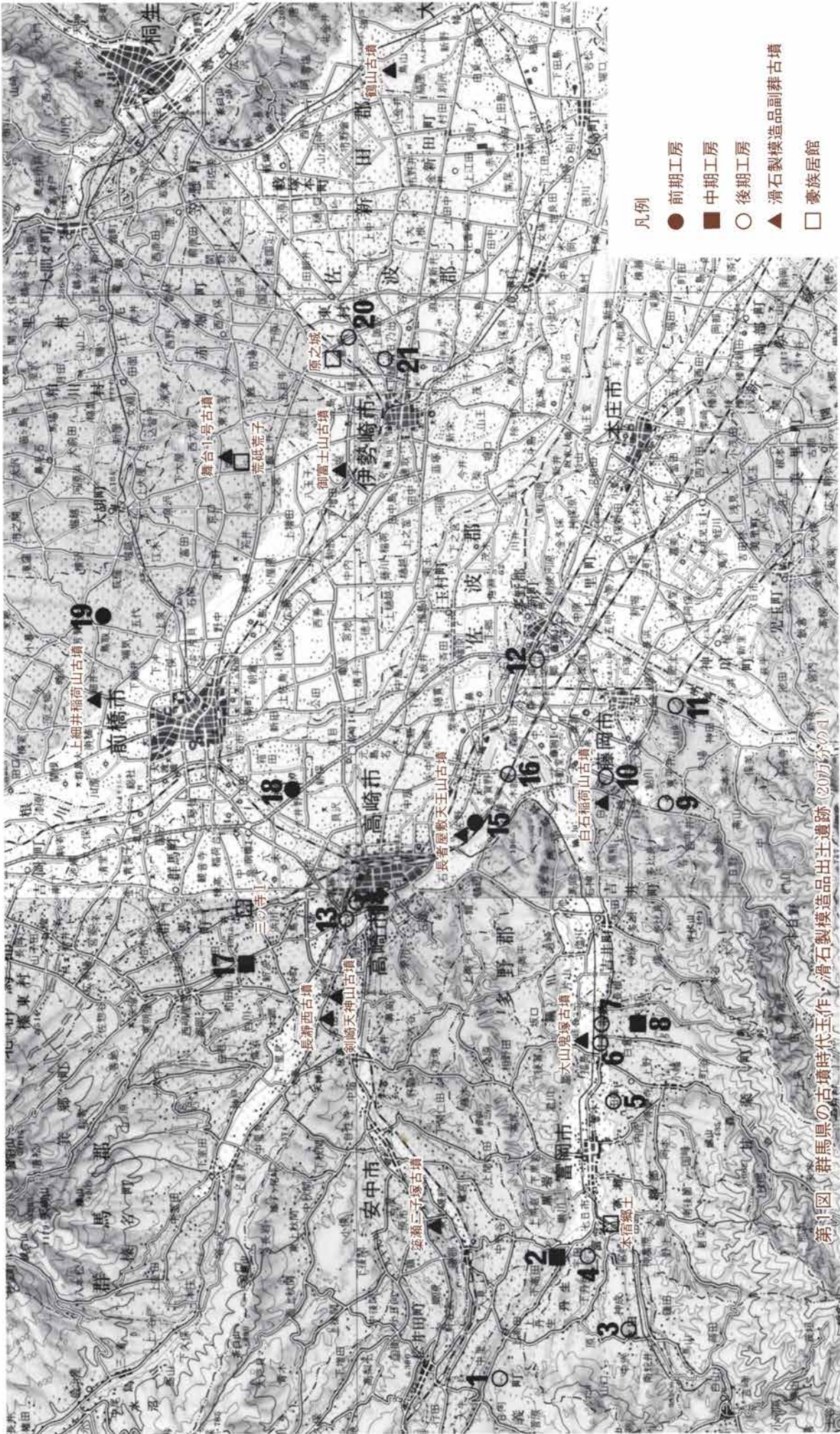
- 8 右島和夫「鶴山古墳出土遺物の基礎調査Ⅰ」『群馬県立歴史博物館調査報告書』第2号(1986)
- 9 前原 豊「2つの石製模造品の石材—北関東における古墳時代後期の石製模造品の掘り方」『発掘者』305 発掘者談話会(1994)

群馬県古墳時代玉作・滑石製模造品遺跡一覧表

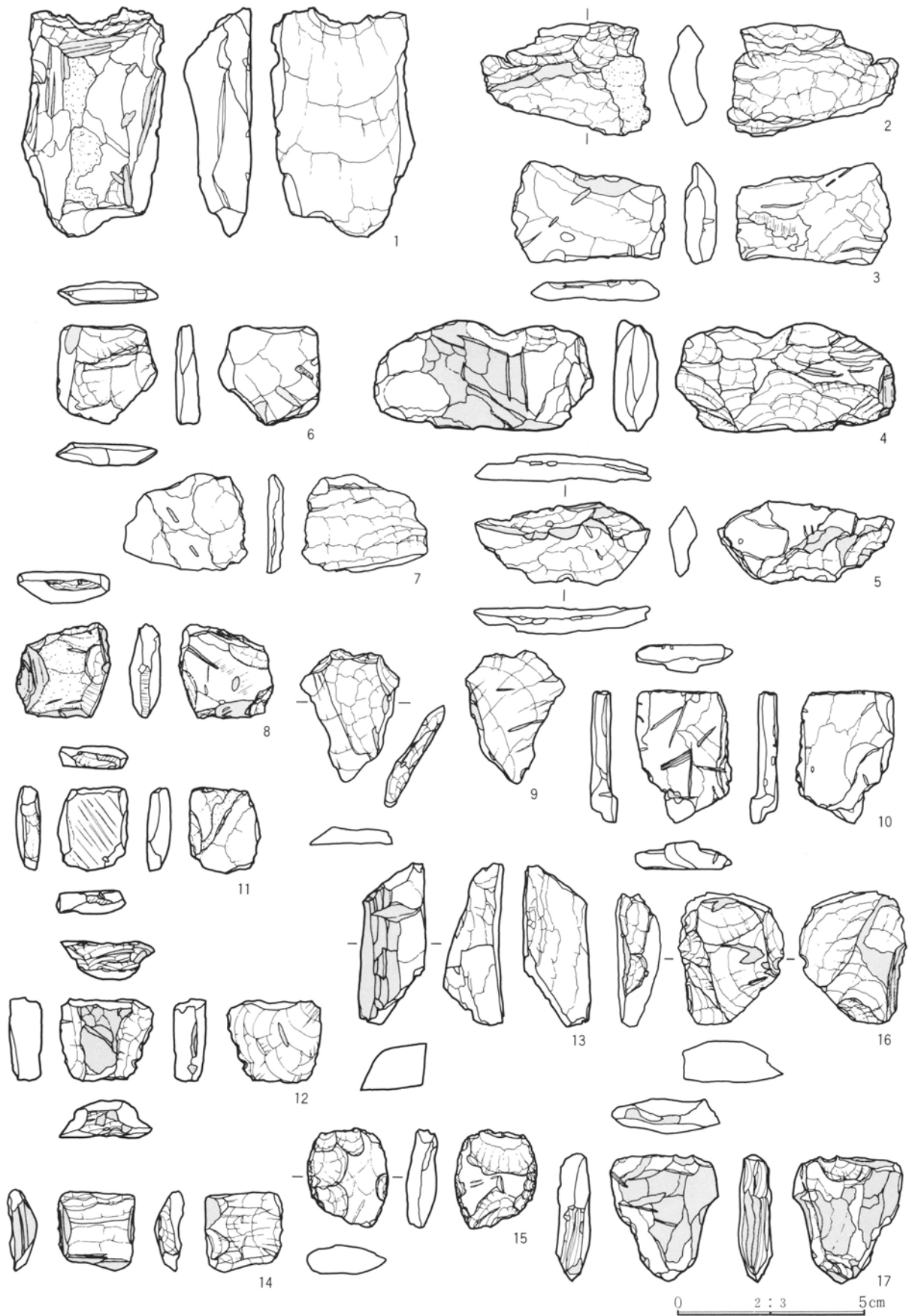
番号	遺跡名	所在地	時期	検出遺構	主要遺物	調査年・機関
1	古立中村	妙義町古立	後期	工房2軒	管玉・白玉・剣形	昭和62年妙義町教委
2	高鳥井	妙義町下高田	中期	工房2軒	管玉・勾玉・白玉・棗玉・剣玉・子持勾玉	昭和58年妙義町教委
3	前畑	富岡市蛭沼	中期	工房1軒	原石	昭和63年富岡市教委
4	恵下原	富岡市宇田	後期	未調査	管玉・勾玉・白玉・有孔円板	
5	原田篠	富岡市原田篠	後期	工房1軒	白玉	昭和59年富岡市教委
6	笹	甘楽町小川	後期	工房3軒	勾玉・白玉・紡錘車	昭和36年群馬県博
7	甘楽条里	甘楽町白倉	後期	工房11軒	勾玉・白玉・剣形・子持勾玉・紡錘車	昭和61年甘楽町教委
8	天引向原	甘楽町天引	中期	工房3軒	勾玉・白玉・剣形・有孔円板	平成元年ほか群埋文
9	竹沼	藤岡市西平井	後期	工房10軒	勾玉・白玉・紡錘車	昭和52年藤岡市教委
10	滝前	藤岡市中大塚	後期	工房1軒	白玉	昭和60年藤岡市教委
11	本郷山根	藤岡市本郷	後期	工房1軒	白玉・紡錘車	昭和62年群埋文
12	温井	藤岡市岡之郷	後期		管玉・勾玉・白玉・剣形・有孔円板	昭和48年群埋文
13	上並榎屋敷前	高崎市上並榎町	後期	工房2軒	管玉・勾玉・白玉・有孔円板	平成3年高崎市教委
14	並榎台原	高崎市並榎町	後期	工房多数	白玉・紡錘車	平成2年高崎市教委
15	下佐野	高崎市下佐野町	前期	工房7軒	管玉・勾玉・琴柱形	昭和55年ほか群埋文
16	田端	高崎市阿久津町	後期	工房1軒	勾玉・白玉・紡錘車	昭和50年ほか群埋文
17	行力	高崎市行力町	中期	工房2軒	管玉	平成3年群埋文
18	新保田中村前	高崎市新保田中町	前期		管玉・勾玉・白玉	昭和59年ほか群埋文
19	芳賀東部団地	前橋市鳥取町	前期	工房1軒	管玉・勾玉	昭和51年ほか前橋市教委
20	八寸大道上	佐波郡東村八寸	後期	工房1軒	白玉	昭和57年群埋文
21	八寸城山	伊勢崎市八寸町	不明		白玉・剣形・子持勾玉	

参考文献

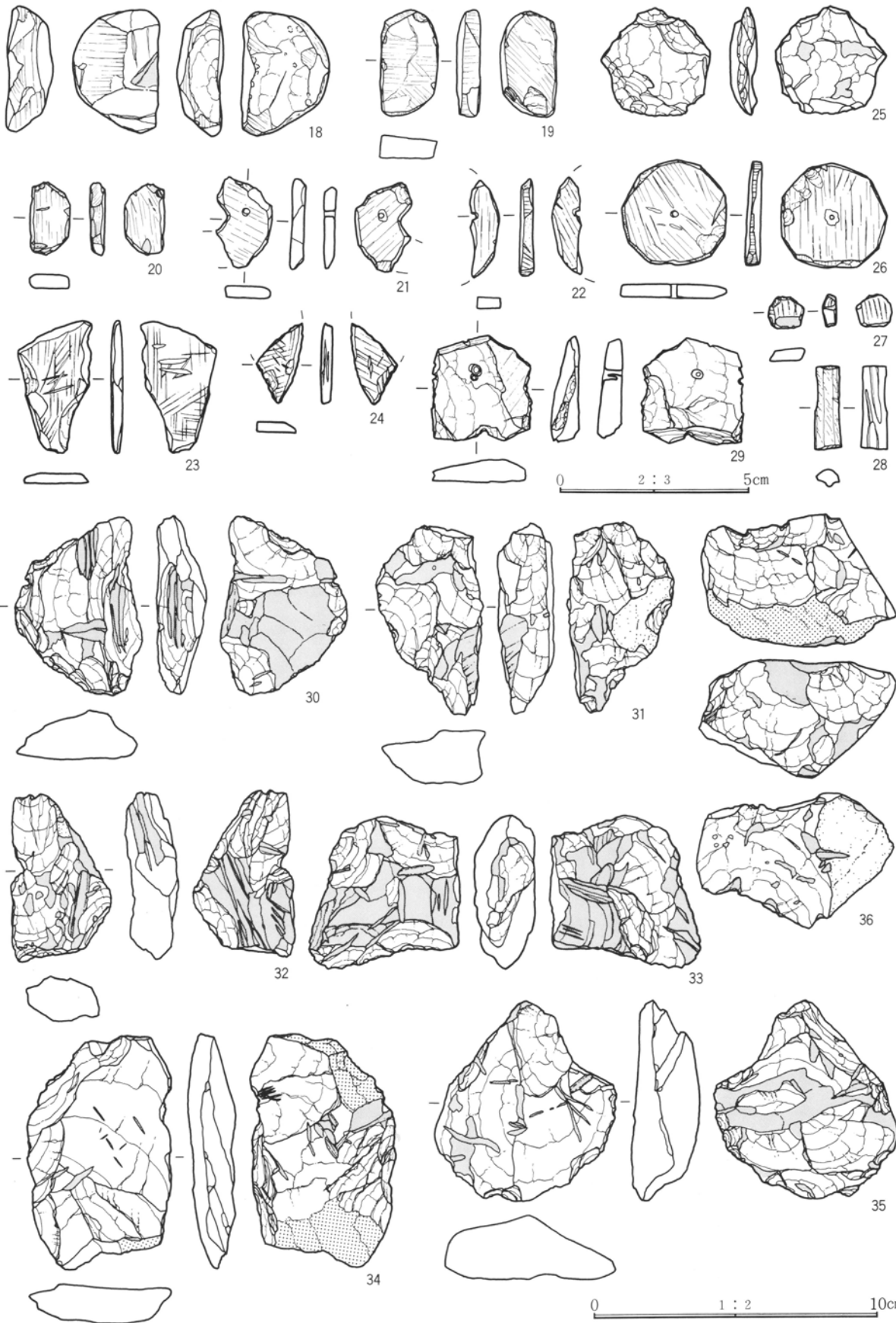
- 1 妙義町遺跡調査会ほか『古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連狸沢遺跡・八木連荒畑遺跡』(1990)
- 2 妙義町教育委員会『妙義東部遺跡群(Ⅱ)』(1985)
- 3 富岡市教育委員会ほか『前畑遺跡・内出Ⅰ遺跡・丹生城西遺跡・五分一遺跡・千足遺跡』(1992)
- 4 富岡市史編さん室『富岡市史 自然編・原始古代中世編』(1987)
- 5 富岡市教育委員会『上田篠古墳群・原田篠遺跡』(1984)
- 6 群馬県立博物館『笹遺跡—鍋川流域における滑石製模造品出土遺跡の研究』群馬県立博物館研究報告第1集(1963) 同第3集(1966)
- 7 甘楽町教育委員会『甘楽町条里遺跡』(1989)
- 8 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか『白倉下原・天引向原遺跡Ⅲ』(1994)
- 9 藤岡市教育委員会『F1竹沼遺跡』(1978)
- 10 滝前・滝下遺跡調査会『滝前・滝下遺跡』(1988)
- 11 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか『本郷山根遺跡』(1989)
- 12 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか『温井遺跡』(1981)
- 13 高崎市遺跡調査会『上並榎屋敷前遺跡』(1992)
- 14 高崎市教育委員会『高崎市内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』(1991)
- 15 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか『下佐野遺跡Ⅱ地区』(1986)
- 16 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか『田端遺跡』(1988)
- 17 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか『行力遺跡』(1995)
- 18 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか『新保田中村前遺跡Ⅰ』(1990)
- 19 前橋市教育委員会『芳賀東部団地遺跡群Ⅰ』(1984)
- 20 群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか『八寸道上遺跡』(1989)
- 21 岩沢正作『群馬県における祭祀関係遺跡概観』『毛野』5号(1933)



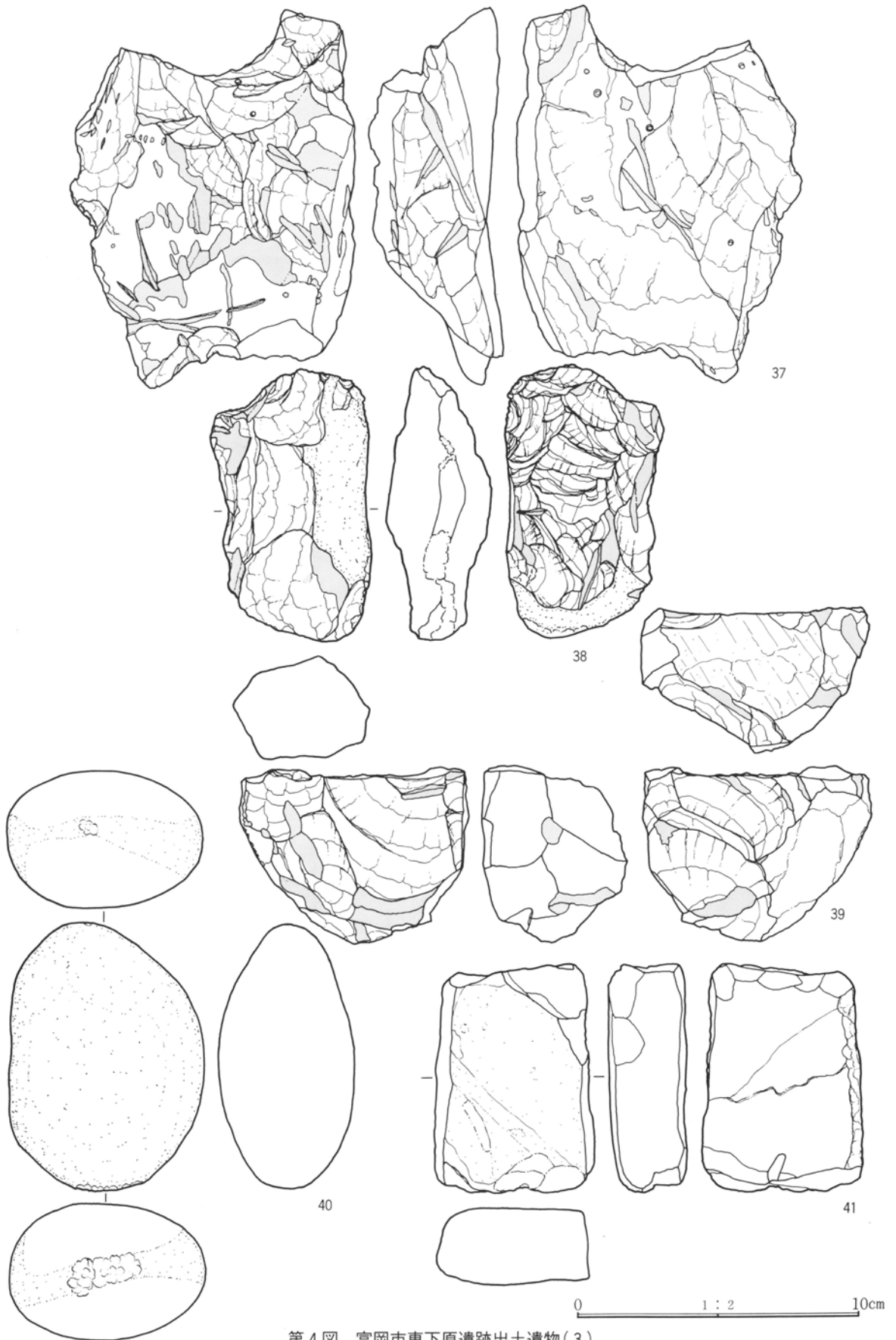
第14図 群馬県の古墳時代玉作・滑石製模造品出土遺跡(20市町村別)



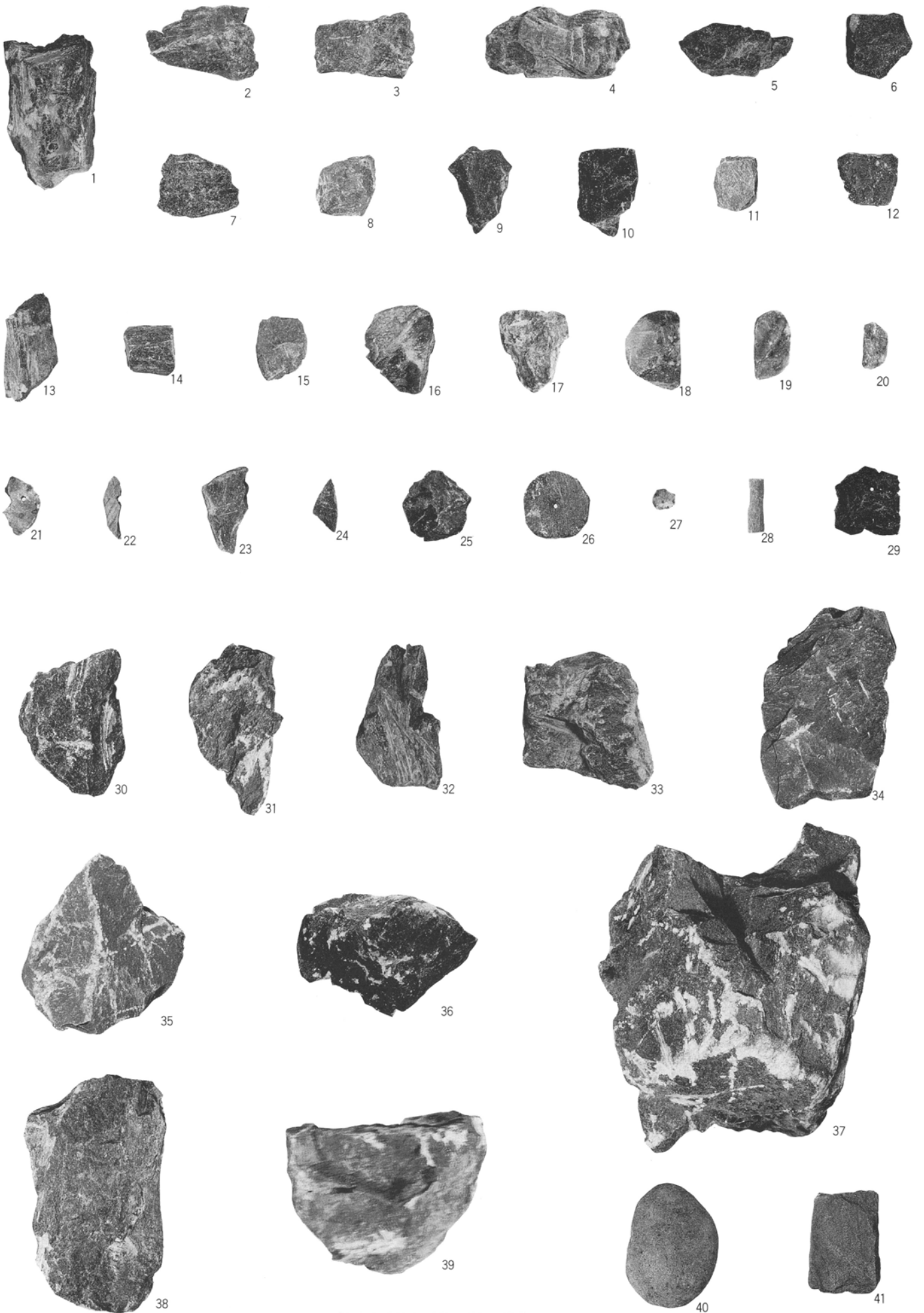
第2図 富岡市恵下原遺跡出土遺物(1)



第3図 富岡市恵下原遺跡出土遺物(2)



第4図 富岡市恵下原遺跡出土遺物(3)



富岡市恵下原遺跡出土遺物

第4章 分析とまとめ

図番 PL.	器種	石材	計測値 (cm・g)				所見
			最大長	最大幅	最大厚	重量	
2-1 181	剥片	滑石	6.05	3.80	1.70	46.5	石核からの粗割剥片。表面に3方向からの工具痕。
2-2 181	剥片	滑石	3.00	4.50		11.9	背面の加工痕は削り痕で、石核を削った痕。打面の加工痕は、主要剥離面に切られている。
2-3 181	剥片	滑石	2.70	4.05	0.85	10.9	石核からの粗割剥片、折断後は勾玉、剣形の素材となる。
2-4 181	剥片	滑石	2.90	5.80	1.20	23.9	切断面の剥片、上端中央に折断用のノッチ、切削による調整。
2-5 181	剥片	滑石	2.20	4.70	0.70	7.7	横割粗割剥片、端部折断後勾玉の素材になる。
2-6 181	剥片	滑石	2.60	2.65	0.60	4.9	端部を折断した剥片。勾玉の素材。
2-7 181	剥片	滑石	2.50	2.30	0.40	4.1	勾玉の素材か。
2-8 181	勾玉	滑石	2.50	2.50	0.80	6.7	端部折断剥片に側縁を切削した形割工程品。
2-9 181	剥片	滑石	3.50	2.60	0.50	4.6	石核からの粗割剥片、勾玉の素材か。
2-10 181	剥片	滑石	3.50	2.50	0.70	6.9	上端を折断、勾玉か剣形の素材か。
2-11 181	勾玉	滑石	2.20	1.80	0.60	3.7	端部折断剥片を研磨と切削した形割工程品。
2-12 181	勾玉	滑石	2.20	2.50	0.85	6.3	端部折断剥片を利用した形割工程品。
2-13 181	剥片	滑石	4.20	1.80	1.50	11.4	背面に削り痕。打面は節理によって折れ。
2-14 181	勾玉	滑石	2.15	2.10	0.60	4.5	両端折断後、折断切削による調整。
2-15 181	勾玉	滑石	2.60	2.10	0.80	5.0	端部折断剥片に側面から粗く調整した形割工程品。
2-16 181	勾玉	滑石	3.10	3.60	1.20	12.3	形割工程品。調整剥離後側面や表裏の一部に切削。
2-17 181	勾玉	滑石	3.40	2.90	0.85	9.6	切削による調整をした形割工程品。
3-18 181	勾玉	滑石	3.20	2.20	1.20	11.2	研磨工程品。
3-19 181	勾玉	滑石	2.80	1.50	0.60	4.0	研磨工程品。
3-20 181	勾玉	滑石	1.90	1.05	0.40	1.3	研磨工程品。
3-21 181	勾玉	滑石	2.40	1.45	0.35	1.8	穿孔方向は表→裏。下端部欠損。
3-22 181	勾玉	滑石	2.55	0.75	0.40	1.0	勾玉の一部。穿孔方向は表→裏。
3-23 181	勾玉	滑石	3.45	1.95	0.30	2.8	研磨工程品。側面未了。
3-24 181	勾玉	滑石	2.10	1.20	0.30	0.8	研磨工程品。
3-25 181	有孔円盤		2.85	2.85		6.3	粗割剥片の側縁を粗く調整した形割工程品、裏面の一部に切削。
3-26 181	有孔円板	滑石	2.75	2.75	0.35	4.7	穿孔方向は表→裏。
3-27 181	白玉	滑石	0.85	0.95	0.35	0.4	側面には工具による摩滅面がある。
3-28 181	管玉	滑石	2.20	0.70		0.9	角柱状研磨後、穿孔時の破損品、両面穿孔。
3-29 181	剥片	滑石	2.75	2.65	0.75	5.8	中央及び左端・上端・下端に穿孔痕。白玉の素材か。

図番 PL.	器種	石材	計測値 (cm・g)				所見
			最大長	最大幅	最大厚	重量	
3-30 181	石核	滑石	6.20	4.45	1.70	40.8	円盤状に整形、右側から間接折法により剥離。
3-31 181	石核	滑石	6.65	3.70	2.00	47.6	原石から粗割された剥片を円盤状に整形、上端折面から剥離。
3-32 181	石核	滑石	5.80	3.55	1.80	36.6	原石から粗割された剥片。表裏、側面に切削。
3-33 181	石核	滑石	5.35	5.30	2.10	71.5	原石から粗割された剥片を切削で整形。
3-34 181	石核	滑石	8.20	6.10	1.70	70.6	原石からの粗割剥片、両側面からの節理面を利用した剥離。
3-35 181	石核	滑石	6.95	6.40	2.40	90.2	円盤状に整形、節理面を利用した右上方からの剥離。
3-36 181	石核	滑石	6.85	4.80	3.95	128.7	原石からの分割後、折面を転移しながら剥離。礫皮を残す。
4-37 181	石核	滑石	13.20	10.00	4.40	575.0	側面を折面とし粗割を重ねる。表裏に8ヶ所の穿孔痕。穿孔後に剥片を剥離したものか。
4-38 181	石核	滑石	9.60	5.65	3.60	202.4	左側縁から連結した剥離、礫皮を残す。
4-39 181	石核	蛇紋岩	6.10	8.00	5.00	259.6	原石を分割し、石核としたもの。
4-40 181	礫器		9.40	6.90	4.75	416.1	全体に磨耗、上下両端部に敲打痕。
4-41 181	砥石	砂岩	8.05	5.65	2.70	177.5	平砥石、表裏と側面に研磨面。

5. 竹沼遺跡、恵下原遺跡の滑石製模造品生産

竹沼遺跡では、1977年の調査で白玉と紡錘車の製作工程が復元されている。紡錘車製作工程の剥片を、勾玉や剣形、白玉などの素材にしている点が特徴である。複数の器種を一括生産する効率的な方法で、量産期の遺跡に多くみられる。導入期の下佐野遺跡でも、勾玉などの素材に円盤状石核の調整剥片が使われており、技法的な初源といえる。

恵下原遺跡は、未調査ながら6世紀代の工房が知られている。ここでは、勾玉、管玉、白玉、円板などを生産しているが、石核や剥片に特徴をみることができる(第2～4図)。石核には、2つの剥離方法がある。1つは、打面を転移して無作為に剥離していく方法(30～36,37,39)。打面が半ばつきるまで行われ、最終形状として不定形の円盤状態になる。2つは、当初から紡錘車を意図して周縁から交互に剥離していく方法である(38)。剥片は、両端か一方を折断されたものが特徴である。不定形な中から、有効な素材を選んで利用していることがわかる。折断は、あらかじめ工具で折り目を入れるか(4)、石核に直接折り目を入れる方法がある(32・33)。また、29に残る穿孔痕は、白玉の素材を得る分割用、37はあらかじめ穿孔して剥離したものとも思われる。

工程の中では、鉄製工具を多用していること、粗割から分割までが不規則であることに特徴がある。不規則な中にも、熟練した様子がうかがえる。

〔4〕竹沼遺跡の調査変遷

菊池 実

鮎川流域での考古学的調査の歴史は古い。1933（昭和8）年に白石稻荷山古墳の発掘調査が後藤守一氏と相川龍雄氏によって実施され、1935（昭和10）年には『上毛古墳総覧』にまとめられた古墳の分布調査などが行われている。戦後も、「白石古墳群の調査」が群馬大学により1952年10月6日から10月13日にかけて実施され、その成果もようやく1989年になって『藤岡市史』資料編別巻として刊行された。また、上野国分寺に瓦を供給したとされる金井金山瓦窯跡の学術調査も立正大学により、1964（昭和39）年7月に実施されている。

1973（昭和48）年以降、鮎川中流域に所在する緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡・竹沼遺跡の周辺では、二度にわたる大規模な農業構造改善基盤整備事業が実施され、鮎川中流域左岸の広範な地域が調査の対象となった。

藤岡市西平井字島・天神・濁り池・金ヶ谷戸、緑埜字吉田谷戸・久保にまたがる竹沼遺跡の調査は、1973（昭和48）年度・1975（昭和50）年～1977（昭和52）年度にかけて、県教育委員会による調査、市教育委員会による調査が行われてきた。そして当事業団による調査が1990（平成2）年度に実施され、また市教育委員会でも同年度西平井字島・天神にかけて調査を実施している。当初命名された遺跡名である「竹沼遺跡」の調査範囲も、このように広範な地域にまで及んでいる。当事業団調査においては、従来の経緯を尊重して遺跡名称を踏襲したが、竹沼遺跡本来の範囲を理解するには適当ではない。そこで、従来の調査状況の外観とその結果をまとめ調査変遷をあとづけたい。

1973・1975～1977（昭和48・50～52）年度の4ヶ年に亘り実施された調査場所（第1・2図）と調査結果は次のとおりである。

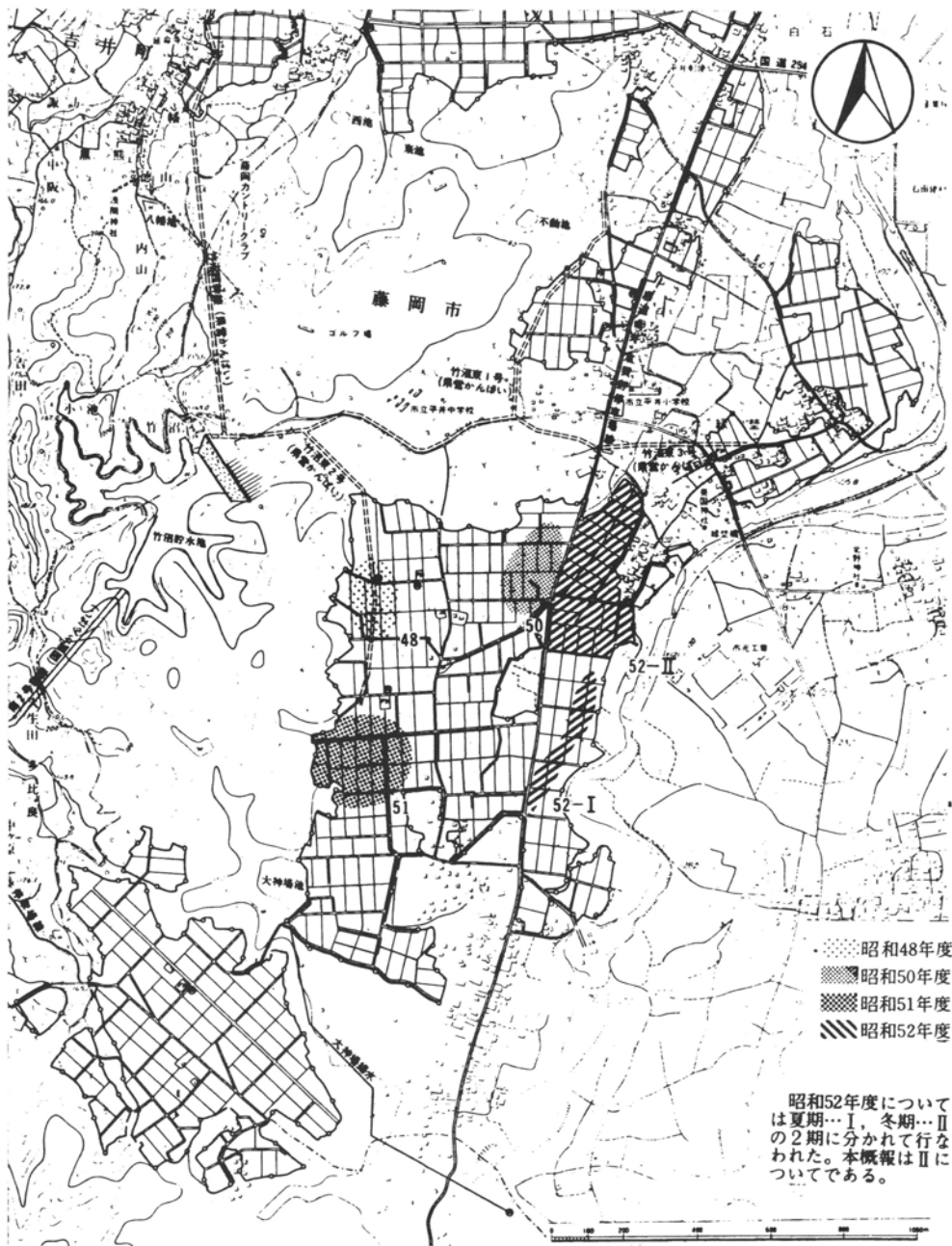
1973（昭和48）年度の調査は、県教育委員会が主体となり発掘をすすめた。調査場所は西平井字天神というだけで、発掘箇所の特定はできていない。発掘の結果、古墳時代の住居跡1軒、溝3条が検出されたが報告書は未刊行である。

1974（昭和49）年度は発掘は実施されていない。

1975（昭和50）年度の調査は、1976（昭和51）年2月27日～3月18日の20日間にわたって市教育委員会の調査が行われている。調査場所は西平井字島であるが、発掘箇所は不明である。発掘の結果、古墳時代後期の住居跡が確認されているが報告書は未刊行である。

1976（昭和51）年度の調査は、1977（昭和52）年1月14日～3月26日に亘って市教育委員会の調査が行われた。調査場所は西平井字濁り池であるが、発掘箇所は不明である。平安時代の住居跡2軒が検出されているが報告書は未刊行である。

1977（昭和52）年度の調査は夏期と冬期の2期に亘って実施された。夏期調



第1図 竹沼遺跡昭和48年度・昭和50～52年度調査場所

(F1 竹沼遺跡 転載)



第2図 竹沼遺跡昭和52年度調査区 (F1 竹沼遺跡 転載)

査は市教育委員会による調査で、緑埜字吉田谷戸・久保、西平井字金ケ谷戸で実施されている。発掘の結果、古墳時代後期の住居跡5軒、平安時代の住居跡2軒が検出されているが報告書は未刊行である。

そして、冬期調査も市教育委員会により12月5日から翌1978（昭和53）年3月15日まで実施され、9,401㎡が調査された。この調査は、「昭和48・50～52年度夏期調査を継承しているものではない。前回までの調査においても個々が有機的関連をもつものではない。各年度の調査が体系的・計画的になされたならば、広範囲な遺跡の実態、集落のあり方等、数多くの属性を把握できたものと思われる」と、報告書でも記されているように、過去の調査に問題点があったために、その成果を生かすことはできていない。これは後々まで尾を引いて今回の調査にまで波及している。

ところで、冬期調査で検出された遺構・遺物は、先土器時代終末～縄文時代草創期の所産である両面加工石器、縦形搔器、石核、有舌尖頭器、次に、縄文時代中期住居跡3軒・土壇5基、弥生時代中期土壇1基・同後期終末～古墳時代前期住居跡4軒、古墳時代後期住居跡17軒、滑石工房跡9軒である。歴史時代に至っては、住居跡1軒と須恵器が多量に集中して検出された他、井戸跡1基、溝10条が挙げられる。時期不明のものとして、土壇6基、住居跡8軒が調査されている。

そして上記の冬期調査検出の遺構群に、今回の調査例が追加されたことになる。

具体的に記せば、A区においては5号住居跡～13号住居跡の9軒、B区においては、2号住居跡と3号住居跡がだぶり、13号住居跡～16号住居跡の4軒が追加された。C区においては、2号住居跡がだぶり、11号住居跡～16号住居跡の6軒が追加された。D区では、4号住居跡と5号住居跡がだぶり、7号住居跡～15号住居跡の9軒が追加された。

この結果、竹沼遺跡A区では古墳時代後期の住居跡13軒、B区では縄文時代の住居跡3軒、古墳時代後期の住居跡16軒、C区では古墳時代後期の住居跡14軒、奈良時代の住居跡1軒、不明1軒、D区では古墳時代中期の住居跡1軒、後期の住居跡13軒、不明1軒となった。この他に土坑や溝、井戸も追加されている。

しかし、『F1 竹沼遺跡 昭和52年度発掘調査概報』には、縄文時代の住居跡・弥生時代の住居跡・古墳時代の滑石工房跡1軒がそれぞれ報告されているだけであり、その他多くの住居跡の形態、付属施設、遺物分布等の全容は不明のままである。また、完掘できた住居跡も非常に少なく、遺跡を理解する上で大きな障害となっていることは否めない。今回の調査もまた、完掘できた住居跡は少なかった。

当遺跡周辺には緑野屯倉と考えられる地点の存在や、下流の白石古墳群、鮎川対岸の平井古墳群の存在等、それら古墳被葬者を支えた集落の一つであるだけに、調査全容が把握できないのは残念である。

第4章 分析とまとめ

藤岡市竹沼遺跡住居跡一覧表

(藤岡市教育委員会昭和52年度調査分と(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団平成2年度分〔ゴシック〕を含む)

区名	住居跡	規模	プラン	竈・炉	柱穴	主軸・長軸方向	時代・時期	備考				
A区	H-1	710×663	方形	西北		N-114°-W	鬼高	覆土より礫200点弱出土 滑石製紡錘車				
	H-2	402×400	方形	北		N-38°-E	鬼高					
	H-3	(236)×478										
	H-4	(381)×(387)			(3)				壁外柱穴(3)			
	事業団	5	530×(330)	長方形	北 北東	(2)		6世紀前半	完掘できなかった			
		6	(630)×(530)			(1)		6世紀前半	完掘できなかった			
		7	470×(270)			(2)	N-16°-E	6世紀前半	完掘できなかった			
		8	470×(460)			(3)	N-55°-E	6世紀前半	完掘できなかった			
		9	340×250					6世紀代	完掘できなかった			
		10	620×(430)			地床炉	(3)		6世紀前半	完掘できなかった		
		11	(600)×(570)			正方形(北東)	(3)		6世紀代	完掘できなかった		
		12	(330)×(180)				(1)		6世紀前半	完掘できなかった		
		13	500×480			方形	北	(3)	N-10°-W	6世紀前半	完掘できなかった	
B区	J-1	526×480	円形	石囲炉	5	N-50°-W	加曾利E	小竪穴? 完掘できなかった 完掘できなかった 完掘できなかった 住居構築途中? ロームによる造り出し H-5~12住はプラン確認の後、保存、これら8軒は鬼高期の所産 焼失住居				
	J-2	536×514	円形	石囲炉	5	N-36°-W	加曾利E					
	J-3	322×320	円形	—			勝坂					
	H-1	524×(173)	方形	北東	(2)		鬼高					
	H-2	500×(300)				6世紀前半						
	H-2	(357)×(332)	方形									
	H-3	(340)×(170)										
	H-3	(381)×(279)	方形	東	(1)		鬼高					
	H-4	(370)×(310)				6世紀代						
	H-4	514×460	方形		—		鬼高					
	H-5	730×760	方形	(東)								
	H-6	525×550	方形	(西)								
H-7	415×(361)	方形										
H-8	540×541	方形										
H-9	726×733	方形										
H-10	475×(486)	方形										
H-11	405×420	方形	(東)									
H-12	415×375	方形										
事業団	13	550×(300)	方形	地床炉	(3)	N-42°-E	弥生後期	完掘できなかった				
	14	370×340		北東		N-58°-E	6世紀後半	完掘できなかった				
	15	410×320		北東		N-53°-E	8世紀後半	完掘できなかった				
	16	(300)×(170)		北東		N-45°-E	6世紀前半	完掘できなかった				
C区	H-1	(329)×—	方形	東	—	N-104°-E	真間 奈良時代 鬼高 鬼高 鬼高 鬼高 鬼高 鬼高 鬼高	完掘できなかった				
	H-2	412×388 (250)×(120)										
	H-3	—										
	H-4	376×(291)										
	H-5	(363)×(368)										
	H-6	288×321							西東	N-60°-E		
	H-7	(389)×(272)										
	H-8	(216)×—										
	H-9	(183)×298							東	N-85°-E		
	H-10	(451)×(314)										
事業団	11	680×(340)	北東	北東	(2)	N-42°-E	6世紀後半	完掘できなかった				
	12	(250)×(120)										
	13	(420)×(370)										
	14	500×(300)										
	15	(680)×(470)							北	4	N-7°-W	6世紀代
	16	(230)×(150)									6世紀代	完掘できなかった

〔4〕竹沼遺跡の調査変遷

区名	住居跡	規模	プラン	竈・炉	柱穴	主軸・長軸方向	時代・時期	備考				
D区	H-1	675×(200)	方形	東	(1)	N-71°-E	和泉 鬼高	滑石工房址				
	H-2	(126)×408	方形									
	H-3	502×(440)	方形									
	H-4	(192)×— (470)×(270)										
	H-5	(416)×(415) (70)×(40)	方形						東	N-60°-E	6世紀代 鬼高	完掘できなかった 滑石工房址
	H-6	414×(240)	方形						東	N-66°-E	6世紀代 鬼高	完掘できなかった 滑石工房址
	区	7	(450)×410		北西	4	N-53°-W	6世紀後半	完掘できなかった			
		8	700×(630)		北東	(3)	N-57°-E	6世紀後半	完掘できなかった			
		9	630×(410)		北東		N-48°-E	6世紀前半	完掘できなかった			
		10	(180)×(150)				N-60°-E	6世紀代	完掘できなかった			
		11	(210)×(150)		北東		N-60°-E	6世紀代				
		12	530×(400)		北東	(1)	N-45°-E	7世紀後半	完掘できなかった			
		13	480×(470)		北東		N-45°-E	6世紀後半	完掘できなかった			
		14	520×(320)					6世紀後半以前	完掘できなかった			
		15	(350)×(170)					6世紀後半以前	完掘できなかった			
E区		H-1	562×452	長方形	東		N-57°-E	鬼高	滑石工房址カマド2基			
	H-2	378×396	方形									
	H-3	(186)×(224)					鬼高	滑石工房址 滑石製紡錘車				
	H-4	(40)×(186)					鬼高					
	H-5	(69)×(85)					鬼高					
	H-6	(186)×(148)					鬼高					
	H-7	(120)×(106)					鬼高					
	H-8	(120)×(215)					鬼高					
	H-9	406×(371)	方形	東	(2)		鬼高		滑石工房址			
	H-10	561×(378)	方形	東			鬼高		滑石工房址			
	H-11	(390)×(327)		西			鬼高		滑石工房址			
	H-12	442×506	方形	東		N-88°-E	鬼高		滑石工房址			
	H-13	469×(212)					鬼高					
	H-14	570×(207)					鬼高					
	H-15	(307)×(229)					鬼高					
	H-16	(236)×(186)										
	H-17	(288)×(210)						焼失住居				
	H-18	(48)×(61)										
	H-19	(73)×(65)										
	H-20	440×420	方形	地床炉	5	N-37°-W	弥生時代後期～古墳時代前期					
	H-21	359×(99)					古墳時代前期					
	H-22	(20)×(34)										
	H-23	(302)×(252)										

1) 規模における () は現存値及び発掘区域内出土部分の計測値を表す。

2) —は存在しないことを表し、空欄は不明を示す。

報告書抄録

フリガナ	ミドノイセキゲン・ミドノカミゴウイセキ・タケヌマイセキ
書名	緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡・竹沼遺跡
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻	第42集
シリーズ名	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第215集
編著者名	菊池実 女屋和志雄
編集機関	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2 0279-52-2511
発行年	1997年2月

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ミドノ 緑埜遺跡群	フジオカシシロイシ 藤岡市白石・緑埜	102091		36°13'47"	139°2'9"	19900801～	3,100m ²	高速道路
ミドノカミゴウ 緑埜上郷遺跡	フジオカシミドノ 藤岡市緑埜			～	～	19910131	1,200m ²	建設
タケヌマ 竹沼遺跡	フジオカシニシヒライ 藤岡市西平井			36°14'21"	139°2'30"		2,000m ²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
緑埜遺跡群	生産	江戸時代 平安時代	水田・畠・土坑・鎌倉街道 水田・畠	板碑	
緑埜上郷遺跡	生産	江戸時代 平安時代	斎藤代官屋敷跡 水田		
竹沼遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代	竪穴住居跡 1 竪穴住居跡 32 竪穴住居跡 1	土器 土器・石製品 土器	滑石工房跡
		その他	掘立柱建物跡 2 土坑・井戸・溝		

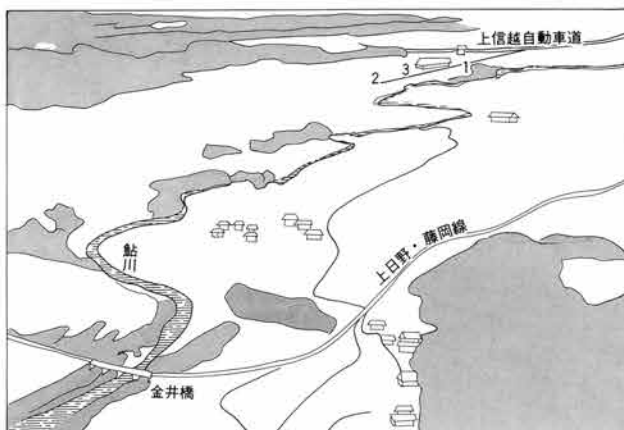
PLATES



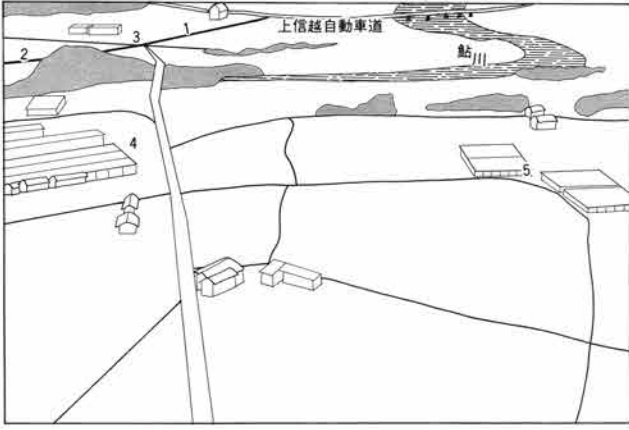
1947年米軍攝影
綠埜遺跡群
綠埜上鄉遺跡
竹沼遺跡



(南から)



- 1 緑苙遺跡群・緑苙上郷遺跡
- 2 竹沼遺跡
- 3 市立平井小学校



- 1 緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡
- 2 竹沼遺跡
- 3 市立平井小学校
- 4 市光工業藤岡製作所
- 5 久保製作所藤岡工場



1. 緑蔭遺跡群・調査前
(北から)



2. 緑蔭遺跡群・遠景
(北から)

1. 緑地遺跡群・調査前
(南から)



2. 緑地遺跡群・遠景(南から)

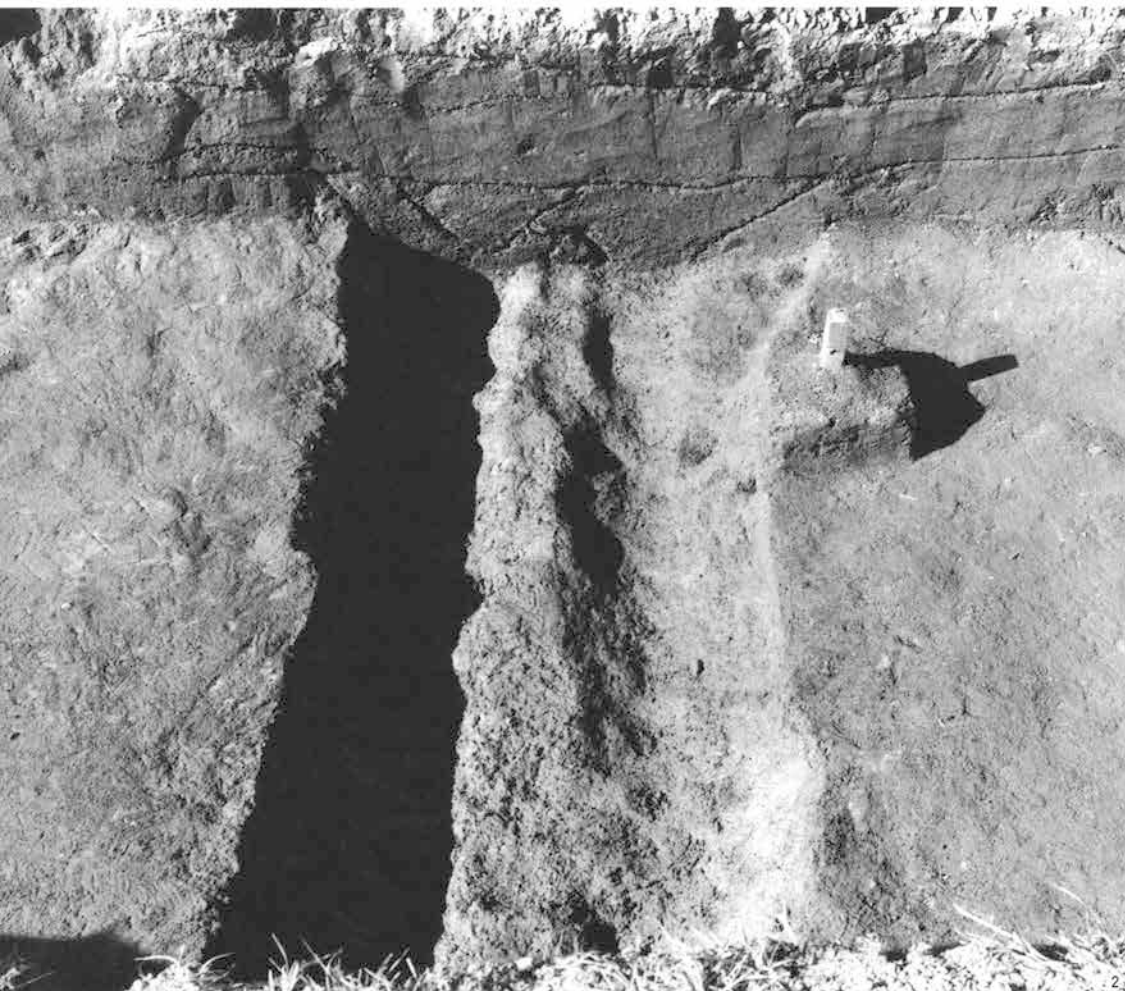


P L . 6

1. 緑埜遺跡群・EM-1全景 (南東から)
2. 緑埜遺跡群・EM-2西壁 (東から)

P L . 7

1. 緑埜遺跡群・1区畠全景 (南西から)
2. 緑埜遺跡群・1区畠全景 (南西から)







1. 緑苙遺跡群・EM-48・49 (南東から)
2. 緑苙遺跡群・鎌倉街道全景 (南から)
3. 緑苙遺跡群・GM-8西壁 (東から)



緑埜遺跡群・石敷遺構全景(南から)

緑埜遺跡群・GM-4全景(南東から)

緑埜遺跡群・GM-10全景(南から)







1. 緑埜遺跡群・3区畠全景(南から)

2. 緑埜遺跡群・AZ-6全景(東から)

3. 緑埜遺跡群・If-55全景(南から)





緑埜遺跡群・4区As-B下畠(南から)

1. 緑埜遺跡群・KM-18全景(南から)
2. 緑埜上郷遺跡・調査前(南から)
3. 緑埜上郷遺跡・表土掘削



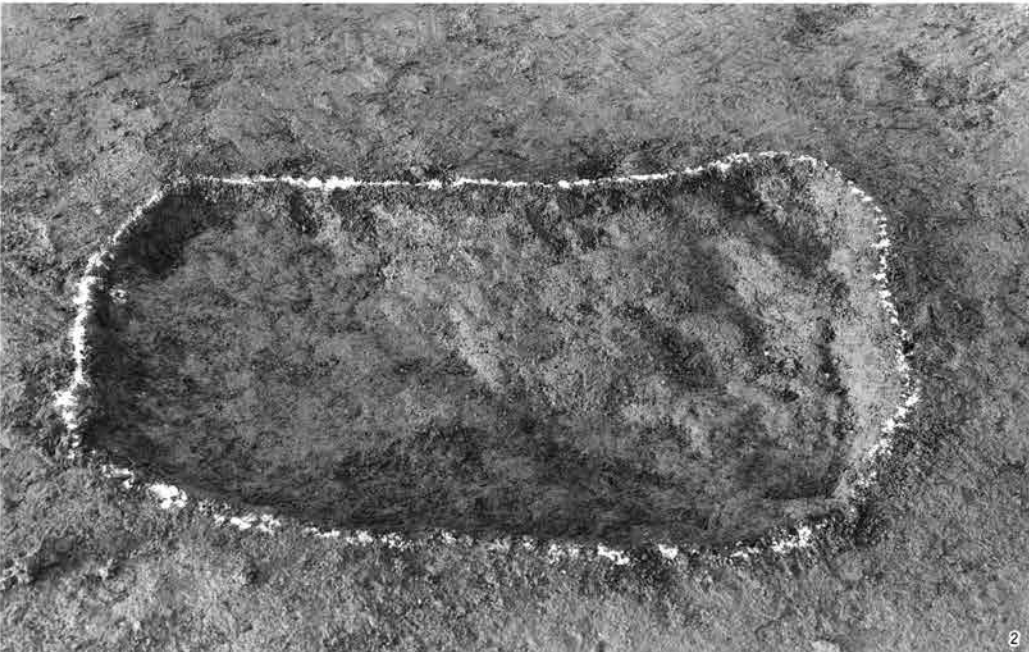


PL.14

1. 緑埜上郷遺跡・JM-2A・KM-3全景
(南から)
2. 緑埜上郷遺跡・1号土坑
(南東から)
3. 緑埜上郷遺跡・As-B下水田
(南西から)

PL.15

1. 緑埜上郷遺跡・斎藤代官屋敷
(北から)
2. 緑埜上郷遺跡・斎藤代官屋敷石垣
(南東から)



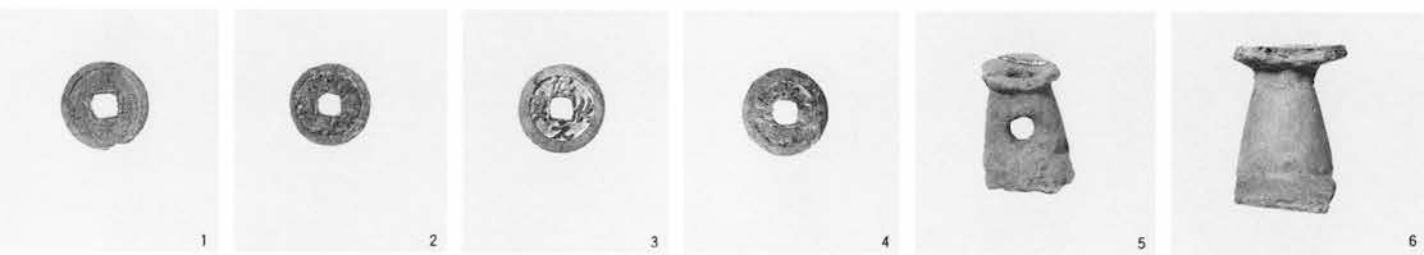


1



2

▼綠埜遺跡群出土遺物



▼綠埜遺跡群表採出土遺物





竹沼遺跡 A区全景(南から)



P L . 18

- 1 . A区調査風景 (南西から)
- 2 . A区調査風景 (南から)

P L . 19

- 1 . A区 5号住居跡 (北から)
- 2 . A区 5号住居跡遺物出土状況 (西から)







1. A区5号住居跡遺物出土状況
(北から)



2. A区5号住居跡遺物出土状況
(東から)

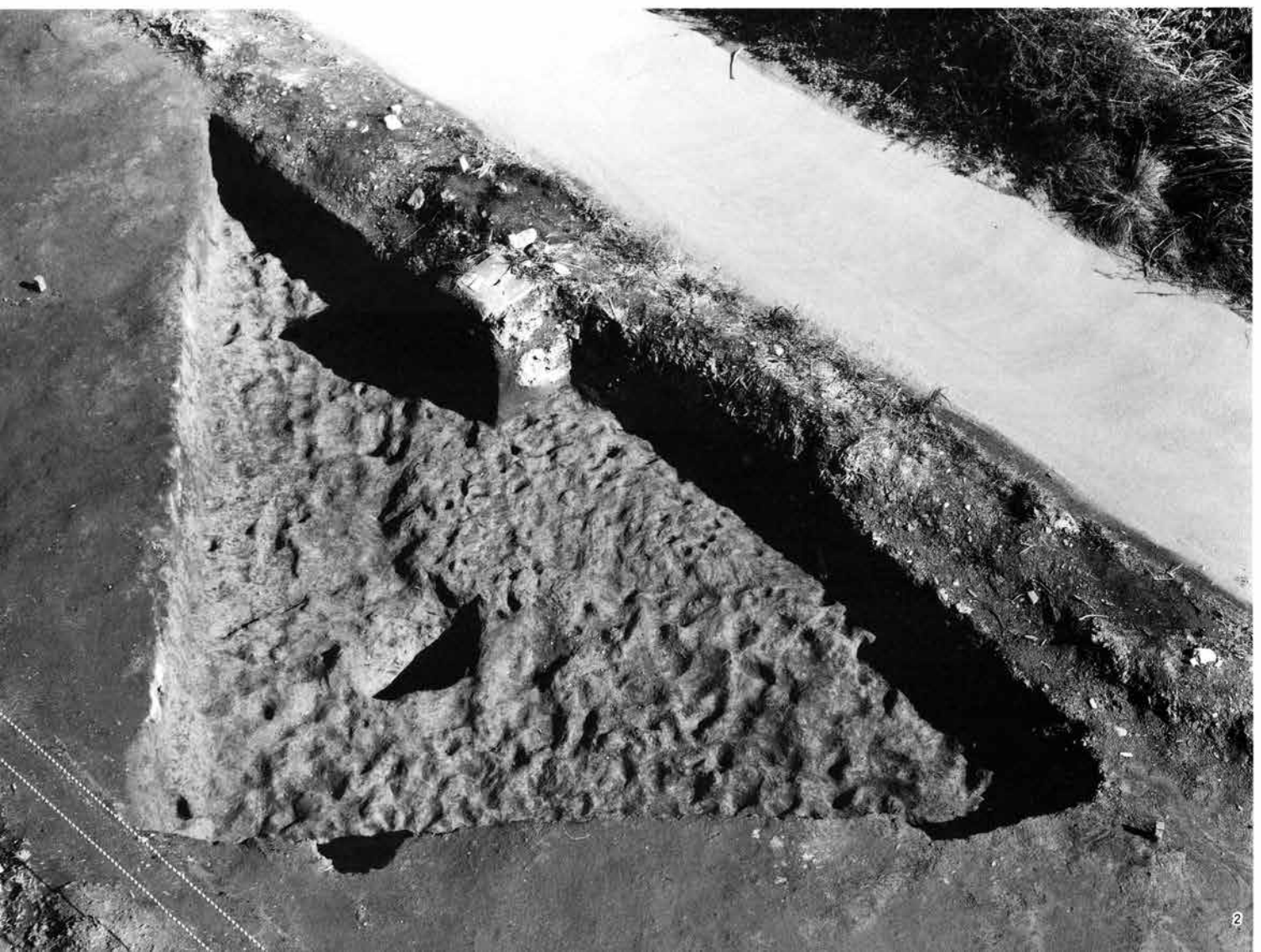


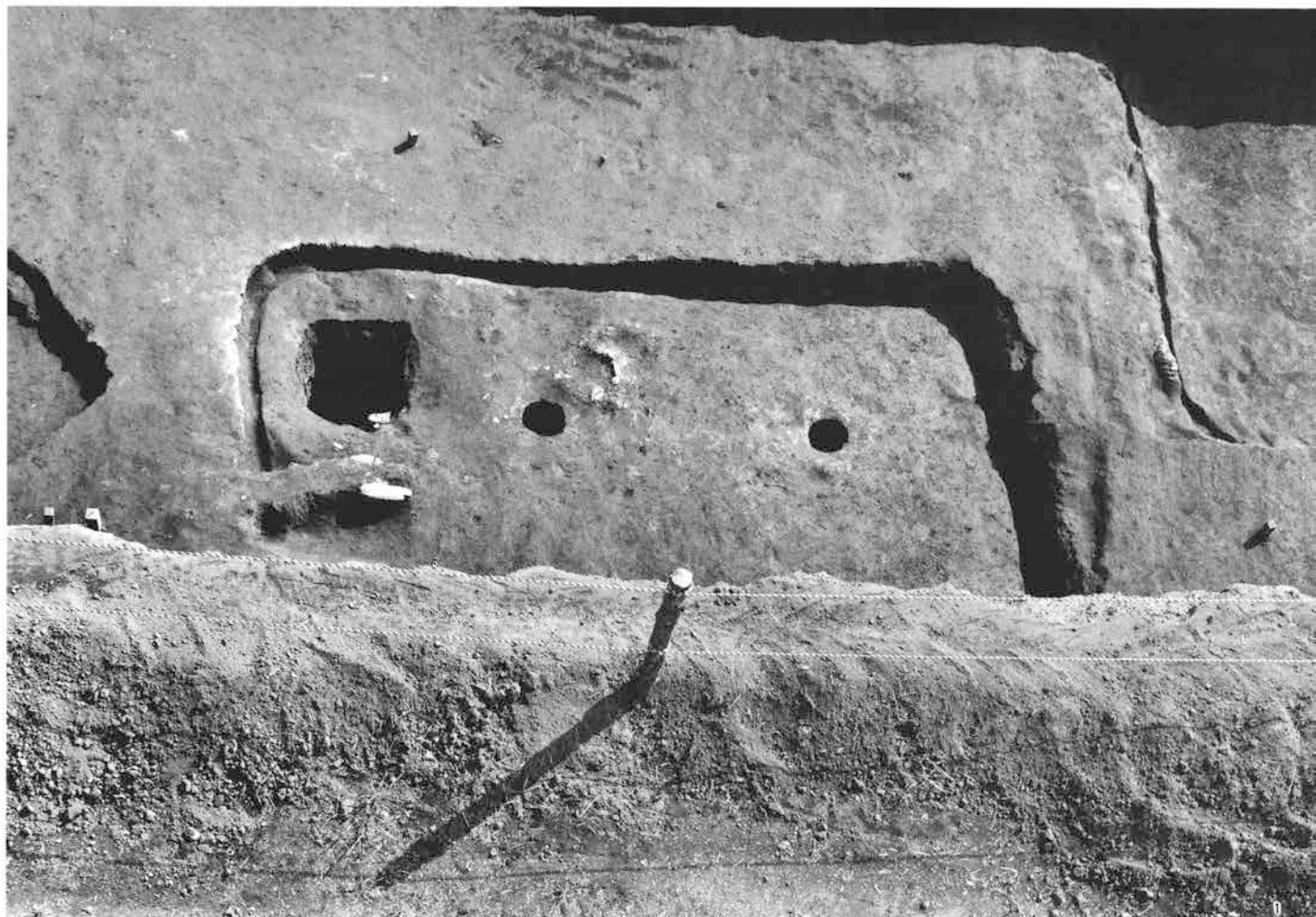
3. A区5号住居跡遺物出土状況
(南東から)

A区5号住居跡
掘り方(北から)

A区6号住居跡
(南西から)







P L .22

1. A区6号住居跡(南西から)
2. A区6号住居跡掘り方(南西から)

P L .23

1. A区7号住居跡(西から)
2. A区7号住居跡遺物出土状況
(東から)
3. A区7号住居跡カマド(南西から)

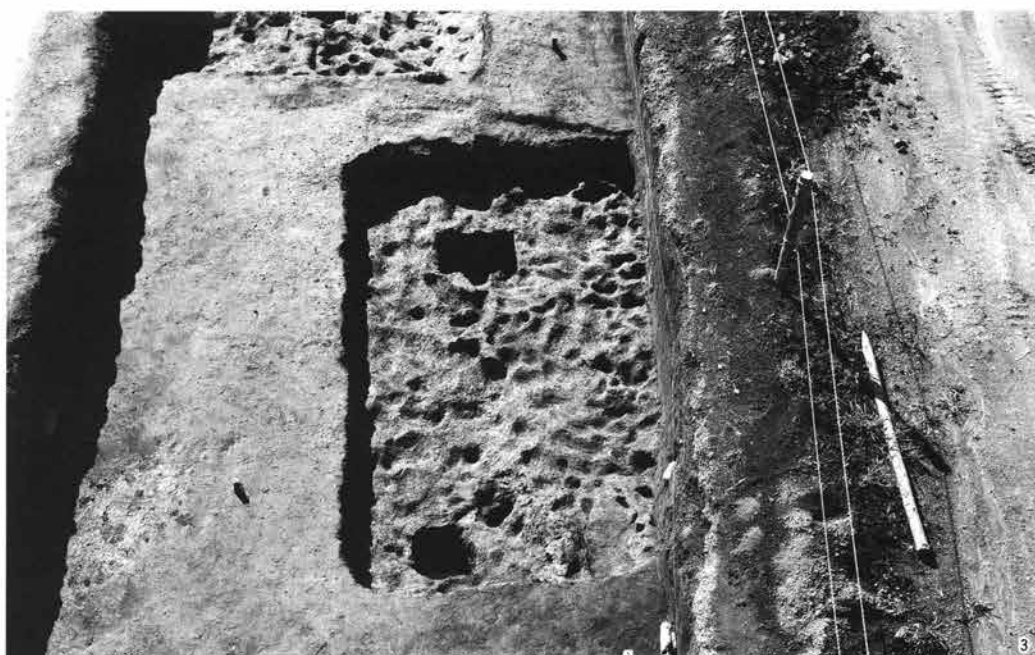




1. A区7号住居跡貯蔵穴(南から)

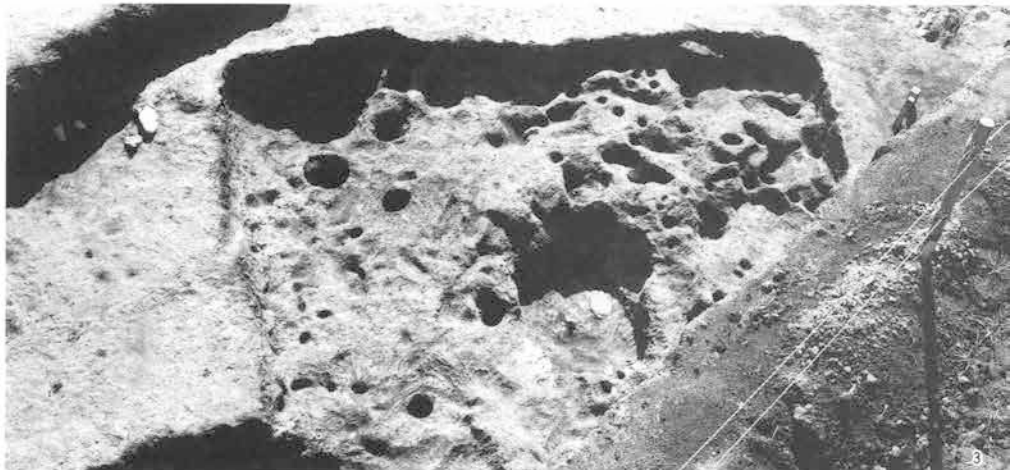
2. A区7号住居跡炭化材出土状況
(北から)

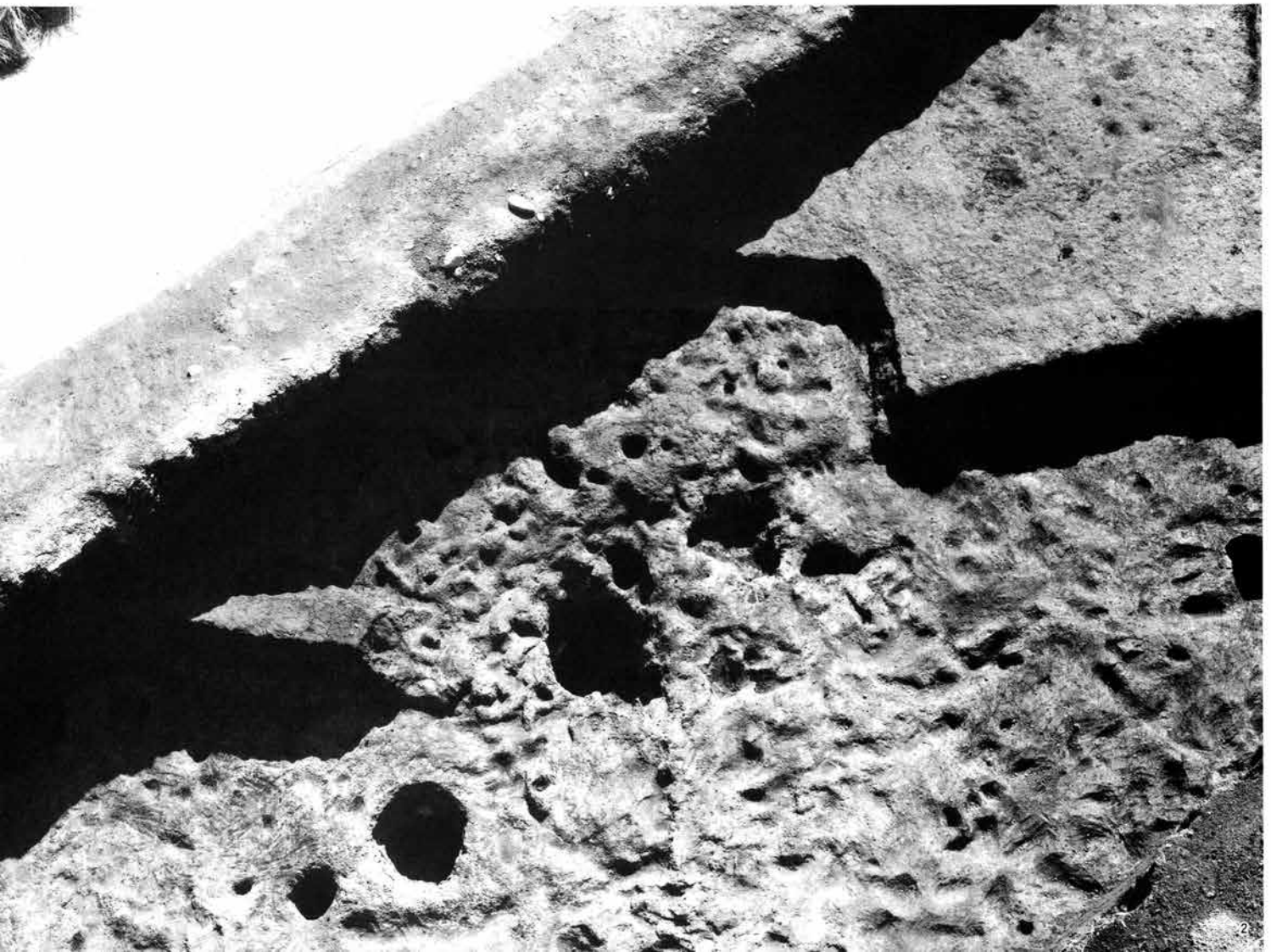
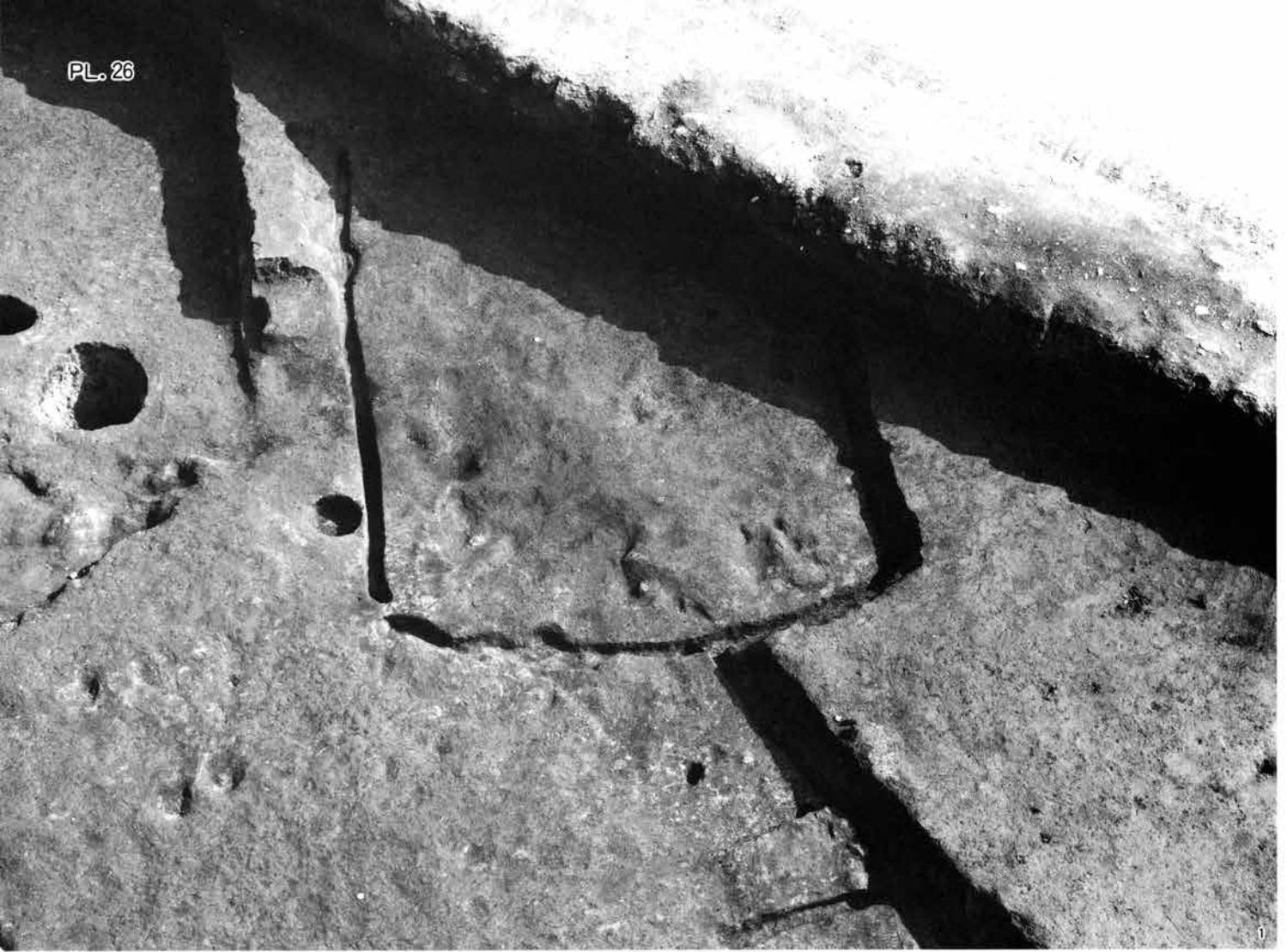
3. A区7号住居跡掘り方(北から)





1. A区8号住居跡(南西から)
2. A区8号住居跡カマド(南西から)
3. A区8号住居跡掘り方(北西から)



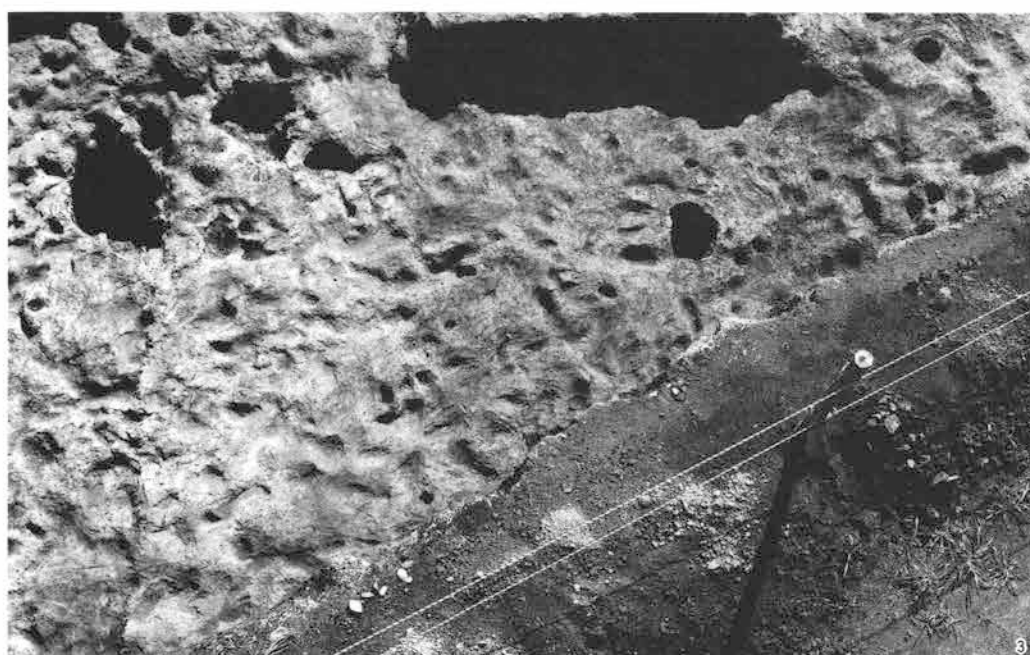


PL. 26

- 1. A区9号住居跡(南西から)
- 2. A区9号住居跡掘り方(北から)

PL. 27

- 1. A区10号住居跡(西から)
- 2. A区10号住居跡遺物出土状況(東から)
- 3. A区10号住居跡掘り方(北西から)



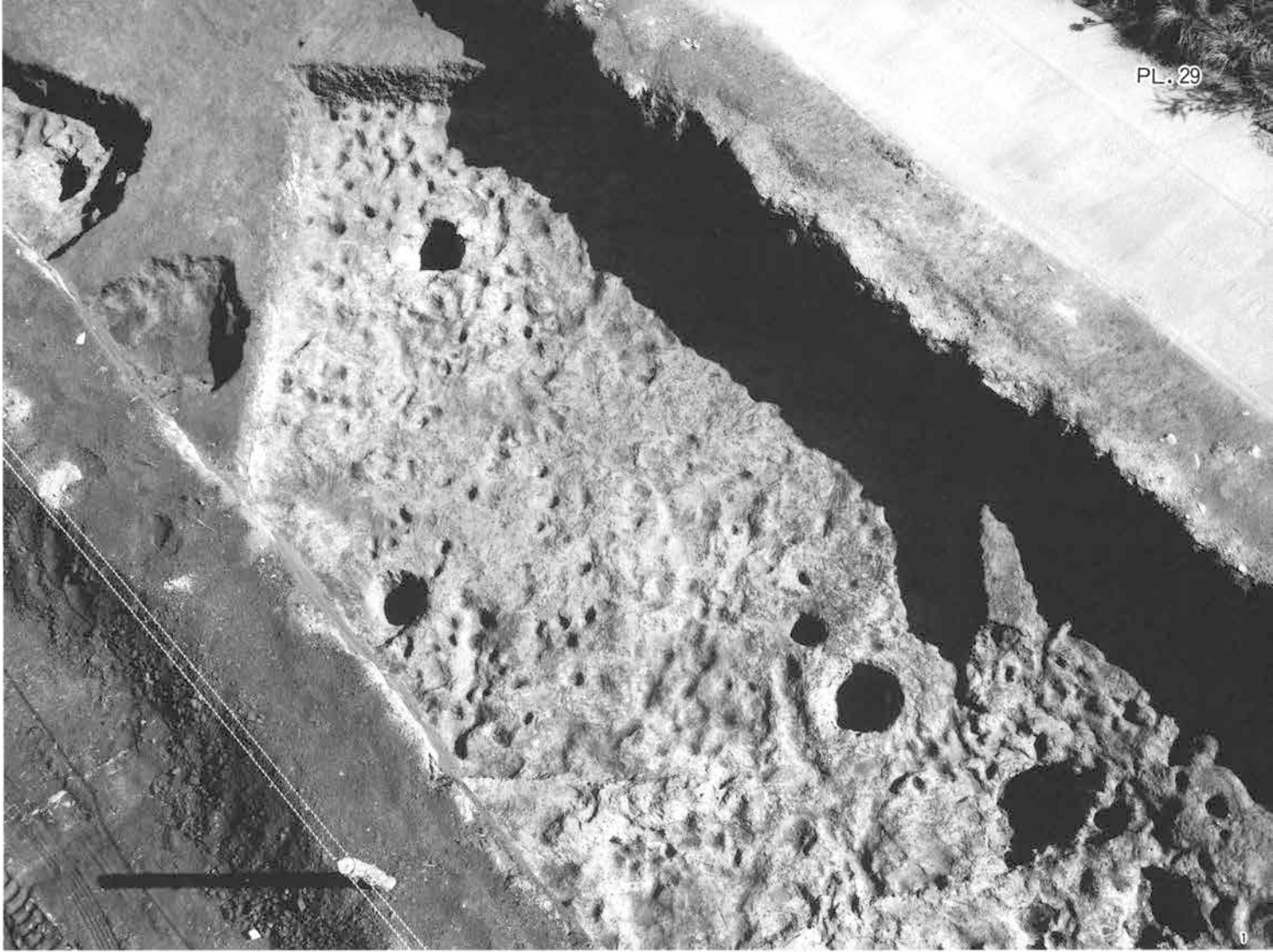


P L . 28

- 1 . A区11号住居跡 (南西から)
- 2 . A区11号住居跡遺物出土状況 (北東から)

P L . 29

- 1 . A区11号住居跡掘り方 (南西から)
- 2 . A区12号住居跡 (南から)





PL. 30

1. A区12号住居跡(東から)
2. A区12号住居跡掘り方(南から)

PL. 31

1. A区13号住居跡(南から)
2. A区13号住居跡遺物出土状況(南から)





PL. 32

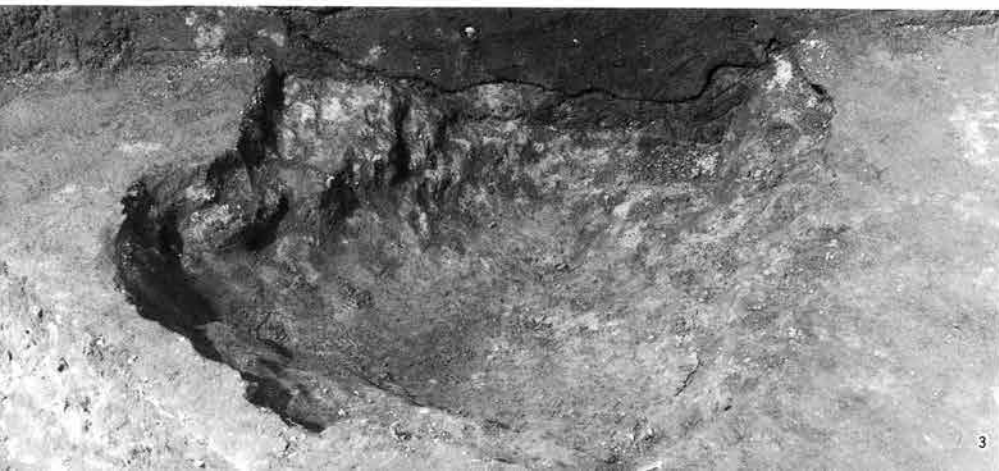
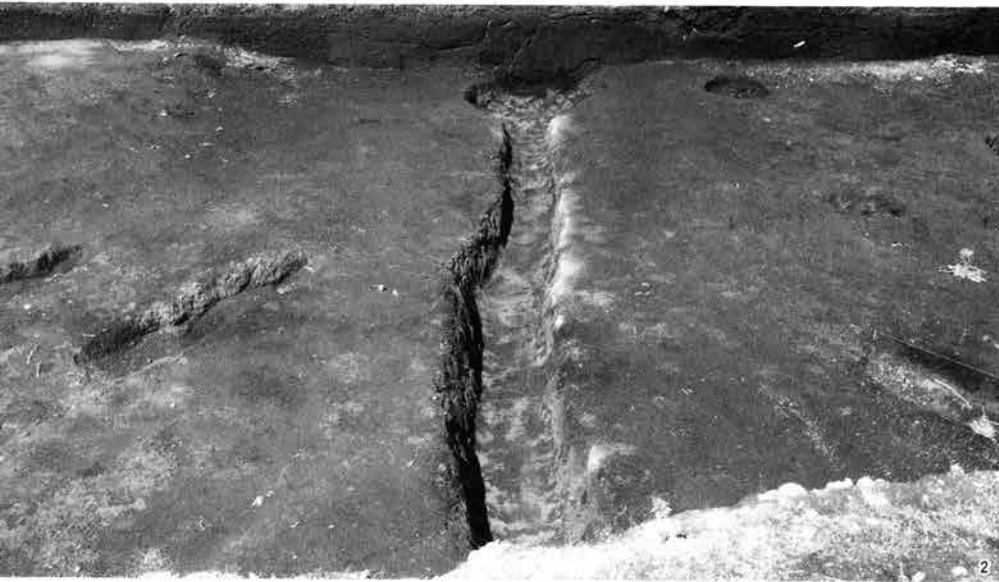
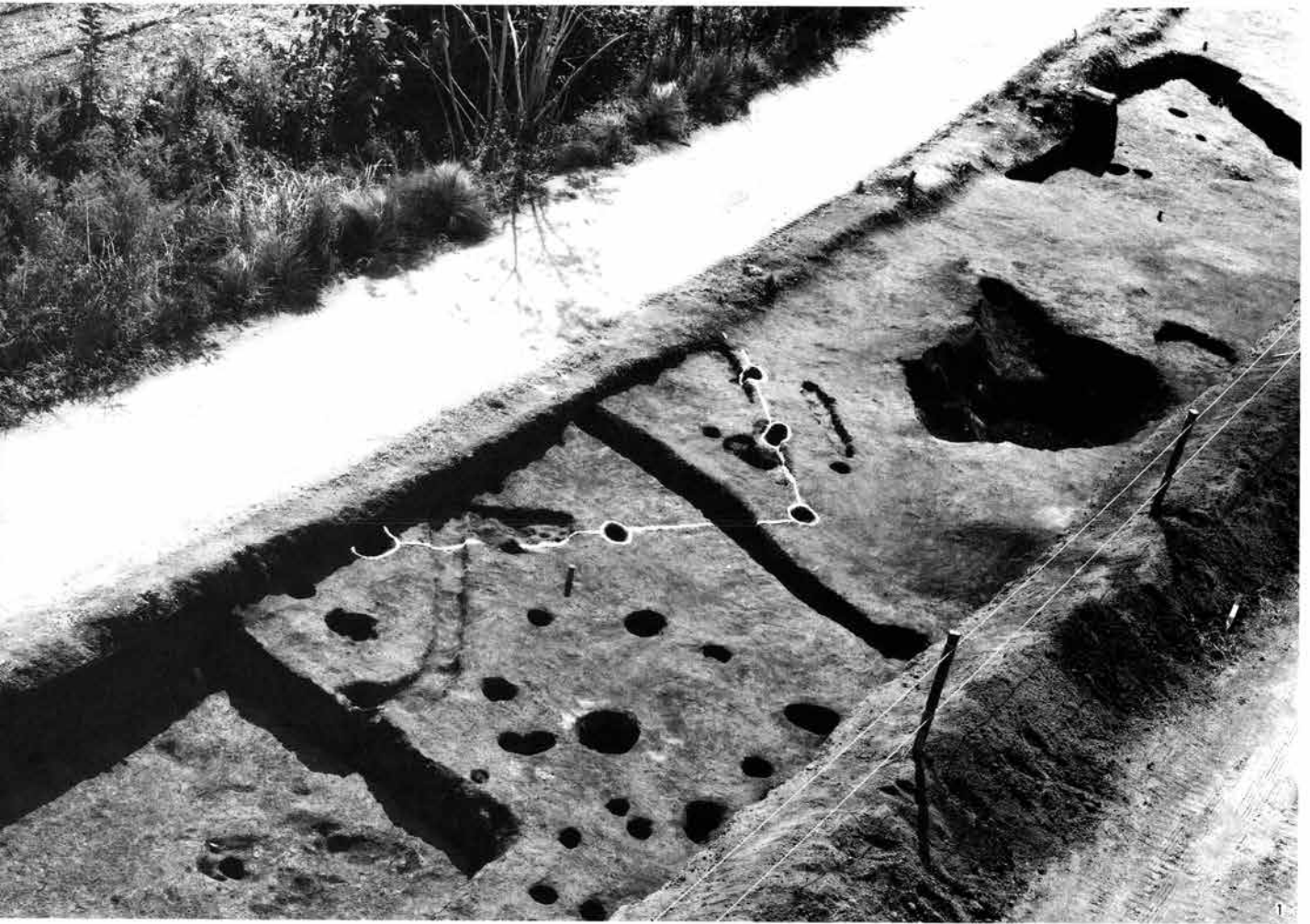
- 1. A区13号住居跡遺物出土状況
(南から)
- 2. A区13号住居跡遺物出土状況
(北東から)



PL. 33

- 1. A区13号住居跡貯蔵穴(南から)
- 2. A区13号住居跡南東隅貯蔵穴
(北から)
- 3. A区13号住居跡掘り方(南から)





1. A区1号掘立柱建物跡(北西から)
2. A区2号溝(南東から)
3. A区3号土坑(東から)

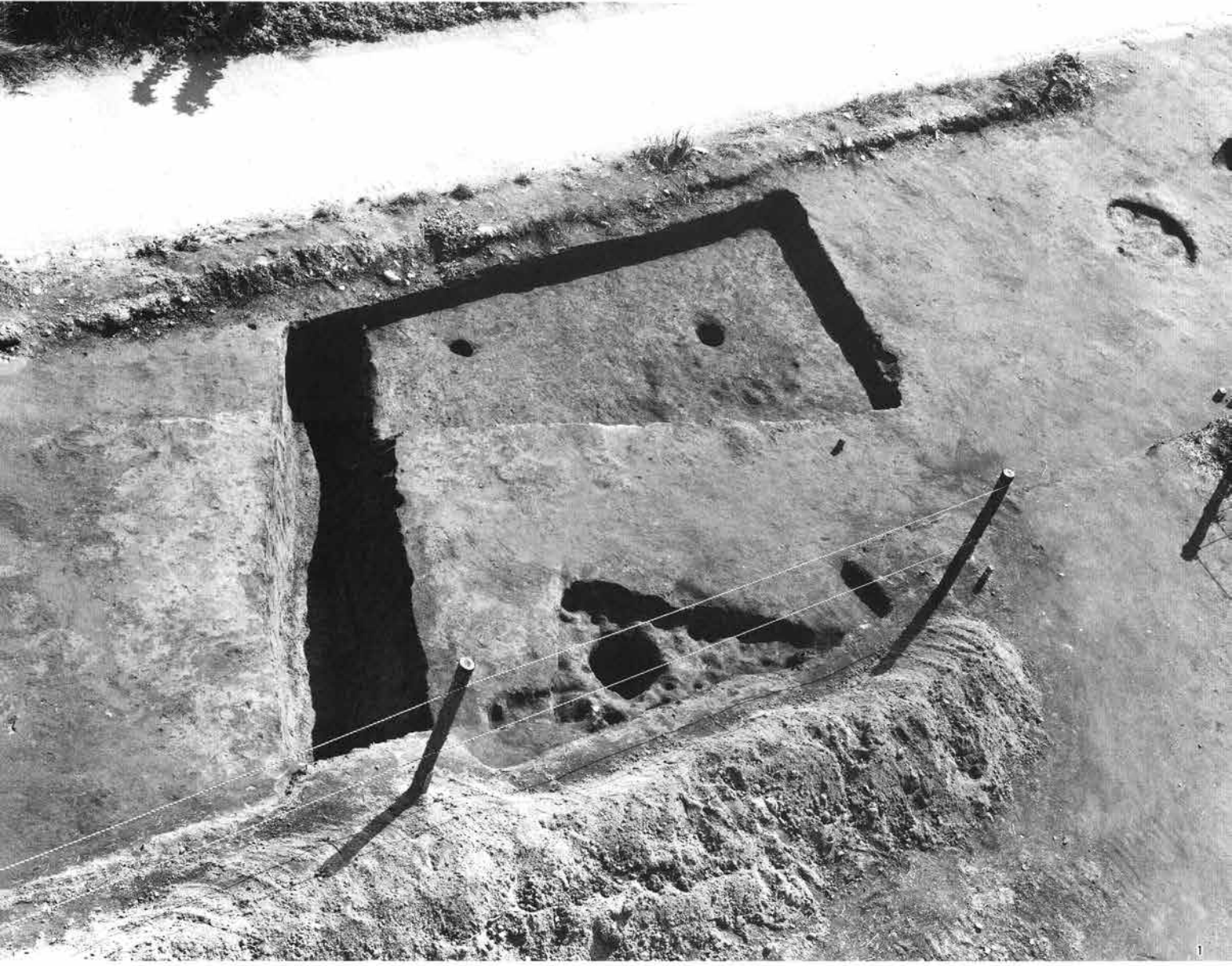


竹沼遺跡 B区全景(北から)

1. B区調査前風景

2. B区遺構確認状況(北から)





1. B区1号住居跡(北西から)

2. B区1号住居跡遺物出土状況(南西から)







P L .38

- 1. B区1号住居跡掘り方(北西から)
- 2. B区2号住居跡(南東から)

P L .39

- 1. B区3号住居跡(北東から)
- 2. B区3号住居跡遺物出土状況(北西から)
- 3. B区3号住居跡掘り方(北西から)





P L . 40

- 1 . B 区 13 号 住 居 跡 (北 から)
- 2 . B 区 13 号 住 居 跡 掘 り 方 (南 東 から)

P L . 41

- 1 . B 区 14 号 住 居 跡 (南 東 から)
- 2 . B 区 14 号 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況 (南 東 から)





1. B区14号住居跡カマド(南西から)

2. B区14号住居跡掘り方(東から)

3. B区15号住居跡(南東から)





1. B区15号住居跡遺物出土状況
(南から)

2. B区15号住居跡カマド(南西から)

3. B区15号住居跡掘り方(南東から)





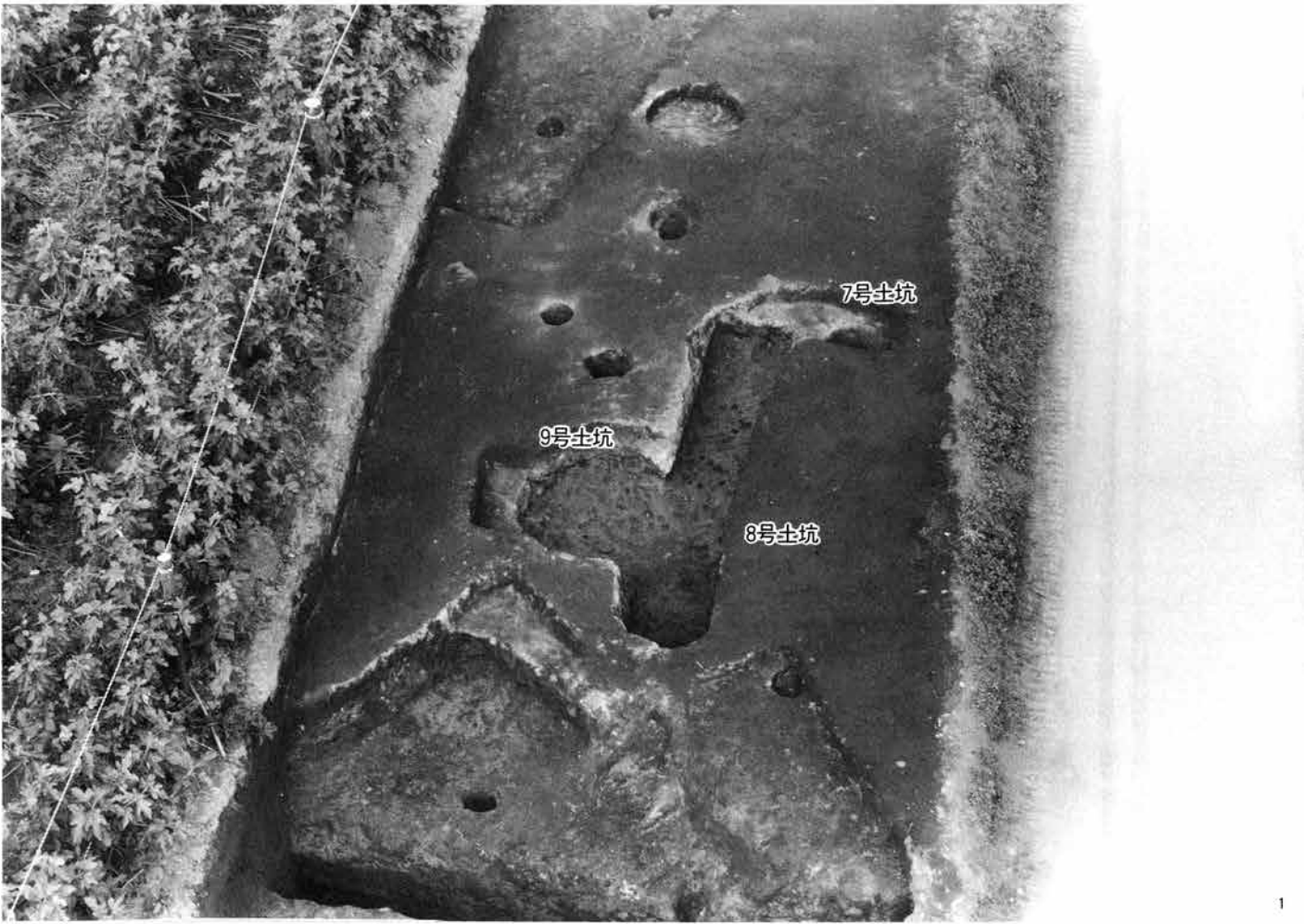
P L . 44

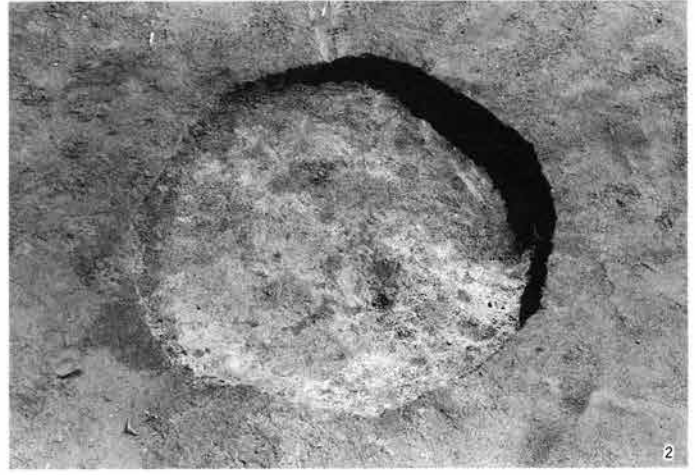
- 1 . B 区 16 号 住 居 跡 (北 東 从 从)
- 2 . B 区 16 号 住 居 跡 掘 り 方 (北 東 从 从)
- 3 . B 区 16 号 住 居 跡 貯 藏 穴 (南 西 从 从)

P L . 45

- 1 . B 区 7 号 ・ 8 号 ・ 9 号 土 坑 (南 西 从 从)
- 2 . B 区 9 号 土 坑 (南 東 从 从)
- 3 . B 区 8 号 土 坑 (北 从 从)
- 4 . B 区 11 号 土 坑 (西 从 从)
- 5 . B 区 10 号 土 坑 (東 从 从)







P L .46

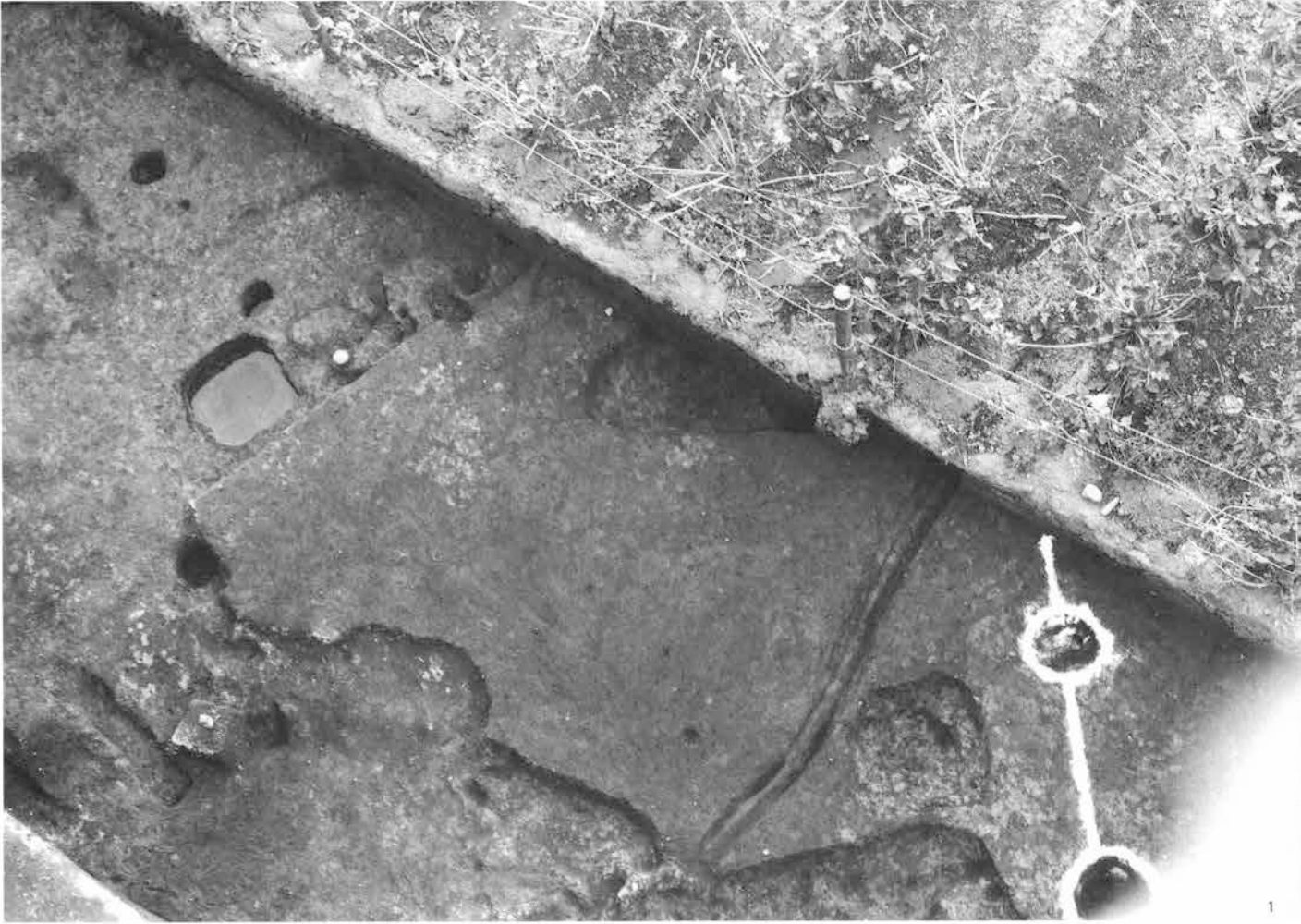
- 1 . B区12号土坑(北西から)
- 2 . B区13号土坑(北西から)
- 3 . B区14号土坑(北西から)
- 4 . B区15号土坑(西から)
- 5 . B区1号溝(南東から)
- 6 . B区2号溝(南東から)

P L .47

- 1 . C区2号住居跡(西から)
- 2 . C区11号住居跡(北東から)







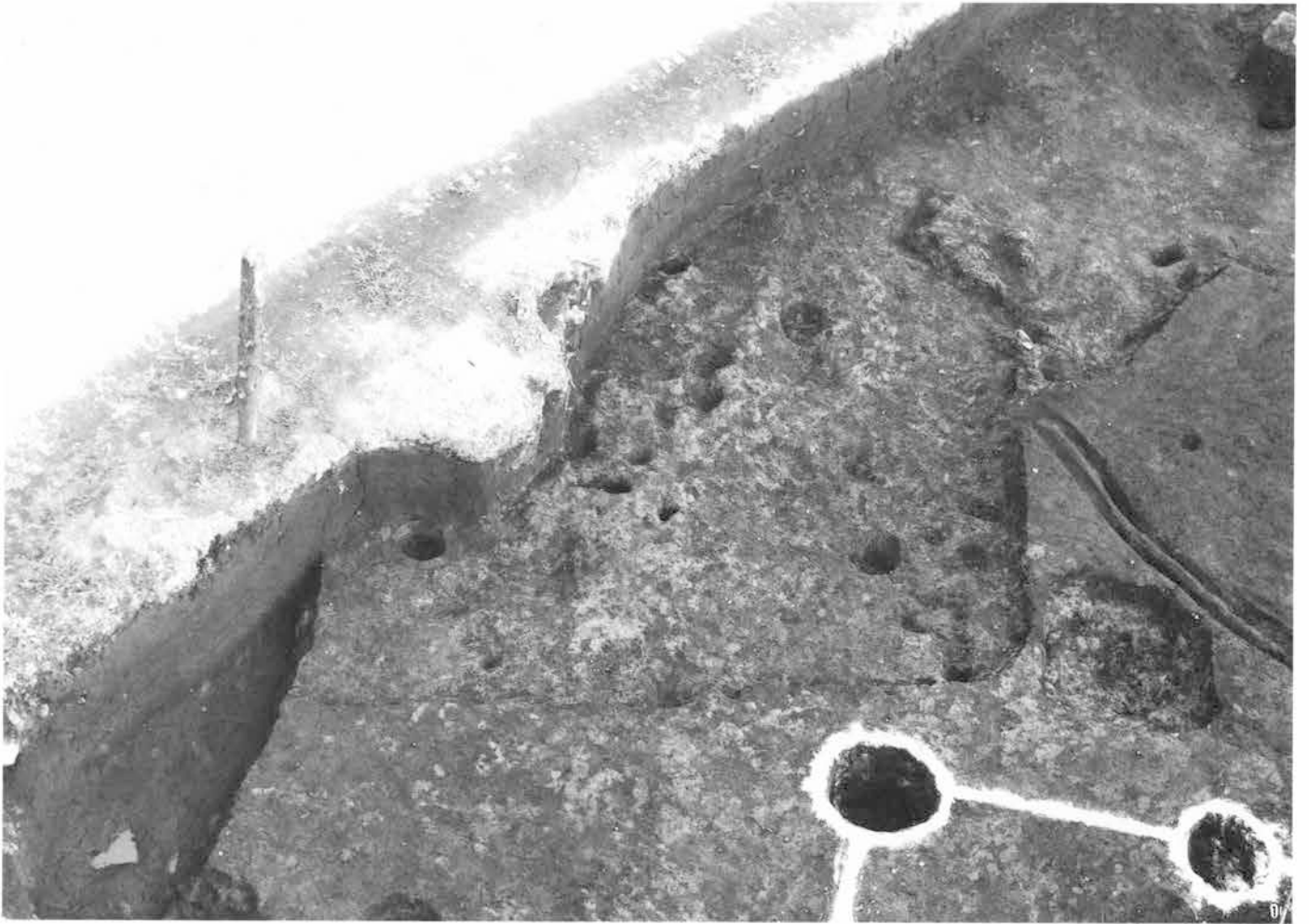
P L . 48

- 1 . C区11号住居跡遺物出土状況
(南東から)
- 2 . C区11号住居跡遺物出土状況
(南西から)

P L . 49

- 1 . C区12号住居跡 (東から)
- 2 . C区16号住居跡 (南から)







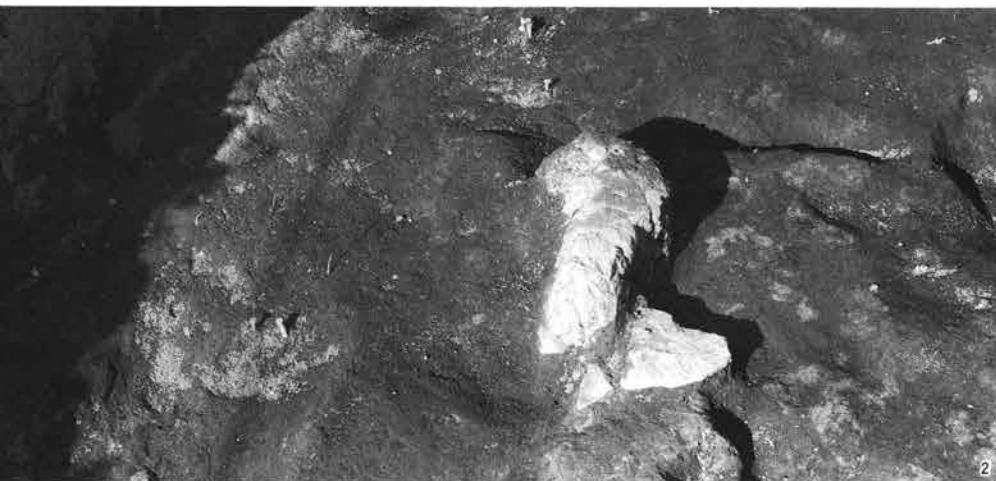
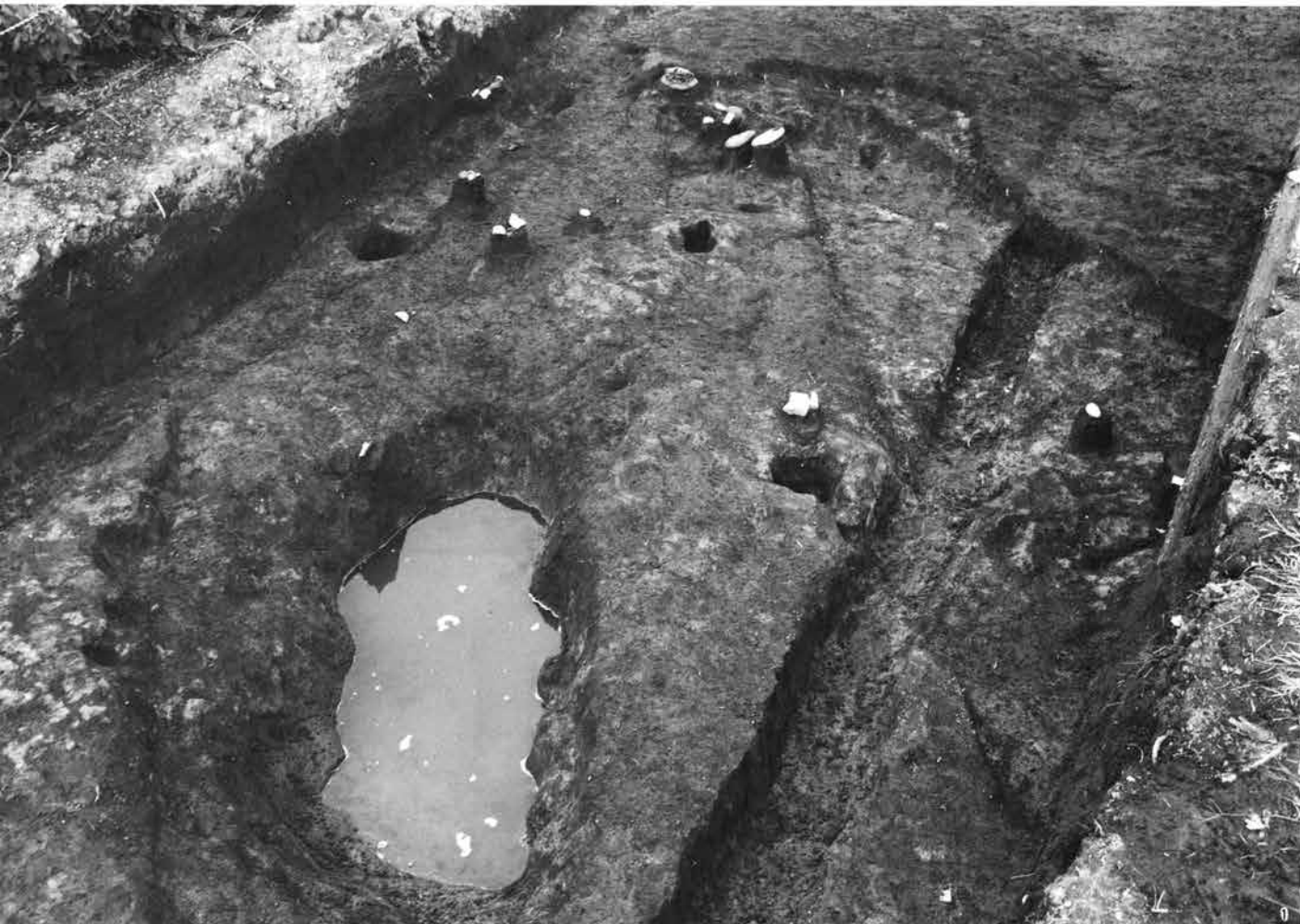
P L .50

- 1 . C区13号住居跡(東から)
- 2 . C区13号住居跡掘り方(北西から)

P L .51

- 1 . C区14号住居跡(北から)
- 2 . C区14号住居跡遺物出土状況(南東から)





P L . 52

1. C区15号住居跡(南から)
2. C区15号住居跡カマド(南から)
3. C区1号掘立柱建物跡(南から)

P L . 53

1. D区調査前風景(北東から)
2. D区調査風景(南から)







竹沼遺跡 D区全景(南から)



竹沼遺跡 D区全景(南から)





P L .56

1 . D 区 4 号 住 居 跡 (南 西 从 从)

2 . D 区 5 号 住 居 跡 (北 西 从 从)

P L .57

1 . D 区 7 号 住 居 跡 (南 西 从 从)

2 . D 区 7 号 住 居 跡 カ マ ド (南 東 从 从)





P L .58

1. D区7号住居跡掘り方(北東から)

2. D区8号住居跡(南東から)

P L .59

1. D区8号住居跡カマド(南西から)

2. D区8号住居跡貯蔵穴(南西から)

3. D区8号住居跡こも編石出土状況
(南西から)



PL.60

1. D区8号住居跡掘り方(南東から)

2. D区9号住居跡遺物出土状況
(南東から)



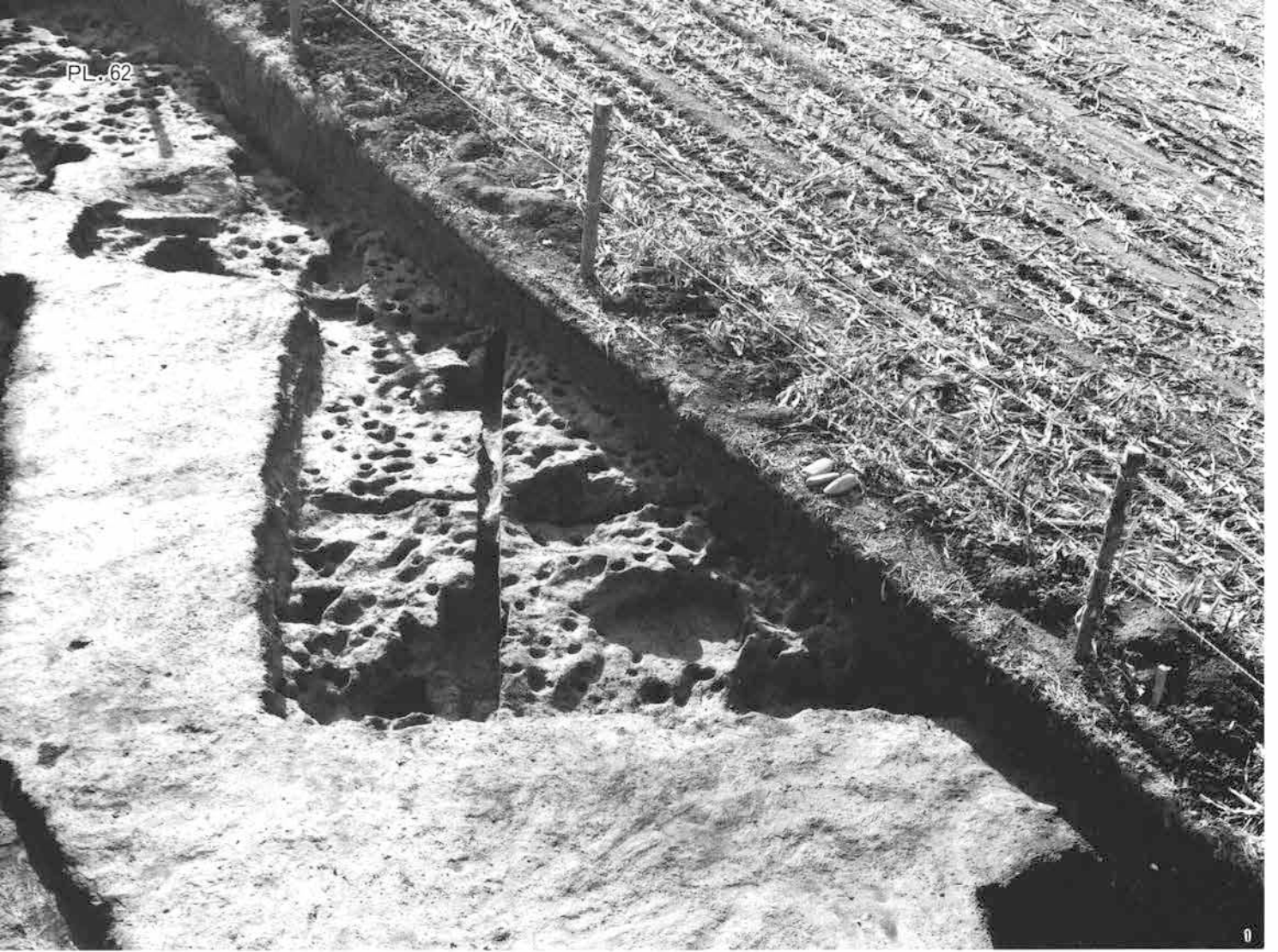
PL.61

1. D区9号住居跡カマド(南西から)

2. D区9号住居跡カマド(南西から)

3. D区9号住居跡遺物出土状況
(北東から)





P L .62

- 1 . D 区 9 号 住 居 跡 掘 り 方 (北 東 か ら)
- 2 . D 区 10 号 住 居 跡 (南 東 か ら)

P L .63

- 1 . D 区 11 号 ・ 12 号 住 居 跡 遺 物
出 土 状 況 (南 東 か ら)
- 2 . D 区 11 号 住 居 跡 カ マ ド (南 西 か ら)





D区12号・13号住居跡遺物出土状況(南東から)

1. D区12号住居跡遺物出土状況
(東から)



2. D区12号住居跡遺物出土状況
(西から)



3. D区12号住居跡カマド(南西から)





1. D区13号～15号住居跡遺物出土状況(南東から)

2. D区13号住居跡遺物出土状況(北から)



1. D区13号住居跡カマド(北西から)

2. D区14号住居跡カマド(南西から)

3. D区1号土坑(南東から)

4. D区3号土坑(東から)

5. D区4号土坑(南西から)

6. D区1号井戸(東から)

▼A区5号住居跡出土遺物



▼A区5号住居跡出土遺物



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33

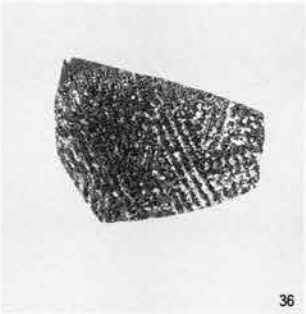
▼A区5号住居跡出土遺物



34



35



36



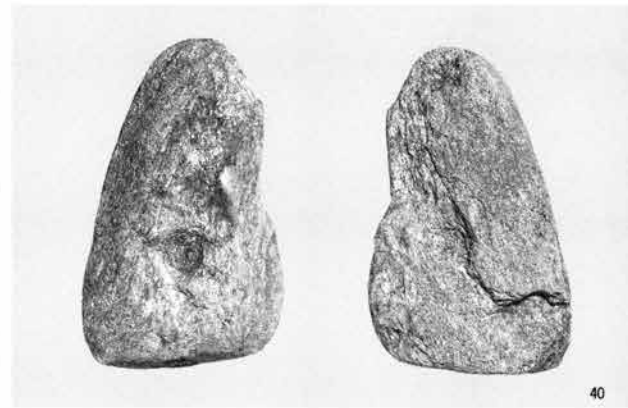
37



38



39



40



41



42



43



44

▼A区6号住居跡出土遺物



1



2

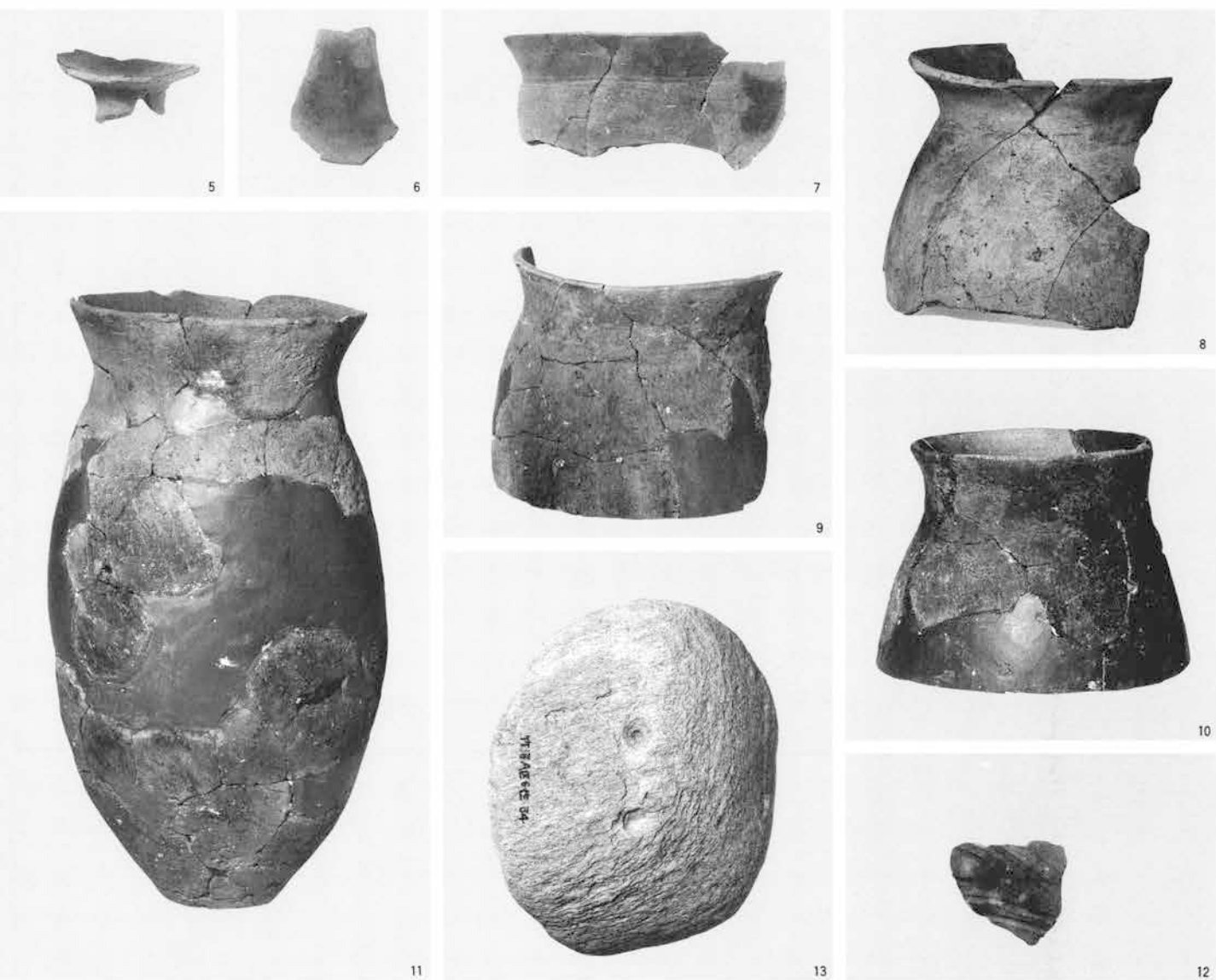


3

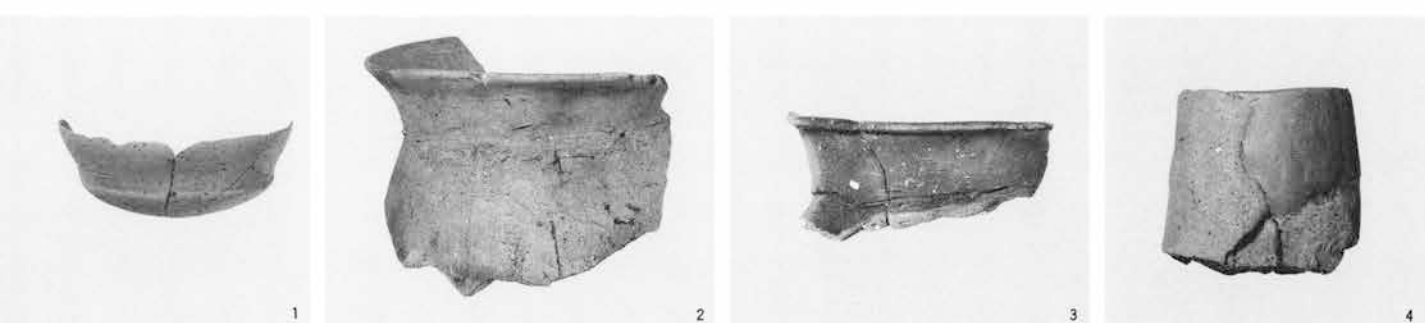


4

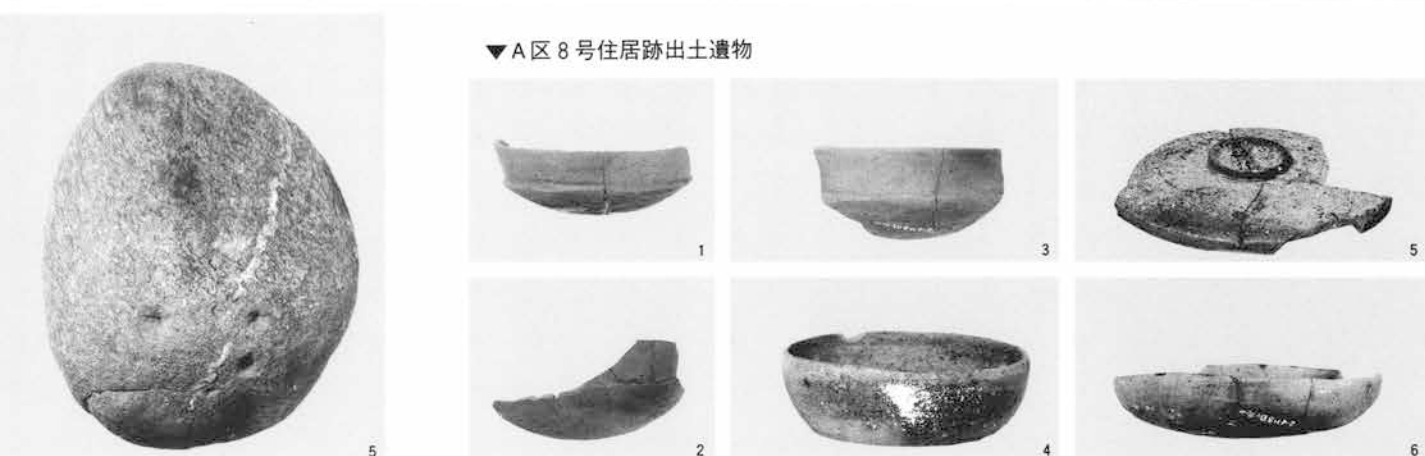
▼A区6号住居跡出土遺物



▼A区7号住居跡出土遺物



▼A区8号住居跡出土遺物



▼A区8号住居跡出土遺物



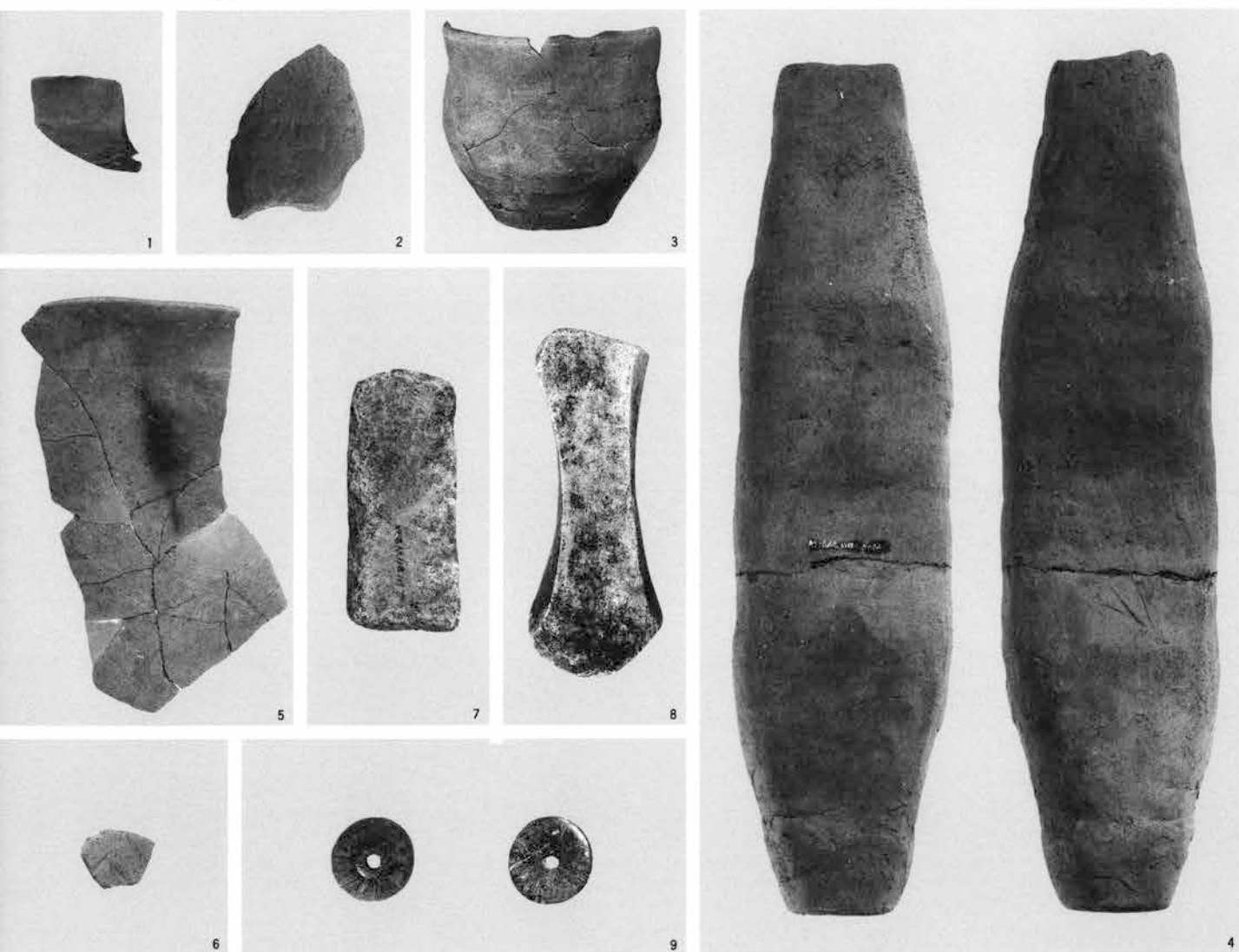
▼A区9号住居跡出土遺物



▼A区10号住居跡出土遺物



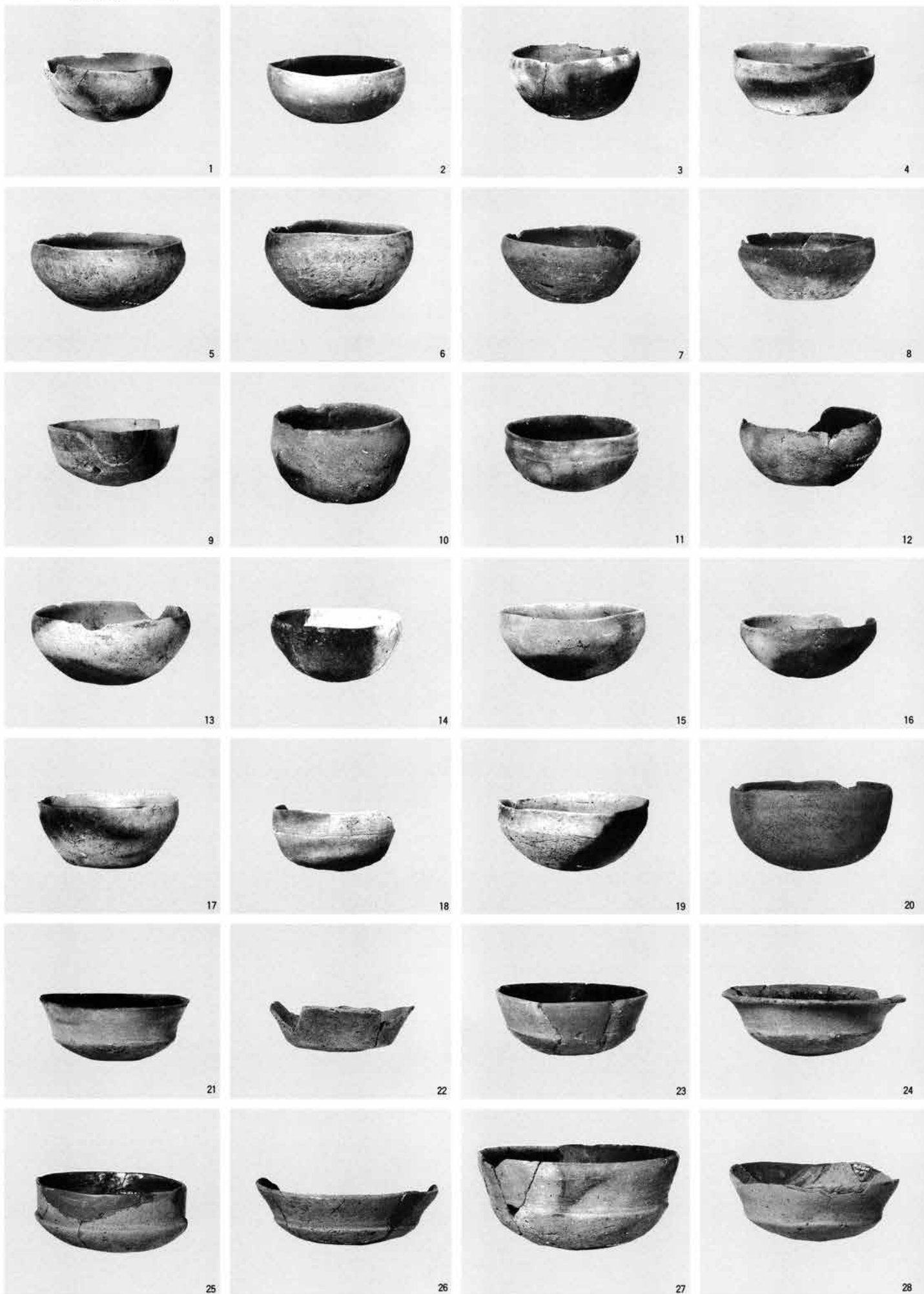
▼A区11号住居跡出土遺物



▼A区12号住居跡出土遺物

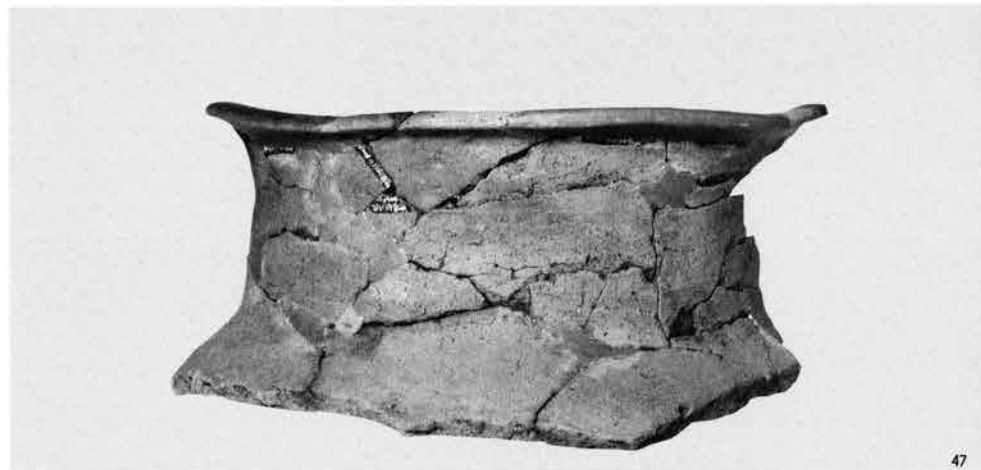


▼ A区13号住居跡出土遺物

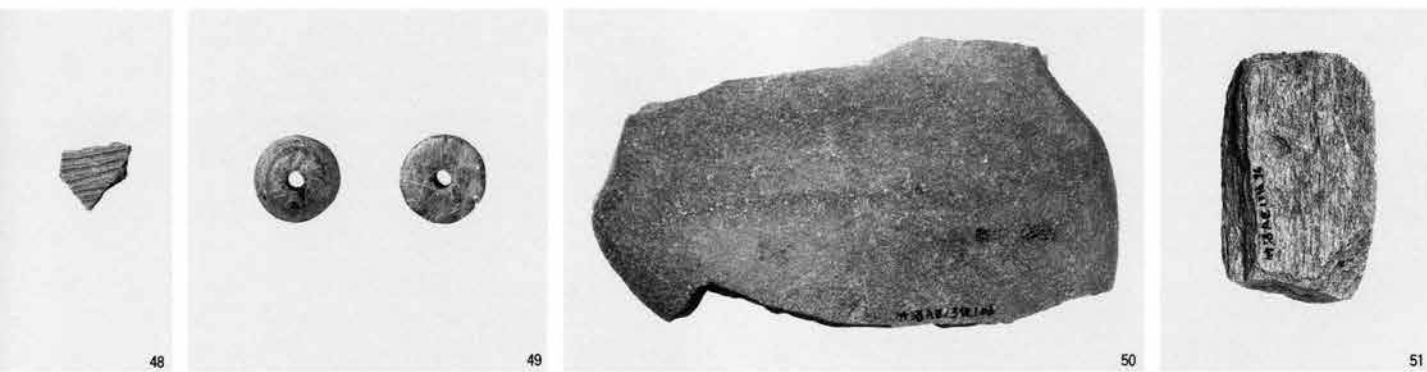




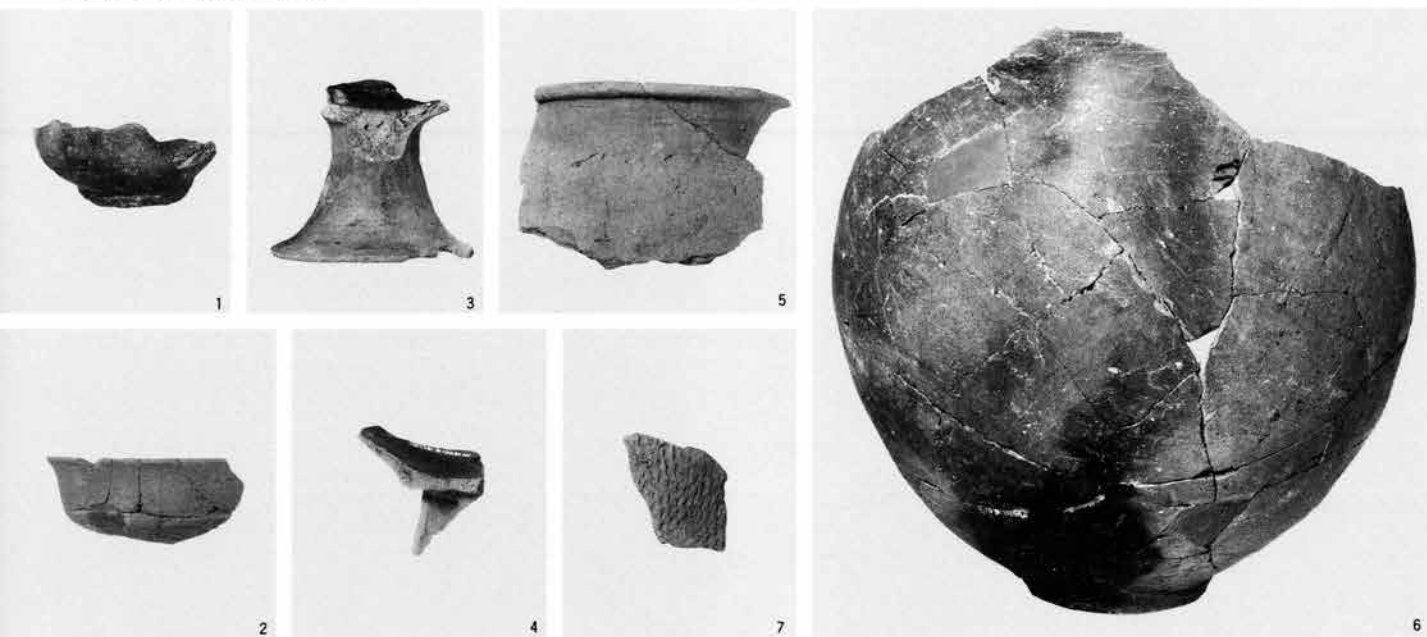
▼A区13号住居跡出土遺物



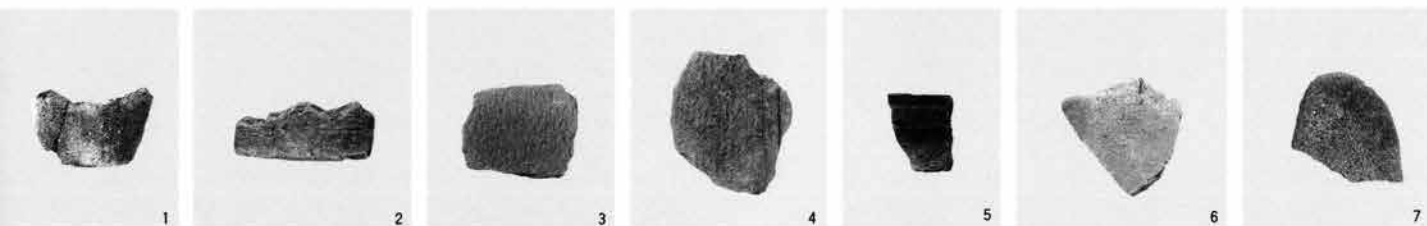
▼A区13号住居跡出土遺物



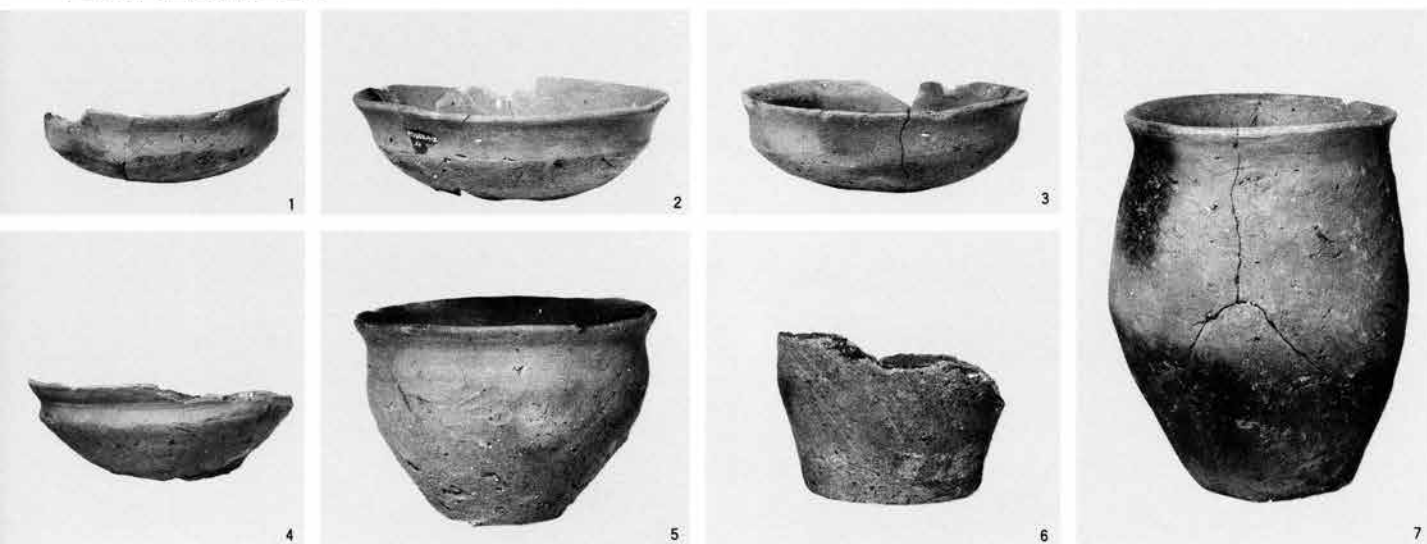
▼B区1号住居跡出土遺物



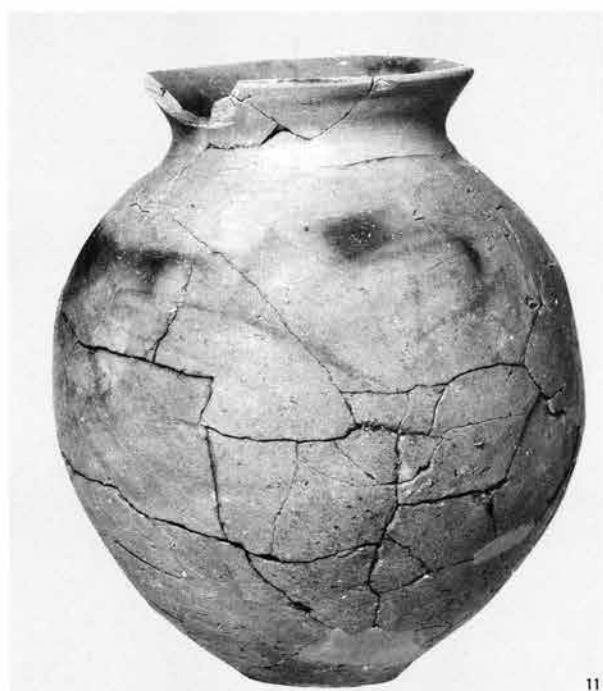
▼B区13号住居跡出土遺物



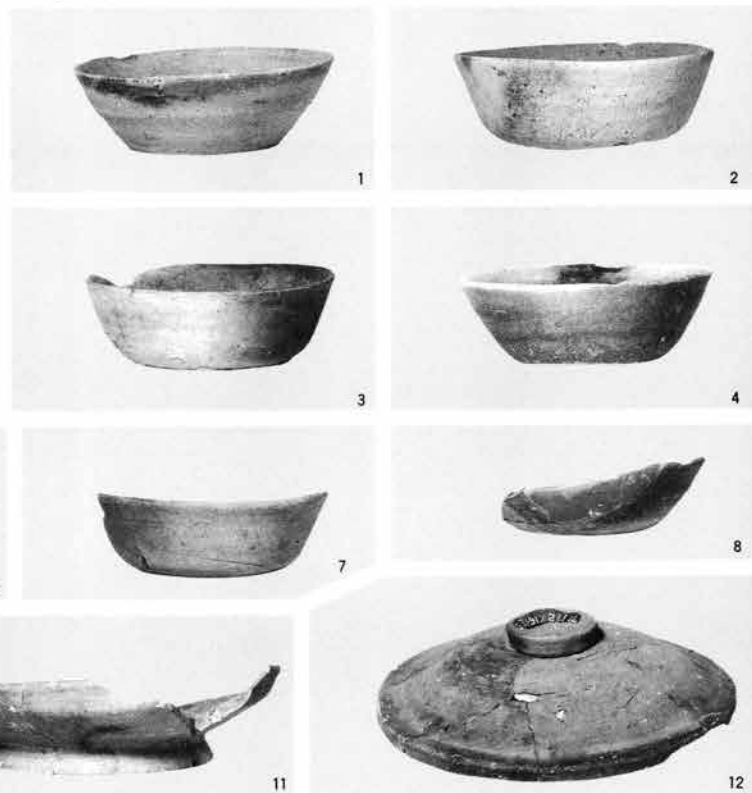
▼B区14号住居跡出土遺物



▼B区14号住居跡出土遺物



▼B区15号住居跡出土遺物



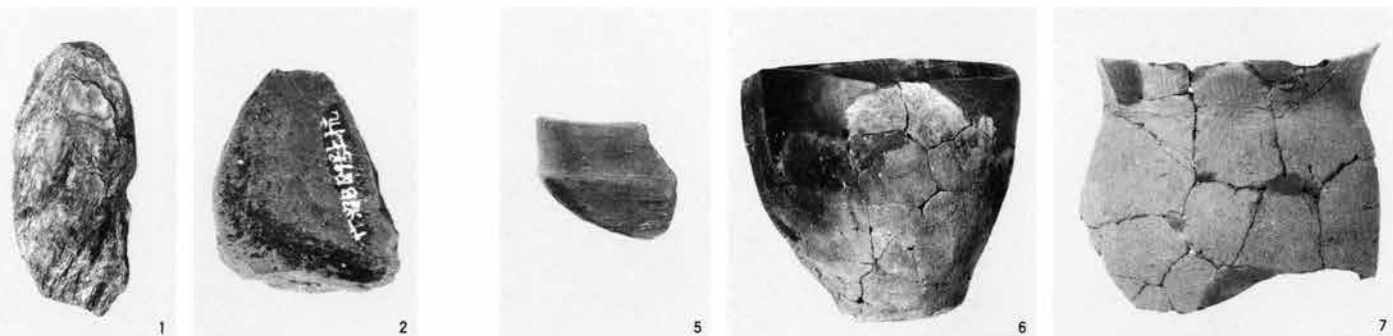
▼B区15号住居跡出土遺物



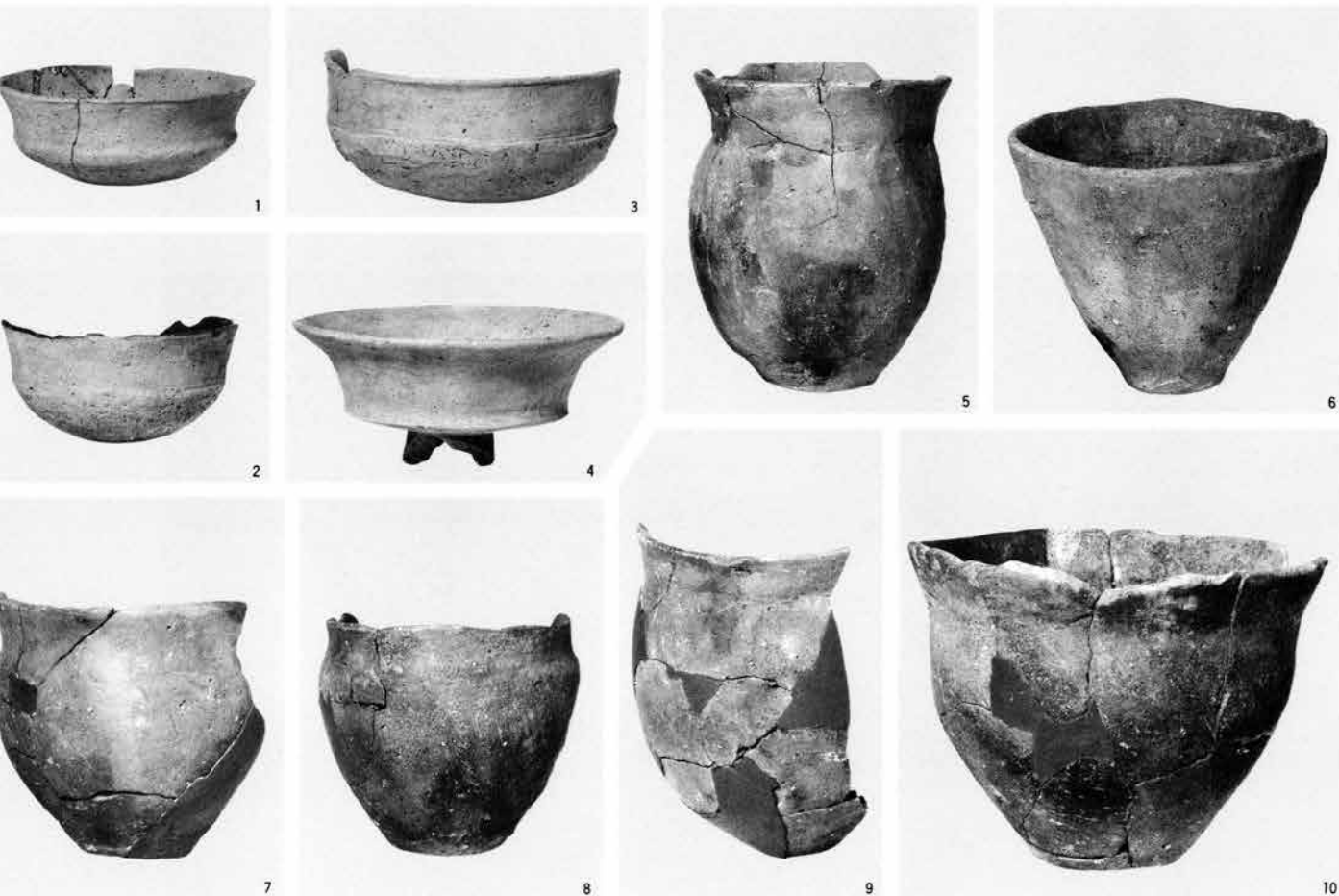
▼B区16号住居跡出土遺物



▼B区9号土坑出土遺物



▼C区11号住居跡出土遺物



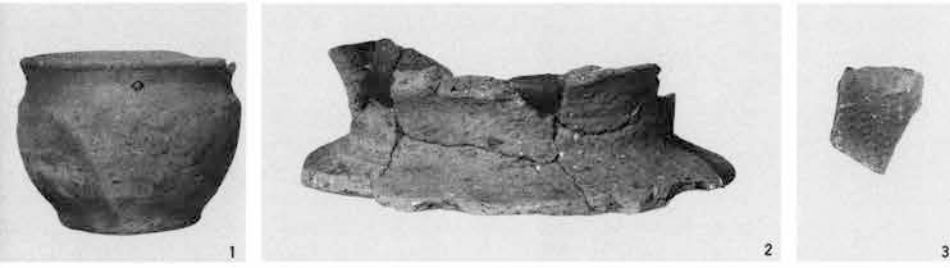
▼C区11号住居跡出土遺物



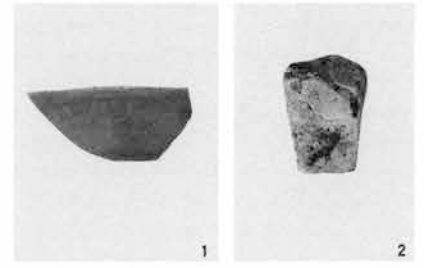
▼C区14号住居跡出土遺物



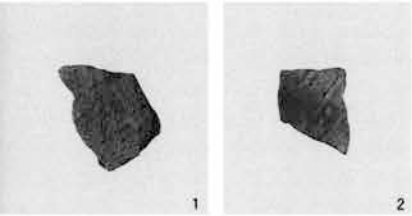
▼C区15号住居跡出土遺物



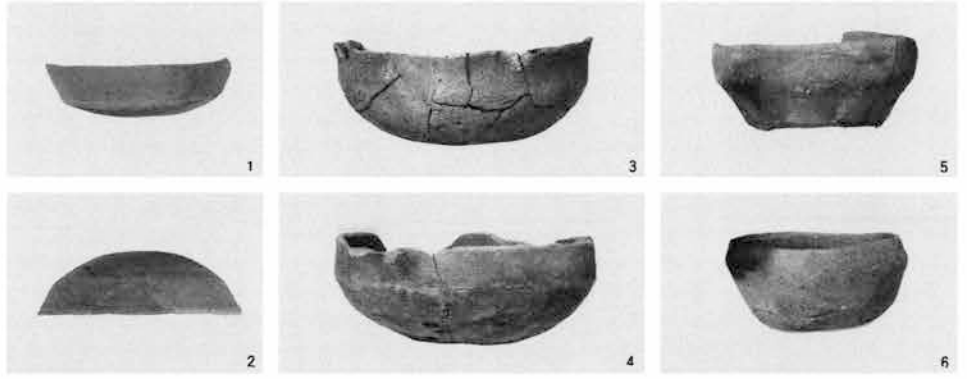
▼C区1号井戸出土遺物



▼D区4号住居跡出土遺物



▼D区7号住居跡出土遺物



▼D区8号住居跡出土遺物



▼D区8号住居跡出土遺物



5



6



7



8



9



11



10



12



13

▼D区9号住居跡出土遺物



5



7



6



9



1



3



8



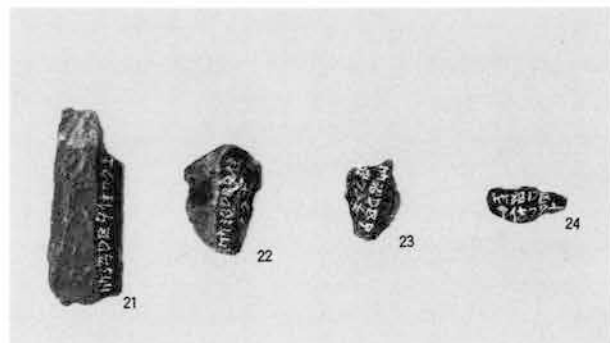
2



4



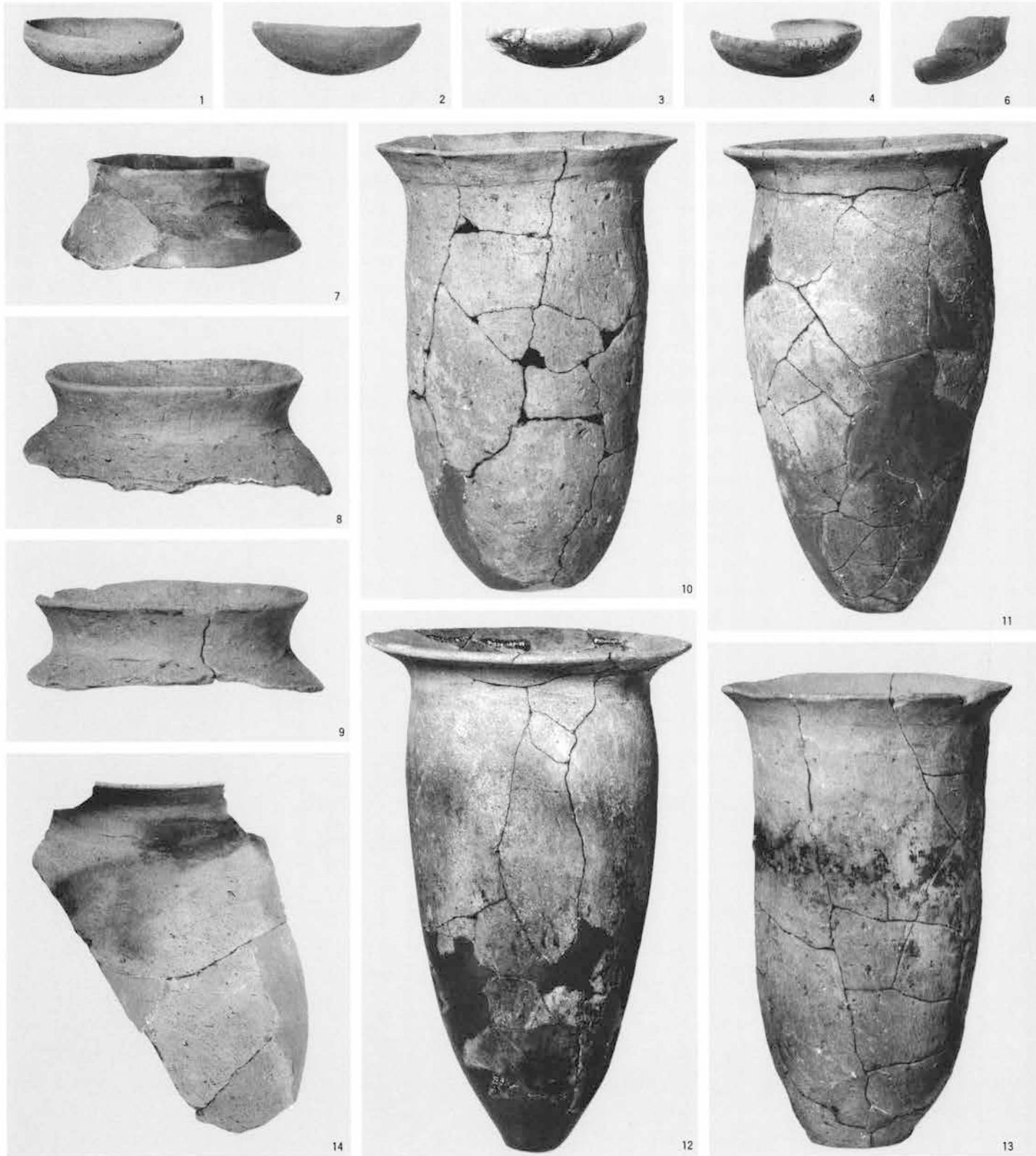
10



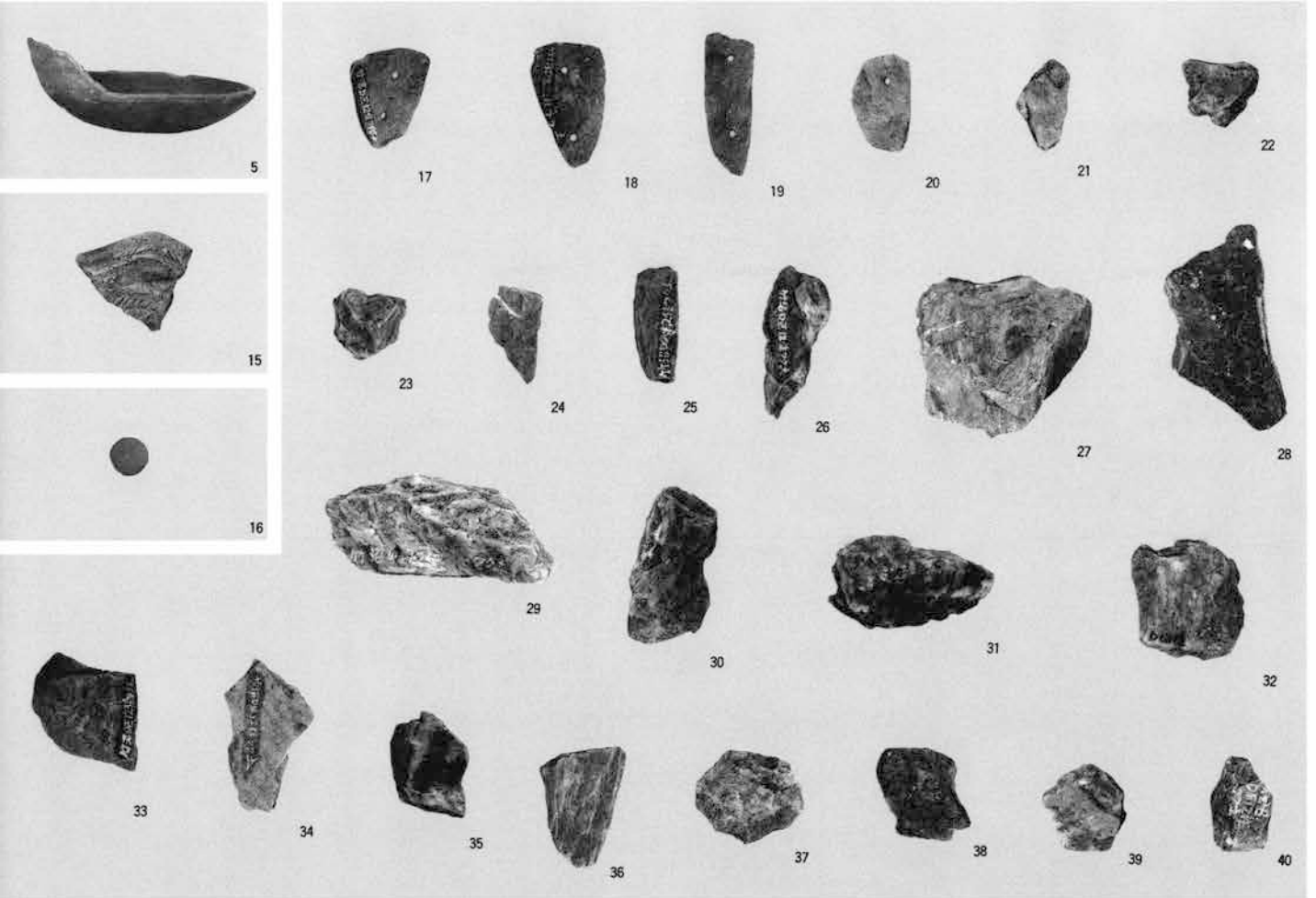
▼D区11号住居跡出土遺物



▼D区12号住居跡出土遺物



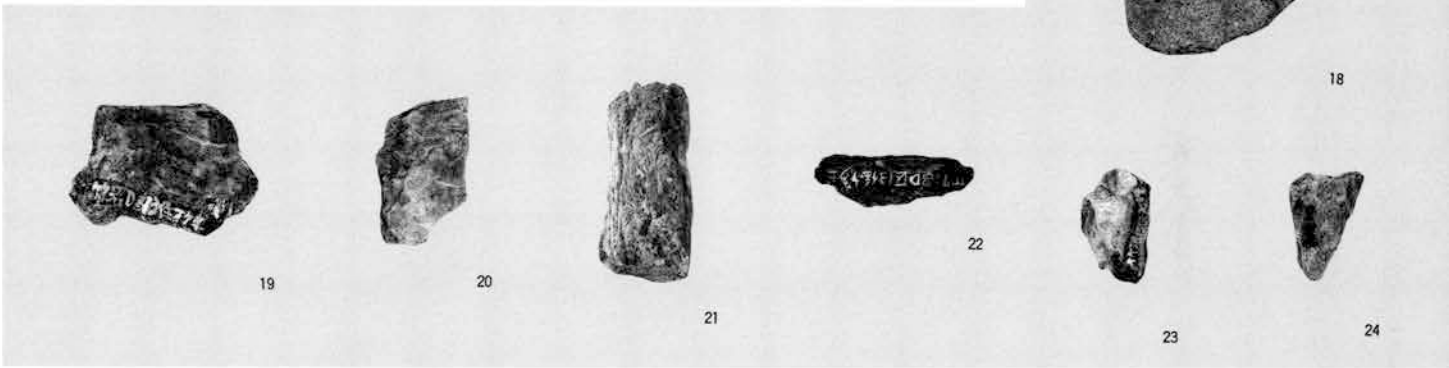
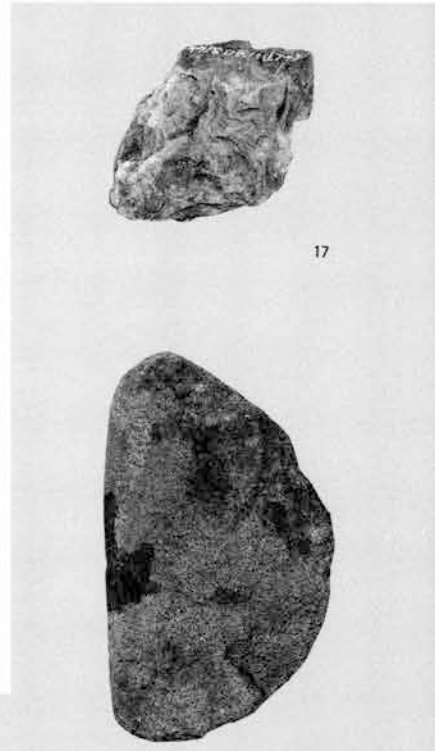
▼D区12号住居跡出土遺物



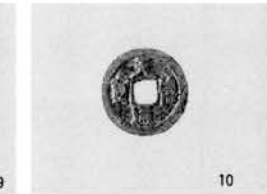
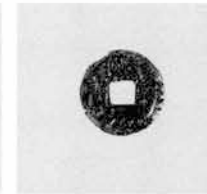
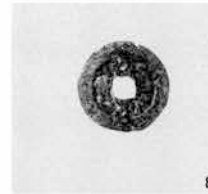
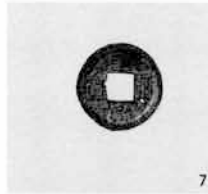
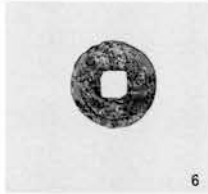
▼D区13号住居跡出土遺物



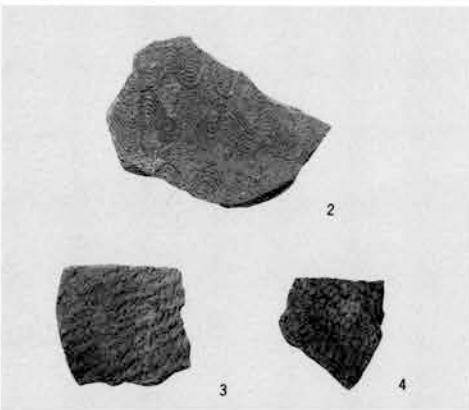
▼D区13号住居跡出土遺物



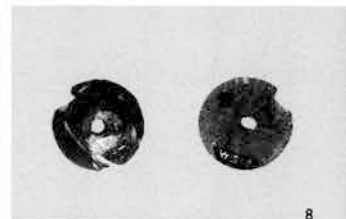
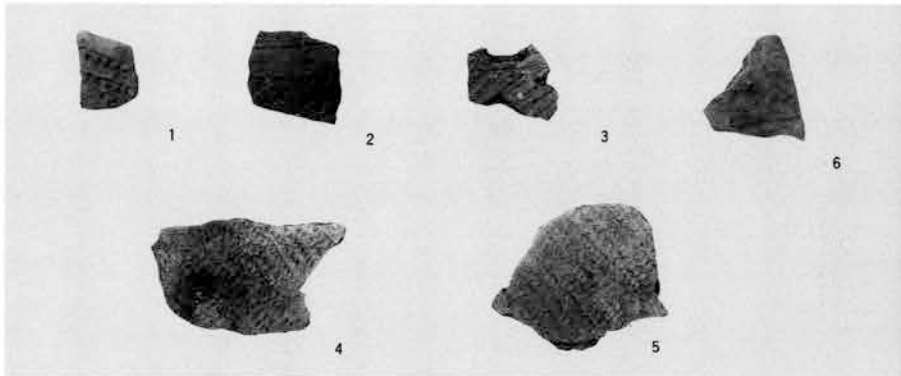
▼D区14号住居跡出土遺物 ▼D区2号土坑出土遺物



▼D区1号井戸出土遺物



▼D区表採出土遺物



財群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第215集

緑埜遺跡群・緑埜上郷遺跡
竹沼遺跡

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第42集

1997(平成9)年2月17日 印刷

1997(平成9)年2月28日 発行

編集/財群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784-2

電話(0279)52-2511(代表)

発行/群馬県考古資料普及会

〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784-2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷/株式会社 前橋印刷所



付図1 白石大御堂遺跡・緑禁遺跡群・緑禁上郷遺跡・竹沼遺跡位置図



Ea

1区

Fa

2区

Ga

38

Ha

3区

Ia

Ja

4区

Ka

5区

La

緑荳上郷遺跡

0 1:800 40m

付図2 緑荳遺跡群・緑荳上郷遺跡全体図

